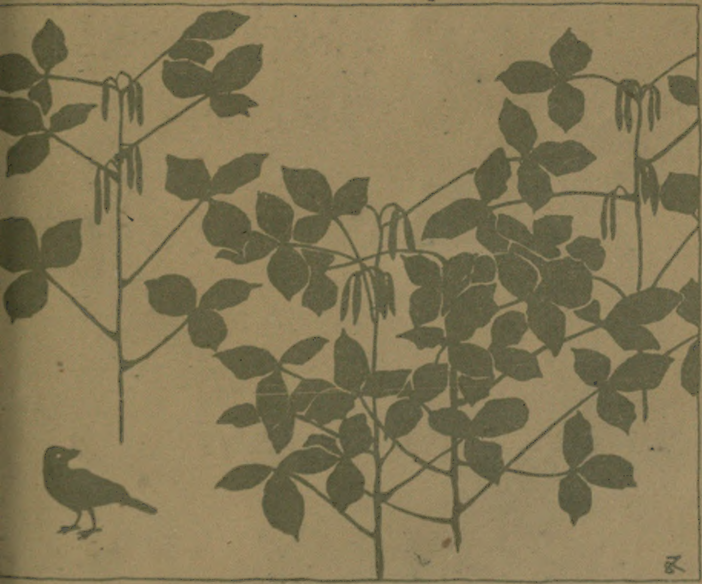
EAST-ASIAN LIB. UNIVERSITY OF TORONTO
3 1761 03046 6452



大正三年十月二十五日印刷
大正三年十月二十八日發行
有朋堂文庫
うけらが花、琴後集（非賣品）

不許複製

編輯兼發行者　三浦理
東京市神田區錦町一丁目十九番地

印刷者　平井登
東京市本所區番場町四番地

印刷所　凸版印刷株式會社分工場
東京市本所區番場町四番地

發行所　有朋堂書店
東京市神田區錦町一丁目十九番地

（岡山製本）

琴後集 終

株折頭而死、因釋其耒而守株。又呂氏春秋に「楚人有渉江者、其劍自舟中墜於水、遽刻其舟曰、是吾劍之所從墜、舟止、從其所刻者入水求之」

おもておこし―面目を施したる事

價なき寶―非常なる貴重品

ことあげ―特にとりたてて言ふこと

てなり。そのみづからよみ出で給へるうたを見るに、ふるきしらべ、新しきすがた、とりどりにそなはらざるはなし。そのいにしへをうつせるは、藤原寧樂の御世におよび、後のたくみにならへるは、堀河鳥羽の御時にくだらず。心におもふ事は、口につくさざる事なく、目にふるゝものは、詞にのせざる事なむあらざりける。これを見て、高きもみじかきも、めでたふとまざる人なし。又ことこのみの人は、その名を君に知られては、身のおもておこしと思ひて、世にもほこり、君の一うたを得ては、價なき寶にもかへじといひてぞ、ふかくよろこびける。しかるを今、こがねの聲たちまちやみて、玉のひゞき再び聞えずなりぬるは、わがどちのなげきのみかは、大かたの世人のうれひともいひつべし。これをいかでかをしまざらむ、かゝるをたれかはしたはざらむ。あはれかなしきかも。わがかくことあげするを、泉のしたにもさやかにきこしめし、天かけりてもはるかにみそなはせとなむ申す。

く

しぞき—退き

まめ事もあだ事も—眞面目に大切な事もつまらぬ事も

むしらひ—精神

しづはたの—あやの枕言

くひぜを云々—舊習を墨守して改善する事を知らざる者をいふ、韓非子に「宋人有耕田者田中有株兎走觸」

おはし、われは世のさがにかゝづらひて、おのづからうときかたにも過ぎつるを、君つかへをしぞき給ひて後は、われもおなじちまたにうつり住めば、花を尋ぬとては、われ道しるべをなし、月をおもふとては、君が舟にあひのり、うき事もともにうれへ、嬉しきふしもともによろこびて、世にありふるわざの、まめ事も、あだ事も、かたみにへだてなく心をかはせる事、今に二十年、其初めをくりかへしかぞふれば、あひ友たる事、すでに五十とせにぞあまりける。さるを今おくれたてまつりて、いつの世にかあひみむ、いづれの時にかことゝはむ。常なきは人の身のならひぞと知るも、これをいかでかなげかざらむ、かゝるをたれかはよく堪へむ。あはれかなしきかも。文の林よゝにおとろへ、言の葉の道日々にくだり行けるを、賀茂の翁世に出でて、今をすてゝいにしへにかへり、青雲の高き心しらひをもとめ、しづはたのあやあるみやびごとをたふとみいへれど、くひぜを守り、舟にきだつくるともがら、かれになづみ、こゝにひかれて、猶あやしみとがむるたぐひは多く、たまあひてよくうけ引く人なむ稀なりしを、君ひとり心をおこして、あまねくさとし、廣くいざなひしより、ちかき人はまのあたり相うづなひ、遠き人ははるかになびき來て、いにしへぶりの歌、世に盛になりにたるは、誠に君の力により

右にも、いなむべきわざならねば、つたなき筆をもわすれて、書きつくるになむ有りける。

たぐひなき香をわすれめや五月雨にかぐのこのみはくちはてぬとも

寛政のこゝのとせさつき。

祭二芳宜園大人墓一文

こゝに文化の五とせ九月八日、平春海、謹みて芳宜園の大人のおくつきのみまへに、菊の初花一枝をたむけ、香の木一ひらを焼きて、うなねつきて申さく、あはれかなしきかも、君はわれに十といひて一とせのこのかみにおはすなるが、いまそのかみを思ひ出づるに、君はまさにさかりの齢におはして、我はまだわらはにてぞ侍りける。常に縣居の庭に物まなびにゆきかひたる時、あしたにまゐるとては、君のみはかしのしりへに従ひ、ゆふべにまかるとては、君の御袖のもとにすがりて、相うるはしみまつれる事、親子はらからにもなにかことならむ。書讀むとては、君を師ともたふとみ、歌つくるとては、われを弟のつらにぞをしへたまひける。中頃にして、君はつかへの道にいとなく

かぐのこのみ―橘
芳宜園―橘千蔭
うなねつきて―頓首して
このかみ―兄
みはかし―佩刀
いとなく―暇なく

むつばひ―睦び
なり―なりはひ、生業
栂尾云々―茶道
あつしく―病氣重く
おほよそ人―他人
うるはし―親し

心にそむける事なく、人となりては、いよゝ父母のこゝろをなぐさむるわざにのみ心をつくせり。かれ其親をうやまふ、まめなる心のまことをもて、人に相まじはれゝば、うからやからも、すべてむつばひ、家びとも、こゝろをよせて、從ひなびかざるはなかりき。其なりを治むるにいとまあるときは、歌よむ事をこのみて、ふることのはのゆゑよしを、おのれに問へり。又栂尾のむかしおぼゆるわざをしたひて、いづみをくみ雪をにて、心やりぐさとぞなしける。また大かたの世の、こゝろうすきならはしをいとひて、相まじらふ人多からず。唯源信瑞ら、ふたりみたりのみ、其心をかたらふ友になむ有りける、さるを、ことし寛政のこゝのとせ、む月の末より、こゝちつねならざりしが、つひにあつしくなりもて行きて、さつきはつかあまり一日に、みまかりにき。よはひはわづかに二十あまりみとせの春秋をなむへにける。あはれかなしきかも、かゝる人の、世に長からざりし事よ。そも〳〵父母の心のやみはさらなり、をちこちのおほよそ人すら、かくと聞く人、かなしみ惜まざるはなかりき。こゝに今はのきはに、其友信瑞にことづけて、しるしの石に、ありし世の事どもを、おのれしるさむ事を請へり。又其父至言は、そのかみ鞠よく蹴たるをもて、わがせうと春鄕とうるはしかりし友なりければ、左にも

山岡大人—江戸の國學者山岡明阿彌

とほつおや—先祖

うぢひろき—同族多き

たはわざ—婬戯

べき事なしといへり。かゝれば其家にをさめ持たるは、世に知らず珍しき品なむ多かりける。またわがみかどのふるごとをしたひて、山岡大人のをしへをうけて、ふみ讀む事をしもつとめたりき。ことし寛政といふとしの十とせ、霜月二十五日、病みてみまかりぬ。年は六十あまり八になむありける。其子何がし、はやくより翁の常の心をしもよく知れゝばとて、おのれに、その在りし世のありさまをしるさしむ。又あひむつびたる人なればとて、橘千蔭に、歌をなむ請ひける。其歌に、

かた山にたつ杉が枝をさし上る月曇りなく思ひあがりてありし人はも

山口標照がはかのいしぶみ

わがせ、名標照、うぢは山口、山口は其はじめ、平の氏より出づ。その家、とほつおやより、今に五世、江戸の淺くさの里にありて、よゝ家とみ、うぢひろきをもて、市のうちに聞えたり。そのちゝは賢干、今はかしらおろして、名を至言といふ。はゝは橋本氏なり。其つまは目賀多氏のむすめにて、としつきあひ住みつれど、つひに子はうまざりき。標照いとけなかりしより、世の常のわらはべに似ず、假初のたはわざにも、おやの

かごかなる—奥まりて靜かなる

鳥の跡—筆跡

琴後集　卷十五

墓碑祭文

足水翁墓碑

翁、氏は片山、名は誠之、字を子道といひ、また常に足水とよべり。伊勢國壹志郡、菅瀬里の人なり。其父何がしが時より、江戸の大城のもとに來りて、よろづの交易のわざをもて業とせり。事足り、家ゆたかなりければ、翁の家をつぎては、あながちに富を求むる心もなくて、すべて商人のわざをばおもひとゞまりてせず、淺草の里に、かごかなるすみかをしめて、大かたの世のまじはりをいとひて、しづけき窓に獨り心をぞやりける。其常に好める事は、春秋の木くさ花もみぢを、とほく野山よりうつして、手づからおほしたつるをもて、明暮のわざとし、又いにしへ今のうつしゑ、鳥の跡を、からも大和も、廣くつどへて、是をおきふしのともとなむなしける。そは只友とするのみにあらず、よくその誠いつはりをわきまへ知りて、其品をさへ定むる事、其道の人も言くはふ

おほよそ人—世間一般の人

見ては、月の影かとおどろき、傾くよはひをおもひては、入りがたの月ぞ身によそへつべき。かゝれば、花にはおのづからにうとく、月にぞ心のひかれける。さはいへ、こはわが身ひとつのすさみなり、おほよそ人のためには、いかでかまねびもいでむ。

かけまくもかしこき―口に掛けて申上げんも畏多き

うむかしみ―なつかしく

彼―月や花自身

くち翁―朽翁、卑自の稱

にはなをたづね、しるべなきやみに月をたどり、あるは花のいのちを神にいのり、月のゆくへを佛にちぎり、また下が下なる、たき木こる山がつ、いぶせきふせやの賤の女までも、月と花とに心をよせざるなむあらざりけらし。さるはかけまくもかしこき、おほみあそびの、きはことなるが中にも、月と花とのためには、時にのぞみて、ことさらに宴の莚をまうけ給ふ事、掟たがはず、のどかなる御世のためしにさへなり來にけり。かくさまぐ〵なる世々のあとを見るに、いにしへも今も、高きもみじかきも、月と花とをうむかしみ思へる事等しくて、いづれを餘れりとし、いづれを足らずとして、一かたに心よせたる人、たれかはあらむ。しかるを、今にありて、其よしあしをことわりいはむは、人わらへにもなりぬべし。しかはあれど、これをことわるにゆゑあり。そのおとりまさりは、もとより彼にはあらざめれど、おのがじしうち見る人の、身にたぐへ思はむには、其よるかたいかでかなからむ。そもぐ〵花は春にありて、にぎはゝしきにより、月は秋にありて、悲みをぞおこすなる。今このくち翁が心にとりていはゞ、身すでに老いにたれば、つぼめる花のさかり待ち出でむたのしみもなく、品いやしければ、花々しき世を經て、時にかをらむねがひもかけず、たゞ鏡にうちむかふをりしも、かしらの霜を

すとかいふらむ、さかし人の心のおくさへ汲みしられぬべし。又有るを有りとも見ず、無きを無しともさだめあへぬ、ひじりごころのさとりも、たゞこの光をみがきてこそ照すべけれ。かゝれば、いたづらにわが世のかたぶくをなげき、老となるものとのみうちながめむは、いとも〳〵心あさしや。

大かたに見てやは過ぎむ空の月ちゞに心をおもひよせなば

月花のあはれをことわることば

花をめづらしみ、月をあはれむならはしなむ、ながれての世はさらなる、其みなもとを考ふるに、いとしも上つ代よりぞおこりける。花に心をなぐさめませしは、わかざくらの宮にはじまり、月を言の葉にかけ給へるは、朝倉の宮よりなむ聞えたる。しかありて後、藤原奈良の御世にいたりては、歌人おほく出で來て、かたみにみやびをかはし、こころごころに思ひをのぶる事、皆月花をもて、心の種とぞなしたりける。かくて世のうつるにしたがひて、此すさみいよ〳〵さかりになりもて行きて、あるは物おもひなき春を花によろこび、くはゝる老を月になげき、あるはさかしきも愚なるも、たよりなき所

わが世の―慈鎭和尚の今様の句に「我が世ふけ行く月影の傾く見るこそ哀なれ」

老となる―古今集「大方は月をもめでじこれぞこのつもれば人の老となるもの」

ながれての世―後世

わかざくらの宮―履仲天皇、花に云々の事五八四頁に注し置けり

藤原奈良―藤原は持統文武の二代、奈良は元明以後七代

にし

露のにほひを添へ―千草の花における露に映じて一段の情景を添ふるをいふ

所せく―窮屈

たかきみじかき―貴賤

きは〱―身分

身分

みしぶのけがしさ―水澁即ち水あかの穢らはしさ

光をつゝみ―老子に「和其光一同其塵」とある類

對レ月言レ志といふことを題にて書けることば

いよゝ高うかゝげて、ふけ行く影をひとりうちまもりて、つら〱思ひみれば、おのづから心の塵も名残なくて、なべてよろづのことぐさこそ、くまなく思ひ出でらるれ。さるはちぐさの花に露のにほひを添へ、絲竹の音のひゞきをすますらむたぐひの、艶になまめいたる、よのつねのをかしさをば、更にもいはじ。いでやすみのぼる光の、高くあらはれて、人のめとゞめむに、まばゆきばかりなるも、時のまに、あやなき霧のまよひにかきけたれて、たゞやみかとばかりたどり、中空にしばしありと見ゆるも、やがて西になる事のとゞめがたきや、うき雲のさだめなくて、きのふは榮え、けふは衰ふる世の有樣こそ、先おぼゆれ。又あさぢが露にやどれども、所せくもおぼえず。海原の波にうかびても、廣きを知られざるは、たかきみじかき、おのがじしのすみかのきは〱につけて、身のやすかる心しらひによそへつべきもあはれなり。またおち瀧つせゞのしら玉は、これがために、心清さをませど、野澤の水のにごりに宿りても、さらにみしぶのけがしさをきらはざるは、世にたがひ、時にさかふ事なくて、光をつゝみ、跡をかく

うちつけ―率爾

つま―端

きは―身分

すさまじかる―無興なる

たきしめ―香を

今一聲の―拾遺集「行きやらで山路暮しつほととぎす今一聲の聞かまほしさ

初せ川なみまに月もやどる夜に

とそれが本をつきたるは、なれたる口つきと聞ゆ。かゝるをりに歌よまでやはあらむ、よしやうちつけなるわざも、なさけ知らむ人は、とがめじなどおもへば、あふぎのつまに、

月見つゝ寝られざりけり郭公ほのかになのる聲聞きしより

と書きて、簾のもとにおし入れたり。こを見て、あなうたてや、あだし人ありけりとて、皆おくのかたにかくれむとす。されど、みやづかへ人の、世なれたるきはなればにやあらむ、いたくはぢらふとにもあらで、あふぎをばとりて入りぬ。かゝる人やどれりとも知らで、くまなく見られしこそねたけれ、さはれかへしせざらむもすさまじかるべし、などいふ聲、かすかに聞ゆれば、猶おくのかたをまもりをるに、やがて白きしきしの、ふかくたきしめたるを、その扇に結びつけて、

郭公月にかたらふしのび音をいづれの雲のひまもらしけむ

とあり。今一聲のとおもふも、あながちなるに、月ははや山のはにかくれて、川波の音のみ高う澄みわたりぬ。

ごたち―女子に對する敬稱

霞も霧も―續千載集「三日月の雲居に高く出でぬれば霞も霧も立ちぞへだてぬ」

すきかげ―透けて見ゆる人影

まみつらき―目付顔付

二本の杉―初瀬の名物、古今集「はつせ川古川のべに二本ある杉年を經てまたもあひ見む二本ある杉」

うれしき瀬―源氏物語引歌に「祈りつゝたのみぞ渡る初瀬川嬉しき瀬にも流れ逢ふやと」

ごたちは明日なむこもり給ふべきとて、はらへのまうけなどし、おほみあかしの事どもとりまかなふ。さるはいづれの殿の女房にかと、たゞならず覺ゆ。暮れぬれば河づらに向ひ居て、月の出づるを待つほどに、物おとしづまり行きて、岩こす波高くひゞき、山風遥に吹きおろしたり。村雨の雲も、名殘なきまで晴れて、くまなくさし出でたるは、霞も霧もとぞおぼゆる。更け行くまゝに、今は人めなしとにやあらむ、月見むとて、おくの人々はしちかう出で來ぬ。いよすいとまばらなれば、さし入る月の光にさそはれて、すきかげあらはに見ゆ。白ききぬきたるも、また二藍なでしこなどもあり。まみつらつきなどは、さすがに扇かざしたれば、分かず。すがたは皆あえかに、らうたげなる人と見えたり。二本の杉はいづこにかあらむと、水上を遠くのぞむもあり。又うれしき瀬と名にたちたるは、なつかしき水のながれよなどいひて、おばしまにより添ふもあり。月やゝかたぶきなむとする頃、郭公の二聲三聲、まぢかく聞きなされたるは、たぐひなく艶に、をかしき夜のさまなり。一人が、

こゝをせに鳴くほとゝぎすかな

と口ずさみ出づれば、またひとりが、

琴後集　巻十四

雜文

河づらなる家に郭公を聞くといふことを題にて物語ぶみのさまにならへる文

初瀬―大和國磯城郡

ぜじやう―軟障、壁代の類にて、室の隔にも用ふ

ひすまし―樋洗、もと厠を掃除する者の稱、はしため

あじろ―網代車

年ごとに初瀬にまうでけるが、今年はう月ばかりにとて、思ひたちにけり。先夜一よ御堂にこもりて、例の河づらのやどりにおりぬ。おくの方は人多く居こみて、ぜじやう引きわたし、屏風たてまはしたり。袙きたるわらは、ひすましめくものなど、出で入るを見るに、こはさいつ日奈良坂にて行きあひたる人々なりけり。あじろのやつしたるに、ことさらに、卯の花あまた折りかざして、やりなしたるを、よしある人と目とゞめられしに、ゆくりなくこゝにやどりせしもをかしければ、さうじのもとによりてかいまみれど、物へだてたればよくも見えず。かり衣すがたのきよらなるをのこどもうち寄りて、

しのぶのくさ云云—忍び出てて歌を詠ずる意
いとなき—暇無き

てまゐらするを　殿には刀自に親しかりしごたち、あまたおはすめれば、しのぶのくさつみはやし給はむをりあらば、見せ給ひねかし。猶人々のも侍れば、そはさらにも物し侍りぬべし。今はいとなきほどにて、もらし侍りぬ。あなかしこ。

まうのぼり—参り上り
ゆくりなう—思ひかけず、ふと
うれ—末
星の逢瀬—七夕
めもあやなる—絢爛目を奪ふ
あえ—あやかり
あらましかば—拾遺集「世の中にあらましかばと思ふ人なきが多くもなりにける哉」

越前のかうの殿に侍ふきち子のもとへ贈れる書

とのにまうのぼり給ひて後は、おのづから雲ゐのよそなる心ちし侍りて、たつ霧のほのかにのみ思ひまゐらせ侍りしを、きのふゆくりなう打おどろかさせ給へるは、荻のうれ吹く初風よりも、いとめづらかになむ。さるはおもと人たちうちつどひ給ひて、來むよひの、星の逢瀬をしのび出で給へる御ことのはども二巻、ふりはへてしめし給へるなむうれしき。先見もてゆき侍るに、色ににほへる千ぐさの露を分け入りて、花野の錦におりたち侍る心ちのせられ侍りて、めもあやなるは、誰も〱たなばたつめの手にやあえ給ひけむとおもふも、こよなき御すさみなりや。げに大かたのよに似ず、みやびごとこのませ給ふ殿の御手ぶりこそしるかりけれ。かゝるにつけても、ぬひ子のとじが世にありがたかりし宿世の、おもだたしう侍りしも、いまは一時の夢とおもひなさるゝ常なき世のさがこそ、わりなきわざに侍れ。昨日はかのとじが四十九日にあたり侍りて、人人歌などよみてしのび出で侍りしを、御せうそこ承はるにも、いとゞあらましかばとなむ、思ひつゞけられ侍りぬる。人々の歌どものなかに、千枝子が長歌ひとつ書いしるし

身におはぬ—敢て當らざる

兼題—豫め會主より課する宿題

かたゐ翁—乞食翁、自己の卑稱

おもておこし—面目を施すこと

つみは、さりどころもなうおぼえ侍り。ことに尼君の御まへにも、何くれとおほせごとなど賜はりしは、いとゞ身におはぬ心ちなむし侍りける。よの子の集、日記など見せ給へるは、いとうれしうなむ。さるは、

木曾路日記

ふみ見るもうれしかりけり木曾の山分けし昔の跡をたづねて

さほがは

おとにのみ聞きわたりつるさほ河の清き流をけふこそはくめ

とぞおもひ侍るは、いとみだりがはしう侍れど、かの御まへにも、聞えあげたまへや。

おなじ北のかたの御もとへかへし

兼題の御歌賜はれるは、いともかしこうなむ。御言の葉の露を光にて、むぐらの門をももてはやし侍るべく、かつは集ひ侍らむ人々にも見せ侍らましかば、かたゐ翁がおもておこしにもと、よろこび聞えまゐらせむも、なか〳〵にてなむ。あなかしこ。

おふけなくも—身分不相應にも

たうびなむ—給ひなん

おもと人—御側に仕ふる人、侍史、執事など書くと同じく、直接貴人を指さゞる也

おふけなくも御せうそこ賜(たまは)りつるかな。そは山里(やまざと)の御すまひの、世にしづけくおはしつるほどよりも、かへりて歌にのみ御心よせたまふと、をしへたまはるよ。さるは御心ゆくわざにこそおはしまさめ、と思(おも)ひやり奉(たてまつ)りぬ。此頃ふたらの親王の御會の歌ども、めし給ふなるを、よみ出で給はゞ、うち〳〵にやつがりにも見せ給ひて、よしあし問ひたうびなむと宣(のたま)はするは、いともかしこきわざなり。かく才(ざえ)みじかく、心つたなき身の、いかでさるさだめをばまうし侍らむ。さはいへ、故縣主(こあがたぬし)のちなみにおぼしとり給ふめれば、なか〳〵に物つゝましげに、へだてあるやうに侍らむは、御こゝろにもそむきぬべければ、およばぬ心にも、おもひうる事の侍らば、心おくことなくぞ聞えまゐらすべき。ひがごとのみ多(おほ)からむをば、なとがめ給ひそ。たゞおほせごとにそむかじとて、かくはこたへまゐるになむ。あなかしこ。おもと人のもとへ答(こた)へまゐる。

さがらの殿の北のかたの御もとへかへし

くはしうしめし給へるは、いとかしこうこそ。過ぎし日は、御帳(みちやう)のまへちかう侍りて、みものがたりなど、くはしう聞き承(うけたま)り侍りしは、いとうれしきものから、猶おふけなき

なづみ―拘泥し

ふぐし―萬葉巻頭の歌に「ふぐしもよみぐしもち」とあるをいふ

そむきけむ親のいさめのかなしきにはるゝばかりの道を見せばや

又後撰、

春くれば咲くてふことをぬれぎぬにきするばかりの花にぞ有りける

此二首などは、「るゝ」といふをうけたる格なり。然れば常に定まりていふ詞もあれど、又時にとりて變格もありと見えたり。かの「と」といふ詞の格にも、「るゝ」といふ詞よりうくる事たま〳〵はあり。あながちになづみがたくや侍らむ。

「いはゆる」といふ詞古くはうつぼ物語に見え侍り。「いへる」を延べて「いはゆる」といへるなり。「はゆ」の反「ふ」なれば「いふ」と云ふ語なれど、音を通はして「いへ」るをのべて「いはゆる」といへるなり。通音にて、反切をかり用ふること、古言に常にあり。萬葉の「ふぐし」は「ほりぐし」を約めたる語なり。さるは「ふ」は「ほる」の反なるを通はし用ひたり。「ほりぐし」とはいふべく、「ほるぐし」とては物の名目にいふ詞ならざれば、「ほる」の反をかりて、此「ほり」の語をつゞめたるなり。此例多く侍り。

くめ子君の御もとへ

なめげ―失禮
かど―才
あらぬ―つまらぬ
かへさひ―返し
ところ―野老といふ草の名に所を掛く

病さへ加りて、はかぐ〳〵しうも物し侍らざりしは、いとなめげなるわざになむ。宣ひし事ども、しづかに考へ侍るに、先は御心用ひのくはしき、御學びの廣き、さらにたぐひ有るまじうおはするこそ、めづらかなれ。己がかどなく、心のおくれたるに、今はよろづにもの忘れがちなれば、とはせ給ふことありとも、かしこき御耳を廣むべき事も何か侍らむ。されど、御詞はそむかじと思ひ侍れば、あらぬひがごとを、ひとつふたつ後にかいつけ侍り。猶申す事たがひ侍らむをば、さらにかへさひをしへ給はらむ事こそあらまほしけれ。あなかしこ。

「るゝ」といひて「ばかり」とうくる詞の格。

二十一代集のうちに、「るゝ」といひて、「ばかり」とうくる詞、いと稀なり。「る」を一つはぶきて、わするばかり、などいへるは、八首にもあまりてや侍るらむ。また拾遺に、

春の野にところもとむといふなるは二人寢ばかり見出たりや君

とあるも、「る」を一つはぶきいへる格なり。然れば「ばかり」は、必「と」とうくる格と同じとして、定むべきかと思ひ侍るに、猶しからず。新千載集雜中に、爲家卿、

よしなき—つまらぬ

季鷹—加茂季鷹、京都加茂の祠官にて初め有栖川宮に就きて歌を修め、後江戸に來りて千蔭に交る

をちつ日—過日

をぢ〳〵—徐々

へをも考へみぬ人のわざにて、いふにも足らず。いかでわが國の學びする人の、さるよしなきならはしをば學ぶべき。此宿禰世に在りし時、しるしおけるもの、一くさだにあらねば、なか〳〵に、かゝるもののはし〴〵殘らむはあしかるべし。はた心あらむ人の見て、あなづりわらはむこそ本意なけれ。宿禰をばたゞ名のみこと〴〵しういひつたへてありぬべきなり。季鷹の縣主今は世に名高かれば、かの傍注のおこなはれむ事、此序のあるによりて、光を増すといふなるよしもあらじ。かつこの序なしとて、その書のおほよその心、知られぬふしも見えず。こはかの縣主にもあひはからひ給ひて、いまより後の本には、除き捨て給ひねかし。宿禰世にありし時は、おのれもいとうるはしうし侍りつるを、今かゝるものをかたはらより見侍るも、いとめやすからず思ひたまへらるれば、くはしう聞えまゐるなり。あなかしこ、人のさがいふとな思ひたまひそ。

寂阿におくる書

をちつ日は、むぐらがもとをとはせ給ひて、ゆくりなく御物語聞え承はりしは、いとうれしうなむ。とはせ給へるをぢ〳〵、御こたへとく聞えさせつべきを、老ほけ侍る身の、

音人―備中介本主の子、天長中秀才に擧げられ累進して貞觀八年には從三位檢非違使別當左衛門督を兼ぬるに至る、勅を奉じて弘帝範及び群書要覽を撰し又菅原是善と共に貞觀格式を撰定せり

ことわり―理

大江の氏も、本大枝と書きつるを、音人の卿の表たてまつりて、大江と改めむことを請はれしかば、やがてみことのりありて、ゆるし給ひつるより書き改めしなり。賀茂と鴨も、その祖は同じく、こと葉も同じかれど、かく書き分ち來ぬれば、そをみだりたる人はあらず。かゝるためし猶いとおほかり。又東萬呂在滿などの、かきしるされしもの、あまたあるを見るに、みな荷田とこそあれ、かくやうにことざまなる文字を書かれし事はあらざりき。おもふにこゝは、蚊と閩と、音同じければ、閩を加の假名に用ひられたるものならむか。さらばいとあやまれり。ひろく字書を考ふるに、蚊も閩も、音文とはあれど、蚊蝱の蚊を、閩と書きしことは、物に見えず。閩に蚊字の義なきことはもとよりなれば、加とは讀みがたかるべし。閩は地の名にて、その語のもとは虺蛇の事より起れり。そは說文に、閩東越蛇種也故字从レ虫門聲と見えたり。もし強ひて此字をわが國の言葉して讀まむとならば、へみとはいひもしつべし、いかで加と讀まるべきや。かゝれば、いにしへより書き來れる文字を、かく書きあらためむ事、我國のいにしへのおきてにもそむき、またもろこしの文字のことわりにもたがへば、かならずなすまじきわざなり。たゞちかき世の博士たちのくせにて、姓氏の文字をみだりに書きなす事のあなるは、わがいにし

やいやり―掻き破り

やもひ―病

御風の宿禰―在滿の子、荷田御風、字は子玄、東藏と稱す、國學者也

やつがり―やつがれ、拙者

しこに、このふみ見たまひたらむ後には、とく〳〵かいやりたまひてよ。むつきはつかあまりやうか。

自寛のもとへおくる書

過ぎし頃は、例の夜とともにかたらひあかし侍りて、心ゆくわざになむ。いよゝやもひおこたらせたまふや。あしたゆふべ風すさまじうおぼゆるをりしも、物つゝましうみづから心添へ給ひねかし。過ぎし夜御ものがたりし侍りしふし、冷然法師のまで來て、伊勢物語の傍注といふもの見侍りつるに、御風の宿禰の序こそ、いとつたなけれといはれし。やつがりそをいまだ見侍らねば、ともかうもこたへざりしを、此頃ふみあきなふ人のもたりしを取りて見るに、こはいと心もせで、とみに書かれたるものにや、げにも法師のことの如し。されどかゝる事は、後よりとにもかくにもなすべきやうなければ、さてもありなむか。たゞ氏のかきざまのいかにぞやおぼゆることあり。荷田を岡田と書かれしは、何によられしにか。いにしへ弘仁の時、姓氏錄えらばれけむよりこなた、姓氏の文字は正しき定めある事にて、みだりにわたくしの心もて文字を書き改むべきことにあらず。

たゞごと歌―古今集序「五つにはたゞごと歌、偽の無き世なりせばいかばかり人の言の葉うれしからましといへるなるべし」

かたはらいたき―はたの見る目も笑止なる

た風雅のむねにはいと遠くなむ侍りける。いまこゝろみに、もろこし人の詞をかりていひ侍らば、新古今の歌は、纖巧輕佻なりといふべく、かの大納言の手ぶりは、曝露率易なりとこそいひ侍らめ。しかれば歌は、詞のあやあるは、みやびごとのまことのすぢなれど、あまりに詞をかざらむとして、纖巧に引かれて、まことをうしなはざらむやうにありぬべく、又たゞごとに、うち思ふ心のまゝをいひ出づるは、うたのもとづく所なれど、率易といはむばかりにつたなく、心詞のあらびざらむやうにありぬべき事なり。このふたつの趣をあやまらざるを、まことの風雅のむねにかなひたりとこそいひ侍るべけれ。またたゞごと歌といふ事をとなへ出でて、それを歌のまことのさまなりと思へるも、いみじきあやまりなり。たゞごと歌といふは、歌のひとつの姿にて、それにはまた一つのいひざまある事にて、猶詞のえらみなきにしもあらぬ事に侍るを、ちかき頃の人の、たゞごと歌とてよめるを見れば、たゞ何の用意もなく、心詞あらびていといやしげなるは、かたはらいたきわざになむ。いにしへの人のたゞごと歌といへるは、いかでさるたぐひならむ。かにかくに、これも文雅といふことの本をわすれたるわざにぞ侍りける。さはれかくやうに人のさがいふことは、いと〳〵あるまじき事にぞ侍る。あなか

難波津の歌は前出「安積山かげさへ見ゆる山の井の淺くは人を我が思はなくに」

くだち―下り

爲兼―玉葉集の撰者

詞をもちひ、序歌などいふすがたのおほく、譬喩の歌などいふ事の侍るにて、いにしへの歌は、詞をかざりてあやをなせるものなる事、明らけくして、あやもなく、たゞに思ふまゝをいひ出づるは、かへりて後の世の事にて、みやびたる言の葉の道の源にそむけるわざなる事を知るべし。さて世くだち行き、時うつろひて、此詞のあやこまやかになりて、心も詞もふかく巧をもとむる事とはなり侍りにけり。されど花山一條の御時までなるは、心にいつはりたるふしなくて、まことをうしなへるさまなければ、これよりして上つかたの歌は、猶かの風雅のむねにそむかざるが多くなむ侍りける。これよりくだりて、後鳥羽土御門の御時にいたりて、人々ことざまなる歌のすがたをこのみ侍りて、いつはりたるふしを多くかまへ、まことをうしなへる事をつくり出で侍りてより、まことの風雅のおもむきは、かくれ行き侍りけり。さて其後、かの爲兼大納言などの、新古今の手ぶりの巧にすぎたるを、ふたゝび學ぶべきことならずと思はれたるは、さる事に侍れど、そをあらためむとて、たゞ打おもふまゝをいひ出づるをのみ、よき事とおもひあやまられて、詞はえらむべきものともおもひたらず、いといやしげにあらびて、あらぬさまなる歌をよまれたるは、曲れるをためて、直きに過ぎたりとやいひ侍らむ。これもま

八雲たつ―「いつも八重垣妻ごめに八重垣つくるその八重垣を」

歌の父母―古今集序「難波津の歌は帝のおほん始なり浅香山の言葉は采女のたはぶれよりよみてこの二歌は歌の父母のやうにてぞ手習ふ人の始にもしける」

のまゝをたゞにいひ出づるにも、雅なると俗なるとあり。あやをなして詞をかざるにも、雅なると俗なるとは侍ることなれば、其けぢめをよく考へおもひて、其おもむきをえらばずしてはあるべからず。さて詞にあやをなすは、おのづからなる言の葉の道にて、からの歌ももとよりさる事にて、また我國ぶりも、またくおなじ事になむ侍りける。さるをいにしへの歌は、たゞ何のあやもなくて、うちおもふ事をいひ出でたるまゝのものとおもへるは、古の歌のさまを、よくも思ひわきまへずして、みだりにさはおもへるにて、いと／＼古にくらきなり。今そのおほよそをいひ侍らむ。かのすさのをの尊の御歌に、八雲たつしか／＼とのたまへるは、其の御心は、たゞ妻ごめに八重がきつくるとのたまふべき事のみなるを、しか御詞をかざり給ひて、うちかへして宣へるが、御詞のあやいみじきなり。かく御詞のあやあるによりて、御心もこもりて、御詞の外に、ふかき御おほしのほども、思ひやられ侍るなり。又歌の父母といへるふた歌も、難波津の歌は、一首のおもてはたゞ花の事をいひて、あらはには其の心をいひやぶらず。安積山の歌は、山の非をかりて、詞をのどかにいひおこせるなど、皆詞をあやなせるにて、こをからの歌にくらべ見るに、かの風人の本旨にぞよくかなひ侍る。すべて詞をおこすに、かならず枕

うちあはぬ―理窟に叶はぬ

おしこめて―一くるめにして

事をいはむに、なずらひに引き出づべき事にはあらぬを、此辨つくれる人は、此聖の詞をば、いかなる事を宣へるなりと思へるにか。こはうちあはぬ事になむ。其心をもよくわきまへ知らざらむ事を、みだりにより所となして、引き出でつべき事かは。今辨つくれる人の心をくみ侍るに、歌は心におもふ事をいふものなれば、詞にあやをなさでも、心のまゝをいひ出でむを、まことの歌とし、詞をかざりあやをなすは、とりつくろひたるいつはりごとのやうに思へると見えたり。こは歌はまろはだかなるがよしなどいへる、えせ歌人のひがごとを、まことなりと信じて、いたくおもひまどへるにて、風雅の源にくらきなり。歌は心におもふまゝをいふものなれど、そのいひざまにあやあるをこそ、風雅なりとはなすべけれ。そのあやをなすといふも、いつはりてつくるにはあらで、おのづからなる詞のにほひなり。たとへば、よき人のものいひは、おのづからに品たかく、しづのをが口つきは、おのづからに品ひきゝが如くなるをいひ侍ることなり。さて末の世にいたりて、この詞にあやをなすにひかれて、浮華にながれて、いつはりたるふしなど出で來らむをこそ、わろしとはいふべけれ、詞にあやをなすは、文雅の本なるを、おしこめて狂言綺語なりなどいひて、そしるべき事には侍らず。又今の世にありては、心

「詩有二六義一焉、一曰風二曰賦三曰比四曰興五曰雅六曰頌」

魯頌の詩の一句—「思無レ邪、思二馬斯徂一」とあるをいふ

も、心にうちおもふまゝを、あやもなくいひ出でて、直情徑行などいはむばかりなるは、いたくみやびごとの道の旨にそむけるわざなる事を知るべし。さるを情のうごくにまかせて、はげしくも、やはらかにも、いひ出でむと侍るは、あまりなるいひごとにぞ侍らむかし。はげしくと侍るは、いかりのゝしり呼びさけぶ時に、そのいかりのゝしり呼びさけぶまゝをも、詩歌にのすべきものとおもへるにや。風人の口より、いかでさる事はいひ出で侍るべき。古より今にいたるまで、からにも、大和にも、歌にさやうなるは絶えてなき事になむ侍りける。さてしかはげしき心をも、いはでかなはぬ事ありて、風人のいはむには、さは聞えぬさまにいひて、おのづからに、其おもむきを知らするやうにこそ、いひ侍るべけれ。さてしもみやびごととはいふになむ。又この思無レ邪といふ語をこゝに引きたるは、いかなる故にか。此語は、魯頌の詩の一句を、聖の引き出でてのたまへるにて、ふるき注さくに二つの説あり。其一つは、三百篇の詩を學ぶには、此魯頌の一句に思無レ邪といへる心をむねとして學ぶべしと敎へたまへるなりといひ、又一つは、三百篇の詩多しといへども、其詩の心、皆正しき義理にかなひたる事、此思無レ邪とあるにそむける事なしと宣へるなりとせり。今いづれの義にしたがひても、大和歌の

うちまかせて―一概に

思無邪―論語に「子曰詩三百一言以蔽之曰思無邪」

鄭氏―鄭玄、字は康成、後漢高密の人

そへ歌―古今集の序に「その六くさの一つにはそへ歌、おほさゞきのみかどをそへ奉れる歌、難波津に咲くや此花冬ごもり今を春べと咲くやこの花といへるなるべし」

六義―毛詩序に

ず。經傳のむねをのべ侍りし事なるをや。又かの辨に、溫柔敦厚を詩の敎との聖語は、詩書禮樂をあげつらふ時のことにて、うちまかせて、かゝらでは詩にあらずとは言はれまじきなりとあるは、しひて私の心をたてむとて、難じ侍るなり。詩書禮樂をならべてあげつらはむ時にしも、詩のおほむねをば宣ふべき事には侍らずや。とにかくに溫柔敦厚のおもむきにそむきたるは、風雅の道にはあらざる事になむ。又辨に、風人の心は、からも大和もひとしかるべきことわりにて、情のうごくにまかせて、はげしくも、やはらかにも、いひ出でむこそ、思無邪とあるにもかなふべけれとあるは、いと〳〵心得がたし。先この辨つくれる人は、風人といふ風字の心をば、いかに心得たるにか。鄭氏が毛詩の箋に、風化風刺皆謂譬喩不斥言也と見えて、風とは、ものによそへて言ひて、うちつけにあらはにには心をいはざるをいふなり。されば貫之ぬしも、この風の體なる歌をばそへ歌とぞ名づけられ侍りける。さて風は六義の一つなるを、詩人をさして、風人としもいへる事は、いかなる故ぞといふに、詩は六義ありて、おの〳〵其體ことなれども、詩の源は、風を第一とする事にて、もろ〳〵の體、皆この風の心をかねざる事なくて、かの風化風刺などいふが、みやびごとのもとなればなり。此風人といふ名の侍るにて

の弟子にして文學の科に居る

うちつけ—露骨

直情徑行—己の情をほしいまゝにしてたゞちに事を行ふ義、禮記檀弓に出づ

孔子—孔穎達、冀洲の人、孔子三十二世の孫にして、五經正義を撰す

而譎諫。言レ之者無レ罪。聞レ之者足二以自戒一など侍るも、みやびごとは、必ず詞のあやあるをむねとなすべき事の本をいへるなり。文を成すといひ、文を主とすといへるにぞ、ふかき味はひは侍りける。また言レ之者無レ罪しかぐ\と侍るは、そしるべきふしも、うちつけにはそしらず、うらむべきふしもたゞちにはうらみずして、詞にあやをなしていひて、ゆるやかに其心を知らすが、風雅の本旨なるをいひ侍る事なり。されば譎諫とも、風諫ともいへるなり。もし人をそしるに、うちつけに拙く心をあらはし、人をうらむるに、ただちに思ふまゝをすげなくいはむには、いたづらに人のいかりをおこさしめて、これをいふ人罪を得むことうたがひなし。そはかの直情徑行といふものにて、みやびたるわざにはあらざるなり。かの溫柔敦厚詩敎なりと聖のたまひけるも、主レ文而譎諫といふ心を示されたるなり。されば孔子の正義にこれを釋して、依違諷諫不レ指二切事情一。故云二溫柔敦厚是詩敎一也ともいひ侍りき。この正義の說を合せ見て、詩の序にいへるも、このひじりの詞も、其むねおなじき事は明らかにて、これにて詩のおほむねは盡き侍りぬべし。春海さきにこのあらましを、かつぐ\いひ侍りしを、かの辨つくれる人の見て、いたくとがめ侍りしは心得ず。そは春海がわたくしの心に、おもひまうけていひ侍りしにはあら

たけき—立派に堅固なる
けぢめ—差別
あて—上品
子夏—名は卜商、衛の人、孔子

をこそもととはなし侍りつべけれ。さてその貫之ぬしのしるされたる趣を、いかにぞと見るに、もはらから歌になずらへよそへて、かしこの事をかりて、こゝの歌の心をば、あかされ侍りしなり。こはいかなる故にしかるぞと思ふに、からもやまとも、歌はまたくおなじものなればなるべし。かゝれば春海が歌の事いひ侍るも、貫之ぬしのをしへによりて、もろこしの事ども引き出でていひ侍るにて、聖のたまひ置きしことを、より所となさむ事は、人のうたがふまじき事とおもひ侍ればなり。わが私の心にのみはかりていはむ事は、たとひいかばかりたけきことわりありとも、そは公のあげつらひとはいひがたくこそ侍らめ。そも〳〵歌は、人の心にうちおもふまゝを、見るもの聞くものにつけていひ出づるわざなる事は、誰も知り侍る事にて、いにしへも今も、それ然らじとは誰かおもひ侍らむ。されど其心をのぶるに、しな侍ることにて、みやびかなると、さとびたるとのわかち侍ることなり。そのみやびかなると、さとびたるとのけぢめは、いかにわかつべきぞといふに、おなじ心をいふにも、詞あやありて、いひざまの長閑にあてなるを、みやびたりとし、詞あやなくして拙く、心のあらはれていやしきを、さとびたりとは定め侍る事になむ。かの子夏が詩の序に、情發二於聲一聲成レ文といひ、また主レ文

うべなひ―納得し

さてもありぬべき―それはさうして置きて差支なき

おもほえず―思ひ掛けず

もの―書物

又かのあげつらひの後に、歌よまむずる事のおほむねを、いさゝかしるし侍りしを、いたくことわりにそむきたりとて、雅俗辨といふものの出で來しをも、さらにしめし給へるは、かへす〴〵もうれしうなむ。その辨といふを、くりかへし見侍るに、春海が心には、猶うべなひがたき事こそ、おほう侍りけれ。今上人のために、春海が思ふところくはしう聞え侍らむ。こはまけじだましひにて、あながちに人に勝たむとのすさみには侍らず。たゞわが上人にへだてなう聞ゆるなれば、かならず人にな見せ給ひそ。かゝる事は、おの〳〵立てたる方侍るものに侍れば、人々おもふところ異ならむは、さてもありぬべき事なり。さるを、しひて我のみもの知りがほならむは、あらそひのはしとなりて、おもほえず、人の心をうごかす事の侍りぬべければ、いとつゝましうこそ。春海が歌よまむずる心をいふに、もろこしの聖の詞を引きていひ侍るは、わがみかどの事をいふに、もろこしのためしを引き出でむ事は、いかにぞやとおもふ人も侍るべけれど、これには故ある事になむ。およそわがみかどの、いにしへの人の歌の事、あげつらひいへる事は、ものに見え侍らず。たゞかの貫之ぬしにいたりて、はじめて古今集の序に、歌の心をばあげつらはれたり。かゝれば今にありて歌の事あげつらひ侍らむは、貫之ぬし

七の寶—金銀・瑠璃・硨磲・瑪瑙・眞珠・玫瑰、其他多少の異說あり、よそほしきは立派にうるはしき意

ことくはへ—議論を付け加へ

とみ—急場

まめやかにさいなまれ—まとめに責められ

おなじ禪師のもとよりおくられし雅俗辨を論じてこたふる書

七の寶のよそほしきあたりに、あたらしき春をむかへたまひて、御法(みのり)の花のゑみさかえておはさうずとうけ給はるは、まづこそよろこばしけれ。春海(はるみ)も事なくて年をかさね侍れど、いまは六十(むそぢ)にちかくなりにて侍りぬるに、いとゞ何をしてかくいたづらにと、思ひめぐらし侍るにつけても、さらに聞えむかたなきこそわりなきわざなれ。此頃(このごろ)芳宜園(はぎぞの)の翁(おきな)がもとへ御消息(みせうそこ)賜はりつるを見侍るに、かのなにがしが歌の事ども、翁があげつらひたりしついでに、春海もことくはへ侍りしを、又とがむる人のありとて、其人のいへることども書(か)いつけて、春海にも見よとて賜はりしは、うれしうなむ。されどかのあげつらひは、たゞとみの事にて、ふかくも心せでものし侍りつれば、ひがごとのおほく侍らむは、もとよりさる事ならむかし。さるは名をもかくし侍りて、わがともがらのわざなりとは、人にも知らせじとての戯(たはぶれ)に侍りしを、いかなる人のいひもらし侍りて、さはまめやかにさいなまれ侍る事ぞと、今は悔(く)い思ひ侍れど、さらにかひなきわざになむ。

京都の歌人

けふは人こそ―古今集「あす知らぬ我が身と思へど暮れぬ間の今日は人こそ悲しかりけれ」

心あがり―高雅の心を抱き

ことゝひ云々―互に交誼は通ぜざれども

思ひはるけ―思ひあきらめ

あらましかば―拾遺集「世の中にあらましかばと思ふ人無きが多くもなりにける哉」

年頃うらなくむつびかはし給ひつるを、過ぎにし初秋に、草の上の露よりももろく見はて給ひぬとなむ。さるはをしみ給はむ御なげきはいふもさらなり、よそに傳へ聞き侍りてだに、けふは人こそと、袖うちしぼり侍りぬ。此翁しも、末の世のにごれる流れを捨てて、清き河瀬の遠きみなもとをたづねて、古人のことの葉の、高き心ばへをよく汲み知りて、さらに人をもよくいざなはれ侍りしかば、おのづから其門をふみならせしあたりには、心あがりしたる歌人なむ多きといふめるは、まことに翁がことたて初めししるしありとこそ、おぼえ侍るなれ。はやくより、其つねの心おきてをきくに、わがあがたゐの翁のをしへのおもむきに違ふべくもあらずなむおぼえ侍りしかば、ことゝひかはさぬものから、猶心しりの人のやうに、したはしう思ひわたり侍りしはや。あはれ常なきは世のならひに侍れど、ことわりの齢なりとは、えも思ひはるけがたうなむ。

さしも世に高く聞えし松風のしらべ絶えぬといふがかなしさ

あらましかばとは、たれも〳〵このごろのくりごとにいひ出で侍るになむ。あなかしこ。

いとなし―暇なし

したゝかに―事事しく澤山に

鹿の御苑―大藏に「鹿苑佛爲道處佛於鹿野苑古佛住處說四諦十二緣」とあり、釋迦の佛道を修めたる處なるによりて寺の義にいふ

衣のうら玉の―老子に「被褐懷玉」といへるが如き意にて、うはべに現はれざる美德の修養をいへるなるべし

蘆菴―姓は小澤

がいはく、さる事なり、わが師說にしたがふ事、考へ得たる事あり、されどこゝにはまのあたり盡し難しといへば、さらば其おほむねしるして見せ給へとあるに、けふ此書かうずるにいとなし、後の五日を待ち給へとて、其日はわかれぬ。かくちぎりたれど、一日二日のあひだに、したゝかにものせむ事はものうければ、いさゝかおもふ所しるしつけて、景寛にあたへぬ。この淸濁の事、猶いふべき事も、更に考ふべきもいと多かれど、それはかさねてこそものすべけれ。これはたゞかたはしばかりになむ。

眞乘院雪岡禪師のもとへ

鹿の御苑の御ありさま、いかにとも訪ひたてまつらで年經侍りぬるは、塵の世にかゝづらふ身のならひとは、おぼしも汲ませ給ふべけれど、かくまでおこたりがちなるこそ、罪さり所なうおぼえ侍れ。しかはあれど、菜摘み水汲み給ふらむ御いとまに、はかなき花紅葉の、あはれわすれぬ御心のみやびも、猶むかしにかはらせたまはで、衣のうらの玉のみかは、御ことの葉の光をさへみがき添へ給ふとは、秋が花咲く宿に、をり〳〵おとづれ給ふにつけて、おぼろげならず傳へ承るぞうれしき。まことやかの蘆菴の翁は、

にしごりのや―錦織舍、晉海の書齋

さだかに―明かに

ど用ひたる事も、いくそばくといふ事を知らず。これまたく〳〵濁る詞には、清音の字をもかね用ふる、いちじるきにはあらずや。てにをはの詞のみ斯くなりといふことわりもあるまじければ、いづれの詞にても、濁る詞に清音の文字を用ひたる事有ること疑なし。かゝれば先達の定めいはれたる說、うごくまじうこそおぼゆれ。おのがにしごりのやにて書講ずる日を、月の五日といふ日ごとを、日本紀の日と定めたれば、八月五日、れいの人々まうで來けるが中に、長尾景寬が問へらく、古言のすみにごりは、いかゞ定めてか讀み侍るべき、近き頃遠江人のものせる清濁考に從ひ侍らむか、いかゞと問へり。かの清濁考くはしくも見ねど、從ひがたき事多し、清濁の事は、師のをしへられたるには、清むべき詞に、濁音の文字を用ひたる事はなく、濁るべき詞には、清音の文字をも通はし用ひたり、是にて古書の清濁は事つきぬべし、古の清濁に、正しく今もことなりと覺ゆるも、まれ〳〵にあれど、今よりはこと〴〵くは、さだかに知るべからねば、大かたは今の世にいひなれたるに從ひて有りぬべしといはれたり、此說によりて有りぬべしといへば、景寬いへらく、古言の清濁こと〴〵くその證ありて、今とは異なるよし、かの清濁考にいへるを、それをとり給はざるには、別におぼし定めたる事ありやといふ。おの

きは〳〵とーはつきりと、きはやかにも同意

なづみー拘泥し

いぶかしきー不思議なる

文字のまゝに唱ふる時は、後世の清濁と異なる事あるは、そのなほにごる詞には、清音の文字をも、兼ね用ふる例なるによりて、しばらく後の唱によりて、文字のまゝには定めざるなり。これ先達のこゝに心をくはしくよせずして然るにはあらず、古書の文字の用ひざま、きは〳〵と定めがたければなり。其きはやかに定めがたきは、もと濁るべき詞を、必ず濁音の文字のみにて書けるものにあらざればなり。鈴の屋の説は、あまりに事をくはしうせむとして、古の清濁の後の世と異なる事あるを、たしかに知るべきあるを見て、すべての詞を、其例にならはむと思ひ入りたる心の、一たびなづみ、二度なづみ、つひにおもひまどへるなり。濁るべき詞に清音の文字を用ひたる事、甚いちじるき證ある事にて、あまりに目にちかき事なるを、この翁考へもらされしは、いと〳〵いぶかしきわざになむ。さて其にごる詞に、清音の文字を用ひたる證有りといふは、萬葉集中に、かくぞ、しかぞ、なに〳〵ぞなにしける、などあるその詞、皆曾文字を用ひたり。これ曾はまさしき清音の文字なるにはあらずや。かゝる類のその詞、叙、序、などいふ文字を用ひたる所も多かれど、夫は猶少きかたにて、曾文字を用ひたるは、いく百千とも數へも盡しがたし。さて曾は清音なる事、もとより論なければ、己曾、許曾、な

べてとらず、たゞ古事記、日本紀、萬葉を據とし、それが中にも古事記をことに正しとし、萬葉はこれにつぎたりとし、日本紀はみだりなるかた多しといひて、さてその三の書のうへにも、おなじ詞に清濁の文字を交へ用ひたるをば、一かたを正しとして、一かたをば正しからずとせり。又日本紀、萬葉もたゞしからずといひて、つひに古事記をさへに、正しからずといへる事もあり。これはいかなる故にしかいふぞとおもふに、おのが濁音の文字あるべき所なりとおもひ定めたる詞に、清音の文字を用ひたるを見てさはいふなり。そは先達の説の如く、にごるべき詞には、清音の文字をかね用ふる事とする時は、疑なき事なるを、あらたに説をたて、文字の清濁は、かならず其文字の清濁のままに唱ふべしと思へるにそむけば、此疑はあるなり。されど古書の文字のつかひざまを、皆正しからずとして、おのが説をのみたてむとするは、しひたるわざにはあらずや。もとより古書にたゞしく清濁をわかち書きたりと見ゆる所もありて、それまにさしく後の世の清濁とは異なりと見ゆる事も、まれ〳〵に無きにはあらず。こはすでに契沖、縣居なども、こゝに心づきて、この詞は後世のと清濁異なりなどいはれたるもありそれは必ず濁音の文字を用ひてまぎれなき類なり。さて清音の文字のみにて書けるが、其

圓珠庵―釋契沖

清濁考―古言清濁考、前の石原正明への書牘にも見えたり

詞の清濁は古言清濁考に從ひて改むべきやと人のとへるにこたふる書

古書の假字の清濁の事は、圓珠庵、縣居などは清むべき詞に、濁る音の文字を用ふる事はなく、濁るべき詞には、清むべき音の文字をもかり用ひたる例なり、といはれたり。しかるを鈴の屋は、ひとり思ひおこして、古言はかならず其用ひたる文字の清濁のまゝに唱ふべし、古言の清濁は、今の世の人の口に唱へなれたるとは異なるを、人の其異なる事を知らで、古言を今の世の唱へにかなへむとて、清音の文字をば、濁る詞にもかり用ひたるものなりとおもへるは、いみじき誤なりといはれたり。其說古事記傳、玉勝間などに委しう見えたり。かの清濁考は、師說によりたりと見ゆれば、全く鈴の屋の考なるべし。およそ古言の學びは、鈴の屋ばかりくはしき人世々になければ、さばかりの人の考へ定めたる事なれば、かならず深き故ある事とはおもはるれども、猶うけがたう思ふよしあり。これは春海などが學びおろそかなる身にて、たやすくいふべきならねど、今試にいはむ。先清濁の事をいふに、續日本紀以下の古書をば正しからずとて、す

ことざま—異樣

よき女云々—莊子天運篇に「西施病レ心而矉二其里一其里之醜人見而美レ之歸亦捧レ心而矉二其里一」

になむ侍りける。さはいへど、こは我心あひたる人にのみこそ見せめ、世の人に廣くはしめし侍らじ。そは人をそしりて、われ勝たむのすさみなりなど、よそ人は思ふべければなり。又ちかき世に、新古今ぶりをまなぶといふ人おほかれど、其人々のうたに、げにも新古今のすがたなりと見ゆるは、絶えて無くて、えもいはぬいやしげなる歌のみ多きは、笑ふべき事なりとのたまふは、まことにさる事にぞ侍りける。新古今のすがたはことざまなるものには侍れど、其世に、そのすがたをはじめてよみ出でたるは、めづらかなる一つのすがたなりとも謂ひつべし。さるを二たびまねびうつさむとするは、いと心の拙きなり。ふるくは逍遙院のおとゞ、ちかくは實陰のまうち君など、此すがたをねがひ給へれど、今より見れば、よき女のなやみて、かほにがめたるを見て、みだり心ちならぬ人の、しひてまねするたぐひにこそ侍りけれ。ましてなほ〳〵しき際の人のまねせむには、人わらへなる歌の、いでまうで來ずやはあらむ。かにかくに、まことのよき姿の歌よみ出でむことは、いとかたきわざにて、誰もよみ得まじう侍れど、せめて心ばかりは高うかまへて、よこざまなるかたに流れざらむやうにこそあらまほしう侍るなれ。あなかしこ。

しひごと—讒誣の言

藍よりも青し—荀子「青出二於藍一青二於藍一」

なほ〳〵しき—普通一遍の

あらぬかた—有るまじき誤りたる方面

わがさかしさを人にほこらむとかまふることは、世のえせものの癖にて、そは人の名高きがねたさに、あながちにまけじとするわざなれば、しひごとの多かるならひにて、人をあばきいはむとて、かへりてわが名をくたす類もおほかめり。今おのがものし侍る事は、さるえせもののまねするやうなるわざに侍れど、これには深くおもふ所なむ侍りける。あがたゐの翁が教をうけて、其學びの心をつぎたる人これかれ侍れど、古言のまなびにくはしきことは、鈴の屋のあるじこそひとりすぐれにたれ。翁のおもひ殘されたるふしをも、考へあきらめたるたぐひ多くて、此人出でて後、この學びの道そなはりぬるは、いみじきいさをにて、まことに藍よりも青しとせむ事、いへばさらなり。かくて今は世に名高くて、たふとみしたがふ人も多かるは、いとよろこばしきことなるを、只その歌のあげつらひは、いたくひが心得のみ侍るこそをしけれ。さるはなほ〳〵しきはの人なりなましかば、さてもありぬべきを、しかすぐれたる人のひがごといはむは、人のまどふべきわざにて、かつはあがたゐの歌のをしへも、此人によりてつひにかくれぬべければ、今そのひがごとを改めことわりて、初學の人などの、あらぬかたにふみまよはざらむ、道しるべにもと思ひとり侍れば、おのがまだしう愚かなるをも忘れて、なすわざ

ひじりの道―孔孟の教

しるければ―明かなれば

ようせずば―悪くすると

むぐらふ―茅屋の意

さゝぐり―前の文に見ゆるが如く、宣長の美濃の家苞を非難したる書

るも、いと心得がたきことに侍り。さる事いふにつけては、ひじりの道をも、佛の法をも、口さがなくいひおとしめなどするは、いとあるまじき事とこそおぼえ侍れ。さてわが國の古の道といふ事、いかなる書に出でたるにか。おのが書讀むことの多からねばにや、いにしへのふみにさる事しるせるものは、いまだ見侍らずなむ。おそらくは私の心につくりかまへていひ出づるにこそ侍らめ。これをも其古により所なきよしをあきらめいひて、初學の人などのためにとおもひをり侍れど、よく思ひめぐらし侍るに、こはことの心とほらぬことしるければ、心をたひらかにしておもはむ人は、誰もわきまへぬべければ、おもひ止みて、筆おこし侍らず。歌の事は、ようせずばおもひまどはむ人もありぬべければ、いはでは止みがたうこそおぼえ侍るなれ。猶まのあたり聞ゆべき事も多し。いとま得給はむをりに、むぐらふの露、ふみわけ給ひなむや。

一柳千古にこたふる書

さゝぐりを見給ひて、其あげつらひども、御こゝろにかなひぬと承るは、いとうれしくなむ。そもそも人のしるし置けるふみなどを、其きずをもとめ出でてそしりおとしめ、

後鳥羽土御門—新古今の技巧的時代をいふ

家づと—前の文に見えたる宣長著の美濃の家苞をいふ

あがたゐ—加茂眞淵

鈴の屋—本居宣長の號

のなり。女房のはかなき筆ずさみとはいへど、事くはふべき事なむあらざりける。今いにしへの歌の、のどやかに、みやびかに、しらべゆるやかに、たけあるを、味すくなくてことたらはずとして捨てて、後鳥羽土御門の御時などの、いやしげに、さかし過ぎて、いつはりたる巧ある歌を、かへりて前にも後にもたぐひなしなどおもふは、物の上手の、高き心しらひある事をば思ひもわかぬ、よのつねのまだしき際の人の心とやいはむ。かくいふは、わが私の心をたてていふには侍らず、おほやけのことわりなり。今より後、百年を過ぎ侍るとも、物のこゝろ得たらむ人の出で來ば、かならずわがあげつらひをば、あらたむまじうこそ。かく思ひ定め侍るにつけても、かの家づとのひがごとの、人まどはしなるわざなれば、さゝぐりとなづけて物し侍り。うちかへし讀み給ひて、猶わがおもひもらせることもあらむをば、こゝろみにことくはへ給ひてよ。こは人のさがいふをこのむには侍らず、わがあがたゐの歌のをしへの、いと高き心ばへある事を、心あひたる人々の、おもひまどはざらむためにとて、なすわざになむ。鈴の屋の翁、さばかりすぐれたる人なるに、又いたくひがみたる事多きは、をしむべきわざにこそ侍りけれ。歌のあげつらひのみにも侍らず、わが國の古の道なりなど、いかめしくいひつゞくる事の侍

とてもかくてもありぬべけれど—どうでもよき事なれども

大よそ人—世間のやたらの人

雨夜の物語—源氏物語帚木の巻雨夜の品定めをいふ

じやなど、おもはるゝふしも侍れば、こゝかしこ筆くはへなどし侍りて、さらにあらため書かせ侍りぬ。こは世の人に廣く見すべきものにも侍らねば、とてもかくてもありぬべけれど、猶一わたり讀み給ひて、いかにぞやおぼさむ事の侍らば、うち置かでをしへ給はらむことこそ、あらまほしう侍るなれ。すなはち家づと八巻かへしまゐらせ侍り。御文車のうちに、とり入れ給ひねかし。

家づとを何ぞと見ればさゝぐりのさゝにはならぬ木のみなりけり

となむいはまほしきも、猶口さがなきつみや侍らむかし。あなかしこ、大よそ人になまねび給ひそ。

清水濱臣がもとへ

よろづのこと、いとはかなき業にても、物の上手はおのづからに高き心しらひあるものにて、なま〳〵の人はかへりて疑ふふしあめり。そのまだしき際の人には、とみにわきまへがたからむこそ、まことのいたり深きにはあなれ。かの雨夜の物語に、木の道のたたみと、手かくことと、うつしゑの上との心ばへをいへるなどは、よく其心を得たるも

しるし―明かなり

かいやり―かき破り

美濃の家づと―本居宣長の著したる新古今集の解釋書

といふ文字は、水の骨をいふにこそあらめとて笑ひけるとなむ。唐も大和も、かゝるたぐひは、まことの筋ならぬ業にこそ侍らめ。今君がしるし給へる條々を見るに、この五十つらの音に、いとなづみ給へりと見ゆるを、今かくその好みたまへるすぢを、あばきいはむは、うべなひ給はざらむことしるし。しかはあれど、おのが思ふ事を隱して、人の心におもねり從はむことは、春海がはぢおもふわざになむ。そのしめし給へる條々の論ひは、あだしものにしるしつけ侍りぬ。あなかしこ、かいやり給ひねかし。

羽生田貴良がもとへ

さいつ夜はうれしくもまで來給ひつるかな。折しも秋の雨のしめやかなるに、あだし人もまじらねば、こゝろにおもふことをも、かたみにつゝまず、うちとけたる歌がたりは、いと心ゆくわざになむ侍りて、しめし給へる美濃の家づとを、おのがことわりて聞えさせつるを、瓶子とりしわらはのかたはらより聞きて、何くれとしるし置きたるが、うちぎきめくものの侍るを、此頃とりて見侍るに、こともとゝのはで、いとみだりがはしう侍れど、初學の人などの、言葉の林わけまどはざらむためには、助なきにしもあら

きりとかぎろひ
―霧と炎陽

たかはつばくら
―鷹は燕、有名なる話也

人のみかど―外國

もよく知らず、おのが學びのほどをも、よくかへりみおもはぬ業なるべし。さる故に古言の學びの、いとかたかるわざなりとするは、いにしへ今の書をよく廣く讀み、いにしへ今のこゝろをよくわいだめ知るになむある。さはた年月をつみて、よくつとめ學びて、その正しき筋によるにあらずば、いかでそのおくがを知り得む。こゝにひとつの物語あり、ことのついでなればいはむ。ある法師の、常にいつらの音もて、古言をとく事をこのめるが、我友藤原宇萬伎がもとに來りて、この頃古言を考へ侍りて、きりとかぎろひは、同じ詞なるを知れり。そは「かき」を約むれば「き」となり、「ろひ」をつゞむれば「り」となりぬといひしに、美樹が、いとよく考へ給へり、さらばたかはつばくらと同じ鳥なるべし、「つば」をつゞむれば「た」となり、「くら」をつゞむれば「か」となりぬとて、いと笑ひたれば、その人、こたふるに詞なくて、古言のみだりにとくべからぬを知りぬ。またこれと同じたぐひなる事を、ものの端にて見侍りつる事あり。むかし人のみかどに王介甫といへる人ありて、文字の形によりて、その心をとく事を好みけり。字說といふふみ、三十卷をつくりて、みかどに奉りぬ。おなじ時に、蘇軾といへりける人の有りしが、そのふみのうちに、波は水の皮なれば、しか文字をつくりたるなりとあるを見て、さらば滑

ともかくも―あもかうも、どうにもかうにも

といひかくいはむ―あゝいひ斯う云はん

ほこりかに―自慢さうに

たるたぐひのみは、これによりて考ふべし。そはかならず詞の例を考へさだめ置きてなすべきなり。その延べもし、つゞめもして試むる時、その詞の古の書に正しく見えたる詞の出で來ば、そは相かよはして、とあるはかくいふ詞なりとも定むべき事もあり。そも又しひて一かたにいひ定めがたきも有るべし。さるゆゑは、いつらの音は、ともかくもあまたにかよひて、動きやすきものなればなり。その延べもし、つゞめもしたる詞の、たゞいつらの音より出でて、古の書にあとなきは、古言といふべからず。そはつよしみて取るまじきなり。こゝに選みなくて、わが私のこゝろにおもひ定めて、これいにしへの詞の本なりなどいはむはまどへるなり。うち聞きて理有るやうに聞ゆとも、古により所あらぬを、誰か誠とすべき。かれ古の書にもよらず、我心にのみはかりて、しひてといひかくいはむとするは、星なきはかりを執りて、物の重き輕きをさだむるが如く、いたづらにおもひをくだくとも、何の益かあるべき。こをもて古の書の心を知れる人は、五十つらのこゑを用ふるに、その道によらざればなさず。さるを契沖、春滿、賀茂の翁などの、いまだ考へおよばぬ筋をも、われよくおもひ得たりなどいひて、このいつらの音もて、こと葉をとく事をしも、ほこりかにいひのゝしる人も侍れど、そはことの心を

おろそけ―おろそか、未熟

らむには、古書を廣く讀みて、その詞の例いかにともとめ、又おなじたぐひなるをあつめ見て、其理を思ふべし。例多く、たぐひあまたなるは、おのづからにその意は知らるべし。またくだれる世の書をも廣く讀みて、古の詞のうつろひ來しをも考へ知り、又こを古にかへして思はゞ、相照して知らるゝ事おほかるべし。また今の世のいやしきことわざにも、猶いにしへの殘れる事多く、或は田舍人のいひならひたる言にも、古言の傳はれる事はあなり。かゝるたぐひまでをもよくおもひわかちて、古言をとくのたすけとなすべきなり。これを古を學ぶの正しき筋とす。さて例とたぐひを考へ得て、かつ〲其心は見ゆれど、猶をぐらき方ある詞あり。そは五十つらの音をもて考へとくべし。例へば「たれ」を略むれば、「て」となるをもて、「手折りてば」といふは、「手折りたれば」なるを知り、「ふぐし」は、物をほる串なれば、「ほるくし」を約めたる名なるを知る類なり。然れども、まなびおろそけなる人の、古の書のこゝろも知らで、みだりに此いつらの音をのみたのみて、なべての詞をもとかむとせば、いとたがひぬべし。すべて詞は、例とたぐひをしもおし考ふる時は、大かたは其意明らかなるものなり。さるたぐひは、五十つらの音もていふべきものにあらず。たゞつゞめていへるを延べ、延べていへるをつゞめ

をぢなき―愚かしき

交云々―後漢書崔駰傳に「交淺而言深者愚也」

なめし―無禮なり

うへうら―表裏

五十連のこゑ―五十音の反切をいふ

よすが―たより

かへりてはをぢなき心に、うけ引くべうもあらぬ事しもあれば、かゝるたぐひは、おのがじしその心々にまかせおきて、そのよしあしは、後のかしこき際の定めいはむを待つべき事にこそあなれ。交あさかる中にて、いふことのこゝろふかきは、罪をうるわざなめりとは、聖も教へ給ひにけり。かゝれば口とぢてもだし侍るべきを、君はしも、むかし楫取魚彦につきて、我賀茂の翁のつたへしことどもを學び給ひつれば、春海はたかれとおなじつらに、翁の家に名簿おくりしを、おぼしちなみて、へだてなくこととひかはさばやとて、ねんごろに聞え給ふめるは、いかであだし人のたぐひにおもひ侍らむ。さればなめしととがめ給はむをも思はず、心にうへうらをおかで論ひ侍るなり。ひがごとのおほからむは、さるかたに見ゆるし給へ。およそ古言をときあかすに、五十連のこゑをもてしるべとなす事は、早く顯昭法師もすでにいへり。ちかき世におよびて、難波の契沖阿闍梨、やましろの荷田のはふり、我賀茂の翁など、皆こをもてふるごとをとくよすがとぞなしたる。しかはあれど、このいつらの音はしも、こを用ふるに道有り。その道をよくおもひわかずば、あらぬかたにぞ踏みまどひぬべき。されば賀茂の翁も、こをもて古言をみだることなかれとは、常にもの學ぶ人にいさめいはれしなり。先古言を知

かいやり｜かき破り
なめげ｜失禮
かたかど｜少しの取りえ
人の心の云々｜左傳に「人心之不ㇾ同、如二其面一焉」

らずかいやり給ひて、わがために人わらはれなるはぢをかくし給はむ事こそねがはしけれ。たび〳〵せちに宣ふことを、かくいなみ奉るは、いとなめげなるつみは、さり所もなう侍れど、事の心をよく汲み給ひて、われをばもらし給はゞ、いとうれしきことにならむ。

大村蜂住にこたふる書

わかう侍りける程より、學びの道おこたりがちに過ぎ來つる身の、今はいたづらにのみ年月をかさね侍りて、世に聞ゆべからむかたかどだにあらぬを、ひが耳に聽きたがへ給ふふしありてか、あまたたび問ひおとづれ給ふなるは、おもひもかけぬわざなりや。さるはおろかなる心にも、百が中の一つは、かしこき際の助ともなるべき筋もやとて、しるしつけ給へる條々、讀み考へよとてしめし給ふなめり。さはたおのがをぐらき心もて、何をかはいはむ。たとへかつ〴〵思ひ得る事の侍るも、古の賢き人のいひけむ如く、人の心のおなじからぬは、其面影のことなるにたぐふべければ、おのがよしとし侍らむすぢありとも、君はたうべなひ給はじ。又君がこゝろゆく方におぼしとり給ふらむをも、

とがなし—難なし
うるけたる—愚かしき
めやすう—見よく
おもひおきて—思ひ定め

ひわたるなめれば、そのよしあしは君が御心にまかせつべく、百の中のひとつにても、とがなしとてうべなはれ奉りて、世に聞えたる博士たちの、いかめしき名どもの末に、あやしの翁が名をもさしまじへ侍らむ事は、いといみじかるべきわざにて、何の面目か、これにしくこと侍らむ。しかはあれど、春海は常にあやしみ思ふこと侍り。今の世のくせにて、名をこのむ人のおほかるこそ心得ね。もとより深きこうつみたることもなき業を、みづからかへりみもせで、みだりに我はがほつくりて、人にもてらひ、世にもほこるめるは、いかなる心ならむ。たとへうるけたるしれ人をばあざむくとも、事の心をよく明らめたらむ人の見て、あざけりわらはむことは、はづかしきわざには侍らずや。其名をこのむとおもへるは、かへりて恥をむとむるにぞ侍りける。なか〳〵にむなしき名の消せざらむよりは、木草と共にくちはてむこそ、人はめやすう侍るべけれ。かくおもひおきて侍れば、年頃わが心をくだきてこのみ侍る大和うたすら、世にのこし侍らむことはおもひもかけ侍らぬ事なるを、まして其道に入りたちても見ぬ、もろこしのことの葉を、うはの空にてまねび出でたるは、たどをりに觸れたるたはむれわざなるを、いかでか世には傳へはべらむ。もし春海がつくれるなりといふを見給ふこともあらば、かな

くしー屈し、心をなやまし

あなぐりー探し求め

るしつけて聞えさせ侍るなり。これはよしあしいふとには侍らず、猶さらに其ゆゑよしときあかし給ひて、くはしうをしへ給はゞ、をしへに從ひ侍りて、うたがはしう思ひくし侍るをも、明らめまほしくてなむ。又此一卷は、ちかき程に、石塚のなにがしがものせる古言清濁考をば、いかゞおもふと問ふ人の侍るにこたへて、おのが思ふ所をかつがつしるしつけ侍りしなり。此清濁の事は、おのれはおもひさだめかね侍るを、わがぬしには、いかゞ定め給へるにか。おのが論じいへる事も、猶いかゞ侍らむ。一わたり見給ひて、わがぬしのおぼす所をも、をしへ給へや。これは彼の御筆ずさみの中に、此清濁考の事をも、のたまひ出でたる事の侍るに引かれて、かくは聞えさするになむ。

稻毛直道におくれる書

こたび思ひたち給ひて、今の世にありふる人々のからうたどもを、廣くあなぐり出でて、あらたなる集をしも、えらび給はむの御すさみにつけて、春海が口ゆがめたらむうそぶきにも、猶とるべきかたやあるとて、ことさらに求め給ふなるは、いとこそかしこけれ。さるは詞の海に玉ひろはむには、芥藻屑をも捨てじとの御心より、かくくまなくのたま

深く入り込みても

つらー列、仲間

わいだめー辨知し

心のなしー心のせい

をぢ〳〵ー條條、かど〳〵

たちてもつとめ侍らず。たゞなほざりの心やりに、書よむことをばこのみ侍りつれど、それは世の常の、めにちかき種類にすぎ侍らぬわざにて、廣くもあさり侍らねば、よろづにたど〳〵しくて、此事とて一つあきらめたる事も侍らぬを、いかに侍ることにか、このちかき年頃は、むなしき名を人のいひつたへ侍りて、世のものしり人たちのつらにおもへる人も侍りぬとぞ。これはいとやすからぬわざにて、心のうちにふかくはぢ思ひ侍る事になむ。かくまなびの事おろそかなれば、うひ學びの人などの、はかなう問ふ事にも、わいだめ侍らぬ事のみおほかるを、ましていにしへ今の學びにくまなくおはする、わがぬしのしるし給へるものを、いかでか其よしあしをばあげつらひ侍らむ。かゝればただめづらかなる御考どものあらむをこそ、はらにあぢはひ侍りて、わがをぐらき心のまどひをもはるけ侍らめとて、先うちもおかず見侍るに、おのがふかゝらぬ心のなしにや侍らむ、とあるは然らじ、かくあるは如何になどおもふ事の侍るこそあやしけれ。こはわが學びのつたなきにこそあべけれ。いかでわがぬしのひがごとし給ふべき。ことをれり出でていはむは、かへりて人わらへなるべく思はるれど、さればとて心のうちに、うたがはしきふし〴〵のあるを、問ひあきらめもせで、止むべきにあらねば、をぢ〳〵し

し何にか春の尋ね來つらん」
あだし—他の
ぬりごめ—土藏
ちぎり—約束
これにのみ—當方ばかり
ありたちても—

いひ知らぬわざになむ。

あく世なくちぎりし花よいかなればまだきも風にまかせはてけむ

さてかのあだし卷々をも、御つかひにまゐらすべきを、ちかき頃は火のさわぎにて、書どもみなぬりごめにおし入れ侍れば、とみにはえ見わきかね侍り。かさねてこなたよりこそまゐらせ侍らめ。御返り猶こまやかに聞え侍るべきを、今日はやむごとなきあたりへまゐるべきちぎりの侍りて、今しもたち出で侍れば、こともつくし侍らずなむ。あなかしこ。

石原正明にこたふる書

さきにしめし給へる、五十番自歌合の判詞、からうじてつどり出で侍り。是は數ならぬ身に、いなみ奉るべき事ならぬを、かくよろづにへだてなう聞え承りなれて、これにのみ心おき奉らむは、かへりてつみをも得侍りぬべければ、とまれかくまれ御こゝろにそむかじとてなむ。また酉の年の御筆ずさみと侍る二卷、これをもこまかに讀みて、よしあしいへと侍るは、いとこそかしこけれ。學びのかたは、わかき時よりあながちに、おり

うちつけ―唐突にて不作法
あるやう―有様、様子
ふりはへて―わざわざ
けに―勝りて
ゆくりなく―ふと
なにゝか春の―源氏幻の巻に「我が宿は花もてはやす人もな

野村素行はおのがしたしき友に侍り。橘千蔭に物學び侍りて、古のみやびごとこのむ人になむ。わがぬしをかねてしたひまゐらするがあまりに、歌ひとつ聞え侍らむとて、おのれにことづけ侍りぬ。こはいとうちつけなるわざに侍るめれど、すきごころの止めがたきを、さるかたにつみゆるし給へや。此人のあるやうをば、雪岡法師に、まのあたりとひ給はむことをこそ。

西村嘉卿にこたふる書

ふりくらし侍る此頃の空をば、いかにながめたまふにかと、日ごと思ひまゐらせしを、ふりはへていとこまやかにしめし給はるこそ、ものよりもけにおぼえ侍れ。さるは家とじの君の、おもほえず梢の花よりも先だち給へるとよ。なべて世の春雨をも、御袖にのみとや思ひとり給ふらむ。さるなげきにしづみ給ふとも知り侍らで、とひなぐさめをだにしまゐらせで、過ぎ侍りにしぞいとわりなき。紫の物語六巻かへし給へるを、ゆくりなくうちひらき侍れば、まぼろしの巻にて、なにゝか春のと侍るを見侍るにも、うちつけに御うへこそかなしう思ひやられ侍れ。さるはさかりなる頃とも知らずとのたまふは、

遠くて近き―枕草紙に「遠くて近きもの、極樂の道男女の中」

とほのみかど―江戸

立田姫のすさみ―紅葉をいふ、立田姫は秋の神

御手染―歌をいふ

下照るかげ―紅葉の陰

行きかひだに絶えずば、中々に遠くて近きたぐひとや思ひなぐさみ侍らむ。柳の絲のくりかへしつゝ、今年もとだえなく、聞えまゐらばやと思ふを、ゆめ鶯の鳴く音なをしみたまひそ。

伴蒿蹊におくる書

秋の日數ものこりすくなうなり侍りにたるを、都の御すまひよ、いかにあかしくらし給ふぞ。此とほのみかどは、大かたに山いとはるかにて、露霜の心おそきならひに侍れば、立田姫のすさみも、はか〴〵しうも侍らずなむ。さるは都の空のみゆかしう思ひやられ侍るが中に、まして塵に染み給はぬあたりは、なにの山里、くれの古寺、御心ゆくかたぞおほかりなむ。

都人いづれの山のにしきをかこと葉の色にたぐへては見る

此ごろは、御手染のめづらかならむこそおほからめ。風のたよりをわすれ給はで、しめし給はゞ、下照るかげにともなはれ侍らむ心地せむは、うれしきわざなるべし。おなかしこ、立つ霧になへだてたまひそや。

みの—實の、蓑

たうべらば—賜はらば

ゆふかけて—夕方に向ひて

市のうちに—王康琚の反招隱の詩に「小隱隱陵藪、大隱隱朝市」

われはたゞ冬野にひろふ落ぐりのみのなきことぞわびしかりける

となむおぼゆるを、此の從者にたうべらばうれしうこそ。たちかへり來むふしは、必ず柴のとぼそ驚かしまゐらすべし。ゆふかけて行くかたとほかれば、ことも盡しはべらでなむ。

上田秋成がもとへ

春たちかへるのどけさは、わきて都の空こそゆかしう侍れ。いまはいはほの中なる住ひをふりすて給ひて、巷の花柳にたちまじらひ給ふらむは、いかに心ゆく御すみかならまし。

巢ごもれる谷の鶯いかなればみやこの春に心ひかれし

となむ聞えまほしき。されどうき世の塵の、のがれがたかなるも、猶市のうちに隱れけむ、古人のためしにならひ給ふべければ、世のさが知らぬ人々とのみ、みやびかはし給ふらむは、山住のつれ〴〵ならむよりはと、おしはかり參らするものから、いたづらに千里のよそにありて、萬のあたり聞え承らぬこそ、あかぬ業なれ。さはいへ雁の翅の

めでくつがへり—大さわぎして賞美し
まのあたり—御目に懸りて
よろこび—御禮
つげの—攝津闘鶏野、仁徳帝の時始めて氷室を造れる所
人めも草も—「山里は冬ぞ寂しさまさりける人目も草も枯れぬと思へば」
あからさま—かりそめに、つい一寸
心まうけ—用意

になむ。先手にとり侍るだに、そゞろ寒きまでおぼえ侍り。わらはどもはめでくつがへり侍りて、ひたひに載せ、むねに當てなどしつゝ、もて興じ侍るもをかしうなむ。されど、こはおほやけのおものにもそなへ侍ると聞くなるを、かくいぶせきふせやの心やりぐさになし侍らむは、なか〳〵にかしこきわざなりや。とまれかくまれ、御まのあたりにこそ、よろこびは聞えつべけれ。

手にとるもあな珍らしなあつ氷とほきつげのの昔おぼえて

しぐるゝ日ものへまかるとて人のもとへみの借りにやる書

關山ちかきあたりの、ことに世ばなれたる御すまひなれば、冬たつけはひものさびしう、人目も草もと思ひとり給ふらむをこそ、おしはかりまゐらせ侍れ。やつがり石山にちぎりたることありて、今日こゝまでまかで侍りぬ。ひるますぐる程より、空うちしぐれつつ、今日たつ冬の、ことわりがほに降り出でたるが、都をばあからさまにたち出でつれば、さる心まうけだにせで侍るこそうたてけれ。

かた—繪
くそ—お前
うち—内裏
あるやう—法式
さいで—絹布の裁ち餘り
めいぼく—面目
土さへさく—炎暑の甚しきをいふ

しらに、くき玉かけたるかたのあるを見て、いとなつかしき姿にも侍るかな、いかなるものにか侍るらむといひ侍れば、くそはまだ知らずや、こはしか〳〵のものにて、都にてはうちわたりをはじめて、高き家々などには、すべてこの頃こもてあそび給ふなれ、またこの東にても、やむごとなきあたりには、手ならし給ふなるはといへば、これに目止めて、いかでこれ一つ調じ出で侍りてしがなと言ひはべるを、をりにあひたる事をもいふかなとおもひ給へぬれば、こゝろみがてらそのあるやうなどをしへ侍りて、いろいろのさいで、からの絲、名ある香など、取らせ侍りつれば、からうじてかくは物し侍るなり。ものの心よくもたどらぬうひごとには侍れど、たはむれにもあすの節の御料にもなり侍らましかば、わらはが爲にも、いとめいぼくありてこそ。

あやめ草ふかきねざしはあらずとも君にひかれば嬉しからまし

六月人のもとより氷をおこせたるに

土さへさくとかいふなるは、暮まつ程もいと待ちどほなるに、をりしも、やむごとなきあたりよりわかち給へるなりとて、暑さわすれむ料にとて賜はれるは、いとめづらか

まてこよ―詣で來よ、お出でなさい
ながめがち―兎角心が沈む
ふりはへて―わざわざ
かたき―敵手
かは笛―口笛
あし分け小舟―新千載「うきながらよるべをぞまつ難波江の葦分小舟よそにこがれて」よそにうかれての意をいふなるべし

でことといひおこせたるにさはる事のありければ

つれ／＼と降り暮したる空の、ながめがちなるをりしも、ふりはへてそゝのかし給へるは、いとうれしうなむ。さてうけたまはるは、北殿の古御達も、此頃里居のほどにて、御かきあはせのかたきにまで來給ふとや。例のむかしおぼゆるつまおと、ばちおとなどに、とき／＼、わがぬしの今めきたる手をさしまじへ給ふらむが、かくしめやかなる軒の玉水に、いとゞひゞきあひたらむは、いと心ゆくべき御あそびならまし。かゝるをりにこそ、常にわらはれたてまつる、翁があやしのかは笛をも、取り出で侍るべきを、今日はちぎりたる事の侍りて、えさしとゞめがたう侍るは、あやにくなるあし分け小舟になむ。

おもふどちかたらひ人となすことに心ばかりや今日はひかれむ

五月くす玉を人のもとへおくるとて

かきくらし日をふる雨の、たち出でむ空もなければ、明け暮れふるき繪ものがたりなど取出て、これにてつれ／＼をもなぐさめ侍るをりしも、こゝにわらはの侍るが、几帳のは

琴後集　巻十三

書牘

睦月ばかり山里人のもとへ

年あらたまりては、なに事かおはすらむ。春の日數もまだあさきに、岡べの下もえは、今しも御袖にたまるばかりも、摘みそめ給ひつや。谷の戸のはつ音は、いつよりか御朝いのまくらをば、おどろかしまゐらせたる。いとなむゆかしき。こゝには、こぞの雪のなごりにや、風のけしきも冬めきて、猶かすみもやらねば、ちまたの柳のうちけぶり行かむ程も、心もとなう見え侍り。さるは一年、まがきのもとにうつし植ゑ給へるしも、雪のうちよりも、いちはやく笑みさかゆとなむ宣はせし、此ころこそ心ことにもにほひ出で侍らめ。いかで一枝をと思ひ侍るを、ゆるし給はましかば、いとうれしうなむ。

しる人のたぐひならねど梅の花いろ香をわれにをしまずもがな

春雨ふる日友達のもとより、こと引きて遊ばむ、ま

下もえ—若草
はつ音—鶯
朝い—朝寢
けぶり—霞み
心もとなう—待遠しく氣掛りに
しる人の—「君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をも知る人ぞしる」古今集

いづちいにけむ—どこへ行きたるならん

しぞき—退き

りて、かく二巻とはなせり。文も歌も猶あまたありつらむを、其家集などいづちいにけむ、今はもとむべきよしのなきこそをしけれ。さてよの子、又の名は瀬川ともいへり。わかゝりける時より、紀の殿につかうまつりて、つかへをしぞきて後は、をとこをももたらず、尼となりて身をへにけり。其住みける所をば、涼月院とぞいへる。天明八とせの秋、よはひ六十あまりにてなむ、身まかりける。寛政五とせのはつき。

こゝろにくきー奥ゆかしき

たど／＼しからでー仲々よく出來て

なま／＼のー未熟なる

つめー集め

涼月遺草跋

むかし、縣居の翁に物まなべりし女房、あまたありしが中に、しげ子と、余野子との二人をば、其ころふるごとしのぶ人々の歌がたりに、たれ／＼も、こゝろにくきかたになむいひあへりける。さるはやむごとなきあたりのをすのうちにて、花紅葉につけつゝ、いどみごとあるふしなど、歌人のえらみには、翁もつねに此二人をしもぞとり出でられたりける。又よの子は、からまなびのかたもたど／＼しからで、唐歌をもよくつくりてなむ有りける。そは其せうと鵜殿の孟一のぬしは、世に名高き博士なりければ、をさなき程よりかたはらにありて、まねび得たりとなむ。おのれわらはなりし頃、ふみ讀むとて、常に鵜殿のぬしの家に行きかよひたれば、よの子のつくれるから歌など、なり／＼見し事もありき。なま／＼のはかせは、はづかしかりぬべき口つきとぞおぼえし。この頃縣居の翁の集どもとりしらぶるついでに、はうごの中より、この二人の書の葉どもの、かつ／＼散殘りたるを見出でたれば、いかで書きつめおかむとするに、茂子が集は、もたる人ありといへば、そを得たらむ時、かさねてものしつべければ、まづよの子のをと

をわれは經にけん」
下露の淵—拾遺集「我が宿の菊の白露けふごとにいく代つもりて淵となるらん」
佛跡をほむる歌の碑—南都藥師寺内にある佛足石碑
このかみ—兄
とりよそへる—取り裝へる、表裝せる

ば、おのれはた筆さしぬらすわざのたびかさなるをも、この翁がためには、さらにいとはじとてなむ。

佛跡をほむる歌の碑の跋

寶暦の十まり三とせの春、縣居の翁にともなはれて、わがこのかみをはじめ、むつまじき人五人六人、よしの山の花見むとて、大和の國にまかれりける時、奈良の都のあたりみめぐりけるついでに、藥師寺にいたりて、此碑はすりうつしたるなり。旅の行くてのわざにて、心いそぎのみせられしかば、式の如くにもものせで、美濃の國紙をつぎて、蠟墨もてなむ磨りたりける。此頃これをものゝそこよりとり出でたるにつけて、そのかみの事おもひ出づれば、すでに四十とせのむかしにて、あひともなひ行きし人も、今はひとりだにあらずなりぬ。さるはこのはかなき一ひらも、夢とのみ過いにし世のしのび出でぐさなればとて、かくとりよそへるになむ。文化のはじめのとしさつき。

からの人々、をしねかる金杉の里に、うたげのむしろをなむまうくなる。軒端の日影しづかににほひて、夜半のしぐれは名殘なきに、松のみどりの色は、ひとしほ露にもてはやされて、をり得がほなるも心ゆく朝なり。東のひさしは、りうびんのたゝみ新にしきて、まらうどゐをかしく、かたへの放出には、伊豫簾かけわたして、女だちゐこみたり。なげしのかなたには、あじろの屛風一ひらを、翁がうしろのまうけとなし、すのこのかたは、わらふだすゑわたして、あるじがたの人なみ居て、かはらけとうでて酒すゝめなどしつゝ、みさかなには何よけむなどうたふも、つき〴〵しうぞをかしき。おばしまの本に、菊の花のえもいはずゑまひ開きたるを、大きやかなるかめに幾本ともなくさしたるは、千世のかざし覺ゆるけふの心ばへなるべし。かくて人々この花をことぐさにて、あるは山路の秋をあはれみ、あるは下露の淵となるを待ち、もろこしのあとをも引き、大和のふるごとをも思ひ出でて、おのがじしことのばへざるなむあらざりける。かれあるじがたの人々、此言の葉のしりへに、けふのゆゑよししるしてよと己に請へば、ゐひのすさみのすみつきおぼつかなきをも忘れて、いさゝかことのまに〳〵書きつく。いでや今日をはじめにて、八十九十のよはひかぞへむ日にも、猶このためしにならは

をしねかる―稻を刈る意、金の枕詞

もてはやされて―映じて一入の色を増し

まらうどゐ―客間のしつらひ

わらふだ―圓座圓形の敷筵

とうでて―取出でて

みさかなはなによけん―催馬樂我家「わいへんはとばり帳をも垂れたるを大君來ませ壻にせん、御肴には何よけんあはびさだをかかぜよけん」

千代のかざし―續千載「咲く花を頭の雪にまがへても千代のかざしは折にあふらし」

山路の秋―古今集「ぬれてほす山路の菊の露の間にいつか千年

道別のもとより得たるを、こたび石井ぬしなむ得られにたる。この長歌をば、翁の書かれたるあまたありて、これかれ見つるが中に、これぞことにすぐれにける。さきに藤原德之が板にゑりだるも、すなはちこれをうつせしなり。今はかばかりなるはいと得がたうこそおぼゆれ。さるは世にあたひなきたからともいひつべしや。

あたひなき寶—無價寶、非常なる貴重品

橘千蔭書新百人一首色紙跋

色紙にものかくやう、いにしへはさだまりたる跡なかりしを、世くだりてより、おのづからに其のり出で來て、今はみだりにはえ書くべからぬこととはなりぬ。さるは大かたの人の思ひまどふふしなるを、この橘の翁が書かれたる百首こそ、人の見ならひまねばむにたよりよけれとて、金花のあるじの、ことさらに板にゑりたるはうべなり。かくて世にも廣くつたへもてゆかむ事は、いみじきわざにこそ。

のり—法則

たより—便宜

篁千古が七十の賀の歌の跋

ことし長月のとをかこゝぬか、たかむらの翁が七十のあきをいはふとて、そのうからや

然他と趣を異にして

もたるを―持ちたるを

岡部日記―一に東歸と稱す、眞淵東都より郷里濱松に到り、遠江の所々を巡遊して、又江戸に歸りたる時の紀行文也

うけて書かれたるは、古今にたぐひもおぼえず、いとめづらかなり。清水濱臣翁のみづから書かれたるを得て、とし頃よろこびもたるを、おのが家に里のしるべ一巻あるをおくりて、其巻の末につがしむ。こはおのが兄、春郷のものせしを、翁のこゝかしこ改め直されたるをりに、別にあらためかゝれしなり。文化六とせの冬。

同岡部日記の長歌跋

あがたゐの翁の家集かきあつむるついでに、翁手づから書きさし給へるものなど、なにくれともとめ出でたるが中に、このひとひらは、岡部の日記に見えたる長歌なるが、引きなほし消しなどせられて、いとみだりがはしうはあなれど、猶千年のかたみにもとて、古田のぬしの御もとに、おくりまゐらするになむ。享和のみとせ八月。

同吉野の長歌跋

此よしのの長歌は、其はじめ土井の尼君のために、翁のかゝれたるなり。尼君これを橘千蔭にたまひたりしを、千蔭また源道別におくりにけり。其後ゆゑありて、人の

えむに云々｜花やかに上品なるを旨としたれば
さるかたに｜それはその向きに
書きさしたる｜書き掛けて止めたる、一寸したる斷篇零墨の意

の法師は、世に書きならひ來しさまをば捨てて、おのれ一つのすがたをなむ書きそめける。さるは古にたちかへるとにはあらで、今めきてえむになまめいたるかたをむねとたてたれば、今一きはつよき所をくはへましかばと思ふふし、無きにしもあらねど、又さるかたに筆すみて見ゆるは、さすがに上手のわざとこそおぼゆれ。この百年あまりこなたは、なべて世に、此法師の筆をたふとむ事となりて、今はわづかに書きさしたる一ひらをも、人々寶とすめるを、此歌合のまたくそなはりて殘れるは、めづらかなりとこそいふべけれ。これはしも、難波の金津氏の家に、年頃ひめおけるを、こたびあらたに板にゑりたるなりとぞ。

縣居翁自筆山里記跋

伊勢の御｜宇多帝に寵せられ、行明親王を生む、亭子院は宇多帝の御號
小野宮のおとゞ｜藤原實頼、天德は村上帝の年
きはことに｜全

此山里の記は、縣居翁のかゝれたるものの中に、ことにすぐれたりとすべし。伊勢の御の亭子院歌合の記、小野宮のおとゞの天德歌合の記などをはじめて、かゝるたぐひの文世々にあまたありて、よしあしはとり〴〵なれど、おほかたはふるきをまねび來れるを、この記はひとりきはことにおもひおこして、詞をいにしへにとり、姿をあらたにま

集む

續詞花—藤原清輔撰、准勅撰集

雲葉—家持、人丸、家隆等より、後嵯峨の時代に及ぶ和歌八百七十餘を輯む

秋風—小野春雄の秋風抄、新古今、新勅撰に漏れたる當時の歌を輯む

萬代—萬代和歌集二十卷、寶治二年撰集の類集也

あらぬ—あるまじき、飛んでもなき

の集ども、もろ〳〵あるを、すべてつぎ〳〵に考へしらべて、われよく其傳へを廣からしめむ、そのもろ〳〵あるが中に、重保(しげやす)のあがたぬしの、月まうでの歌こそ、ことに知る人も少く、世によき本もなければとて、先(まづ)これをとりて板にゑりなむとす。今その心を用ひたる趣(おもむき)を見るに、これをあだし集どものなかにさぐりて、おなじきをくらべ、ことなるを擧げ、詞のたぐひを引き、事のもとをことわり、また歌人の氏姓(うぢかばね)つかさ位(くらゐ)をさへに考へいひて、これをしりへに添(そ)へたるは、くはしともくはしうなむ。濱臣こゝろとき人にて、年はたわかければ、かのもろ〳〵の集をも、かくの如くものして、其こゝろざしはたさむ事うたがひなし。われ今は老(お)いにたれど、もしそのいさをの全(また)からむ日に逢はば、またも筆とりて、其ゆゑよしをこそ記(しる)すべけれ。文化の五とせ後のみなづきはつかまりふつか。

瀧本坊昭乘法師三十六人歌合墨帖跋

いにしへ人の假名(かんな)は、全(また)くもろこし人の、草(さう)の手よりいでたれば、猶その心しらひの殘れるを、世を經(ふ)るまゝにあらぬ方(かた)にながれて、本(もと)つ心(こゝろ)は失せもて來にけり。かくて瀧本(たきもと)

世の手ぶり―時の習はし

かのまうち君―定家

えやは知らむ―何ぞ知るを得んや

ぢす―帙簀の義、物の本など包むもの也、竹にて編みて錦などの縁をとり、或は金襴などを裏にし緒を用ふと和訓栞に見ゆ

四條大納言云々―藤原公任著、新撰髄腦、和歌九品論議等

能因法師云々―玄々集と稱し、圓融、花山の御製を始め、凡そ百六十餘の歌を

まねぶべきものとも思はず、たゞ世の手ぶりにのみかゝづらへば、よみとよみ出づる歌ども、かしこにはゞかり、こゝにおそれて、皆いくたびも人のいひふるしたる跡をふまざるはなし。こはいかなる故ぞとおもふに、見る所廣からず、いつも初學のをさなきならはしをのみえ捨てやらで、せばき心に思ひなづめばなるべし。そはかのまうち君の宣ひおける詞には、いたくそむけるわざにこそ。いでやよし野の春をおもふとも、目にちかき山口にのみとゞまらば、奥ある花の世にことなる色香をばいかでか見む。又都の秋に心をやるとも、遠く千里の外に出でずば、海山の月のかぎりなきあはれをば、えやは知らむ。此歌もまたかくのごとくになむ有るべき。わがとも清水濱臣常におもへらく、今は歌の學びいとあさはかになりもて行きて、ふるき集どもの、世におほく殘りたるがあれど、これを見てよゝの姿を考へ見むものとも思ひたらず、文殿のうちに高く束ぬれども、ぢすの塵うちはらふ事をだにものうくおもひ、からびつの底にひめおけども、つひにはしみのすみかとなりはつるが多きは、いとをしむべきわざなり、かくしつつ年經なば、おそらくは世に絶えもぞせむ、さるは四條大納言のえらびおき給へるくさぐさ、又能因法師があつめおける一卷をはじめて、續詞花、雲葉、秋風、萬代のたぐひ

うち聞—打聽、聞き得たるを書き付け置けるもの

おしたちたる—出過ぎたる

つき〴〵し—似合はし

まうち君—前つ君の意、朝臣

いちじろき—明白なる

所せきおきて—窮屈なる規則

好みには任せずして、公にも、私にも、世々の歌人のえらびおける集どものうちなるをのみとりて、古の人のひろひもらせし、家集、うち聞などのたぐひより、ことさらにとり出でたるがなきは、まめなる心より、おしたちたるわざは、えせじと思へるにこそ。かくつとめたるをめでて、芳宜園の翁が、舊草に新草まじり、とかいひけむふることの葉によりて、おもしろき野になずらへたりしは、げにつき〴〵しうこそ覺ゆれ。いでや此集、世におこなはれましかば、にひまなびの人々の、こと葉の林分け入らむには、これをしをりとなさずしては、今はたなににか依らむ。文化の三とせといふ年のかみな月やうかの日。

月詣集跋

むかし、定家のまうち君の宣ひけらく、歌には師なかるべし、たゞふるき歌をもて師となむなすべき。又、歌はいにしへ今をとはず、よき歌を見て、其姿をまねぶべしとも宣ひけり。これはしも、ことわりいちじろき敎なるを、時うつり世くだちて、やう〳〵所せきおきて多く出で來てより、かへりてふるき歌を師とせむ事をも忘れ、よき歌を見て、

さても有りぬべけれ―それでもよい
心ゆかず―不滿足なり
いとほし―氣の毒なり、惜むべし
さらなり―云ふ迄もなく
古今六帖―紀貫之の女の私撰集
たけある―丈有る、のび〳〵したる
あらぬ―あるまじき

れかれおほかれど、みないかにぞやおぼゆる題どももまじり、またその歌どもも、題の心をあかさむためにはさても有りぬべけれど、あまりに品くだれる歌の見ゆるは心ゆかず、物の心得たらむ人は、よくえらびてこそ取るべければこともなし、かのにひまなびのともがら、さばかりに品くだれる歌どもを、思はずに口なれゆかば、よみ出でむ歌の、おのづから悪しざまになりなむこそいとほしけれ、いかで題をも歌をも、一わたりえらびてものせばやと思ふはいかにといへり。此事わがおもふところなれば、よろこばしくて、そゝのかしいふ事たび〳〵なりしを、このごろ其撰なりぬとて、見するを見るに、先その題は、ふるく出で來たるをばすべてのこさず、後なるをば今捨てたるも多し。又題の文字は、もと詞の爲にかりたるものにて、意かなはざるもおほければ、いささかあらためたるもあり。歌はもとより、其題につきてよめるはさらなり、さあらぬ歌は、かの古今六帖の例にならひて、題をあるじにて、歌はまうらどとなして、併せ載せつ。おほかたの歌のえらびざまは、ふるきは其詞耳どほからで、すがたたけある類をとり、後なるは、其しらべなだらかにして心やすらかなる種類を抜き出でたり。こはにひまなびの人を、あらぬ姿に口なれしめじとの心ばへなるべし。さはいへど、これを私の

もはら—專ら

はしだて—楷梯

いひけたむ—云ひ消さむ、けなさむ

事の心—物の道理

たより—手引

み入るべき事はた少し。よく其みやびかならむをえらぶにあらずしては爲しがたし。これをみだりにとりなさば、いかでか歌とはなるべき。さるは見るもの聞くものにつけて、ただによみ出でむ事はかたき方にて、まうけたる題によりなむは、なしやすくておだやかなるべし。かゝればその世の人の、題詠のみもはらなす事となりぬるは、おのづからなる勢になむ有りける。このおもむきを深く思ふに、題詠といふ事、古にありては、かたへのわざなりといふべく、今にありては、歌よむはしだてなりとこそいふべけれ。たとへひたすらに古をしたふ人とても、歌のまなびせむには、此はしだてによらずしては、いづれの道をかは踏まむ。しかるを口かしこき人の、われは古をこそ學ぶべけれ、題詠は後のならはしなれば、したがひがたしといひて、あながちにいひけたむとするは、よく事の心をもくみ知らで、ことわりをおして、空にのみはかりていふなれば、いと〱うけがたし。こゝに清原雄風ぬしは、わがたまあへる友にて、年頃月にあざけり、花をもてあそびて、世々のこと葉の色をも香をも摘み知りたる主なるが、われに語りけらく、にひまなびの人をみちびかむには、かならず題詠によらしめむ事は、さらに論じいふべき事なけれど、今の世の人のたよりと爲してとりあつかふめる、明題、題林のたぐひ、こ

思ひたらず—思ひてあらず

ことゝひ—物言ひ

設けて—題を設けて

舌だみ—訛り

の歌見えたり。さていにしへは、歌人の常になすわざにはあらざりしを、歌合といふ事はじまりてよりぞ、やう〳〵ひろまりにける。しかはあれど、宇多醍醐の御時より、花山一條の御時までの、もろ〳〵の集どもを考ふるに、題詠の歌ども數おほからぬを見れば、其世々の歌人たち、これをば猶かたへのわざとなしけるにこそ有りけらし。それより世くだりて、堀河の御時よりこなたは、世々に題詠さかりになりもて行きて、今の世となりては、大かたの歌人、題によるにあらざれば、歌はよむべきものとも思ひたらずなむなりにたる。そも〳〵今の世に、題詠のみもはらとなりにたるは、末の世のならはしにて、いにしへにはそむくに似たれど、今にありてはえも捨てがたき一の故あり。そはいかにぞといはむに、いにしへは人のことゝひも、歌の詞も、そのけぢめあることなくて、よろづのことわざ、すべてみやびかなれば、見るもの聞くものにつけて、皆歌にいふべからぬはなし。かゝれば折に觸れ、事に逢ひて、よみ出づることやすかるべく、さて設けてよまむ事は、まれにぞ有りぬべき。今の世には、人のものいひさとびて、舌だみたる口つきのみ多ければ、歌よまむとするには、先よこなまりを正し、ひがめるを改むるにあらざれば爲しがたく、よろづのことわざも、古とはことになり來ぬれば、歌によ

いにしへのかきざま―萬葉假名をいふ

けぢめ―差別

まめなるいさを―眞面目なる働き

萬葉佳調跋

歌にいにしへの手ぶりあり、今の手ぶりあり。そのいにしへは本なり、今はすゑなり。よく古のすがたを思ひあきらめてしも、今のうつろひ來しさまをも、知るべきわざになむ有りける。かれ古は古、今は今なりとて、今にのみなづみて、いにしへをおもはざるは、まどへるなりけり。されば長背のぬし、こゝにおもふ心ありて、萬葉集のうちなる、心みやびかに、すがたうるはしきをえらみ出でて、かのいにしへのかきざまの讀みがたかるをも、やがて今のかんなにうつしなして、世の歌人の爲とせり。いでや古しのぶ人はさらにもいはじ、今の手ぶりにならふどちも、こを見て古をかうがへなば、よく今のうつろひ來しけぢめをも、おもひ明らめざらめや。はた此ぬしのまめなるいさををを、たれかはめでよろこばずしもあらむ。

怜野集のおくがき、

事をまうけて歌よむことは、其ためしいと久しかりき。はやく萬葉集にも、さるたぐひ

琴後集 巻十二

跋

千年筐の跋

縣居の翁の筆の跡に、おほよそ三つのすがたなむ有りける。その始のほどなるは、まめにうるはしきすぢをむねと立てて、かりそめにもみだれたる所なし。其中らの程なるは、世にかゝはらぬ高き心ばへありて、やゝうるはしきにほひはうせて、おのづからにつよき勢あり。その末のほどなるは、物をものにもあらずおもひけちて、筆のまにまにつくろひたるふしなく、心やりのすさみなるなむ多かりける。今此巻を見るに、そのはじめなる、中なる、末なる、すべてもらさず載せたるは、翁の筆の跡を盡せりとこそいふべけれ。いでやこを見む人、翁の筆の跡を、たゞに見るべきのみかは、そのまごころのみやびをも、おもひ知るべきにこそあなれ。もろこし人のことに、その筆の跡を見て、その人の心しらひを知るといへるは、まことにざりける。

まめにうるはしき—眞面目にして端麗なる

けちて—消して、けなして

その筆の跡云々—揚子法言問神篇に「言心聲也、書心畫也、聲畫形、君子小人見矣」といへる類

事そぎ云々—簡約素朴を好めるに
あたひなきくさはひ—無價寶の類、非常に高貴の品
しぞきて—退きて
みもひ—水、特に飲料の水をいふ
やま人—仙人

長曾禰又玄におくる序

むかし人の茶湯にすけるは、事そぎ、物おろそかなるをこのめりしに、今の世には、得がたき品をもとめ、あたひなきくさはひを爭ふ事とぞなりにたる。さるはもとしづけき心をやしなひ、世の塵をのがるべきわざなるを、今は時にきそひ、人にてらひて、よろづほこらしげなるは、人の心のうつろひ行く事、すべて世のならはしとはいへど、うたてあるわざとぞなりにたる。こゝに長曾禰のぬしは、此道のすき人なるが、かの時にきそふならひをばまなばずして、しづけき心をやしなふ、むかし人の跡をなむしたふめる。今は仕の道をもしぞきて、かりそめなるふせやを、市の中のかくれがにて、かぐはしき木の芽を、とほく宇治の山里にもとめ、寒きみもひを、近くすみだ河のながれにくみて、これを朝夕の心やりぐさとぞなすなる。おのれもはやううるはしき友なればとて、歌一つと乞はるゝに、とりあへずかくなむ。

やま人のよはひのぶてふ木の芽こそ老のともとはなすべかりけれ

そこひなくすめる心にくみわけて今より水の品はさだめよ

名つぎをおくり—名簿を送りて弟子の禮を執る

とほのみかど—都より遠く離れたる地の官府の稱、江戸は幕府の所在地なればいふ

をぢなきものから—癡鈍なるにも係らず

うまのはなむけ—餞別

ことにもあらず—何でもなし

廣くとひさけ、くはしく聞きあきらめばやとて、神風の伊勢の國にいたりては本居宣長に名つぎをおくり、鳥がなく東のとほのみかどにしては、源清良、橘千蔭らになむこととひける。おのれはたをぢなきものから、むかし縣居の庭をふみならせし人のつらなればとて、今をかたらひ、いにしへをしのびて、うらなく睦ばひつるを、今年彌生のなかば、其國にかへり行きなむとす。かくて別をしむ人々、うたげのむしろをつらね、うまのはなむけをなむすなるに、盃をとりて春海がことだてすらく、わぬしはや、今かへり行きなば、かしこき大和だましひをもて、その國人をみちびき、上つ代の學の道も、今よりその國におこりぬべくなむあるは、わぬしの時に逢ひ、心ざしを得るのみかは、高本の大人がいさをも、わぬしによりてあらはれ、まして其君の、學の道たふとみ給ふ御心には、いよゝさかしとめでよろこび給はざらむや、さらばおのがどちの私の別れは、ことにもあらずと、醉泣しつゝいへば、ありとある人々、此言を聞きて、いでやけふの別のむしろは、ことのかたりごとにもせむとて、おの〳〵ゑひに乗りてぞうたふ。その歌、

年月を千里のよそにへだつともふることしのぶ友なわすれそ

つぎしらして―嗣ぎ治めて
文屋のつかさ云云―寶暦二年、藩主細川重賢、老臣堀勝名、儒臣秋山定政に命じ、學寮を建てしめ、同四年十二月竣工し、名づけて時習館といふ
五ともの書―五部の書、所謂五經にして、博く儒書をいへる也
八十ともの緒―衆臣、ともの緒は一部の首長をいへる古語

國のぬしと名づけて、世のおぼえいよゝかしこく、物のいきほひことにもぞ有りける。そも〳〵、肥の道のしり熊本の君はしも、かの國の主の貴き品におはしまして、世々にかしこき君たちつぎしらして、聖の道たふとみ給ふあまりに、文屋のつかさをおこし、物學びの博士をたてて、國人をなむみちびき給ひにける。されば物しり人おほくつどひ、名だたる文人どももあまた出で來て、はやく天の下にも聞え、はた後の世までもいひつぐべくなむあることは、むかし春海がわらはなりし時、その博士なりける秋山の翁にあひて、其くはしきよしをぞ聞きける。こゝに高本の大人は、今の文屋の博士なるが、五ともの書をとりて、諸人を教ふるいとまに、皇御國のいにしへの書をも考へ、又縣居の翁がしるせる文らをも讀みて、ひそかにこをしのびつゝ、かく文屋のこと代々におこし給ひつれど、此みくにの學びの事そなはらぬは、いとあかぬわざなり、いかで大和だましひならむ人をとて、こをその君にもまをし、またあだしつかさの人にもはかりて、八十ともの緒の中に、ひとり長背の家の子をえらみ出でて、この事をしもぞおほせたる。さるは長背のぬしが御國の學にくまなく、古の心にゆきとほれる事は、またことくはふべくもあらぬを、そのまめなる心より、猶たらはずや思ひけむ、さらに縣居の翁がをしへを

大神―德川家康
ことむけ―服させしめ
よさし―依附し
しれ―治めよ
まけて―設けて
なずらへ―比較し

長背眞幸が肥の道のしり熊本の城に歸るを送る序

かけまくもかしこき、二荒の山にしづまります大神の、むかしあらぶりし世を治め、まつろはぬ人をことむけ給ひける時、百の軍の君たちが、御軍にいそしくあかき心をもて、おほやけにつかへまつりけるを、めでよろこばせ給ひて、其君たちの爲に、郡をわかち、鄕をあはせて、ことさらに國所をさだめてなむ、そをよさし給ひにける。さるは雲かゝる山も、砥の如く平らにふみなし、とほじろき川も、帶の如くほそらにあせなむ世までも、永く其所をしれとて、天の下に二百まりの君たちをなむ、たてたまひにける。またその君たちはや、外にはあたまもる城をつらね、うちには八十のつかさをまけて、國つ神をあがまへ、青人草をいつくしみて、天皇のしきます國の、遠つまもりの御垣になむ有りけらし。それ上つ代の國造縣主てふは、御世つぎの書らに、其事のくはしきよしをもらして、今考へいふべくもあらねば、なずらへがたし。又かの中つ世の國つかさのくらゐひくゝ、品かろきがたぐひは、中々にならべいふべき業ならねば、まねびいづべくもあらざりけり。此君たちのかく品たかくおはすめるが中にも、その上の品なるをば、

彼もなく―佛道の悟りには彼我一にして平等無差別なるをいふ

十くさのたとひ―大乘の十喩、幻・焔・水月・虚空響・乾城・夢・影・鏡像・化と諸乘法數に見えたり

たぐへむ―一所に附けてやる

來あひて、馬のはなむけしつゝ、とり〴〵わかれ惜しむ心をうたひ出でたるは、彼もなく我もなき、かしこきひじりごころを、ともにしたはざるなむあらざりける。春海はた、おなじ心しりの人の列に、かずまへられたなるを、たゞにやはとて、たふとき御法のふみに見えたる、十くさのたとひの詞をかりて、更にわかれをしむ心をうたふ。其歌、

わかれなむ今日をうきせに結ぶあわの消えてもの思ふわが心かな

秋風にもろき芭蕉のそれならでくだくるものは心なりけり

行く雲のたぐひと君をいふめればしばしとだにもいかゞ止めむ

わかるとも年なへだてそいなづまの光の間にも見まくほしきを

かげろふのほのかにだにもあひ見ずばなにごこちして月日へなまし

心をし君にたぐへむものならば影となりてもはなれざらまし

かへり來むほどや契らむまぼろしに似たるこの身と君はいふとも

山河もおもふ心をへだてずば夢にだにやは君を見ざらむ

いづこにもすみうきことやなからまし心の水にやどる月かげ

山水にひゞきかよへる琴の音をみやこにそれと聞く人やたれ

嘯ずる意、唐の枕詞

うるまの島―琉球國の異稱といひ又臺灣ともいふ、心の通ぜぬ例にいふ也

うたてある―情なき

心を種と―古今集序「大和歌は人の心を種としてよろづの言の葉とぞなれりける」

塵の外―出家の社會

あからさまに―つひ一寸

たまあへる―心合へる

じからずなどいふ人も出でくめり。かゝれば相共に花にうたひ、月にうそぶくことあるも、中々に心のゆくかたはなくて、徒にうるまの島人とたちまじり居たらむ心地ぞせらるゝ。こはその同じ道なる事をわすれて、聲と形のことなるに思ひなづめばなり。世にしたがひ時にひかれて、人のならはしうつろひもて行くことは、おのづからなる理なりとはいへど、いにしへにたちかへり思へば、うたてあるわざにはあらずや。しかるを聞中大徳はしも、から歌の道に心ふかゝなる事、はやく世にも聞えたるが、また大和ことの葉の林をも分けて、よくわが國ぶりをもうたひ給へり。まことや、かれになづみ、こゝにへだつる、今の世のならはしを思ひ捨てゝ、心を種とする道は、かしこもこゝも二つなきを、よく明め給ひたるなむ、世にたぐひなきわざなりける。さるは塵の外のみかは、これをもてまじはり世に廣くて、あひともなふ人おほかなれば、かくてしも古の人の、春秋月花のをりにつけつゝ、かつうたひ、かつうそぶき、志をいひ、思ひをのべて、からも大和も、へだてなきみやびごころを、今の世にありて、猶あひ見るべくなむあるは、めづらかなりとこそ言ふべけれ。こゝに大徳、長月のなかばばかり、あからさまに都にのほり行きたまひなむとするを、つねにたまあへる唐大和のうた人、おなじむしろに

やかやと
思ひとり―會得し
もとつぶみ―本書、玉の緒を指す
けぢめ―差別
志をいひ―說文に「詩志也」又書舜典に「詩言志」
かれ―故に
ことさへぐ―言

と人のもとまで參らせし也。こは全くかの玉の緒のかた端なれば、名をばかた絲となづけぬ。こを見給ひて、事の心大かたに思ひわき給はゞ、更にかの玉の緒に記せることわりも、くまなく思ひとり給ふべければ、今は例少く、耳遠き類をば、すべてもとつぶみにゆづりて、皆はぶけり。たゞ口ならし給はん料にとて、なすわざになむ。

聞中上人の都にのぼり行くを送る歌の序

いにしへのから歌このめる人は、かならずわが國ぶりをもよくせり。かくてくにぶりうたふ人も、又から歌の心をもよくかよはし知れゝば、春の朝、秋の夕、おなじ莚につどひて、かれ歌へば、われ答へて、かたみにあひ睦ばへること、さらに唐大和のけぢめもあらずなむ有りける。そは志をいひ、思をのぶるわざなること、心ふたつしもなければなり。今のから歌このめる人は、古にことなれり。かれたゞこと國のことぐさをうつしまなぶをのみ、あながちに其心となして、わがうまれ出でたらむくにの手ぶりは、とふべきものとしも思ひたらず。かくて我國ぶりうたふ人も、かれをはるかに思ひへだてて、ことさへぐからさひづりよ、われは知らでもありなむ、われはかれと道おな

わろかむなり—よくあるまい

かへさひ—繰反し

てにをは—假名遣

伊勢の國人—本居宣長

ひも鏡—本居宣長著の假名遣書

かゝらで—此樣に面倒なるものにて無く

なにくれと—何

定めいへることにも、そはいかにぞ覺ゆるふしなきにしもあらず。又まれにはわろかむなりとて捨てつる說にも、引き出でつべきたぐひもあり。又あらたに思ひうることどももいでまうでくれば、其ふしぐ〳〵いさゝかしるし置きて、またこの後、かへさひ讀みなむ時のたすけにもとてなむ。享和の三とせ八月。

かた絲の序

あるやむごとなき御前に、歌の事などまうしけるに、てにをはのとゝのへはいかゞ心得べきと宣ふめれば、そは伊勢の國人がものせる、こと葉の玉の緒こそよけれ、是にそのゆゑよしはつくせりとて、ひも鏡一卷を添へて奉りしに、御前に宣はすらく、初學のたど〳〵しき心には、なか〳〵におもひまどひて、その絲すぢをしも、得わきがたくなむ、なほかゝらで、幼心の人にも、とく心得べからむよしあらば、記して奉れよと宣へり。そはいかゞし侍らむ、かくまでくはしくとき記せしものを、心をだに深めて見給はば、などか思ひわき給はざらむと聞ゆれど、猶耳うとからず敎へよとせめ給ふに、詮方なくて、さらば絲口を引きかへて、見せ參らすべしとて、何くれと書きつどへて、おも

あげつらひ―論じ
ことざま云々―妙に一方に偏して飛んでもない見當違ひに流れたる類も
ことずくな―簡略なる言葉
代匠記―釋契沖が水戸公の囑によりて述作せる萬葉集の研究
萬葉考―加茂眞淵の著
此集云々―萬葉集を只一通り知らん者にはこれにて十分なり

あげつらひいふめるが、いとよく思ひ得て、めづらかなりとおぼゆるふしもあれど、又ことざまにひがみもて行きて、あらぬかたにながれたるたぐひもありて、一かたならぬを、千蔭がおもひけるは、いかでこのさま〲に言ふなるを、考へさだめて、初まなびの人の、道しるべにもせまほしきをとて、おひともによしあし定めいひて、かたみに得たる所得ぬ所をあげつらふ事とはなりぬ。さて三年ばかりを經て、よみをはりたる後に、千蔭筆とりて略解をばしるしたりき。そも〱略解のおほむねは、たゞことずくなにして、歌の心をのみさとしやすからむ事を思ひたれば、事ながきあげつらひどもは、みな代匠記、萬葉考などにゆづりて、引出づべきことをも載せず、しるすべきふしをも漏したる類多し。さはいへど、縣居の翁のいはれたることをむねと立てて、ちかき頃の人の考どもをも廣くとりて、世にうごくまじき說をえらびあげたれば、此集一わたり心得むには、かくて足れりともいひつべし。もしひろく此集のおもむきを知らむとおもはむ人は、この略解を本となして、もろ〱の注釋をもまじへ考へなば、おのづからおもひ得る事もありなむかし。そは其人の心にこそ。こゝにわがふせ庵をとひ來る人々、この頃此集よまむ事をもとむれば、先略解をとりて、其說に從ひて讀みもて行くに、むかしよしとて

十三曲―蹊・梅が枝・心盡し・天下泰平・薄雪・雪の晨・雲の上（以上表組）薄衣・桐壺・須磨・四季・扇・雲井（以上裏組）

かろがへ―考へ

り、世には傳へけるとぞ。さて肥後の國の人、賢順といひけるをのこ、其善導寺の僧に學びて、その國の慶光寺の僧玄恕に傳へ、玄恕これを善導寺の僧法水につたへにけり。世に此道の親とすなる、八橋檢校といへる法師は、そのわかゝりし時、此玄恕と法水とに學びけるが、年經て慶安の比にいたりて、更に考へしらべて、表裏中奥の品を定めてなむ、はじめて十三曲とはなしける。これより後、北島、倉橋、安村、三橋、久村、石塚などいへる法師たち、皆この業にすぐれたる人々にて、とり〴〵にあらたなる曲をもつくりけり。その曲の詞ども書きあつめたるもの、今は世にこれかれあれど、猶漏れたるも多かれば、こたび豐高法師、ことさらにその遺れるを拾ひて、あらたに板にはゑりたるなり。此法師はこの道に名高かるすき人なるが、ことのあらまし記してよとあれば、いさゝかうちきゝたるまに〳〵こゝに書きつく。

萬葉集後讀記序

寛政のはじめつかた、信夫道別、安田躬弦などと共に、芳宜園につどひて、萬葉集かうがへよむ事ありき。さるは此集のまなびする人、今は世におほく出で來て、さま〴〵に

字澤山

つめ—集め

紫のものがたり—源氏物語

鳥の跡—文字

おほよそ人—世間一般の人

さだかに—明かに

大永—後柏原帝の時の年號、紀元二千一百八十年代

やむごとなき—高貴の

ながちならむこそ、女のともには似げなきわざなれ。たゞいたり深ききはの人は、おのづから心のみやびより出でて、筆のまに〳〵捨て書いたるにも、猶見どころぞ多かめる。ここに橘の千蔭のぬしに、ものまなべる女あり、消息ぶみのさま見しらむためとて、ふるき物語共よりぬきでて書きつめおけるを、又手かく本にもとて、このぬしになむ、書きてよとてもとめけるを、先この紫のものがたりなるをのみ書きて、あたへられつ。さるをこたび板に彫りたるなり。こは小簾の内なるどちのためにもとて、なすになむありけらし。この主はしも、ことばの林のおくをもわけ、鳥の跡のふるきためしをもよくわきまへ知れゝば、かゝるすさみも、古のみやびにこそかなひぬべけれ。されどおほよそ人のまねび出でむには、よしやあしや、はた見む人のこゝろ〴〵になむあるべき。

箏曲新譜序

今の世に人のもてあそぶめる、つくしごとの曲といふなるものは、いづれの時よりかおこりけむ、さだかに知りがたかれど、其道の人のいひつたへたるは、大永の頃とかや、筑後のくに善導寺に住みける僧の、あるやむごとなき家にひめ給へるを、學び得たりしよ

柳の枝—三輔黃圖に「灞橋在長安東、跨水爲橋、漢人送客至此橋、折柳贈別」

ずんながれて—順流れて、順に杯を廻して

ゆきかひぶみ—消息文

なか〱に—寧ろ

かど—才能

あはつけく—輕卒に

まんながち—漠

る柳の枝をさして、その絲をわがねたるは、けふの心ばへなるべし。かくて誰をあるじともなく、歌は心々に誦して、講師などもなし。入相のかね霞を漏れ來て、夕づく日ほのかなる頃、さかづきずんながれてやみぬ。ふみ書ける人九人、長うた九つ、旋頭歌一つ、短うた三十あまりなむありける。寛政六年彌生。

行かひぶりの序

人のことわざ多かる中に、しなわかるゝものは、手かく業になむ有りける。そがなかに、先うち見てけぢめいちじるきものは、ゆきかひぶみの書きざまなりけり。はかなき筆のすさみに、あやしくも、あてにも、いやしくも、見ゆめるものにしあれば、いとつゝましきわざなりや、さはたあまれるも足らぬも、その心の淺きと深きによりてしもぞことなる。さるはあまりに心をこめて、こと葉のかみしもひとしく、よみ出でたる歌をも、わざとはなち書きたらむは、なか〱に見おとりするわざになむ有るべき。そもまたおのがかどありがほにて、あはつけくはしり書きしたるも、かへりては心おくれてこそ見えめ。有るか無きかに消え〱なるは、おほつかなくても止みぬべきを、文字づよにまん

あなづり―侮り
をこなる―愚かなる
名高う云々―陳書姚察傳に「名下定無㆓虚士㆒」又、北史薛道衡傳に「名下固無㆓虚士㆒」
はなちいで―放出、臨時に障子を徹して取ひろげたる間
なから―半分
けうさん―筴算、けさん

きて、筆さしはなちて見れば、かく二巻をなむ拾ひ得たる。おのが若かりし程には、かかる集どもをばおしこめて、末の世の手ぶりにて、見所あらじとのみあなづりおもひて、心もとゞめざりしを、今思へば、なか〳〵にをこなるわざになむ有りける。そもそももろこし人の古言に、名高う聞ゆるあたりにむなしき人なしといへるは、げにまことなりけりとぞ、此歌どもを見るにつけても、おもひ知られける。文化の三とせの秋。

あやむしろの序　高市直節にかはり書ける、一名折柳集と云ふ

やよひの十日あまり、梅園院のひむがしいはんかたなし。名に高き老木の陰は　はやく散り過ぎたるに、ひもときそめたる櫻が本は、今ぞ時得がほなる。東のひさしはりうびんのたゝみ敷きわたして、わかれ惜む人々の座とし、北のはなちいでには、伊豫簾なからばかりかゝげ、あじろの屏風立てわたして、女房の座とす。母屋のはしらのもとに、黒木の二階の厨子一雙をたてて、うへには例の火とりなどはなくて、ぬさをさま〴〵のかたちに造りて、花の枝につけたり。下にはしろき色紙に、雲がたのたむざくあまたかさね、けうさんして、硯のふたに載せたり。おばしまの下なる花がめに、おほきやかな

心も得ず—讀みてもわからず
內典—佛書
四天王—頓阿、慶運、淨辨、兼好の四人、共に室町初世の歌人
わいだめ—辨別
みあかし—佛前の燈明
さら—勿論

いへば、文どのの塵かき拂ひて、四卷いつまき取り出でたり。何ならむとて見れば、義疏とかいひて、大乘の道々しき注釋なりけり。かくひじりだちたるは心も得ず、世の常のかんなの草子、うた物語などや侍ると問へば、かんなに書きたるも、みな內典のかたならぬは侍らず、たゞし四天王のつくり置き給へる御歌なども侍り、これは世にまれなりとかうけ給はるを、見給ひつやといふ。いさやしり侍らず、そはいとこと〴〵しき歌人にも侍るかな、いで見せ給へといへば、また文殿のうちよりさがし出でたるを見るに、かの世にいひもてはやす、四人の法師たちの集にて、なにのめづらしげもなし。さるは法師のおいしれて、物のわいだめなきもうちゑまるれど、またこれだにあらずば、何をかつれ〴〵の友にはなすべきとて、みあかしのほかげほのかに漏り來るにむかひて、しづかにあぢはひつゝ見るに、すべて時世のならはしに引かれて、しなくだれる歌どものおほかるはさらなれど、さはいへ、誰も其一ふしよみ得たりとおぼゆる歌は、又心しらひあたらしく、しらべはたなだらかに聞ゆるがありて、いと心ゆくもあれば、其よきをばえりもて出でつゝ、小硯の筆して、なにくれと書いつくるに、沙をわかちて、黃金もとむる心地のするもをかしくて、夜の更くるもおぼえず。あかつきの鐘におどろ

はやう—以前より

そらもなき—氣もしない

阿伽棚—佛に供ふる水花など据ゑおく棚

ざへ有りけれ。わが友橘のをぢは、筆とるわざに名高かる人にて、よく古のかんなのさまをしも得にけり。今この古今集の序を書けるを見るに、かののどかに高き心ばへのおぼゆるは、めづらかなりとぞいふべき。此卷を見む人、古のみやびを知らば、よくその心を思ひうべきになむ。

山づと序

長月の末つかた、玉河ちかきあたりの山寺に、はやうあひ知りたるひじりの有るをとぶらひしに、老いたる法師のひとり柴折りくべつゝ、かまどのもとにあるが、わが師はこの頃鎌倉のなにがし寺に、法のわざつとむることの有りて、まかりぬとなむいふ。をりしも秋の日のかたぶきやすきに、たち歸らむそらもなきを、こよひは一夜やどりて、明日なむかへり給ふべき、日も暮れぬなりとて、さすがに老法師のなさけ有るもうれしければ、さらばとて、阿伽棚のかたはらによりふしぬ。みねの松風はるかにひゞきて、まがきが本の蟲の音かれ〳〵なるに、所がら心すみわたりて、うちも寐られず。かくては此なが き夜をいかにしてか明さむ、なににまれ開き見て、つれ〳〵なぐさむべきものや侍ると

いさをしさ—勤勉勵精

さるかたに—それは又其むきに

かんな—假名

草の手—草書

あらぬ—有るまじき、正しから

鳥の跡—文字

あらむ人、たれかこのぬしのいさをしさを、うむかしみてたふとまざらむ。さは言へど、こゝに人ありて、今の世にのみかゝづらひつゝ、われはたゞ月にあざけり、風にうそむきてあらば、事足りぬべしといひて、古今をかよはし見むものとも思ひたらずあらむは、又さるかたにおもふ所ありぬべければ、それはわが言くはふべきわざにはあらずなむ。文化といふとしの二とせ、九月とをかいつか。

橘千蔭古今集序墨帖序

かんなの出で來しはじめは、草の手のいとなだらかなるよりうつりて、つひに一つのすがたとこそなりにけれ。さるはあがりたる世には聞えざりしを、今の都となりてぞ、もはらとはなり來にたる。その筆の跡の今の世に傳へたるは、貫之のぬし、道風の朝臣などをこそ、ふるしともふるしとは言ふめれ、これより後なるは、とりどりにおほくつたはり、そのすがたもさまざまになむ有りける。其代々のあとの殘れるを見るに、下りたるほどのは、おのづからあらぬふしも出で來て、いやしげにもなりもて來にしを、花山、一條の御時より上つかなるこそ、猶鳥の跡の本つ心をうしなはずして、のどかに高き心

かうせち—講說
うれたき—嘆はしき
まめ—忠實
なずらひ—比類

の博士たちのかうせちありしかど、今は卜部宿禰が釋に引出でたるにのみかつ〴〵のこり、又古ことぶみなるは、これを說きしるせし人、はやくより世にひとりだに有りきとも聞えず。かくなほざりにのみ過ぎもて來ぬるを、水戶中納言の君、ふかくうれたき事におもほしとりて、難波の契沖法師はこの學にすぐれたればとて、先やまとぶみの歌をしも拔き出でさせ給ひて、とき記さしめ給ひければ、おほせごとのまに〳〵、更に古事記なるをさへにあはせときて、厚顏抄三卷をつくりてなむ奉りける。此上つ世の歌どもの注釋、かくそなはれる事は、これを始めなりとこそいふべけれ。あはれ中納言の君の此道にまめなる、又法師がまなびのくはしき、遠く古の人にもまさりにけり。こゝにおなじ難波の里人、若山滋古は、かの法師におくるゝこと、百年にあまりて、まさに今世になずらひなき物しり人なるが、古の學に心をふかむるまゝに、かの法師が注釋めでたしとはいへども、猶あかぬ事のおほかるを惜みて、このちかき世にまなびの名聞えたる人々の、これかれ考へいへる事どもの有るを、廣く問ひあまねくあつめて、よきをばひろひ惡きをば捨て、足らはぬを補ひ、ひがめるを正して、更に補正と名づけて、法師が注釋をしも全からしむ。此ふみ一度世におこなはれましかば、古の學にこゝろざし

ぞ歌とはいふなる。此歌天地のわかれそめにし時、皇神の口づからとなへはじめ給ひけるよりおこりて、いくちよろづの世のすゑが末にも、なべて上なかしもの人、これをもて心をやらざるはなし。さるはうらうへなきひとへ心に、うちおもふがまゝのまことを、ただ言ひ出づるわざなれば、かしこき神をもなごしつべく、おろかなる人をもこしらふべし。またこれを世につたへて、長くいひつぐ時は、はるかなる千年の下に有りながら、あがれる世の人の心をも詞をもくまなく知り、さやかに見む事、今の現にことなることなし。さはた世をまつりごち、人ををさむるたすけともなどかならざらむ。これぞこの言魂のたすくる國のくにぶりのあやにたふとむべく、最もめでつべき故なりける。かゝればわがいにしへの學は、この歌をまなぶよりむねとすべきわざはあらずなむ。しかあるを、藤原寧樂宮の御時よりこなたなる歌は、世々にえらびあつめられたる集ども絶えせざれば、おぼつかなき事なし。たゞいとも上つ世なるは、もはらと書きつめたるものも聞えず、たま〳〵にやまとぶみに、もゝちはたあまり七つ、古ことぶみに、もゝちあまり七をなむ載せられたる。これはしもこの歌のみなもとなるを、ながれての世に此道に名高き人々、いかでこゝに心をば用ひざりけむ。其日本紀なるは、弘仁の御時より後、世々

皇神の云々—伊邪那岐、伊邪那美二神の「あなにやしえをとこを」「あなにやしえをとめを」の唱和をいふ
やらざる—慰めざる
さはた—されば又
もはらと—專らと、主として
やまとぶみ—日本紀
ふることぶみ—古事記
ながれての世—後世

もたる—持ちたる

うつしみの世—この世、現世
ひたぶる—一途に深き

契沖法師富士百首の序

この契沖法師の富士百首は、さきに片山誠之がもたりける時に、おのれうつしとりて板にゑりたるになむ。さるを今は観阿のぬしが家にぞをさめたる。法師のこの百首をかゝれたるが世にのこれるは、難波の若山滋古がもたると、此巻と二つなり。わか山が巻は、文字おほきやかにて、すがたうるはしく、にほひおほし。この巻は文字ちひさくして、筆すみていにしへぶりなり。今おもふに、この巻のかたは、よはひの末にかゝれたるにやあらむ。

厚顔抄補正序

おほよそ、うつしみの世にありとある人、をりにふれことに遇ひて、心におもふ事あらざるはなし。其おもふ事ひたぶるなる時は、あながちに心につゝみもてあらむ事を得ず。その心につゝみ得ぬ時は、かならず聲にたてゝなげく。そのなげくにつけては、やがて言に出でてうたふ。其うたふ時は、詞にあやあり、心にことわりあり。これをしも

うけひかず―承諾せず

たゞよはしき―よるべもなき

はた―また

たからとなすべきわざならむとおもひ定めて、橘千蔭、藤原宇馬伎、尾張黑生等にひらき見せて、ぬしたちこそよはひもたちまさり、物のこゝろもいたりふかけれ、このひめごとは、ぬしたちの傳へ給はむものなりとて、ゆづりいひければ、いかでかさることあらむ、こはそこの家さかえ、うからやから廣ければ、末が末にも絶えせざらむことを、思ひはかられたるにこそあれ、翁のこゝろにはそむくべからずとて、三人の人さらにうけひかずなむありし。かくてあまたの春秋をおくりむかふるまゝに、美樹黑生は世にあらずなり、千蔭はよはひすでにたかく、春海は家おとろへ行き、うからやからも多くうせて、今は世にたゞよはしき身の、かゝるもの傳へむ子だにはたあらねば、ゆくりなくゆふべの露にさきだたましかば、このつたへのこといかにかなり行きなむ、かつは學の道はおほやけなるこそよけれ、今にありては世に廣く傳へむことこそ、かへりて宿禰と、翁との心にそむかぬわざなめれと思へば、すなはち千蔭にはかりて、翁の手づからしるしおかれたるを、其まゝ板にはゑりぬ。あなかしこ、こを見む人、さばかりひめ傳へたることを、みだりに世に廣むるは心輕しやなど、うたがひおもふことなかれ。享和のはじめのとしもつき。

たうべる—給へる
おのが父—春海の父村田春道
おきて—定め
せうと—春海の兄春郷
やすからぬ—穏かでなき

れたる事を、こゝろみ知りて、今はこを傳へむ人はいましこそつひに學びの年月つもりなば、我おもひ得たるがごとくに、よみうべき人なれとて、翁になむ、口づからつたへたまひにけるとぞ。さるはその荷田の家にもつたへず、たゞ一人にのみこゝろざして、傳へたうべる事なればとて、翁も又ふかく心につゝみて、さらにもらされずなむ有りけるを、年六十におほく過ぎ給ひて後、おのが父にむかひてのたまひけらく、このわざうたのこと、今なむいましにつたふべき、こは荷田の大人のみたまのとゞまれるものぞ、おろそかにな思ひそとて、手づから一卷にしるしてたまはりぬ。そはうみの子のつぎ／＼にも傳へもてゆかむことを、おほしおきて給へるになむ有りける。さてとし月へぬるに、おのが父も兄も、翁にさきだちて亡せにければ、翁うちなげきて、わが後をこそたのむべかりし人々なるにとて、いたくをしまれつるが、身まかり給ひなむとする際にいたりて、春海を病の床ちかく召して宣ふ事は、かのわざ歌の傳へよ、いましが父につたへたる心ざしをわすれず、ながく家に傳へよとぞ宣ひける。其かみ春海おもひけるは、かく年わかくこゝろつたなき身にて、おのれのみこを傳へもたらむことは、いとやすからぬわざなり、ちゝのいまさばこそあらめ、いかで私の

町のつかさの下司―町奉行大岡越前守に仕へて與力たり

わざうた―はやりうた、童謠、字鏡に「謠、和佐字多」

きはことに―特に拔け出でて

飯高の郡に住みけり。景光より七世、景之といへるが時に、北畠の家はほろびにたり。かくて後景之は世にかくれて、伊勢寺といふ所になむこもり居ける。景之がむまご、重攻にいたりて、出でて紀の殿につかうまつりぬ。翁はこの重政より四つぎの後にて、若かりし時に江戸に來りて、町のつかさの下司にめされにけり。よはひは九十あまり四にて、天明の五とせ八月になむ身まかりける。さて其家故ありて、中比より藤原をなのり來つるを、さらにもとつ氏にたちかへりて、橘を用ふることは、翁よりとなむ聞えし。享和のはじめの年。

齊明記童謠序

むかし荷田宿禰の大人、古言のまなびのこと世にことたてそめて、いにしへの書らにときえがたき事どものあるを、其眞心にはじめておもひあきらめられたるふし多かるが中に、此わざうたの考をば、ことにめづらかなりとみづから思ひほこりて、こをばたやすく人にもいはじ、いにしへの學びに心深からむ人の出で來むを待ちて傳ふべしとて、こころに祕めおかれつるを、よはひの末にいたりて、加茂の翁が、よろづきはことにすぐ

くだち―下り
しるし―明かなり
くさはひ―種、材料
芳宜園のあるじ―千蔭

しきの、こまやかなる中比のたくみをよろこび、翁は絲竹のことさらにまうけたるこゑにはあらで、百鳥の音の、おのづからなるしらべをこのみて、たゞに眞心よりよみ出でたれば、いにしへにもよらず、後にもつかず、われと一つのすがたをなむなせりける。いでやこの人々はしも、身は品くだりたれども、心は青雲の高きを占めたれば、くだち行かむ世にも、其名かくれざらむ事しるし。されば今よりいく百とせを經とも、かくまさかりなるその世の手ぶりをおもひ見るべきくさはひにもひき出でつべくなむ覺ゆるは、めづらかなりとこそいふべけれ。しかるを、大人と宿禰とは、其歌もふみもはやく世につたへたるを、なほこの翁のみ、世にあらはれざりしが、あかぬわざになむありしを、翁のまなご芳宜園のあるじ、こたび思ひおこして、東歌六卷を板にゑりなむとす。こは翁のみづからえり出でおけるなりとぞ。これよりしも翁の言の葉廣くつたはりて、かの二人とひとしく、かぐはしき其名のいやましにあらはれ行かむ事は、よろこばしきわざになむ。翁はじめ名を爲直といひけるが、後に枝直となむあらためける。其とほつ親をたづぬるに、古曾部の入道能因がむまご、加藤五判官景貞といひけるは、伊勢の國になむ住みける。それより十つぎにあたりて、彈正景光といへるは、北畠の家の家司となりて、

しづたまき―賤環、賤しきの枕詞
かしこき―畏き、賢き
かど―角、才
圓珠の庵のひじり―釋契沖
稻荷の山のはふり―荷田春滿
縣居の大人―眞淵
在滿の宿禰―荷田春滿の養子
橘の翁―千蔭の父枝直

世にすぐれたる人々もあまたおはして、その名とり〴〵聞えにたれど、しづたまき賤しき我ともがらの、たやすくまねびいづべきならねば、今こゝにとり出でていふべくもあらず。たゞこの下のきざみにも、青淵のそこひふかき心をしめて、いはがねのかしこきかどある人々、これかれ出で來にけり。これをあがりたる世にくらべ見るに、猶今をすぐれたりと覺ゆるたぐひなむありける。それがなかに、おしてるや難波の圓珠の庵のひじり、つぎねふ山城の稻荷の山のはふりこそ、其名をちこちにしも聞えにたれ。この二人のをしへ世に廣まりてより、歌の學びいにしへにたちかへりぬれば、あがりたる世をしたへる歌人もおほく出で來にけり。しかはあれど、得たるところ得ぬところたがひにしもありて、學びのちからたけたるは、かへりて歌の心におくれ、うたよむ方に心引きたるは、なか〳〵にまなびのわざおろそかにて、これをかね得たるなむ稀なりける。さるをこの二つをかねて、世にもすぐれ、人もゆるしたるは、縣居の大人、在滿の宿禰、さては橘の翁なむありける。此三人のぬしたち、其學のこゝろは等しきものから、歌の手ぶりはおもひうるかた殊にて、心々にぞ有りけらし。かれ大人は、尾上の松の雲をしのぎて、めも及びがたき古への高きすがたをたふとみ、宿禰は、秋の野にあやおる花のに

さがにくきもの いひ—口の悪き物のいひ様
いさめ—戒め、教へ
二荒の宮の大神—徳川家康
うま人—高貴の人
かしこき—畏るべき
千世のふるみち—山城の名所、古りぬるの縁語
かくれぬ—隠れて水面の見えぬ沼、かくれたるの縁語

よりきゝて、よしなの事や、をこの人々かな、さがにくきものいひならへとはいさめぬものをとて、さいなみたまへば、猶あげつらふべきをも言ひさしてやみつ。やがてかたはらなる一人が、其さうしの上に、

いかでかくまだきをりけむ若桂もみづる秋を待たましものを

東歌の序

いはまくもゆゝしき二荒の宮の大神、天の下むけ平らげ給ひて、まつろはぬ國もなく、まう來ぬえびすもあらず、おほみいつくしみ至らぬくまなむ無かりしより、うま人はから衣ひもときさけて、玉のうてなの宴に飽き、民くさは高鞆のかしこき鞞をわすれて、八十のちまたにうたひ、おのがじしたのしかる月日をよろこび、のどかなる春秋を送り迎へざるなむ有らざりける。かくて大御世は、春の花のさかりに匂ふがごとく、松の葉のときはに榮ゆくまゝに、おのづから千世のふるみち古りぬることもおこり、かくれぬのかくれたるあともあらはれて、言の葉の道も明星のあかりゆきつゝ、くもり夜のくもらはしき方もあらずなむなりにける。さるは宮位高き上の品のあたりにこそ、もとより

うへうら—表裏

いちはやき—敏速なる、すぐれたる

まできて—詣で來て、やつて來て

とて、いかでか誤なからむ。また楫取のあまがしるせることをも、おほくとりたれど、海士が名をばはじめよりかくしていはず。都人の身にては、あまがこと葉をまねび出でむは、恥なりと思ひけるか。さらば其事を取らでもありぬべきものを、其事をよしと思はむに、その名をいみかくすべき事かは。學の道はおほやけなるものとこそ聞け。かく心にうへうらを置くべしや。すべてふみ一くさをつくり出でむには、おのがひとり思ひ得たるふしありて、人のたすけともなりぬべきすぢあらば、なしてもありなむ。はか〴〵しき心もあらで、たゞ人のいへることをのみ拾ひあつめつゝ、おのが思ひ得たらむさまにいひなさむは、いとしなおくれたるわざなり。なま〳〵なるうひまなびの人は、ことのゆゑよしをもよく知らねば、いちはやきわざなりとも思ひぬべし。されどこゝろある人の見ば、おのづからあなづりおとしむべき業にこそあなれ。あはれ都人は、かくはかなきわざをもするものよとむねつぶれて、賓えたりとおもひけるぞくちをしき。かくて爪木の道も雪に絶えもて行くまゝに、かきこもりてのみをれば、いとつれ〴〵なるを、心しる人のひとりふたりまで來て、ほだの火のもとにより添ひつゝ物がたりするに、此ふみをとう出て、其たがへる事どもぬきでつゝ、とりならべあげつらふを、父のかたはら

よぼろは使丁、荷前は年末諸國より國產を都に上るをいふ

まつり―賀茂の祭、四月中の酉の日

あがれ―分れ

草子―加茂季鷹の正誤假名遣をいふ

はるけ―晴す

あたひなき寶―非常に貴き寶

りぬるに、あひ知れるゆかりの有りけるが、ことしはこゝにて春をもむかへよとあれば、さらば花のをり過ぐしてと思ふほどに、卯月にもなりにけり。けふはとりの日なりとて、まつり見にいざなはれ行きしに、物見車のあまたあがれ行くが中に、いとわかやかなる桂の枝に、ちひさき草子をむすびつけたるを、簾の端よりとりおとしつるに、かたはらの隨身だつ人もえ知らで、めもふれず行くを、やをらたちよりて、とりかくして歸りぬ。こは氏人のものせるを、やむごとなきあたりへまゐらせたるにて、いにしへの假字のことども記せるふみになむありける。これはしも都の人の心いたれるが上にて、誤なしも正しつれば、かの難波田舍の法師がたぐひにもあらじ、また楫取のあまがさへづりにぞまさりぬべき、さらばわが年月うたがひ思ひけることもはるけなむ、まだわけも見ぬ言葉の林のおくをも知らるべし、これなむあたひなき寶とおもへば、いとうれしくて、あづまにもてくだりて、いとまあるをり〳〵くはしく見るに、世にははじめ思ひかけしには似ず、見おとりするものこそあなれ。そのふみもはら難波の法師によれると見えて、法師がいひけることは、いにしへのあと有るも、また古によりどころなきをも、すべてあげたり。こはいかなるゆゑにかあらむ、ことのえらみなきこそ心得ね。法師がいへること

まばゆき―氣恥しき

おいさらぼへる云々―釋契沖の和字正濫抄をいふ

楫取の云々―楫取魚彥の古言梯をいふ

いかにぞや―疑はしく

かど―才

かゝげあへぬ―揭ぐる事も出來ぬ、忙はしくして學習の餘暇なきをいふ

荷前のよぼろ―

りつくろふよしもあらねど、せめてことばのよこなまりをば改めなむ、人わらへなること多きは、世のまじらひまばゆきわざなりとぞ宣ひける。此ことを常に思へば、いかで詞の道知らむたつきもとてもとむれど、かくいやしき商人の身にしあれば、誰によりてか問ひあきらむべき。さるを過ぎにし頃、難波の市にたちまじりつるに、いとふるくすすけたる經文のうらに、おいさらぼへる法師の手して、何くれと書いつけたるものを、ゆくりなく得つるを、くりかへし見れば、いにしへのかなのあとあることをときしるせるが、いと心ゆくことのおほかれば、これになれもてゆくまゝに、やゝ言葉のゆゑよしをばわきまへにけり。また楫取のうらの海士が家につたへたるとて、人のもとより得つるあり。こも彼のなにはの法師がことによりて、さらにおほくいにしへの書どもを考へ添へつれば、そもおなじすぢのたすけとなる事ぞおほかりける。かくて年月にこの事を思ひめぐらすに、此二くさのふみのうへにも、猶いかにぞや覺ゆる事のあるを、これ考へきはめばやとおもへど、もとよりおのがかどなきのみかは、かくひなの末には、さるべきふみどもも乏しく、かつ窓の灯をだにかゝげあへぬ身の、のどかならぬ月日をのみおくれば、いかでかさる事をえむ。こゝに去年の冬、荷前のよぼろにめされて、都にのぼ

水茎の跡—筆の跡
蜻蛉、紫、更科、十六夜—此四つの日記何れも本文庫「平安朝日記集」に收めたり
よるべなき云々—千載集に載せたる遊女戸々の歌「數ならぬ身にも心の有り顔に獨ぞ月を眺めつる哉」といへるにや
玉淵がむすめ—有名なる白女〔シロ〕の事にて、古今集、後撰集、大和物語、古今著聞集等に其歌話多く見ゆ、玉淵姓は大江、丹後守たり
わいだめ—識別の力
舌だみたる—訛りたる

て、清き水茎の跡をぞとゞめたる。今このなずらひをいはむには、いにしへの女房のなかにこそもとむべけれ。さるは蜻蛉、紫のにほはしき筆ずさみにもはぢず、また更科、十六夜のあてなる口つきにもおとらぬは、いとこそめづらかなれ。そも〳〵いかなりし人のむすめぞととふに、そはくはしくも知らねど、そのかみよるべなき露の世をかこちて、はかなき伏屋の月にうたへる、うかれめの流なりきとなむ聞きつるはといふ。さはいへ、葎にとぢられたらむあたりに、かくまでかぐはしき花はいかでか生ひいでけむ。もしはもとのねざし賤しからぬが、世にはふれたる、玉淵がむすめのたぐひにはあらぬにや。

若桂の序

みちのくにのはてに生ひたちて、よろづのことわざわいだめなき身ながら、なりはひのよすがありて、をり〳〵都へ行きかひつるを、父のをしへ給へらく、都の人はいやしき下がしもも、こととひにならひたれば、田舎人の舌だみたる口つきをば、いとめざましきものにうとみおへり、かく賤しき身の、かたちよそひなどひなびたるは、もとよりと

庚子道の記序

みなかみ澄みて流るゝ河も、おち行く末となりては、やう〳〵あらぬ塵あくたにけがれて、つひにもとの清き姿をうしなふ事あり。詞の道も叉かくのごとし。あがれる世のみやびかなりし手ぶりも、あまたの年なみをわたりては、いつしかとさとびたるならはしこそ多くは出で來にたれ。かれ古はみなもとなり、今は末なり、その源にありては、もとめずとも、おのづからにすみ行くながれに從はむ事はやすかるべきを、後にありては、あくたを拂ひて、ことさらに清き瀬をたづぬるわざなれば、いとかたしともかたしや。わが友清水濱臣は、詞の學に廣く、文つくるみやびに心ふかき人なるが、この頃たけ女が道の記を得て、おのれにかたらく、女房の日記といふもの、今の世にもやむごとなき殿のあたり、おくまりたる窓のうちなどよりもれつたへたるには、心にくき方に人のおもへる類もこれかれあれど、よく見もてゆけば、これはしもととり出でていふべきは猶少し、しかるを此道の記を見るに、いたくも書きけるかな、世のかいなでのたぐひにはあらずといふを、かへさひよみて味はふれば、げにも詞のみなもとをよく汲み知り

あらぬ―あるまじき、つまらぬ
かれ―故に
たけ女―享保の頃世に時めきたる某侯の寵を受けし白拍子なりといふ
心にくき―奥ゆかしき
かいなで―普通一遍

まつりごち｜政を行ひ
さぶらふ人々｜
舊蹟遺聞は、阪牛助丁が黑川盛隆、三輪秀福、梅內祐訓等と共に編輯せる所、千蔭、春海亦其顧問たりし也
かへさひ讀みて｜復し讀みて、校閲して

むとて、よろづ思しいたらぬ方なくまつりごち給ふあまりに、このふるき跡の事どもしるせる書の、猶そなはらぬをあかずおもほしとりて、おもとにさぶらふ人々のなかに、其事にたへたるをえらせ給ひて、その書つくらせたまふ。其知り給ふ所は、郡の數十といひてなほ餘あれど、いにしへの世に聞えぬ所々をばおきて、ふるき書にあらはれたるかぎりを集めさせ給ふ。名をば舊蹟遺聞となむつけられたる。その書なりて後、春海に猶かへさひ讀みて、考へしらべよとてしめしたまふを見るに、其書のさま、もとよりふるきふみに廣くわたれる事はさらにもいはじ、かたはら國のふる人の昔がたりをさへに載せられたるは、めづらかなりといふべし。かゝるを我みじかき心に、なに事をかはたすけいはむ。そも／＼これはしも、知り給ふ國の寶なるのみかは、あまねく世にも傳へさせ給はゞ、いにしへを考へて今を見む人、たれかたふとみめでざらむ、とく／＼板にゑらせ給へとまうせば、さらば其ゆゑよし記せと宣ふまゝに、身のいやしく、詞のつたなきをも忘れて、かしこみながら、はしつかたに書きつく。文化の四とせやよひはつかなぬか。

元明天皇和銅六年、諸國に勅して風土記を上らしむ

延長—醍醐帝の年號、其三年十一月諸國の風土記を上らしむ

盛岡の君—所謂大南部の藩主也、南部侯は曩祖光行以來明治の維新に至る迄前後七百年代々北門の重鎭たり

どの御時、はじめて國々におほせ言たまはりて、しるさしめ給ひ、また延長の御時、ふたゝび其事おこさせ給ひて、さらにしるし添へさせ給ひつれば、六十あまりの國々のふるき跡ども、もらさず傳へ來にけるを、時うつり世へだたりて、今はその書どもおほくは失せにけり。さてたま〳〵に散り殘れるが有るも、わづかにひと國二國にはすぎず。かゝれば、今にありて古へのくにこほりの大方を見るべきものは、たゞ民部の式、神名の帳、順朝臣の和名、東山のおとゞの拾芥のたぐひのみあり。されどこのくさ〴〵の書どもは、國をかぞへ郡をつらねたるのみにて、古の跡を考ふるには猶こと足らはず。しかるを四方の海なみ風をさまれる事二百年、おのづからよろづの事、其道々に心ふかむる人々いでまうで來て、今はくに〴〵にふるき跡を考へあつめたる書ども、こゝにかしこにやう〳〵おほく聞えたり。みちのくにには、仙臺の佐ゝ木義和が聞老の志といふありて、くはしくとひ、廣くあつめたれど、をしきかな、其君の知り給ふさかひにはくはしくて、あだしかたにはなほ漏したる事もおほかりき。こゝに盛岡の君は、其遠つ御祖の御時より、其國しろしめす事今にいたり六百年、世をかさね給ふ事三十あまり六世繼になむおはすなる。さるは古の事をもわすれじ、又すたれたる事をもおこさしめ給は

木の芽―茶

かいつく―書き付く

寧樂のみかど―

琴後集巻十一

序

烹茶樵書序

水をえらみて清きながれを汲み、品を分ちて宇治山の木の芽をにることは、はやくより事このめる人のもてあそびぐさにて、今はこのわざに心いるゝ人なむ多かめる。さるは世をのがれ老を忘れむすさみは、これに如くわざあらじかし。こゝに占春ぬしの、古今と此事あげつらひしるされたるは、かの世にことこのめる人々、こを見て今一きはみやびたるこゝろしらひをも添へよとてなむ。年はみづのとのゐ、さみだれふる頃、平春海かいつく。

舊蹟遺聞序

國郡のあるかたち、山河もろ〳〵の跡をたづねて、書に載せられたる事は、寧樂のみか

一鋪の如く狹く
くさづつみやもひ一くさづつみは恙、やもひは病、病氣
いひ知らぬ一いふにいはれぬ、形容も出來ぬ

やかたのすさみは、いかでかおもひもかけむ。又野山の遊びも、おのづから時におくれ、をりを過して、常に心にそむくふしなむ多かめる。かれ雪ばかりは此二つにことなり、蓽にとぢたる門のうちも、たゞ一夜のからに、玉しく庭とうつろひ、あばらなる板やが軒も、時の間に白がねをはやせるばかりに、すがたをかへもて行きて、朝夕のいぶせさもさらにおぼえず。またなれたる市のちまたも、たちまちに景色をそへて、いひ知らぬ山里のおもひをなし、行きかふあき人の蓑笠までも見所ありと覺え、はかなき木草よろづのものも、さながらめづらかなりとのみ目とゞめらるゝは、たゞ居ながらにして境をうつし、所をかふるとやいふべからむ。かくてこそ心にたらはぬことなく、外にうらやむべきふしもあらね。されば此雪にのみ翁が心をよするも、所にしたがひ、人によりたる、老のすさみなるはや。

ゆの枕詞、嘯々たる言語の義にとる

あげつらふ—論ず

野づかさ—丘陵

花の云々—花の名折れたらしむべし

しみゝ—みつしりと

はたばり云々—面積狹き入口の庭

しづたまき—賤の緒卷、品賤しくの序

うつゆふのさく

だつる事なく、古より今にかよはして、こにを歌によび、文に記してめであへるは、いづれをおとれりとも、いづれをまされりとも、品さだむべきたぐひならぬは、もとよりあげつらふべき事ならねど、所にしたがひ、人によりて、おのがじし心の引くかたなくてやはあらむ。梓弓はるのあした、うら〱とひもときそむる花の心をとはむには、まづかしこの野づかさ、こゝの山里、露をしのぎ、岩ほをたどりて、名ぐはしき陰をもとめてこそ、たぐひなきにほひをも見るべけれ。おどろなる垣ほのうち、あやしき伏屋の前に、一木ふた木をうつし植ゑたらむは、なか〱に花のおもてをぞふせつべき。また眞萩さく秋のさかり、くまなき月の光は、所をわかねど、あるはたか殿のすだれをからげて、千里の空をのぞみ、あるは行く河の流にうかびて、水底の影をもてあそびてこそ、心の雲もはるくべけれ。小家しみゝに立ちならび、はたばりなきはひりの庭に、うづくまり居て見むには、塵あくたけがしさも、澄渡る光にいよゝあらはれ行きて、かへりては月うとかれとぞおほゆめる。かゝれば月と花とは、所がらこそあはれもうちそはるめれ。さるはかたゐ翁がたぐひの、しづたまき品賤しくして、うつゆふのさくくるしき住家にかきこもり居つゝ、くさづつみやもひにのみかゝづらふ身は、かの高殿の望、

たひらの宮—平安宮
天つ星—「久方の雲の上にて見る菊は天つ星かとあやまたれける」古今集
山路の露—「ぬれてほす山路の菊の露の間にいつか千歳をわれは經にけん」古今集
朝にけに—朝々
根さへ枯れめや—植ゑ「植ゑしば秋なき時や咲かざらん花こそ散らめ根さへ枯れめや」古今集
ことさへぐ—か

のいひけらく、わがみかどに此菊をめづることは、たひらの宮のはじめにおこりてよりこなた、雲居のはしをのぼりては、天つ星かとうたがひ、山路の露を分けては、千年ふる思ひをなしけるたぐひ、ふるごとのためし世々に多かめれど、さるはおのがどちの思ふべき事ならねば、さらにもいはじ、たゞ千種の花の後にひらきて、過ぎにし秋のなごりをとゞめ、かつは世をのがれたる人の操になずらふべき花にしあれば、朝にけにあかずあひみむ友となすべきは、此はなにしくものなむあらざりけらしとあれば、人々このことを喜ぼひて、根さへ枯れめや、年ごとにまたかくてこそあひかたらはめとて、とりどりにうそぶき出でたり。

大かたの秋におくるゝ菊の花なれもうき世をのがれてや咲く

雪をめづる記

かきかぞふ四の時につけて、むらぎもの心をやるわざなむ多かる中に、花をあはれみ、月にあくがれ、雪をよろこぶ、三つのならはしこそ、世にたぐひなきすさみとはすめれ。ことさへぐから人のためしにも、しきしまの大和の國ぶりにも、たかきもいやしきもへ

橘の云々―萬葉集に「橘の陰踏む路のやちまたに物をぞ思ふ妹にあはずて」略解に「古へ都の大路市の衢などに木を植ゑし事有りしにや」

まろともむらじも―眞人も連も、誰も彼も

冬かたまけたる―冬かたまけは片負くにて一方が負くるをいふ、冬を凌して咲き殘れる

ゆれど、誰も猶たち去りがてなるや。

のこりの菊をめづる記

おもふ友がき多かる中に、うつせみの世をのがれいでて、ちまたの塵の跡たえたるかたには、たれも先吉田のぬしをなむ、世にこよなきものにしも、常にいひあへりける。そもそも此ぬしのすむなるかたは、月影のすみだ川よりは西、しぐれ行く上野の岡よりは北なりけり。こゝをしも金杉の里とぞいふなる。これやこの橘の陰ふむ市の大路にも遠く、又杣木きるみ山のおくのたぐひならねば、浮雲の常なき世のさがをも忘れ、ちりひぢのけがしき心のならはしをも、おもひはらすべきすみかになむ有りける。さるは花にとひ月にならせし園生のうち、冬たつけはひいかに見所ありなむとて、まうともむらじも、おなじ心におひいざなひてぞ訪ひ來める。をりしも時しりがほなる空のけはひ、晴れみ曇りみ定めなきに、昨日の秋の紅葉は軒の露にあらそひて、夕風にみだれ、冬かたまけたる花の光は、猶まがきの霜をしのぎて、入日になむにほひける。かくて人々苔をむしろにおり居て、古をしのび、今を語らふほどに、あるじ

今日にとぢむる—今日が最後の
もよほし顔—涙を
もろき木の葉の—眞淵「おのづからもろき木の葉の秋なれば暮るゝを何にかこちだにせん」

れなむきゝわたる麓寺なりける。やう〳〵暮れゆけば、今宵はこのみてらにこもりて、明日なむ高嶺の雲をわくべきとて、朝臣が、

いざさらば紅葉かたしき今宵もやしらねの雲にやどはからまし

とおもふも、世すて人の心やすしや。

縣居翁の御墓にまうでて秋を惜む

いつしかと今日にとぢむる秋のけはひの心細きに、しぐれそめたる空のもよほし顔なるや、御墓まうでの人々袖しぼらぬはなし。紅葉もいたく散り過ぎて、菊もうつろひがちなるを、これをだにとてみ墓のもとにたむけて、まとゐなれたる苔のむしろについゐて、例のむかしの事どもしきしのびいづるに、もろき木の葉のと宣ひけむは、いつの秋にかといふもあれば、また散るを何にと、めのまへにとりなすも、をりあはれにこそ。

年ごとに秋にわかるといひ〳〵ていとゞ昔やとほざかりなむ

行く秋のなごりとのみやたゞに見むたがためならぬ袖のしら露

とて、うちながめをれば、松の陰はやう暮れそめて、ゆふべをつぐる鐘の聲かすかに聞

爪木—薪
あげまき—童
によび—苦吟
亭子のみかど—宇多天皇

ゆるも、そゞろにあはれすゝまるゝ棲なり。くやしく過ぎし昔の事どもうちかたらふほどに、あるじのいひけらく、きのふ爪木のたよりに、あげまきが一枝もて來れるを見しに、露霜の色こそくまなくなりにけれ、いざたまへとあれば、うちつれて出でぬ。山ぎはたどり行くほど、大井の川水まぢかう見わたされて、波間をくだす瀬々のいかだは、たゞ錦をつむかと目とゞめらるれば、まてこととはむなど口ずさみつゝ行くに、やがて御幸橋とかいふなるをわたれば、嵐の山はたゞ手にとるばかり近きに、入日ほのかににほひて、空さへこがるばかりなるが、山風はるかに吹きおろして、道もさりあへぬまでちり來めるは、また類やはとぞおぼゆめる。かくて朝臣が唐歌によび出でたるを、そのこゝろにこたへて、

　ゆくかたは紅葉をはしにわたすなり天の河原に我や來にけむ

また、むかし亭子のみかどの御舟とゞめ給ひし渚は、こゝぞといへば、

　大御舟つなぐ綱手のからにしきむかしおぼえて散る紅葉かな

橋の詰よりは北に、いらか古りたる寺あるに入りていこひぬ。わたどのなど物さびて、はらふ心なき嵐の庭は、苔路も見えぬばかりなるが、たゞこがねを敷けるやうなり。こ

もゝしき云々—朝廷の官職を辭して

野べのけぢめ—野と庭との區別

旅衣いくたび秋をかさねましまた初鴈のこゑを聞きつゝ

こは、故郷をわすれぬ人なれば、

かりがねのおくれ先だつ一つらを定めなき世のたぐひとも見む

法師めきたる口つきやと、人々いひあへり。

山里の紅葉を見る記

都の旅居はおのづから心のとまりて、今年もいつしかと秋をさへ過しにけり。降りみ降らずみ定めなき雲のけはひのたゞならぬにも、先西山のをかしさ思ひ出でらるれば、はやうあひしれりける、秋篠の朝臣のやどりをとて訪ひ來ぬ。この朝臣は、いまはもゝしきのつかさ位をしぞきて、嵯峨野のおくにうき世のちりをのがれ出でて、ひとり古のうま人の操になむならへりける。さるはあるじのおのづからなる心しらひもしるく、萱が軒端はたゞかたぶくまゝなるが、板間のしのぶのみ所を得て、おどろなる垣ねは、かたへたえ〴〵なるを、ゆひだに添へねば、さらに野べのけぢめなむあらぬに、なほ野分のなごりおぼえて、萩薄の心まゝに枯れふしたる、今はをしかの路さへ絶えにけりと見

一行—雁

霞みていにし—「春霞霞みていにしかりがねは今ぞ鳴くなる秋霧の上に」古今集

玉梓のたより—書信、雁帛の故事によりていふ

のばへ—のべ

いかなる人のうへ—思を掛くる相手は誰か

めばかすかなる月と口ずさみ出づれば、をりしも峯飛びこゆる一行のこゑさだかなるは、このふもと田に落つるなるべし。げに秋のうは露もたゞならずなどいひしらふ程に、一人がいひけらく、霞みていにし雲路のなごりなくおぼえしを、秋霧のうへに聲きゝ初むるが、よにめづらかなる事はさらにもいはじ、すべて四の時、花鳥の色香にそへて、はかなき言の葉をのばへ、すゞろなる心を動しつべきくさはひ多かる中に、世をうらみては、人の心の秋をかなしみ、うきをなげきては、中空に物をおもひ、遠づまをしたふとては、玉梓のたよりを待ち、雲水に身をたぐへては、此世をかりとたどるも、折にふれ、事につけつゝ、あはれさ似るものなくこそおぼゆれ。いでやこよひのなぐさめに、このくさ〴〵の心によそへて、おの〳〵ことのばへ給はむなりとあれば、澄みのぼる月影にむかひて、うそぶきいでたるは、心々の引くかたなるべし。

世を秋となきて過ぐなる初鴈をわが身のよそに聞きやはつべき

となむあるは、世をあぢきなく思ふかたあるにや。

むねの雲いつかは晴れむ初鴈の聲もらすべきおもひならねば

いかなる人のうへならむ。

文字のこゑ―平仄

となせ―戸無瀬 今は嵐山の淺瀬の稱とすれど、古歌には大井川の一瀨をよめり

たまあへる―心合へる、懇親の

山を望めば―朗詠「望レ山幽月猶藏レ影、聽レ澗飛泉轉倍レ聲」

にやあらむ、から歌ひとつ口ずさみいでたれど、まだかたなりなるが、文字のこゑうちあはねば、こゝには書かず。かくて日影やう〳〵かたぶき行きて、夕をつぐる鐘の音はるかに聞え來れば、猶分け見まほしき方も多かれど、うちつれて御堂にかへりぬ。たゞ今日の山ぶみの猶あかぬことなどいへば、あるじの、我もさこそはおぼゆれ、あすは大井より船さしのぼせむとあれば、さらばとなせの紅葉をも見ばやなどいひて、其夜は寢ぬ。

初鴈をきく記

秋のけはひのうつろひ行くまゝに、野面のすまひぞ言はむかたなくをかしき。そともの小田の穂なみはかつ〴〵色づきそめて、まがきの本の小萩は、をりえがほにほころびわたれる、露のにほひ、風のおとなひ、いづれあはれを添へざるなむなかりける。さるは夕月のおもしろきを、たゞにやは過さむとて、蓬生の露うちはらふなるは、わがたまあへる人々なりけり。いよす高う卷けば、むら雨の名殘の雲は絶間がちなるに、そこはかとなき外山のたゝずまひも、月影にもてはやされて、やう〳〵あらはれ行きぬ。山を望

「小倉山しぐるる頃のあさなあさな昨日けふうすき四方のもみぢ葉」
この流—和歌の道
秋のみゆき—有名なる大井河行幸
古きみゆきの云云—拾遺集「大井河かはべの松にこととはむかかるみゆきやありし昔も」

さだかにはえ知られ侍らず、又二尊院とてたふとき御寺の侍るは、法然大德の跡とゞめ給ひけるより、今にそのなごり忘れずなどいふ。さるはあはれなる御物語にも侍るなれ、ふるき世をかたるにつけても、この流の遠きむかしをくみ侍れば、かの延喜のみかどの秋のみゆきの事こそ、をりからことにしたはしうは覺え侍れ、そのかみ名高き歌人みな諸ともにまゐりて、みことのりのまに／＼うたひ出でたる言の葉どもの、秋の錦にもおとるまじう侍りつるは、たとしへなうをかしうこそは侍りけめ、物かはり時うつろひゆき侍りぬれど、たゞこの山河のむかしにかはる世もなければ、今もめのまへに見る心ちのし侍るなどいふを、かたはらなるわらはの聞きて、このみぎはの松のいとゞし深く見ゆるは、古きみゆきの事とひけむは、此木にはあらずやなどいへば、

　みゆきせしむかしの秋をいかにぞとまたも入江の松にとはばや

とうたふを、法師のきゝて、松にのみやは問はむ、みねの紅葉もこゝろありげに見ゆるをとて、

　小倉山いまもみゆきを待ちがほに峯の紅葉ぞにほひことなる

といひつゝ、かはらけとうでて酒たうべなどす。かのしほぢも、人なみにものいはむと

あらし—嵐、嵐山
しぼち—新發意、未だ僧行を積まぬ者
した照るかげ—美しき紅葉の陰
はなだ—縹、水色
ゆはた—纐纈、しぼり染
きのふはうすき—拾遺愚草下

ば、一日二日は猶こゝにありて、高嶺の秋のにほひも心しづかにこそたづね侍らめといへば、うたてさはなのたまひそ、山の名のあらしはたゞ時のまもうしろめたきを、あへなく夜の錦になしはて侍らば、いかにくちをしからまし、いざたまへとて伴ひいづ。しぼちの年まだ二十にはたらぬばかりなる一人、はしたなる程のわらはに、かの調じたるものなどになはせたり。けふは常の道にもよらじ、たゞ木末の色をのみしるべとせむとて、木こりあげまきがふみ分けたる跡をたづねて、した照るかげをしたひ行けば、所せき木の根、いはかどなどの、いと歩み苦しきを、からうじて少し平かなるかたそばに出でぬ。こゝは木立もまばらにて、のぞみもくまなければ、苔のむしろにおりゐて見るに、げにも高嶺のかたは、只いくむらともなく、錦をはりたらむやうにて、日影にかゞやきあひたる、目もあやなり。麓を見やれば、大堰の河遠く流れて、はなだの布引きはへたらむやうなるに、ちりうかべる木の葉は、くれなゐのゆはたさらせるが如し。かの見ゆるむかひの山の、ことに色こきはといへば、法師のいひけらく、これなむ小倉のみねなる、ふるくは中務の親王の、かくれがしめ給へることもきこえ、またかの定家のまうち君の、きのふはうすきとよみ給ひけむも、かしこには侍れど、今はいづれも其跡とては

名におふ園生の花―萩

そらながめ―空を眺むると空しく眺むると

法輪―嵯峨渡月橋の南、嵐山の東部にあり、眞言宗にて太秦廣隆寺に屬す

けはひしるくて―樣子明かにて

もらるゝも、いとわりなしや。今宵は名におふ園生のはなも、いたづらに夜の錦にて、淺茅がもとの松蟲のみ、やう〳〵ころ添はりゆくも、猶あかぬわざながら、さすがにあはれは添へつべし。

　はれ間なき月をいかにといひ〳〵てそらながめにや今宵あかさむ

　かきくらす雲間の影はうとくとも月まつ蟲よせめてかたらへ

秋の山ぶみ

都の旅居の久しうほどふるまゝに、おのづから住みなるゝこゝちのせられて、今はむつまじう語らふ人々もおほかるが中に、年比こゝろあひたる法師の、法輪にあるがもとより、秋もはやのこりすくなうなりにて侍り、山かたづけるあたりは、露霜の色もくまなう侍るを、あな心おそき主かなとそゝのかされて、時雨の雲とともにさそはれ行けば、あるじは待ちに待ちたるけはひしるくて、御堂の東のひさしかきはらひて、こゝにしばしやすらひ給へ、先山ぶみのまうけせむとて、わりごなにくれの物などとう出て、のゝしりあへり」いかでさはあわたゞしうは物し給ふぞ、世にかゝづらふ事もなき身にし侍れ

神代の光をあふぐも、岩清水のみなもとをくむも、いづれかかしこからざらむ。

かくてつがひ終りぬれば、おまへに彈物どもまゐらす。うへには琴、大い君に箏の琴、中の君和琴、少納言琵琶つかうまつれり。また若き御達のなかに、こゑある人々をめして、伊勢の海などうたはせ給ふ。かきかへししらぶる響は、軒端の松にこたへ、をりかへしうたふ聲は、空行く雲をもとゞむべくなむあるを、久かたの月の都もかくこそと、人々いひあへり。あそびはてゝ、杯あまたたびめぐる程に、月ははや入りかた近うなりぬ。今宵のいどみごと右一つ勝ちたれば、左がたのまけわざは、また明日の夜をとて、人々あがれぬ。

八月十五夜芳宜園にてくもる夜の月を見る記

芳宜園の月のまとゐは、年ごとのちぎりなれば、こてふにも似ぬよのさまなれど、こよひも例の人々まうで來にけり。さるは降りくらしたる雨の名殘、はれゆかむ空もおぼえず、ましてさやけき光まちいでむは、いとゞ心もとなきを、更けゆかばかくのみにはあらじを、こよひは寢で明してましなどいひつゝ、伊豫簾むなしうかゝげて、そらのみうちま

いづれか云々—

きん—十七絃

和琴—六絃

伊勢の海—催馬樂「伊勢の海の清き渚にしほかひになのりそや摘まん貝やひろはん玉やひろはむ」

まけわざ—負方より其償として饗應すること

あがれぬ—退散したり

こてふにも似ぬ—「月夜よし夜よしと人に告げやらばこてふに似たり待たずしもあらず」古今集

いづれをかー持、勝負なし

かたそぎー神社などの家根の建て方

みや姫の昔しりきや山のべの御井の清水にやどる月影

いつきの宮のふる事を、月におもひ出でたるもあはれに、また影もよしとうたふらむ、月の夜はましてさこそあらめ。いづれをかおとれりとせむ。

左。水干すがたなる男、木のもとに馬をとゞむ。

宮城野の木の下露に袖ぬれて月見に來しは都人かも

右。直衣きたる人、萩のはなを分くるかたあり。

またやみむ月澄みわたる秋風に露ふきむすぶしのの秋原

雨にまさらむ下露よりも、花ににほへる袂をこそとて、右をかちとす。

左。たかき山に、木の間よりかたそぎのさま見ゆるかたあり。

朝熊や鏡のみやに照る月は神代のまゝの影にやはあらぬ

右。松の竝み立てるもとに、御洗手の水ながれて、しめなは引きはへたり。

わき出でしみなもと遠き岩清水月もいく世か影やどすらむ

秋しの、伊駒ー共に大和

風越の峯ー信濃

しのばしさよー右勝

かなまりー金椀

みもひー水、催馬樂「飛鳥井に宿りはすべし影もよしみもひも寒しみまくさもよし」

左。山本の里に、はしるしたる人あり。

秋しのの里の月影すめる夜は伊駒がたけにたつ雲もなし

右。秋野のさまをつくりて、小家所々にあり。

深草や露のよすがを尋ね來て野となる里に月やどりけり

里の名のあはれさは、いづれとわきがたかれど、左も、右も、あまりにいひふりたるとりなしやとて、次の番をまつ。

左。山松の風に吹きたわみたるかたあり。

時の間に夕るる雲も吹きはれて月をみせたる風越の峯

右。古宮に、上臈だつ人のあそべるかたをつくれり。

いにしへもかくや澄みけむ高圓の尾上のみやの秋の夜の月

雲吹きはらすらむは、月に心行く山の名なれど、猶宮人のむかしのしのばしさよ。

左。かなまりに水をくみて、人々見るかたあり。

かくしつゝやどりはすべし飛鳥井のみもひに月の影をうつして

右。井のもとに人たてり。老木の松などあり。

百和香―煉香をいふ、種々の香類を細末にし、甲香を和し、蜜にて煉り合はせたるたきもの

くまなさこそ―左勝

左。黄金(こがね)をいさごとしたる濱に、白かねを波のかたとせり。

眞砂(まさご)さへ光をそへつよる波のしらゝのはまの秋の夜の月

右。黒方侍従百和香をもて、島のかたち三(みつ)をつくれり。

名にも似ず影こそすめれ小黒崎(をぐろさき)三つのこじまの波にてる月

月の影はあかく、所の名の白きと黒きは、めづらかなるつがひよと人々いひあへれば、おとりまさりもさだめず。

左。鏡をならべて川とし、波のかたを糸がきて、水のすめるこゝろとせり。

名とり川底(そこ)さへ見えて澄(す)む月にかくれもはてじ瀬々(せゞ)の埋木(うもれぎ)

右。山川のながれ廣く、所々に岩のかたをおほくつくりて、旅行く人あり。

立ちかへり人にも告げむ鈴鹿川(すゞかがは)八十瀬(やそせ)の波にやどる月影

八十瀬にうつろふ月はさぞあらむ。さはいへ埋木(うもれぎ)さへあらはれぬべき影のくまなさこそ。

くもで—八方に行き違ひたること、伊勢物語、水のくもでに流れ分れて木八つ渡せるによりてなむ八つ橋とはいへる」

隈—月の光を遮る所

あれにし後は—新古今「人住まぬ不破の關屋の破庇荒れにし後はたゞ秋の風」

うちかへし誦したり—左勝

たして、橋のもとに秋の花どもをうゑたり。

八橋の下行く水のくもでにも月はかくれずすみわたりけり

右。里ばなれなる川づらに、所せきまで舟橋をわたして、道行く人をたゝせたり。

今宵のみさのの舟ばしとりはなし波にくまなき月を見てしが

水せく川にやどらむ影はあれど、舟ばしをも隈とおもはむこそ、こよひの心なれとて、右勝ちたり。

左。杉むらのもとに關屋を造りて、前に清水のながれあり。

相坂の關のせきもりうちも寢ず月を清水にとゞめてぞ見る

右。板びさしの朽ちのこりたるに、あらがきなどむぐらにとぢたるかたあり。

もりすてし不破の關屋の板びさし久しき世をも月にとはゞや

あれにし後はといひしも、今は遠きむかしなれば、いよゝ久しき世のとはまほしけれど、猶月にねぬ關守が心さぞとて、月をしみづにと、うちかへし誦したり。

り

ふる人―老功者

蘆手―蘆の生えたる如く歌をちらしがきにしたること

せんかう―淺香、質の粗なる香木の名

波にあらすな―新今古集「立ちかへり又も來て見む松島やをじまのとまや波にあらすな」

六人たちかはりて、おまへにかきいづるを、少納言待ちとりていひさだむ。このおもとは、故殿の御時よりあり經たるふる人にて、物つゝましげもなく、われは顔にさたしいふを、若き人々は、にくき者にさゞめきあへるもあり。

左。紫のむらごの絲もて脚結ひたる洲濱に、るりの海に白き砂をしきて、蜑の家ども數多あり。歌は波打際に蘆手にかけり。

すまの浦の蜑の藻屑火心して今宵は月にたきすてにけり

右。せんかうのあしつけたるだいに、絲してつくれる松を島にうゑて、海にのぞめる家あり。歌はしろき色紙に書きて、左のあしに結ひつく。

月ふくるをじまの蜑の苫やにも都の人をやどしてしがな

月に名だたる浦人の心はさる事ながら、波にあらすなといひけむあはれこそ思ひ出でらるればとて、持とせり。

左。水はとざまかうざまに流れたるに、橋八つを所々にわ

よるの錦―「富貴而不歸故鄕、如衣繡夜行」折角の美をも人に見られざるをいふ

たゝまくをしき―古今集「思ふどちまとゐせる夜は唐錦たゝまく惜しき物にぞ有りける」

みさう―別墅

はしたなき迄―あまり明る過ぎる迄

かゞやかし―氣まりわるし

名だたる―有名なる

ことわれ―批判せよ、勝負を定めよ

かずさし―數取

くれぬとも家路なとひそあき萩の色なる露に月やゝどらむ

よるの錦にはなさじと思ふあるじの心ばへも、たゝまくをしき夕になむ

月の宴の記

秋によりたる殿のおまへ、いろ〳〵にひもとく花の錦はさらにて、ことしは嵯峨野ちかきあたりのみさうより、さま〴〵の蟲をえり奉れるを、やがてはなたせ給へれば、ことさらに今宵の雲を待ち喜びて鳴き出でたるが、いみじさいはむかたなし。東のひさし五間を、格子とりはなち、御簾高う巻きあげて、御帳するゑたり。月はしたなきまでさし入りて、おもとに侍ふ人々は、あまりくまなきがかゞやかしさに、みじろきつゝましきまでぞ覺えける。御館の人々、今宵月めで給はむ料にとて、洲濱たてまつれり。とり〴〵月に名だたる所々の心ばへをつくり出でたるを、うへにきこしめして、いと興あるわざかな、たゞさてのみやは見む、方わけて勝負あらむこそをかしからめ、少納言のおもとやある、これことわれとて召し給ひぬ。左は大い君のかたうど、右は中の君となむ定めける。とみの事なれば、かずさし何くれの物もまうけず、たゞかたた〴〵の童ども、五人

隅田川の堤の傍にある名所

みさかなにはー備馬樂、我家の句にて、下に「鮑さだをかかぜよけん」と繰返す也

ねぬなはーぬなはに同じ、水草の名、蓴

はたばりー布帛の幅をいふ、面積

一花ごろもー一花は只一時の意

きてー著て、來て、をは詠歎の詞

に、秋葉の社を右にて、秋の景色なか〳〵に世ばなれて見ゆるもをかし。門さし入れば、あるじ喜びて迎へ出づ。みさかなには何よけむなどいふもつき〴〵しう、やがてあはびさだをにはあらぬ、芋ねぬなはなど、所につけたるもの調じ出でて、饗應したり。酒たうべつゝうちながむるに、はたばり廣き庭を、いくむらの錦を敷きたらむやうに、植ゑわたしたるは、いと見所あり。此萩は宮城野の種なりとぞいふ、げに花ぶさ大きやかにて、長く垂れたるは、世のつねのにほひならず。

さをしかもさそはれぬべし宮城野の秋をばこゝにうつし來にけり

あるじに盃さすとて、

いざさらば袖にほはして秋萩の一花ごろもきてやかへらむ

かへし、

いくたびも露分衣きてをみよなど一はなにおもひおくらむ

ある人、

花にそむ心ぞあかぬ夕かけてわれもひもとく萩のあそびは

またあるじ、

しのびぐさ—思の種

たれこめて—閉ぢ籠りて

まで來て—詣で來て、まゐりまして

むづかし—うるさし

いさや—否とよ

白鬚の森—武藏

なくぞおぼゆる。さはれ猶花の行くへよ、さながらにわが世のかぎりのしのびぐさとしもおぼゆるは、うたて如何なるちぎりとか。

うつろふを花の上とやよそに見むあだなる春を過しこし身に

萩をめづる記

老いてはものの興すくなき習なるに、いとゞ病がちなる身の、よろづにものうくて、たれこめてのみ日をふるを、ある人のまで來て、萩もやゝ盛になりぬ、などか野邊見にとは思ひたゝざる、かしこの御寺、こゝの園生など、とり〴〵に人もあくがれ行くとぞいふなる、いざたまへ、かくてのみやはなどそゝのかせば、さすがに心は動けど、徒歩より行かむ境は、杖ひくほども遙なるべく、またあまりに人めしげからむも、むづかしかるべしといらふるを、いさや、わが誘ひまゐらするは、さるかたならず、君も知り給ふらむ、すみだ河をさかのぼることいくばくもあらで、入りぬる磯に棹さしとゞむる所なりといへば、さりけり〳〵、そは我も問ひなれたる宿ぞ、さるは人の往來のすくなきあたりにて、舟路のほどもたゞならぬをとて、ともなひ行く。舟よりおるれば、白鬚の森を左

あえかに―艶にやさしく

ねびとゝのひ云云―すつかり成人して心の届かぬ隈なく、而もあまり差過ぎたる事なきの大様に上品なるが如し

心にくき―奥ゆかしき

まみ―目つき

およずき―年寄じみて

あり經む―生きながらふべき

こしかた―過去

かゞやかしさ―氣恥さし

て、あえかに女しと見ゆるは、をかしきものから、今すこしよづきたらむふしを添へばやと思ふ比なるべし。散りもはじめず、咲きも殘らず、夕日にもてはやされて、霞のひまより長閑にこぼれ出でたるは、今はねびとゝのひて、あかぬ所なく、心ばへくまなくて、さしすぐいたる事なむあらぬが、猶おほどかにあてやかなるが如し。うるはしき薫は、ここごとにまさりゆけど、はやうつろふ色見えそめて、よそに過ぎ行く嵐のおとも、うしろめたうおほゆめるは、やゝさだすぎたるが、なほ今めきたる方によくもてつけて、めやすければ、心にくき所もうちそはりて、さまおくれぬたぐひなり。香もあせ色もうつろひながら、猶心きたなくとゞまりて、暮れ行く春にもおくれまほしげに見ゆるは、あながちに取粧ふとはすめれど、まみ口つきなどいつしかとおよずき、あしけさもそふめるを、おのが心にのみ昔忘れずして、ひとりふりがたく思ひとりたらむや、くらべつべからむ。かく人の身のあり經む世のあらましを、たゞ一時の花の上にうちながめつべきは、あはれにも、をかしうも、はかなうも、いひ知らぬわざなりや。さるは春ごとに散り行く陰を見れば、はかなきこの身の、あさましうすぐせし三十四十のこしかたをも、先思ひ出でられて、鏡の影のあらず口惜しうなりもていぬるも、かゞやかしさいはむ方

もてはやされたる―映じて一段の趣を加へたる
今日こずば―「あすは雪とぞ降りなまし消えずはありとも花と見ましや」古今集
年にまれなる―「あだなりと名にこそ立てれ櫻花年にまれなる人も待ちけり」古今集
ふゝめる―蕾を開かざる
かたなり―未成
たぐふ―比す

は夕日にもてはやされたる色香の、雨のなごりおぼえて、心ありげに散殘れる、今日こずばとぞ見えたる。あるじは待ちよろこべるけはひしるくて、年にまれなるなど口ずさみつゝ、風を待つまの木の下におりゐて打語へば、おのづからうき世に遠きこゝちせらるゝを、誰かは市の傍とは思はむ。かくて家路をさへ忘れぬべし。日入りはつれば塒にかへる鳥の音もわかれをしみ顏にきこえ、入相のこゑかすかにつたふるも、春を閉ぢむるこゝちして、夕やみの空も猶ふりすてがたしや。

かくながら花の木陰に待月ちていざもろともに散るまでは見む

おなじ題をすが子にかはりて

あはれ花の日數のはかなく過行く有樣を思ふに、いとかく常なき人の世のためしこそ、あやしうよそへつべけれ。やうやうひもときそむるこずゑの、猶ふゝめる方おほかめるは、おひたち行くまゝににほひ添れる人の、まだかたなりなる所ありて、さらにをさなき心ならひの殘れるやたぐふべからむ。おほかたにほころびもて行けど、猶さえかへる風の名殘おぼえて、心行くばかりはゑまひ開かぬほどなるは、若々しきけはひけざやかに

この御館、こゝの御園生、此ごろのけはひ如何に見所あらむといふもあり、又なにの山里、それの河づら、猶散り残る陰をや尋ねましなどもいふを、いでかのやむごとなききはの塵もすゑじとおきてたらむは、春風の心もたどらで、あながちに朝夕かき掃ひなどすめるが、所につけてはめやすきわざとも見ゆべけれど、かへりては情おくるゝかたやいかで無からむ、又かの世離れたるあたりは、暮れゆく春のあはれもさこそ多かめれど、霞へだつる道のそらも、いとはるかなるを、暮れかけてはなどか思ひたゆむ、さらばわれも人もおひむつばへる、羽生田のぬしの住居こそゆかしけれ、いざ給へとて、うちつらねて行くに、所せきちまたの塵は、たゞ中垣の一重をへだてなれど、やゝおくまりてのどかなる方をしめつれば、木立ものふりて、霞のたゞずまひたゞならず、ましてあるじは古のみやびしたふ人にて、なべて世の島好てふ人の心ならひはまなばで、たゞおのづからなる山里の有様をうつしたれば、はひりの方をばさながら畑につくりなして、なづなの花など露にうち亂れたる、いとつきづきし。垣ねをめぐりては、田所廣くうちかへして、堰きいれたる水いと清なるに、蛙の時知りがほに聲たてたるもをかしく、くろづたひの道かたがたにわかれたるには、花の木どももわざとならず植ゑわたせり。さる

やむごとなききは—高貴の御方
おきて—きめ込み
道のそら—道のり
むつばへる—睦まじくせる
いざ給へ—いざ來給へ
所せき—窮屈なる
島好—庭園に數寄を凝すこと、萬葉伊勢等に見えたる句
おのづからなる—自然のまゝの
はひり—入口、門口
くろ—畔

がの地しき—二藍の象眼の地敷、二藍は青花と紅花との染色、象眼は支那より船來の絹の名、地敷は高麗縁を施したる敷物の稱

野をなつかしみ—萬葉集「春の野に菫摘みにと來し我ぞ野をなつかしみ一夜ねにける」

たゞにやは過すべき—空しく過すべけんや

おどろかす—訪ふ

もろともに菫咲く野にやどりせば草の枕もうれしからまし

野をなつかしみとおもひとり給ふなるべし。この助は名高き博士なりければ、酒たうべて文つくらせ給ふ。今日の山ぶみのこゝろを、四韵の句におもしろくつくり出でたるを、その道の人々はうちかへし誦して、いたくも言へるかなとて、いみじくめであへりけり。祿どもかづけ給へば、ゑひの足どりたど／＼しく、立ちよろぼひながらまかり出づるも、をりから罪ゆるされてをかしかりき。日影やゝ山の端ちかうなるまゝに、今はまかで音聲なるにやあらむ。左も右ももろごゑに吹き上げたるが、あまりに耳おどろくばかりおぼえたるに、ふとめさめたれば、ひねもす降りくらしたる雨の晴間なくて、軒の玉水こゑうち添へたるなりけり。さはゆめなりとおもふも、猶わすれがたくて。

花ををしむ記

つれ／＼と降りくらしたる長雨も、やう／＼はれ間おぼゆるに、かゝるゆふべをたゞにやは過すべき、春のゆくへをもしのばむ、花の名殘をも見ばや、いざとて、葎生の門おどろかすなるは、我相思ふ人々なりけり。さるはいづこの心ゆく方ならむといふに、かし

空行く雲—歌聲の妙なるを形容して遏雲の袖といふ、列子に出づ
なからひ—間柄
わか櫻—日本紀履仲天皇の條「三年冬十一月丙寅朔辛未、天皇泛ニ兩枝船于磐余市磯池一、與ニ皇妃一各分乘而遊宴、膳臣余磯獻レ酒、時櫻花落ニ于御盞一」云々、かくて長眞膽連室山に花を尋ね獲て獻ず、これ稚櫻宮の名の起因也
つがり—かゞり
ふたあゐのざう

けふは彼方にも此方にも、ものの上手どもをえらばせ給へれば、すべていひ知らぬ手どもをつくして、野山の木草もなびき、空行く雲をもとゞめつべくなむ有りける。さるはいとうるはしくむつび聞え給ふなるが、大かたのはかなきすさみごとには、かたみにおとらじといどみかはし給ふも、をかしき御なからひなりや。かくてみこに御酒たてまつらせ給ふ。山吹の花ながらなるをつくゑに結ひて、上にはこがねの杯をのせ、白かねの瓶子に櫻の枝をおもしろくとりよそひて、歌とくつかうまつらむものにとて、おのれに賜へり。いと心も得ねど、もてまゐりたるに、みこいと興ぜさせ給ひて、さかづきとらせ給ひぬ。おまへにはべり瓶子とりながら、

わか櫻名におふ宮のいにしへの春おもほゆる花のさかづき

山吹のほそながに、三重の袴とりそへて賜りたるに、いともおふけなくこそおぼえしか。みこよりの御つかひは、圖書助となむ聞えける。いと大きやかなるすゞりの蓋に、色こき菫をあまた植ゑて、くれなゐの絲をつがりにしたるこんるりの壺に、名だかき薫物どもを入れて、しろかねの火とり一を添へて、その上におきたり。ふたあゐのざうがの地しきのはしに、歌をぞかゝれたる。

山かたつける―山の方に片寄りたる
なから―半分
雪をめぐらす―舞容の巧なるを形容して廻雪の袖といふ、それを落花の片々たるにとりなしたる也
やをら―靜に
召して―中務のみこが
こなた―殿
すぎ〳〵―つぎつぎ

ふを、などかく忘れけむと、心もそらにて、やがてかりばかまに水干とりきて、いそぎいでつ。嵯峨野のかなたこなた見めぐらせば、山かたつける老木の松の陰に、あげばり高うはりて、幕なから引きわたしたるなむ、とののおましなりける。また麓の芝生いと清らなるに、今を盛とにほひあひたる花の本をしめさせ給へるは、中務のみことぞ聞ゆなる。山風さと吹き來て、散りかふ花のけはひは、さながら雪をめぐらすとかいふばかりなるに、春庭花をおもしろく舞ひいでたる、うちふる袖のにほひもたゞならず、やをらこなたの御前うち過ぎてかへり入りぬるは、たとしへなくめでたしと、目とゞめられつ。殿はまちとり給ひて、あそびとくせよとのたまふ聲のしたより、わらは四人、たけだち姿ひとしきが、胡蝶のよそひうるはしく、霞のひまよりみだれ出でて、花のあたり飛びかひたる、えもいはずつき〴〵し。やがてそのわらは一人を召して、

いざさらばあそぶこてふにさそはれて花の木陰にけふはくらさむ

ときこえ給へば、とりあへずこなたよりも、御かへりきこえ給ふ。

胡蝶にもわれおとらめや咲く花のあかぬ色香をしたふ心は

猶かた〴〵きそひあひて、春鶯囀、喜春樂、陵王、納蘇利など、すぎ〳〵にまはせ給ふ。

斧の柄―晉の王質山に登りて仙翁の圍碁に見とれ知らず〳〵歲月を過して斧の柄朽ちたる故事

まがひ―紛れ

とうでて―取り出して

いひさして―いひ掛けて後を言はず

さへづりは、さらに我をとゞむる心地のみして、うら〳〵と永き春日も、今日はた晝間すぐるをだに知らざりけり。かくても斧の柄はくたしつべくなむあるや。あやなくおくる春の日數を花にのみ過いなむよ、これにましたる心遣はあらじ、わが世のかぎりは唯かくてのみもあらまほしきやなど、歸るそらもわすれて、われさかしらに言ひあへるは、醉をそへたる心のすさみなるべし。

　またさらに花に一夜の宿からむ散りのまがひは人もとがめじ

とぞおぼゆる。

春の山ぶみ

春雨そぼ降りてしめやかなるに、ひとり日ながき窓のうちに、なにくれと古き世の册子どもとうでてうち見るほど、しばし文机によりそひてまどろむとせしに、たちまち柴の戸うちたゝきて、師どのの待ちかね給ふを、いかでまうで給はざなる、とく〳〵、といひさして走り行くを見れば、とのの舍人なるが、御ともの列よりふりはへておとづれけるなり。げに今日は嵯峨の山ぶみせさせ給ふなるに、歌よみの數にとて、かねて召させ給

風をかごとに—風を口實として

苔をむしろ—苔の上に坐してゐる

かひ—甲斐、峽

心から—自分の心より散るこそあだなりとの名を立つる所以なれ、我は決して花に濡衣を着せたるにあらず

山風にまかせなはてそさくら花夢に見しさへ散るはうかりき

とばかりやすらふほどに、峯より童がおり來るあり、なかば散りたる枝に文をさしたるをもて來て、都の人は猶こゝにこそおはしけれ、これをとて出すを、とりて見れば、

花さそふ風はうらみじ散らぬ間を見すてゝかへる人もある世に

とあるは、都までいひおこす使なるべし、とりあへず、

またもとてちぎり置きしを山ざくら風をかごとに待たじとやする

やがて懷なる硯とうでて、その童が袖にかきつけてやりつ。花にひかるゝ心のはてしなければ、猶苔をむしろなるに、かしこより酒さかななにくれの物ども持て來て、また童していはせたるは、

とはるゝをみ山のかひに住むやどの花にうき名をおほせざらなむ

かへし、

心から散るこそあだの名だてなれ我やはきせし花のぬれぎぬ

かくはかなき事いひしらひて、人々酒たうべなどす。谷水のながれ幽におとづれ、松の聲は遙かに響きて、散りのこる尾上の花は、猶わかれ惜みがほに匂ひ、霞をもるゝ鳥の

りさまをしも、けふ來ぬ友にもかたらまし、また後のおもひ出ぐさにもとて、月の光をともし火にて、かつ〴〵ものに書いつく。

山里に花を見る記

一夜のたびねは猶あかぬものから、散り散らずとかまつらむ人もあめれば、けふはたちかへらむとするを、花のたよりならでは、又かゝる人めをも見じなど、あるじは止めまほしげなれど、鶯に身をあひかへばとて、わかれにけり。紫だちたる空のけはひうちくもりて、昨日はくまなく見わたされし梢どもも、霞のまよひおぼつかなく、なか〳〵にふりすてがたきあしたなり。やゝおり來るまゝに、山ぎはあかり行きて、やう〳〵さしのぼる日影に見やれば、小柴垣、萱が軒端は、そこといちじるく、まして立ちならぶ梢の雲は、いよゝ手にとるばかりなれば、たゞかへり見がちなるに、風すこしうち吹きてそこはかとなく散り來なるが、見るがうちに道もはだれになりもてゆけば、あな心づくしの山ざくらよとて、人々おりゐぬ。

ふりすてし人をとゞむる山櫻散るをも花のなさけとぞ見る

散り散らず―拾遺集「散り散らず聞かまほしきを故郷の花見て歸る人と逢はなむ」
鶯に云々―後撰集「鶯に身をあひかへば散る迄も我物にして花は見てまし」
あかり―あかるくなり
はだれ―斑、花の道に散りたるさま
おりゐぬ―坐り込みぬ

めでくつがへり—大騒して賞歎し

によび—苦吟し

あざれ—戯れ

のみての後は—萬葉集「青柳梅との花を折りかざし飲みての後は散りぬともよし」

花に云々—春風

庭のつらいと廣らなるに、植ゑそへたる千本の陰は、色に香にとりならべて、露をねたみ霞にきほへるけはひ、この世のものとしもおぼえずなむある。かくてこそうき世をそむきはてぬるかひありけれとて、人々めでくつがへりつゝ、花のもとにまとゐすれば、あるじは酒さかなとりまかなひ、かはらけとりあげて、

梅見にとゝはれもするか大伴のむかしおぼゆる宿ならなくに

とによび出でたるを、とりあへず一人が、

大伴の名も香ぐはしきやどの梅むかしの春をわすれやはする

かはらけたび〳〵めぐるほどに、月はれやかにさしのぼりて、木陰もくまなく見ゆるに、吹くとしもあらぬ下風ににほひみちたるは、醉をすゝむるばかりなるが、いはむかたなし。人々みなあざれあひて、あるは遣水に口うちそゝぎて、のみての後はとうたひ、あるは苔のむしろにおりゐて、雪をあざむくとくちずさび出づるもあり。また物の音吹きならしたるは、花にうしろめたき調の名なるも、をりにあひたる心々、いづれをかしからぬはあらざりけり。いでやかくあそびの道のたのしかるも、世のほだしなき人こそはとて、あるじのほこり顔なるを、花の心もしか思ふらむとぞおぼゆる。されば今宵のあ

あからめ―わき見、よそ目

けがしき―穢らはしき

みこともち―司、大伴家持任に九州に在りて梅の宴を催したること萬葉集に見ゆ

ふりはへて―わざわざ

そこはかとなく―どこともなく

人く―鶯の啼聲に人來を掛く、古來の慣用法

東の比叡―上野東叡山

を、いつの世いかなる人のうつし置きけるなりとも知られぬこそをしけれ。これにむかへば、あからめもせず、うちまもられて、飽く世なけれど、さはいへ久しく止むべきならねばとて、そのおほよそをしるし置きて、返しやりつ。

二月ばかり山里の梅をめづる記

大作の宿禰のぬし、今は塵の世のけがしきをのがれ、其遠つおやなる、筑紫のみこともちの古をしのび出でて、もゝちどの梅を砌にねこじうつし、そをもて清き心の友となむなしける。こゝにわがおもふ友垣相ともなひつゝ、その花のさかりをもすぐさじ、世の外の春をも見むとて、ふりはへてとふことあり。頃は二月の十日あまりなるに、かの見ゆる岡べの雪は、猶きえのこりながら、うちかすむ森の梢どもは、春の光うちわたりて、そこはかとなく聞ゆる鶯の聲も、人くといふにはあらで、我を呼ぶなるこゝちのすめるは、こゝろゆく夕なり。所は東の比叡のふもとなれば、世ばなれてかごかに住ひなしたり。松のとぼそ萱の軒ども、いとことそぎたるに、おのづからなる竹むらをまがきに結ひわたして、堰きいるゝ水の流いさぎよく、石のたゝずまひことさらならずしなして、

云—李白蜀道難の詩をいふ
眉引のごとし—遠山を形容する慣用句
いづこをはか—何所が終局
あやしき—賤しき、粗末なる
かちより行く—徒歩にて行く
かぞへも云々—數へ盡し得んや

ためしにいひけむ、から歌のこゝろこそおぼゆれ。又とほく見やらるゝは、あるかなきかに雲霧たちまよひて、群れゆく鳥の翅も末たどきえ〴〵なるに、夕日ほのかににほへり。いにしへの書に眉引のごとしといひけむは、只かくぞと先おもひ出でぬ。水のながれ一すぢ、其源をとむるに、幾千里の遠ともわかたず、又その落ちゆく末をのぞめば、いづこをはかとも知りがたし。その八十瀬のくまには、眞砂いと淸らに、さゝら波よる渚あり、また岩うつ波高くたちて、おと聞くばかりなるに、舟いたくさしわづらへるあり、また岸のまに〳〵いりまがりて、水よどみて深きは、そこひも知らぬ淵なるべし。さて水をへだてゝ麓のかたに、大きなる屋ども甍をつらね、こと〴〵しき門おしひらきて、前には石をはしとせり、また水のこなたには、あやしき萱屋たち並びて、おどろなる垣根ゆひわたせり。又こゝにかしこに人あり、あるは馬に乘れるも、あるはかちより行くも、あるは薪おへるも、あるは釣の竿もたるも、立ちたるも、居たるも、老いたるも、若きも、そのさまいひもつくし難し。まして木草何くれの物は、かぞへもあへむかは。かく遠じろき山川のすがたを、たゞ一ひらの紙のうちに、こまやかに心しらひしたるは、世になき筆の跡とぞいふべき。たゞかく珍らかなるを、いづくの國、いづれの所

それにとつゞいて

うつせみの世—現世、此世

糸竹のしらべ—音樂

人の國—田舍

けはひ—樣子

十まりいつゝ—十有五

しみゝ—茂くみつしりと

かしこかる世云

此君をもて、此道の親とめでたふとみ奉らざらむ。文化の四とせかみな月ついたちの日。

山水のかたかける繪を見る記

うつせみの世に人のことわざ多かめれど、しづけき窓のうち、幽かなる燈火のもとにひとり居て、よくつれ〴〵なぐさむべきものは、たゞ繪と書との二つになむ有りける。糸竹のしらべに思ひをやり、盃を取りてうき世のさまを忘るるたぐひは、折にふれ時にしたがひて、人の心をなむなぐさむる業なれど、いかでかは常にしもなすべき。故くだれる世に生れ出でて、上つ世の人を心の友となすべきは書なり、足は都のうちにのみ止りて、人の國の遙かなる境をもたゞに見るべきものは、うつし繪のたくみになむありける。かゝれば、古の書どもくりかへし見るいとまには、名だたる山河のけはひを、うつし繪にしのび出でて、こゝを常に心やりぐさとぞなしける。かくおのが好める心をおもひはかりて、ある人の見よとておこせしを見るに、山をたゝめる事十まりいつゝ、たゞ墨がきにかきなしたるが、濃きは近く、薄きは遠し。そのまぢかく見わたさるゝは、大木しみみに生ひ立ち、巖こゝら聳えて、道いとさかしともさかしく、かしこかる世の經がたき

あらぬ方―とんでもない見當違の方角
なほ〳〵しききはの人―凡庸の人
かう―守
まがね―鐵
かいやり―書きなし
たゝずまひ―姿
くさはひ―類
この―彼の
すぎ〳〵―つぎつぎ、それから

に入りたらむ人は、われより法をばはじめつべし。すべてくだりたる世人の心ぐせにて、法になづみ、あとにかゝづらひて、かへりてあらぬ方にひがみもて行くたぐひも多かるをや。もろこし人の詞に、法はのりなきがうちにありといへるは、其詞味ありとこそ覺ゆなれ。さはいへど、これは世のつねのなほ〳〵しききはの人のためには、たやすく言ひがたくやあらむ。こゝに燒繪といふわざあり、はやき世のすさみにて、中昔の書にも其事見えたれど、今は世にたえて其あとも殘らず、ましてその業得たる人とては誰かはあらむ。しかるを若狹のかうの君、稻垣の朝臣は、繪をふかくこのみ給ふあまりに、此わざをふたゝび世にしいで給へり。其ものの形をうつしたまふを見るに、まがねをやきて筆とし、火をもて墨にかへて、筆づよにとりなしたまふ所は、紙のおもていたくこがれ、輕らかにかいやりたまふ方は、火の氣かすかににほひて、またく墨がきの心しらひにことならず。さるは水のながれ、山のたゝずまひ、木草、鳥獸、人のよそほひ、家居のありさま、何くれのくさはひ、筆の心のいたらぬくま無くなむおはすなる。これぞこの古人の跡をもふまず、われとわが心をもて、法をさだめてものし給ふなるは、いと〳〵珍らかにこそ。今よりして、此わざをすぎ〳〵にまねび出でむ人、誰かは

似げなし—文意として適當ならず
失ふ—却つて其宜しきを失ふ
ひそくのつき—祕色の杯、青磁燒の上等なる器物
けぢめ—差別
まめやか—眞面目
かれ—故に

かざりなきは、中々に神代のすなほなる心しらひあれば、此杉もてつくれるを似げなしともいひがたし。とまれかくまれ、物は事たらばさても有りぬべきを、あまりに選りととのへむとせば、失ふふしも出でくべし。我が友躬弦のぬしは、ふるきみやびごと好む人なるが、猶この古に跡なきさまなる物をも、有るにまかせて捨てざるは、心ありとやいはむ。椎の葉もひそくのつきも、ものをもるには心ひとしく、あじろの屏風も錦のとばりも、身をへだつるに異なるけぢめなければ、すべて物は一方をとりて、かたへをいひけつべきわざにはあらぬにや。

燒畫記

よろづ何の業にも、古より法となすしるべありて、それによらざらむは、まことの心を得がたく、其のりを得たるは、まめやかなりとて、人もうべなふめり。こはもとより理さる事ながら、ふかく事のもとを考ふるに、よろづの事、はじめに法をまうけ置きて、後に其わざをなし出づるにはあらず、そのわざあるがうへにこそ、法てふ事はいで來めれ。かゝれば、わざは本にて、法は末なり。かれ何の業にもよく心を深めて、其道

みかぎは―水際

時にしたがふ―隨時樓

けぢかく―手近に心置きなく

よそほしき―よそほひある、立派に飾りたる

神路の山―伊勢大廟の傍の山

ゆくりなく―偶然、思ひ掛けなく

うそぶき、冬は雪にうたふも、すべて山水のあはれをそへざるをりなむあらざりける。ましてあるじの言の葉もて、友にまじらふ事廣ければ、時にふれをりを過さず問ひ來る人々、皆みやび好まざるはなし。かくとこしへにあく世もしらぬ高殿なればとて、聞中大德の、ことさらに、時にしたがふてふ事をもて名づけられたるは、ふかき心しらひにこそありけらし。

安田躬弦の家の文臺の記

よろづの調度、古の跡あるものは、よそほひありてうるはしかれど、けぢかくもてならし難し。今の世につくり出づるものは、ことそぎて見所なけれど、とりつかふに心やすし。この文臺は、ちかき世に桃青法師が、はじめてつくり出でたる型なりとなむいふなる。法師は塵の世をのがれ出でて、かりの宿に心とゞめざりし人なりとかいふめれば、古のよそほしき姿はまねばで、今の世の心やすきに從へるにこそ有りけらし。又こは神路の山の杉の古枝を、木造なせるなりとなむ。そはゆくりなく爲せしわざなめれど、これを思ふに、とりよそひうるはしからむは、大かたに人の世の手ぶりにて、事そぎて

たることを知る—知足菴

つき〳〵し—似合はし

ひみづ—氷水

いにしへの人云云—清少納言枕草紙に「すさまじきもの、春のあじろ、八月のしらがされ」網代は冬期川に掛けて氷魚を捕るもの

所せく—窮屈に

ものから—ものの、けれども

むかつを—向ふの丘

ることを知るとは名づけしこと。

隨時樓の記

うつせみの世の人のことわざ、よろづにさま〴〵なれど、時にそむき折にあはで、つきづきしからざらむは、いみじきふしなりとも、いかで心のゆくわざなるべき。されば夏の日は埋火のあたゝかなるを思はず、冬の夜にひみづの涼しさをば忘れつべし。いにしへの人も、春のあじろ八月のしらがさねをこそ、すさまじきことの例には引き出でたりけれ。かゝればはかなきすさみも、をりにあひたるはをかしく、見所なき木草も、時を得たるはめづらかになむおほゆめる。しかはあれど、人ぐさしげき巷の、所せく門たち並べたらむあたりには、時をすぐし、をりを失ふたぐひ多くて、月にたよりよきは花にうとく、水によしあるは山遙にて、四の時のゆきめぐるにしたがひて、心をやるべき住居は、いとも〳〵かたしや。こゝに前田のぬしの高殿こそ、あやしく所得てはおほゆれ。しりへは市路につゞくものから、前は世ばなれたるのぞみあり。春はむかつをの花のかをりを居ながら袂にしめ、夏はみなぎは清き池の蓮葉を舟ならずして手折り、秋は月に

ものはあなれ—ものにはあるなれ
おのがじし云々—各自心に十分の満足を感ずるは稀にて不足なる事のみ多し
林に云々—莊子逍遥遊に「鷦鷯巣二深林一不レ過二一枝一偃鼠飲レ河不レ過二滿腹一」
けがしき—穢らしき
閼伽—佛に供ふる水
栂尾の云々—茶
うつそみの世—現世
あげつらふ—論ず

知足菴記

あはれ世のならはしこそはかなきものはあなれ。貴き賤しき品いとことなりといへども、おのがじし心ゆくばかりなるは稀にて、たゞたらはぬ事のみぞ多かりける。花を思ふとては梢のあらしをうらみ、月をめづるとては尾上の雲をいとふためし、誰かはのがるべき。林にやどるさゝぎは、わづかなる小枝のかげをのみたのみ、ながれに水もとむるねずみは、たゞはらふくるゝにすぎずとこそ、いにしへ人もいひつれ。かゝる理をだにわかたば、限あるこの世に、かぎりなき事を思ふべきかは。こゝに中村のぬしなむ、よく塵の世のけがしきをのがれて、萱の軒松の樞に心の月をすまし、花をつむゆふべ、閼伽をくむあかつき、み佛につかふるいとまある時は、氷をくだき、雪を煮て、栂尾の昔をしのぶめる業にしも、心をなむなぐさめける。これや此世にもとむべきすぢをも忘れ、また人をうらやむべきふしをも思はで、おのが心から事足る業にしもあれば、かのいにしへ人のいひけむことわりにこそかなはめ。いでやうつそみの世の、限りなきもとめある際とは、日をならべてあげつらふべくもあらざりけり。うべなく〳〵、この住家をしもた

何でもないつまらぬ歌、後拾遺、好忠、「なけや鳴け蓬が杣のきりぎりす過ぎ行く秋はげにぞ悲しき」長能袋草紙に此歌を難じて「狂惑のやつ」といへり、この文前後凡て此歌によりて立論す

中々に云々—寧ろ馬鹿々々しき事といふべし

ついでて—叙し

曾丹の翁—曾根好忠、蓬が杣の歌の作者也

えせ歌のこと葉にすがりたるこそ心ゆかね、かの長能の朝臣のそしりをば、いかにことわるべきぞといふとぞ。おのれこたへけらく、そはものに泥みたるぬしかな、かの朝臣のうけひかざるは、耳なれぬ詞をいとふにこそ有りけらし、されど必ずさる事とのみもさだめ難きよしあり、そも／＼歌の詞にいひふりて跡ある事と、あらたにつくり出でていひそむる事との二つあり、蓬の杣とはあらたにいひそめたる詞にて、古き跡によりたるにはあらず、そは蓬の茂う立てるが、杣山の木のむれ立てるに似たれば、たとへていふなり、かの天つ星の數多きを仰ぎて星の林となづけ、みねの岩ほの並み立てるを見て岩垣といふらむ、みな同じたぐひなるべし、かゝる言葉をあらたにいひ出でむも、歌人の一つのたくみにはあらずや、古くいひならひたるをば、善しとて必ずとり、新しく思ひよせたるをば、悪しとてあながちに捨てむは、中々にをこなるべし、まして彼歌は、通俊の君のえらびにもとられ、また帥大納言の難にもいらず、かゝればこの二人の君たちは、其あらたなる詞をよしありとこそ思はれけめといへば、あるじ手うちならして喜ぶことかぎりなし。則ち筆とりて此問答の詞をついでて、あるじの名にかけたる事のもとをあかし、かつは曾丹の翁のため、あざけりをとくになむ。文化六とせの春。

鳥の跡—文字
名代—名を後代に傳ふる資料
ひたゝけたる—喧しき
かごか—幽閑
事そぎたる—簡素なる
すさみ—閒興
よすが—便宜
あらぬえせ歌—

問ひ來にける。一日あるじのいひけらく、世を經てたえざるものは鳥の跡なり、いで此屋のたのしみをも、人々とあひむつばへる心をも、ながくうみの子のつぎ〳〵につたへて、わが名代とせむ、ことのゆゑよし記してよとあれば、すなはち筆さしぬらして、いささかもののはしに書きつく。寛政といふ年のなゝとせ神無月。

蓬が杣の記

吾黨晃海は、はやくひたゝけたる巷の住家をいとひて、たゞ歌にのみ心をなぐさめ、山水の清きさかひになむ思をやりける。其尾張の故郷を出でてより、甲斐の國にあそべること十年あまり、今また東の都に來りて、世の歌人にまじらへることこゝに二年、市が谷の里にかごかなる所をしめて、花にながめ月にうそぶくやどりとせり。おのれ一日其やどりを訪へば、松の柱竹の編戸いと事そぎたるぞをかしき。あるじのいへらく、我こゝにわが世をへなむとにはあらず、たゞ時にとりたるかりそめのすさみなり、われ此やどりを蓬が杣となむ名づくといふ。さるはみやびたる名にこそ有りけれ、蟲の音きかむ秋を待つよすがにやといへば、さりけり〳〵、さはいへどこれをとがむる人あり、あらぬ

かりそけて―刈り開きて

むかつを―向つ尾、向ふの丘

四の時のあはれ―春夏秋冬四時の風趣

のばへて―のべて

かれ―故に

たまあへる―心たまあへる

琴後集　巻十

記

清水濱臣の泊酒舎の記

上野の岡のふもとに池あり、この池の西なる方を萱がまちとぞいひける。こゝに蘆原かりそけてつい建てたる伏屋あり。そはたゞに其池にのぞみたれば、名をさゝなみのやとなむいふなる。そも〳〵霞たなびく春のあしたは、むかつをの梢をうつして花の鏡にむかひ、雁鳴きわたる秋のゆふべは、雲間の影をうかべて月のみふねをとゞめ、あるは蓮はな咲く夏の日、あるはみ雪ふる冬の夜、をりにつけ時にしたがひて、見るめのあはれなむつきざりける。あるじはふかくみやびこのめる人にて、四の時のあはれをすぐさず、こを古様のことの葉にのばへて思をやり、また唐風のしらべにならひて心をしもなぐさめけり。かれたまあへる人々、花にあくがれ月にたどるも、つねにこの伏屋をなむ

たしと、長房卿の宣ひしによらば、此集のぬしなどをば、いかばかりめでぬべきものにか。

文化の十とせかみな月望の後の一日

平　務　廉　識

月雪はな、ほとゝぎすはさらなり、うきふしも、うれしきをりも、あはれなるも、かなしきも、をりにふれ、ことにあたりて、年頃よみ出でられし歌どもの、厨子のうちにのみ埋もれなば、おのづからちりうせなむこともあらましなどある人々にそゝのかされて、このちかきとしより、かきもあつめ、梓にものほせてむなど思ひたちたまひて、おのれに清書のことまでをもあつらへられしが、ほどなくやまひの床にかゝらせ給ひて、目くるめくことを、ひたすらにうれへさせ給ひぬれば、何事もしさして、つひに身まかり給ひぬるは、いとほいなく、思ひ出づるも、今更なみだにくれてなむ。さるをこたび大人（うし）のみこゝろざしを繼ぎて、たせ子のものせられしが嬉しくて、おのれもちぎりしまゝに筆とりぬれど、拙さはなか〳〵人わろく、つめくはるゝわざになむ。さてなき御あとに、うしの歌のうへを論ぜむは、おふけなく、ふかきむねはわがどちのしるべきにもあらねど、只おもひあがれるこゝろ高さと、いうなるおもむきとは、きはことに、世の歌人たちとおなじ日にかたるべきにはあらず。またかの秀歌一首もつはうたよみなり、二首は上手なり、三首はありが

て、いにしへにのぼりゆかむはしだてとなすべき木は有りぬべけれ。かくばかりことのはしげき大木のかげに、ひるはひねもす立ちならし、よるはよすがら居りあかしてこそ、みやびかなることのはをもひろふべきことには有りけれ。かくて今よりは、ちとせの後も朽ちせざらむことのうれしきあまりに、いさゝかことあげすることかくなむ。

文化むとせ長月　　片岡芳香

かずしらず竝みたてる杣山の木も、たけたかく、もとだちすなほにして、はしらともなり、うつばりともなるべきは、いとまれなり。ことばの林にいりて、其陰をえらばむことも、またかくのごとくなるべし。うつせみの世に、ふみのそのに立ちまじり、言葉のかげにあそぶ人々、夏野の草のかずおほかめれど、おもわなす心々なれば、こゝにあまりあるも、かしこにたらはずして、山の井のこゝろあさきおのれらが、かしこきかげとたのむべきは、すくなくなむ有りける。こゝにわがにしごりの大人の、としごろ思ひをよせ、心をこめて、よみおきたまへることのはの、世をへては、あらぬことにうつしひがめもて行かむことのいとほいなきわざなれば、とて、こたび板にゑりなむといふ人のあるに、かのことじりなる厨子に、としごろこめおきたまひぬることのはの、秋野の花のいろ〳〵につみわけたまひぬるを、ながきみじかきよりはじめて、くさ〴〵のふみをさへにとうでて、かきあつめたまふこと有りけり。まことにわがうしのことのはぞ、おのれらがたちなれてたのむべきかげには有りける。この大人のことばのそのにこそ、はしらともなり、うつばりともけづり

此琴じりの集は、父のおもひたち給ひし事なるが、ともかくもさだめたまはぬ程に、みまかり給ひしは、あかずかなしきを、その本意たがへぬさまにはいかにかしなさまし、かくさまぐ＼に、しげき言の葉どもを、しがなきさまにはちらさずもがなと、朝なゆふなに、かき集むとすれど、力なきをみなごころに、おもひあへねば、しどけなくのみもてなしつゝ、ほど經しを、務廉ぬしの、せちにこゝろくるしがりあつかはるゝに助けられ、かつは濱臣ぬしにもかたらひあはせなどして、やうく＼かのみだれたりしくさぐ＼を、つどりわけついでて、かく板にもゑりぬるは、うれしきわざになむ。しかはあれど、今これをなき人の見給ふものならましかば、御こゝろにかなはぬも有りぬべく、またおもひ入れ給へるふしおはしたらむも、おほくもれたるべければ、いかばかりかひなき事にかのたまはむと、ただこれのみぞあかずおもはるゝ。

文化の十とせしもつき　　むら田のたせ子

身をたゞへつ—水中に投じたる也
もこよひ—苦悶し
かのきし—彼岸、涅槃の境

つたへし　たゞかなる　便りもがもと　月に日に　待ちつゝをれば　難波なるわがともがきの　ことさらに　おもひおこして　天つ鴈　翅にかくる　玉章のたよりうれしと　ことの葉を　ひらきて見れば　さつまがた　沖の小島に　ゆく舟の　ゆきもはてなで　法の師は　八重の汐ぢの　うたかたに　身をたゞへつと　さだかにぞ　われに告げつる　常もなき　世はかくこそと　一たびは立ちておどろき　一度は　ふしてもこよひ　いきつぎて　なげきぞわがするせむすべをなみ

反歌

かのきしに到らむことしたがはずばなにくるしみの海となげかむ

ふりはへ―わざわざ、振りに掛く
室の名―松月庵
薪こり云々―僧の修業、釋迦雪山の難行によりていふ
おさかべのつかさ―刑部
およづれ―妖言、人を惑はす流言をいふ

へ　都より　こゝにいまして　山松の　梢の月を　室の名に　かけて住みにし
法の師の　ことをしおもへば　さら〳〵に　なみだぞおつる　うつし身と　あ
りし其世は　薪こり　水汲むわざの　いとまある　をり〳〵ごとに　月すめば
ともにひもとき　花さけば　手たづさはりて　露ばかり　こゝろもおかず　こ
との葉の　友とむつびて　むら鳥の　ゆきかひしつゝ　うるはしみ　有りける
ものを　たちかへり　もとつ御法の　庭草を　しばしふみわけ　さらにまた
行きても來まし　はやからば　ふたとせ三とせ　おそからば　六年いつとせ
七とせと　すぐしはせじと　契りおきて　別れにしかば　いつしかと　侍ちし
間に　都べの　人のかたらく　君がまつ　その法の師は　さきの世の　いかなる
罪か　今の世に　むくい來にけむ　なにぞもの　故としらねど　おさかべの
つかさにめして　さつまがた　沖の小島の　しまもりに　行きてをすめと　お
ほせごと　賜ひしまゝに　いにし月　なにはの浦の　うら傳ひ　舟開きして
波風に　身をまかせぬと　つばらかに　われに語りつ　しかれども　千里の外
に　海山を　へだてゝをれば　まがごとか　人のいひつる　およづれか　人の

あえむ—あやからん

うらぶれ—憂ひ佗び

たもとくたしに—涙を添へて袂を腐らしむべく

ましや　うつせみの　人のこの世は　はかなかる　ならひといへど　花よりも
あだなるものと　おもひきや君

かへし歌

ぬひ子が三年の忌に

咲くはなに人しもあえむものならば散りても春にあはましものを

過ぎにける　年のみとせは　昨日かと　ゆめごこちして　しのびつゝ　いにし
その子が　手ずさみは　かくやありしと　まねひ出でて　あやめのくさの　な
がきねを　袂にかけて　かぐはしき　花たちばなを　玉にぬき　うらぶれをれ
ば　さみだれの　ふるやの軒に　音づれて　山ほとゝぎす　あやなくも　なく
ね添へけり　たもとくたしに

反歌

わすれめや花たちばなを玉にぬき袖にほはせし人のむかしを

眞乘院雪岡禪師をかなしめる歌 禪師の江戸にありける時は金地院の松月庵に住めり

人の世は　夢ともゆめと　はかなかる　ものにしありけり　墨染の　袂ふりは

さかる―離る、死してあひ〳〵年月のたつをいふ

朝戸出―朝家を立ち出づる時

まさか―現實

なべて世に　人ぞしぬべる　むかしべに　かもの翁が　有りし世を　思ひいづれば　かしこきろかも

反歌

しら玉の光はとほく照せどもとり得し人はいやとしさかる

香ぐはしき君がこと葉のにほひこそ千世にもあせぬ花には有りけれ

棚倉のかうの殿の北の方うせ給ひての又の年の春花のもとに去年(こぞ)をしのぶといふことを人々によませ給ひける時によみて奉れる歌

年月は　ながるとすれど　立ちかへり　春こそ來ぬれ　咲く花は　散りぬと見しも　春くれば　またもにほへり　世のことは　かくこそ有りけれ　よしやさは　いにけむ人も　さらにあふ　時もやあると　すみれ咲く　御園の芝生　かき分けて　露ふみならし　朝戸出(あさとで)に　君はこふれど　八重霞(やへがすみ)　たちやへだつる　春鳥の　來なく梢を　をりかざし　陰におりゐて　ゆふ庭に　君は待てども　入日さす　かげやをぐらき　面影に　たつとはすれど　まさかには　あひも見

あにまさらめや」

沖つ鳥—鴨の縁にて賀茂の枕詞とす

あせあゆる日—汗の流れる夏の日

うまい—熟睡

かくろひ—かくれ

みことからさず—御言葉を掛け給はざる時なく

得ぬ　其玉のごと　たをり得ぬ　そのはなのごと　皆人の　得がてにしつゝむかしより　思ひまどひて　古言の　ふかきおくがを　おほゝしく　いひつぎ來しを　沖つ鳥　賀茂の翁の　此世にし　あらはれまして　人はよし　たづきをしらに　思へりし　ことには有りとも　言魂の　たすけもこそと　肝むかふ心ふりおこし　あさ衣　あせあゆる日も　やすらへる　時の間もなく　皮ぎぬに　霜さゆる夜も　おきゐつゝ　うまいはなさず　月かさね　年もへにつゝ眞心に　もとめてしより　くもり夜に　分くる山路を　松の火に　照すがごとく　辿りゆく　隈もあらはれ　谷陰に　ふりおける雪の　春來れば　消ぬるがごとく　かくろひし　名殘なければ　世に知らぬ　花はわれ見つ　あたひなき玉は得にきと　ほこらひて　有りしあひだに　おのづから　知らぬ國にも　世の人の　かたりつがひて　をちこちの　人もとひさけ　いはまくも　あやにゆゆしき　大殿に　其名きかして　とののうちに　つかへまつらせ　朝夕に　みことからさず　上つ代のこと　問はしつゝ　ねもごろに　思ほしめして　汝がごとき　人はあらじと　うつくしみ　めで給ひてゆ　かぐはしき　名をし傳へて

やさか—八尺、尺長くの意

讀みてをしぬべ—讀みて偲べ、をは強辭

少林院—品川にあり、眞淵の菩提寺

あたひなき—價のつけ樣もなき意、佛經に所謂無價寶也、萬葉集に「價なき寶といふとも一つきの濁れる酒に

いは垣を　やさかにきりて　諸手船　もろ手に載せて　荏原の海　濱の磯間ゆ
百たらず　八十綱はへて　ひこづらひ　山ふみさくみ　さゝげ來て　其岩角を
鏡なす　たひらにみがき　常世麻呂　筆とりもちて　わが大人の　ありへつる
世を　つばらかに　ことにのばへて　鳥のあとを　ふかくとゞめて　おくつき
の　御前にたてつ　百世にも　千々の年にも　かくながら　いやとこしへに
傳へゆかば　今のをづつを　遠つ世と　見む世の人も　たちむかひ　讀みてを
しぬべ　これのいしぶみ　（常世麻呂は千蔭が字なり）

反歌

君が名を千名のいほ名にひゞけとて山もとゞろに石にゑりつく

賀茂大人みまかり給ひてより三十あまり三とせになりけるとし少林院にまうでてふるきをおもふといふことを人々と共によめる

わたつみの　千ひろの底に　あたひなき　玉こそ有りとへ　高山の　五百重が
おくに　世に知らぬ　花こそ咲くとへ　波間わけ　かづくとすれど　その玉は
ひろひもかねつ　岩手ふみ　のぼるとすれど　其花は　をりもとられず　拾ひ

神さびせすと—神さび給ふとて

天皇—雄略天皇

栖輕—日本紀に「蜾蠃」に作る、國内の嬰兒を宮墻の下に養ひて少子部連（チヒサコベノムラジ）の姓を賜ひ、又三諸山の大蛇を捉へて雷（イカヅチ）の名を改め賜へる事同書に見ゆ

の　神ながら　神さびせすと　みこゝろの　あらぶるときは　朝はふる　風こそいぶけ　夕はふる　風こそさわげ　そのかげに　いぶきはらはれ　たつ雲も　いゆきはゞかり　其風の　さゆと冴れば　六月の　つちさへさけて　照る日にも　雪ぞふりける　いはまくも　ゆゝしきかもや　木曾の神高嶺

かへしうた

雲井なるみたけ神さび風たちて木曾のむら山なりぞとよむる

賀茂大人の御墓のもとに石文を立てける時に

こもりくの　泊瀬の國の　朝倉に　宮づくりして　天の下　しろしめしける　天皇の　其大御世に　栖輕ちふ　ますらたけをを　をゝしとて　たゝはしき名を　石文の　柱に載せて　なべて世に　稱へにけりと　記しつぎ　いひつぎにけり　いにしへも　しかこそありけれ　それをしも　ためしに引きて　さしむしろ　賀茂の翁が　ふる言の　學の道に　いそしかる　其ゆゑよしを　岩の上に　ゑりてもがもと　翁をし　しぬぶ人どち　あひはかり　相かたらへば　諸人は　誰もうづなひ　いで湯わく　伊豆の高嶺に　なみたてる　ゆつ岩むらの

ゆつ岩村―八百つ岩村、磊々として疊みなせる巖

見さけて―遙かに眺めて

もゝたらず―百足らず五十の意にて「い」に掛る枕詞

こち〴〵の―彼方此方の

立ちぬる　草枕　たびのながぢの　山川の　いづこはあれど　名ぐはしき　よしのの山の　雲きりを　八重かき分けて　大瀧の　川瀬を見れば　上つ瀬は　ゆつ岩村（いはむら）に　落ちたぎち　水沫（みなわ）くだけて　大雪の　散りかふがごと　下つ瀬は　八十（やそ）のくまわに　よる波の　うづなみまきて　天雲の　たゞよふなせり　神がらか　しかぞあやしき　國がらか　かくぞさやけき　かくしづゝ　やほ萬代に　ありがよひ　つねに見るとも　あきたらめやも

かへし歌

落ちたぎつゆつ岩むらに波ふりて山もとゞろにひゞきあひにけり

木曾のみたけを見さけてよめる

野つもちの　神の御世より　玉ぐしに　とらし來にける　みすゞかる　信濃の國に　たてる檜（ひ）の　眞木（まき）のつまでを　もゝたらず　筏（いかだ）につくり　波のむだ　うかべながせる　木曾川の　かはのをちこち　高山は　さはにあれども　むらやまの　つかさの山と　こち〴〵の　山のみなかゆ　雲井に　たかく尊き　おほきその　木曾の御嶽（みたけ）は　かしこくも　たゝせる山ぞ　あやしくも　いませる神

たゝなはる—幾重も重りたる
いでましのとつ宮—行宮
たちばな云々—楠氏一族澌盡灰滅すと雖も其名赫々として千古に朽ちざるをいふ
かいつらね—連立ちて

たゝなはる　青垣山の　岩がきを　みかきとなして　岩ばしる　瀧つ河内は
外(と)の重(へ)なる　みかはの水と　みし給ひ　なぞらへまして　いでましの　とつ宮
ならで　大宮を　こゝとさだめて　雲の上に　ふとしきましぬ　しかれども
いく世もあらで　山河の　神もつかへず　あまざかる　鄙(ひな)となりきと　かたり
つぎ　いひつぎにけり　大宮の　その跡どころ　見ればかなしも

かへし歌

ふりにける跡とひ來れば宮人のたもとわすれず花さきにけり
いにしへを汝(なれ)もしのぶかよぶこ鳥うらなきをれり大宮所(おほみやどころ)
しら雲の八重たつ山に大宮をいく世までとて造り初めけむ
たちばなは根さへかれてもとこしへにかぐはしき名ぞ今ものこれる
天地のかためし國といはめどもうつろひ來ぬる世にこそ有りけれ

賀茂のうしと共に我はらからなどかいつらねて大和の國へ
いきける時によしのの大瀧を見てよめる

かみろぎの　遠き御世より　かたりつぎ　いひつぐことを　ゆかしみと　思ひ

橘―楠正成をいふ、楠氏は橘諸兄の裔也
まけ―任せ
あともひつれて―引率して
ちはやぶる―逸はやぶる、荒れさわぐ
たむだきて―拱手して

りましけり　うべしこそ　天のます人　いやさはに　人はあれども　さかしとか　聞しめしけめ　うましとか　おぼしけめやも　橘の　ますらたけをに　御軍を　まけたまへれば　丈夫も　みことかしこみ　むらぎもの　心ふりおこし　大王に　つかへまつると　ぬば玉の　夜はすがらに　つるぎたち　腰にとりはき　あかねさす　ひるはしみらに　梓弓　手にとり持ちて　軍人　あともひつれて　まつろはぬ　國もなびかへ　ちはやぶる　人もなごしぬ　とこしへに　かくしもあらば　木綿花の　さかえましけむ　いにしへの　まさかりの世と　今の世も　さちはひまさむと　大船の　おもひたのみて　よの人は　有りけるものを　うき雲の　また立ちまよひ　ありそなみ　たちのさわぎに　かりごもの　みだれあひつゝ　思ふそら　やすからなくに　なげくそら　やすからなくに　いはむすべ　せむすべしらに　ますらをの　たけき心も　朝霜の　消なばけぬべく　ゆふ露の　ちりてうせぬれ　神ながら　神のみことの　みこゝろの　ゆたにまさでや　たむだきて　いましかねてや　やほによし　たひらの宮を　朝鳥の　出で立ちまして　み雪ふる　芳野の嶽の　しら雲を　八重かき分けて

いましはし—今頃、二つのしの字は共に強辭

たつか杖—手束杖、手に握り持つ杖の意

しが—汝の

天皇—後醍醐天皇

春の日の　のどなる時に　ふせいほの　かなどをひらき　かすゆ酒　のみつゝをれば　はしりでに　くつの音きこゆ　いましはし　たれか來ぬると　たちむかひ　姿を見れば　霜やたび　おくと見るまで　眞しらがを　うなねに生しみるのごと　わゝけしひげを　むなさかに　長くしだれて　ぬの衣　ま袖もゆたに　たつか杖　こしにたがねつ　いづくより　來ますとゝへば　年ひさにしが名をきゝて　いばばしの　あふみの國ゆ　はろ〴〵と　われは訪ひ來と　ねもころに　君ぞのらせる　しかれども　おその我はも　なぞへなき　世のしれ人　ひがみたる　國のすて人　わが目らは　四つしもあらず　わが口は　ふたつもなきを　いかさまの　人ときかして　めづらしみ　われを訪はせる　いともいとも　あやしきかもよ　ましらがのをぢ

よしのの宮の跡を見てよめる

橿原の　日知の御世ゆ　百たらず　世つぎましける　天皇の　神のみことは　いはまくも　かしこけれども　天つ日の　くもりあらせず　天の下　照したまふと　食國を　さだめたまふと　神おもひ　おもほしめして　神はかり　はか

まほら―山に圍まれて籠りたる所をいふ

としのはに―年毎に

月にけに―毎月毎月

しゝじもの―鹿といふものの如くの意、いはひのはひに懸る枕詞

うなねつきぬき―頓首して

ゆふづつ―宵の明星、その夕は西に見え朝は東に見ゆるより、「かゆきかくゆき」の枕詞とす

神さぶる　ふたらの山は　朝日子の　たゞさす高嶺　しきませる　國のまほらぞ　常宮を　こゝとさだめて　天の下　まもらひませと　皇神の　よさしのままに　あらみ魂　しづまりいまし　萬代に　うしはきませば　もゝ敷の　大宮人は　天皇の　またす使と　年のはに　ちさとを越えて　つばさなす　ありがよひつゝ　靭かくる　八十件のをは　岩がねを　ふみ平らげて　とこしへに　いがきが本に　しゝじもの　いはひさもらひ　月にけに　八洲の國ゆ　まゐり來る　人し絶えねば　山ごもる　檜原が奥も　馬車　いゆきかへらひ　雲迷ふ　ちひろの谷も　家むらは　みちて有りけり　しかれこそ　神のみ山は　天皇の　御代のしづめと　世の人の　いひつぎきぬれ　倭文はたの　ぬさとりむけて　ふとまへに　うなねつきぬき　ゆふづつの　かゆきかくゆき　とりよろふ　山の八百くま　隈もおちず　見て歸り來よ　かしこかれども

かへし歌

朝日子のとよさかのぼる二荒山たゞさす影をあふげとぞ思ふ

海量法師のはじめてとひ來けるによみておくれる

ひたみちに—一途に
かつやすらへり—暫く滯在せり
ぬさしろ—幣帛の料

にひ宮を　造らむために　なほあかぬ　わざぞと思ひて　ひたみちに　心ふりおこし　山も越え　海も渡りて　はる〴〵と　千里の遠の　江戸の城に　さらにまゐ來て　やちまたに　か行きかく行き　日をかさね　月を重ねて　こゝにしも　かつやすらへり　むかしべや　東の鄙と　世の人の　いひしあら野も　今はまた　いともかしこき　おほとのの　ふとしきませば　やしまぐに　もゝ國人も　まゐり來て　つかへまつりて　道々に　心さかしく　みやびたる　人こそさはに　つどひけれ　それが中にも　言の葉の　道ふむ人は　いやしきも　高きもなべて　多かれば　思ひ歎きて　御柱は　我こそたてめ　檜皮をば　我ふかましと　とり〴〵に　あひあらそへば　おもふこと　あかぬことなく　ぬさしろも　山とつもりぬ　いざさらば　とく立歸り　新宮を　雲井に高く　造れ法の師

かへし歌

時を得てかゝぐる法のともし火にふたゝび照せあけの玉がき

雨岡のふたら山に詣づるを送る長歌みじか歌

かたそぎの云々ー千木のくひちがひたる隙間より

ちかごとー誓ひのこと

いそしさーつとめはげむこと

きこえし　歌人の　こと葉の露を　とゞめ置く　跡をし見れば　はやき世の
ことにぞあるらし　其寺の　いまのあるじは　墨染(すみぞめ)の　身にしもあれど　しき
しまの　大和手ぶりを　ま心に　ふかくしたひて　この神に　つかふることを
おのが身の　さきはひありと　よろこばひ　思ひわたれば　春秋に　花折り手
向け　朝夕に　いがきが本を　かきはらひ　清むとすれど　年深(としふか)み　ふりし宮
ゐの　みやばしら　朽ち行くまゝに　おのづから　こけのみむして　かたそぎ
の　ゆきあひのまより　をり〳〵に　漏り來る雨は　さゝふべき　よしも知ら
れず　かくながら　ありへむことは　かしこしと　神の御爲に　やすからず
思ひまどひて　里人に　あひかたらへど　里人も　せむすべ知らず　とほ里に
こととひすれど　誰しかも　いかにかせまし　よしやさは　我身をちゞに　く
だきてと　思ひおこして　廣前に　ねぎごとまうし　ほとけにも　ちかごとた
てゝ　都べに　ひとり出で來て　かくこそと　人に告ぐれば　聞く人の　いひ
つぎ行きて　まことある　あかき心の　いそしさを　誰もめでつゝ　ぬさ奉(まつ)る
人こそおほく　ありけらし　しかはあれども　かくのみに　やみなましかば

壽星—爾雅釋天に「壽星角・亢也」といふ、列星の數は角亢の二星に起るが故に壽と稱する也、こゝは其星の化身と稱する七福人の一、壽老人につきていふ也

こひのみて—祈禱して

はりみ—播磨

神の宮ゐ—明石大倉谷なる人丸社、其別當を月照寺と稱す

おほきいさをぞ　あやにたふとき

かへし歌

天つそらさやけき月をよろづ代にかけて仰がぬ人あらめやも

壽星のかたかける繪に

あめなるや　南の星の　くしみたま　いつの世よりか　此の世にし　あもりいまして　いひ知らぬ　神のすがたを　うつそみの　人に見ゆらむ　かしこしと　まさめに見れば　たなばたの　いほはたたてゝ　おるきぬを　身にまつはして　玉の緒の　ながきかしらに　眞しらがの　霜かきたりて　千世ふべき　神のをしへを　世の人に　傳へむためと　天つふみ　御手にとらせり　其ふみを　見むよしもがも　神ごとを　聞くよしもがも　こひのみて　たちゐをろがみ　あふげもろ人

舜叟法師がはりみぢへ歸るを送る長歌

言の葉の　道のひじりと　あふぎ來る　神の宮ゐを　はりみぢや　いちひが本の　山寺に　いはひ初めけむ　そのかみは　いつとしらねど　中つ世に　其名

て漢詩の隆盛を致したるを機にたとへていへる也

まねき―機蹢、和漢三才圖會に、横二小竹一挂二之綜竹一以二左右拇指一更蹢レ之故名レ之云々、足にてあやつりてあぜを引くやうにせる木也

がに―が如くに

へ―經、綜

よろこび云々―延喜

かるも―刈藻、かきつどへの縁

織りも出で　つくりも出でて　めでたまひ　すさび給へば　うち日さす　宮のみや人　わが君の　なしのまゝにと　高機に　よぢものぼらひ　さなはたのまねきふみたてゝ　からはたに　みもまがふがに　とりまねび　きそひにしかば　大野らや　風にもろむく　はた薄　靡くが如く　月草の　初花ずりの　色に出でて　きぬにつくなす　なべて世に　うつろひゆきて　皇神の　國つ手ぶりは　こもりぬの　下にかくれて　かた絲の　たえばたゆがに　とひ見べきものとも知らで　あまた年　へにぞへにたる　しかれども　岩がき淵の　あつ氷　春を待ちえて　音たつる　ためしあればや　よろこびを　のぶときこえし大御世に　萬のことら　いにしへの　跡しのばして　おほほしき　ことあらせじと　みこゝろに　おもほすなべに　神代より　有りくるわざを　よろづ代に傳へもゆけと　紀の朝臣に　みことのらして　あまの子が　磯まのかるも　かきつどへ　えらせ給へば　水底に　しづめる玉も　波の上に　光かゞよひ　浮雲を　いぶきはらひて　照る月の　影見るごとく　ことだまの　さきはふ手ぶり　さら〳〵に　世にあらはれつ　ことに出でて　名づけも知らぬ　此朝臣が

ざりしに、却て醜く畫かれ、遂に匈奴に嫁する事となれり、西京雜記に見ゆ

草のみどり—昭君匈奴に在りて遂に自殺す、胡地の草色皆黄、唯昭君墓上の草のみ靑しといふ

聖—赤人人麿等をいふ

あれつぎ—繼ぎて生れ

天皇の云々—桓武天皇の漢詩を奬勵し給ひ、一時天下靡然とし

國人を　つまとむつびて　たをやめの　まとひも馴れぬ　かは衣　袖さしかへて　もろねせむとは

反歌

春の日の光もうときふる塚に草のみどりやいかに殘せる

こだくみのつかさ紀朝臣をたゝへまつる長歌

八雲たつ　いづもの國に　ありたゝし　妻とはしけむ　皇神(すめがみ)の　神の御世より　言魂(ことだま)の　さきはふ國の　國ぶりを　世々に傳へて　あらたへの　藤原がうへに　をすくにを　しらしける世は　山ざくら　さきのをとりに　いろも香も　にほふがごとく　眞盛(まさかり)の　時にぞ有りける　かゝれこそ　聖(ひじり)とすらも　たゝへ來る　人も有りけれ　ならの葉の　名におふ宮の　中つ世と　きこゆるまでは　名ぐはしく　いひつぐ人も　おひすがひ　あれつぎにけり　かくしもぞ　めでたかりしを　いかさまに　おもほしけめか　玉しきの　たひらの宮の　新世(あらたよ)を　みよつがしける　天皇(すめろぎ)の　神のみことの　神ながら　神さびせすと　からにしき　あやとるわざを　うむかしみ　おもほしめして　かしこきや　大御手づから

しづたまき—賤環、賤しの縁

をす—簾

うつし繪—漢の元帝の竟寧元年、呼韓邪單于來朝し、漢に壻たらんことを求む、帝畫工毛延壽をして宮女の容貌を畫かしめ、其中の醜なるを遣らんとす、宮女皆毛延壽に賂をおくり美しく畫かしむ、ひとり王昭君は天成の美人ゆゑ賂をおくら

詠二王昭君一歌

雪まじり　あられみだれて　夜もすがら　北吹く風の　あらましき　夜床の上に　つく〴〵と　枕そばだて　きしかたを　思ひいづれば　人の世は　ゆめなりけりな　しづたまき　いやしき我も　宮姫と　かずまへられて　をすのうちに　いつかれし世は　あや錦　袖にかさねて　白玉を　かづらにしつゝ　ますかゞみ　見るおもかげの　かぐはしき　花のゑまひを　我ながら　われとたのみて　大王(おほぎみ)の　めぐみの露し　あまねくは　漏(もれ)じとこそは　思ひつゝ　有りけるものを　さがなきや　筆にまかする　うつし繪の　あらぬすさみの　いつはりを　正しもあへぬ　うきふしは　せむすべをなみ　いひしらぬ　國の界に　はる〴〵と　出でたつ道に　おきそはる　袂の露の　きえかへり　引きとゞめたる　駒の上に　しばしかきなす　四(よつ)の緒の　絶えぬ恨を　はるけなむ　世こそ知られね　をしからぬ　命と思へど　塵の身の　ちりもうせなで　春たてど　花もにほはず　秋來ても　紅葉も見えぬ　あら山の　岩かきこもる　ふせ庵に　われにもあらで　いたづらに　年はかさねつ　おもひきや　こともかよはぬ

よさし―委任の意
新代の―帝王の代り給へるを告ぐる國使
わたと―海外
そぎへ―遙かの彼方
ふたらの山―二荒山即ち日光、みや柱云々は家康の事をいふ也
こきし―韓王、琉球王をいふ
しゞぬき―繁く楫し
まゐ―參り

ともを　とりえらび　よさし給へば　はしきやし　若子(わくご)がともは　新代(あらたよ)の　み使たゝす　大船に　いざなはれつゝ　かしこきや　父をもおきて　たふときや　母が手はなれ　わたとなる　國のそぎへに　いやとほく　別れも行くか　なほざりの　旅にしあらめや　おほろかに　年なかさねそ　心せよゆめ

かへしうた

ことさへぐ國に七年としふともことはつたへよ父母のため

觀二琉球來聘使一作歌

下野や　ふたらの山に　みや柱　ふとしきいます　大神の　とほの御門に　大御世を　しらしゝ時ゆ　天皇(すめろぎ)の　まけのまに〳〵　天の下　守(まも)らひますと　いやひろに　國をなごすと　隼人(はやひと)の　さつまの國の　みやつこに　みことおほせて　ことさへぐ　南のしまの　こきしらを　ことむけまして　をす國の　うちつみやけと　ことよさし　さだめ給ひぬ　しかれこそ　いやつぎ〳〵に　新代(あらたよ)の　はじめの時と　國ほがひ　ことほがひすと　海原は　まかぢしゞぬき　あら山は　岩根ふみさくみ　はる〳〵に　今もまゐ來る　遠つ島人

うしはきいます—統治し給ふ
四の船—遣唐使は正副使屬官等にて都合四艘に分乘するが例なりしなり
もなく—恙なく

まつぶさに—まは接頭語、つぶさに
今のをつゝに—今眼前に

とも　あきつ神　我大君の　大みこと　いたゞきもちて　こと國に　いゆきむかはゞ　あらしほの　汐の八百重に　ありたゝし　うしはきいます　秋津姫神のみことの　ともへをば　まもらひたまひ　四の船　もなくぞあらむ　倭文機の　ぬさとりしでて　わた中に　手向よくせよ　玉がきの　うちつみ國のますらをのとも

反歌

大王のみことかしこみあらしほのうづまく海に旅ねすらしも
丈夫は名をし立つべしこと國のふびとがとも記しつぐべく

擬㆑送㆓留學生㆒歌竝短歌

日の本の　大和しまねは　天地の　かためし國と　むかしより　いひつぎ來れど　吾大王　神のみことの　たり御世を　ましたらはして　いや廣に　ことしらさむと　こと國の　大きひじりの　言たてし　道のことごと　まつぶさに　問見したまはむと　神ながら　おもほしめして　それをしも　今のをつゝに　問ひさけて　學ばひ來よと　ものゝふの　八十伴のをの　生れつげる　わく子が

山河の―早きといふ爲めの序詞
はやき世―上代
むかしみ―懷しく思ふが故に
けふ―今日、希婦、希婦は細布の產地
はふる―風浪などの勢強きさまを鳥の羽振にたとへていふ語

しもかくや　山河の　はやき世よりも　むねあはぬ　ものなりけりと　細布の　せばきためしを　言の葉に　いひつぎにけり　これぞこの　いやしき賤が　身にまとひ　みゆきふる日の　さむけさを　忘れむためと　おり出づる　布にしあれば　よき人は　たれもすさめず　しかれども　時にひかれて　物みなは　かはるならひを　すなほなる　賤がわざとて　移り行く　世にもうつらず　いにしへの　手ぶりを今に　傳へ來る　ことぞめでたき　そこをしも　あやにむかしみ　いはまくも　ゆゝしけれども　ふりにける　ことしのばする　おほ君の　みてにとらして　はるかなる　ひなの手わざに　とほき世を　見そなはせとて　細布を　さゝげもち來て　かしこきや　みはしのもとに　けふたてまつる

みちのくのけふの細布せばけれどふるき手ぶりは今ものこれり

擬レ送ニ遣唐使ニ歌竝短歌、

天雲の　むかぶす空は　朝はふる　風こそいぶけ　汐けのみ　かをれる海は　夕はふる　浪こそさわげ　よしゑやし　浪はたつとも　よしゑやし　風は吹く

の木の實とて常盤のものと歌によまれたり
たゆたひ—ためらひ
よしゑやし—よしや
もだし—默止
今のうつゝに—今眼前に

りを　眞心に　ふかくえしかば　しら玉は　われこそもたれ　光しろ　人しもがもと　ほこらひて　年はへにけり　しかれども　ちひろの淵の　そこひをばくみてだに見ず　淺き瀬に　立ちてたゆたひ　高山は　よぢも登(のぼ)らで　麓べにゆきかよづらふ　よのつねの　人し知らねば　よしゑやし　見ぬ世の後に　あらはれむ　時こそあらめと　もだしゐて　ありふるほどに　いかなりし　神の心に　みちびかし　たまひけらしも　かけまくも　いともゆゝしき　久方のとほつ雲井の　そなたより　きこえあげよと　ことさらに　おほせたまへば　年久に　袖につゝめる　白玉を　ひろひあつめて　御使に　さゝげまつりぬ　いにしへの　ためしは知らず　後の世に　たぐひやはある　かくばかり　まれなるふしに　あふことを　今のうつゝに　見るがうれしさ

かへし歌

みなぞこにかゝよふ玉のひかりこそ波かき分けてあらはれにけれ

おなじ宮の御まへにけふのほそ布にそへて奉れる歌

あづまぢの　道のおくなる　しづのめが　なれて手わざに　おるはたは　むか

こゝ―江戸
おもておこし―面目を施す事
かれ―故に
常世もの―橘は ときじくのかぐ

が名高かるをきこしめし給ひて、ことしやよひ、大舍人岡本保考が一條のおとゞの御ともにまゐれるにおほせごと賜はりて、千蔭のよめる歌のなかに、山家閑居などの題なるをたてまつらせ給へり。そも〳〵此百年あまり、江戸の大城（おほき）にして萬の政まうし給ふまゝに、今は天の下のにぎはゝしさを、たゞこゝにしもつどへたれば、おのづからみち〳〵のかしこき人々も、おほく出で來て、言の葉に名高かるともがらも、これかれきこゆめれど、かかるかしこきおほせごとをかうぶりて、世におもておこしなることは、更（さら）にためしなきわざになむ有りける。さるはその身のひとりたぐひなきほまれあるのみかは、かくて縣居翁（あがたゐのおきな）がをしへのあらはれぬべき時いたれりとやいはむ。かれよろこばしさにたへずして、すなはちうたへらく

常世（とこよ）もの　名におふをちは　言の葉の　ちよのふる道　ふみわけて　高き手ぶ

こちごちの—彼方此方の
ときれ—かき入れ
やつを—八峰、多くの峰
見さけ—見はらし
まぐはし—麗し
いまき—勢捲くの略
當今—今上天皇

之彩ニ時以レ歌判レ之といふ歌の心を追和しける歌

百千鳥　さへづる春は　こちごちの　花のさかりと　にほへるを　折りてはかざし　散り來るを　袖にこきれて　あし引の　山ゆきくらし　おもふどち　心をやりつ　長月の　しぐれの秋は　もみぢ葉の　下照るときと　やつをこえとほくも見さけ　木のもとに　おりゐ遊ばひ　家のごと　ひもときさけつ　春山は　しかもまぐはし　あき山は　かくぞたぬしき　いづれをか　わきてしぬばむ　春花の　散るはをしけど　時來なば　山郭公　いつしかも　つぎてなかむと　なつ山に　心ぞうつる　もみぢ葉の　時すぎゆかば　嵐のみ　いまきわたらむ　枯山を　何にすさめむ　そこをしも　あはれとぞ思ふ　秋やまを　うべもむかしゆ　しぬびけらしも

妙法院宮より橘千蔭が歌めしたまへるをよろこびてよめる歌竝序

妙法院宮は當今の御いろせのみこにおはしますなるが、古へのみやびごと、深くこのませ給ふあまりに、橘千蔭

しれ—癡愚の意

やはなき—無からんや

山の端に—「日暮道遠吾生已蹉跎」の意

むなしかるべき—「をの子やも空しかるべき萬世に語りつぐべき名はたてずして」山上憶良

競憐云々—萬葉集一なる額田女王の歌の題

とし月は　いる矢(や)のごとく　おいは身に　せめ來るものを　しれにたる　おぞの翁は　わかゝりし　昔よりして　思ふこと　なきにしもあらず　なす事のある身ながらに　あすありと　けふはたゆたひ　又も來む　年やはなきと　ひとゝせを　思ひのどめて　いそしかる　心はもたず　ともすれば　人にはおくれ　かくすれば　時をもすぐし　徒(いたづら)に　としはかさねつ　今さらに　悔いに悔(く)ゆれど　老が身の　かひこそあらね　さらばまた　心つとめて　今よりと　おもひおこせど　山の端(は)に　落つる日影の　かたぶける　よをいかにせむ　あはれこの　おぞの翁が　ゆく年を　惜むにつけて　かくばかり　なげくと人の　きかませば　心とゞめて　おほろかに　思はずもがも　ますらをや　むなしかるべきと　いにしへの　人もぞいへる　心あらむ　世の人みなよ　わすれても　ゆめなならひそ　おぞの翁に

かへし歌

世の人にいかゞこたへむ何をして老いにける身と問はれましかば

橘千蔭の家にて萬葉集竟宴に　競レ憐春山萬花之艶秋山千葉

ことのばへ―言を延べ

いちしば―いちぐさと芝と
あつごえし―厚くふくらみたる
かすゆ酒―どぶろくの類

やりて　ことのばへ　あそぶこの日は　くれずもあらなむ

反歌

けふとはむ人のためとや御園生に木々のもみぢの秋をのこせる

山家雪

雪ふれば　岨のかけ道　ゆきかよふ　路こそたゆれ　をりかこふ　まがきの竹の　いつしかも　山となりては　隣さへ　ことも通はず　よしや世は　隔てはつとも　とはるべき　友はなくとも　しづけさに　心やらむと　さゝの戸をひらきて見れば　かきはかぬ　はひりの庭も　おもほえず　玉しきわたし　枯れたてる　いちしば原も　春またで　花咲きにけり　これをしも　世に埋もるる　山住の　身のかひよとて　ほだの火に　獨よりそひ　あつごえし　綿かづききて　かすゆ酒　くむ一杯ぞ　おもふ友なる

反歌

かくぞとは都の人につげやらむかた山里に降れるしら雪

むそぢになりける年のくれに

千世もたる花のゐまひにあえよとや大宮人に御酒たまふらむ

山寺の秋のくれ

かた山や よをふる寺の 苔むしろ おりゐて見れば とゞめえぬ 秋はかぎりと もみぢ葉も 風にきほひて おく霜に あらそひかねて しら菊も 色ぞうつろふ 空蟬の 世はかくこそと 瀧川の はやく見しよを くりかへし しのび出でつゝ かへるべき 家路もとはず ゆふしぐれ 袂ぬらせば 塵の身の 夢さませとや をかの上の 松にこたふる 入相のかね

かへし歌

かねの音に秋をとぢめて山寺の岩がき紅葉散りはてにけり

神無月のはじめ藤堂の君の染井の莊の紅葉を見て

なが月の しぐれの秋を こゝにのみ なごりとゞむる 御園生を けふとひ來つゝ 山みれば 呉のてびとが おる機の にしきか張れる いけ波の 來よるなぎさは たをやめの 手染にくゝる くれなゐの ゆはたかさらす おり立ちて 見るめもあやに たもとほり あく世も知らず おもふどち 心を

空蟬の—世の枕詞、無常の意
瀧川の—はやくの縁語、はやくは昔の意

呉のてびと—呉の國の機織、てびとは手人の意にて職工をいふ
たもとほり—たもとほりは接頭語、もとほり、徘徊し

かへし歌

此そのに匂ふ眞(ま)萩(はぎ)のからにしきたつことやすき月の夜(よ)半かは

九月九日詠二菊花一歌一首竝短歌

ちはやぶる　神の御代にし　きこえたる　種にはあらで　やほによし　たひらの宮の　はじめより　かぐはしき名を　傳へ來る　かはらよもぎは　から國の　まつるみつぎと　そのかみに　ねこじや來つる　君が世の　さかえむさがと　おのづから　なりや出でたる　うつろはむ　かぎりも知らず　年ごとに　秋をふかめて　咲きと咲く　花にしあれば　なが月の　けふをたり日と　久方の　雲井の庭に　大御酒(おほみき)を　みちたらはして　此はなに　あえてもがもと　神ながら　おもほしめせば　さもらへる　もゝの司(つかさ)は　ことほがひ　酒ほがひして　この花の　咲きのをゝりに　から衣　たもとにほはし　折りかざし　老もわかきも　もろともに　こゝろをやりつ　たのしかる　わが君が世の　よろづ世の　ためしとなれる　はなぞこの花

反歌

たつ―裁つ、立つ
やほによし―八百丹吉、枕詞
かはらよもぎ―菊の異名
まつる―奉る
あえてもがも―あやかりたきもの哉
咲きのをゝり―花咲きて枝もたわむ程なるをいふ

世々のかたみ―李白の「今月曾經照古人」の句の類

おいとなる―「大方は月をもめでじこれぞこのつもれば人の老となるもの」古今集

うらもなく―心のへだてもなく

けり　うき事も　何かそはらむ　人の世の　たのしき道は　かくこそと　思ひ知りにき　時へなば　思ひや出でむ　人きかば　しのびやせまし　照る月は　世々のかたみと　むかしより　いひつぎぬれば　うつせみの　いまの世のみか　今もまた　昔とならば　くちやらぬ　けふのまとゐの　ことの葉を　後みむ世にも　しのび出づる　人こそあらめ　いやとほき　わがよの後の　みやびをのとも

かへしうた

おもふどち心は月にあくがれつおいとなるてふことも忘れて

八月もちの夜芳宜園にて月を見て

秋の夜の　いつはあれども　今宵こそ　たぐひなき夜と　昔より　人もいひつげ　照る月の　いづこはあれど　秋萩の　花ににほへる　しら露に　うつろふ影は　大かたの　世に似ぬ宿と　もろともに　手たづさはりて　月見にと　人もとひ來ぬ　花見にと　我もおりゐて　から衣　ひもときさけて　うらもなくあそぶ此夜は　明けずもあらなむ

ひまゆく駒—莊子知北遊篇に「人生天地間、若白駒過郤忽然」

玉だれの—をに掛る枕詞

ふよりと　聲たてそめつ　のどかなる　御世の春とて　老いぬるも　わかきも
共に　かくしつゝ　心ゆく野を　とふがうれしさ

かへし歌

花鳥にまたも野守が宿とはむけふの子の日をはじめにはして

八月十五夜宴二吉田氏家一歌

年月は　いる矢のごとく　人の世は　ひまゆく駒ぞ　うきことは　つねに添は
れど　ゑみさかえ　わらふ日なしと　いにしへの　人もいひけり　いざさらば
時すぐさめや　おもふどち　心やらむと　たぐひなき　秋のも中の　月影に
あくがれ出でて　此宿に　とぶらひ來つゝ　垣ごしに　こととひすれば　いつ
しかと　待ちよろこびて　うれしくも　來ましにけりと　立ちはしり　むかへ
出できて　かりそめの　竹のくみ戸を　おしひらき　を花かき分け　盛なる　眞
萩がもとの　苔むしろ　露うち拂ひ　から衣　ひも解きかはし　うらもなく
まとゐをしつゝ　玉だれの　をがめをすゑて　諸ともに　ゑひみわらひみ　こ
とのばへ　を琴をあそび　澄む月に　夜たゞむかひて　世の事も　わすらえに

みを―水脈
けぶり―霞みて見え
いざとし―いざ行かんと、しは強勢の助辭

正月のむゆかばかりよべの雪の名殘見むとて隅田川に舟をうかべて

みをのぼる　すみだ河原の　河舟も　ゆくかたとほき　上つ瀨の　堤を見れば　しら雪に　猶うづもれて　下草の　みどりもわかず　たちならぶ　木々の梢は　春の日を　はやく待ち得て　うら〳〵と　けぶりそめたり　下つ瀨を　かへりみすれば　氷ゐし　あしべの洲鳥　波の上に　友よびかはし　をちかたや　霞のまより　夕虹の　たつかとばかり　久かたの　雲井にたかく　かゝる長橋

かへしうた

消えせずば明日もとひ來むすみだ河かは遠白くふれる沫雪

子日遊

はつ春の　初子の野べに　みな人の　いざとしいへば　もろともに　われもゆき間の　小松原　二葉に千世を　引そへて　まとゐをしつゝ　さかづきに　くむや霞の　そなたなる　をかべの梅も　あたらしき　年のさかえを　見せがほに　花のひもとき　をちかたの　一むら竹に　うぐひすも　百よろこびを　け

はひり—入口

ゆくら／＼—ゆつくりと

琴後集　巻九

長歌

春たちけるあした硯を洗ひて筆を試むとて

おいが身は　世にしもうとし　わびずみは　人もとひ來ず　しかれども　よの人なみに　あたらしき　年をかさぬと　ふせ庵の　塵かき拂ひ　きならせるきぬぬぎかへて　朝日子の　かげまちとりて　春の來る　かたにむかへば　一木たつ　はひりの梅も　いつしかと　ひもときはじめ　むら竹の　をりかけ垣に　うぐひすも　はつ音もらして　おのづから　心のどけし　よしやさは　とはれぬもよし　老(おい)ぬとて　何なげかまし　うれしくも　ゆくら／＼に　しづかなる　世にながらへて　むぐらにも　さはらぬ春を　またも迎(むか)へつ

かへし歌

うれしくも春はむかへつけふよりぞはな鶯をわがやどのとも

つらし—つれなし、薄情也
わりなき—理なき、わけのわからぬ

ふみ—蹈み、書

鳥の跡—文字
けたれ—消され、壓倒されれ
心をたね—古今集序「大和歌は人の心を種としてよろづの言葉とぞなれりける」

戀

絶えせじのことの葉のみをたのみにてあふことかたき我や何なり
これをだに君がかたみとしのぶかなおきわかれにし床のうつり香
うき名のみなどか朽ちせぬ日をふれば袖もまくらもたへぬ涙に
なみだのみ知らでや袖をぬらすらむつらしと人を思ひ絶えても
我爲にわが身をさらにをしまぬや戀はわりなき物にぞ有りける

雜

月花もおもひわすれつ遠き世の跡をふみみる窓のすさみに
いやしかる身とてか人におくるべき思ひあがらむ心ばかりは
なほざりにかきなすさめそ鳥の跡は人の心も見ゆといふなり
なか〳〵に色どる筆ぞけたれけるたゞ墨がきの心たかさに
おのがじし心をたねとなすわざをいにしへ今と何へだつべき

宮木—宮殿建築用の材木

文のはやしにすむ蟲—蠹

あり—在り、蟻

汐さゐ—潮のさし來る時ゆきあひて高まりさわぐこと

杣山に神さびたてるいはひ杉いつの宮木に引きはもらせし

村雨のしづくももらぬほゝかしはいざ下陰に笠やどりせむ

蟲

かぎりなき文のはやしにすむ蟲もあはれとや見む身のたぐひとて

葉がくれをおのがすみかと所えて絶ゆればかゝるさゝがにの絲

なく蟲のたぐひならねば廣き野にありとも人に知られでぞ住む

われと身をこがすならひはあるものを何夏むしのうへとのみ見む

さゆる夜は壁の底なるきりぎりすあるかなきかに聲よわり行く

鳥

おくるゝは先だつ聲をしるべにて梢にかへるむらがらすかな

浪の音もなるればなれて汐さゐに洲さきの鷺の立ちもさわがぬ

跡絶えてとはれぬ宿は山鳩のともよぶ聲もうらやまれつゝ

風あるゝ磯まの波や高からしあしべのたづの浦うつりする

人すまで年をふるやはあれにけりあやしき鳥の聲のみはして

いこま山峰のこがらし音たてゝ霰ふるなり秋篠の里

鳥の音も松のあらしも埋れて雪にしづまるみねの庵かな

もろともによせてはかへる村千鳥浦わの浪やおもふどちなる

ことなくてことばの苑に年くれぬまた來む春もかゝらましかば

草

名にしおへば哀とぞおもふみゝな草よのうきことも聞かずや有るらむ

春はもえ秋ははな咲くわすれ草をりわすれぬぞ名に似ざりける

のがれ來て我すむ宿の影にこそ世にはしのぶの草も生ひけれ

花にさく名をしもたてぬ翁ぐさいつかは人にすさめられたる

宮人のかつらにすなる日陰ぐさ遠つ神代もかけてしのばむ

木

かたやきて誰うらとはむ神の世にはゝかてふ木の生も出でずば

言のはにかけてぞ千世に聞ゆなるひとり名高きしがのうら松

下つえは波にくちぬる濱びさきかくて久しき世をやへにけむ

秋篠の里―大和に在り、擣衣、霧などの名所として知らる

みゝな草―野原に叢生する草の名

わすれ草―萱草の異名

翁ぐさ―松の異名

ははか―樺の異名

濱びさき―海邊に生ずる楸

さくら—咲く、櫻
ちどめ—止めよ
かはほり—扇、班婕妤秋扇の故事による
ほこらし—穂、誇らし

夏

心ありて夏山かげにさくら花あかでわかれし春を見よとか
むらさめのゆふべはあれどほとゝぎす有明の月になのる一聲
木のもとはかきなはらひそ紫をむらごになしてあふち散(ち)るころ
咲きまじる野べは秋にもおとらめやさゆりなでしこあぢさゐの花
藻かり人その舟ちどめ夏河にわれもうかびて夕すゞみせむ

秋

かくばかり殘るあつさにかはほりを秋とて誰かうとみしもせむ
野べ見にと思ふ友にしつけやらむ萩のあそびのをりは來(き)にけり
月見つゝ今宵はこゝにうきねせむあきのかつらの河瀬こぐ舟
青きをばおきてなげかむ陰もなしそむる千入(ちしほ)の岡のもみぢ葉
たのみある秋をしめつと里人のかりつむ稻(いね)のほこらしきかな

冬

秋の野の花ずりごろもぬぎかへて氷を袖にけふやかさねむ

ひつぎ—日嗣、皇位繼承

霜—老いて頭の白くなりしをいふ

井出の玉水—山城井出の玉川、蛙、山吹の名所

鏡

神代より光くもらぬかゞみこそむべもひつぎのしるしなりけれ

もとゆひ

年ふりし我もとゆひのこむらさきいつより霜にむすびかへけむ

こゝろざしをいふ

いけるまの心ひとつしたのしくばなからむ後の千名も何せむ

五十首 文化二年六月二日

春

山ざとを梅見がてらにとひしかばはつ鶯の音をぞ聞きつる

雨にそめ風にさらせる青柳のいとは日ごとにいろ添はりゆく

春はたゞ花のかげこそ慕はるれ胡蝶に身をもかへしばかりに

なつかしきすみれの床をよそに見てあがる雲雀ぞ心そらなる

山吹の花のしがらみにほふなり春せきとむる井出の玉水

ど一々に數ふれば、各個の材料のみにて、終に車なるものはなしとの意也

玉の枝―竹取物語の車持皇子の事などにや

われとは更に―無名氏「遍身綺羅者不是養蠶人」の翻案

つきゆみ―槻の弓

使

〔原本缺レ之〕

玉

いとせめてとりえし玉の枝さへもおもひくだくる種となりにき

錦

おりいづるこまもろこしの品はあれど倭錦(やまとにしき)にしくはたはなし

布

たがためにさらせる布ぞ賤(しづ)のめがわれとはさらに身にもまとはで

琴

うきことをおもひつゞけて是をだにかたらひ人となすよしもがな

弓

弓といへば眞弓(まゆみ)つきゆみ品はあれど玉まくゆみに心こそひけ

たち

〔原本缺レ之〕

うたかた―泡沫

はなりの髪―振り分けてつかねたる髪

あえよ―あやかれよ

かぞへつゝ―老子第三十九章に「致數車無車」とあり轅輻輪輿等各種の材料集りて車を成せ

うたかた

一しきり降り來る雨に數(かず)そひて消えてはむすぶ波のうたかた

釣

かくて身はふる江にたるゝ釣の絲の世にひかれぬも心やすしや

翁

ともすればわかきが中にいとはれておきなさびたる身をいかにせむ

うなゐ

うなゐ子がはなりの髪をなづるかな老にあえよと思ふ心に

法師

むらさきの雲まつ身こそやすげなれ此世はかりにすみぞめの袖

車

かぞへつゝ見れば車もなきものを何よしあしの名はさだむべき

舟

ちりうかぶ波の木の葉と見るばかり沖になづさふしがのうら舟

つまで—杣手、杣人の木造りしたるあらづくりの材木

七つの道—東海、東山、北陸、山陰、山陽、南海、西海の七道

三つの關—近江逢坂、美濃不破、伊勢鈴鹿

六田河—大和吉野村の北なる六田（ムタ）の渡の川をいふ

そま

君がためとるともつきじ萬代にいづみの杣のまきのつまでは

ふるさと

故郷はとへどこたへぬ飛鳥風をのへの松にいたづらに吹く

井

山ざとのむかししのばむをとめ子がおもかげうかべ御井のま清水

關

君が代は七つの道の國人も三つの關をやすく越ゆらむ

淵

しら玉はありとも誰かかづくべきこの岩淵のそこひなければ

瀬

かくて身をうしとな思ひはつせ河うれしき瀬をも待ちて見む世に

やな

せきとめてみなわさかまく六田河やなせの波は音もとどろに

見し世―戀仲にてありし世

やさし―恥し

立ちのぼる―出生する意

塵もすゑじ―「塵をだにすゑじとぞ思ふ咲きしより妹とわがぬるとこ夏の花」古今集

玉がしは―玉堅磐、水中にある石をいふ

おもひいづ

見し世にはたゞなほざりの一言も思ひ出づればなつかしきかな

むかしあへる人

ことに出でてしばし引き見むあづさ弓もとの心を人やたどると

年經ていふ

いひよるもやさしな年をふる鏡みむわが影を君たどりなば

いやしきをいとふ

契りあれば霞ならでも立ちのぼるためしを人のなどか思はぬ

人づま

いかなれば塵もすゑじと思ふらむわが床なつの花ならなくに

かくれ妻

しのぶればうきみな底の玉がしはあらはれてあふよしのなければ

山里

山ざとはかけひにうくる谷水のこゝろほそくも年をこそふれ

けふの細布―陸奥の希婦の細布の名に今日を掛く、而してその特に幅狭きものなるより、むねせばみといひ、あはでといふ、皆言葉の綾也

みるめ―海松、見る目

二夜へだてたる

きのふといひけふの細布むねせばみあはで今宵も明けむとやする

ものへだてたる

かつみても猶したはれつを車におもがくしせし袖のなごりは

名ををしむ

戀ひ死なむ命はさても有りぬべしせめてうき名の殘らずもがな

たのむる

君をのみたのむ心は深かりき世のいつはりに馴れし身なれど

よべどかへらぬ

とけがたき心くらべにまけじとやしばしといへど立ちもとまらぬ

ふみをみぬ

もしほ草かきやるかひもなかりけりひろふみるめもあらぬ渚に

おもひやす

下紐のしたこがれつゝおもへばや三重むすぶまで身はやせにけむ

そは〳〵し—よそよそし、山の岨に掛く

みづぐきの跡—筆の跡、見に掛く

かけそ—口に掛くる勿れ

夜がれ—一所に寝ぬこと

相おもはぬ

うちとけぬ人に心をおくやまのそは〳〵しくもなりまさるかな

こと人をおもふ

末つひにかくてや我をわすれ水ながれてよそにひかれそめなば

よるひとりをり

ともし火のもとの心やたどるらむこれぞかたみとみづぐきの跡

ふたりをり

うらもなく語(かたら)ふ時はもろともに千(ち)よを一夜とおもふばかりぞ

よひのま

世の人に寝よとのかねをとぢめにておきわかれなむ我や何なり

口かたむ

相おもふ中とや人のとがむらむわが名なかけそとはず語りに

一夜へだてたる

恨みわびぬ一よばかりの夜がれをもまたかゝらばと思ふ心に

神樂歌、韓神「みしまゆふ肩にとりかけわれからかみのからをぎせむやからをぎせむや」

とをはた—十、二十、若かりし時をいふ

いはての森—陸中岩手森、言はでに掛く

佛名

罪とがも佛の御名ものこさじと曉かけて花たてまつる

としのくれ

くりかへしおもへばとほし年波をとほはたとのみ數へてしよは

知らぬ人

まだ知らぬ人をあやなくこふるには心のみこそしるべなりけれ

いひはじむ

けふまではおもひつゝみて日をぞへしいはでやむべき心ならねど

いはでおもふ

いたづらに袖やくちなむ思ふこと人にいはての森のしづくに

はじめてあへる

あふことははつ花ずりのかり衣うつろふ色をみはてずもがな

あひおもふ

なかなかにうらむるふしも多かりき相思ふなかの心すさみに

き薪を折り集むべく通ふ道

かれふー枯生、一端枯れたる後に生ずる草をいふ

をのー山城小野

とよのあかりー五節の後の賜宴、豊明の節會

からをぎせむー

水鳥

世をわたる人しもならへ水鳥のやすくぞ波にうきしづみする

鷹狩

狩人の袖吹きかへす朝風にかれふのすゝき立つかげもなし

雪

すみぞめの夕の雲の絶間よりなほくれのこる峰のしら雪

炭がま

冬ごもる程やいつまですみがまのけぶりくゆらすをのの山人

埋火

おもふどちかたらひあかせ冬の夜を火桶（ひをけ）の灰のしらみ行くまで

五節

みや人はとよのあかりのなごりとて肩（かた）ぬぐばかりゑひしれにけり

かぐら

やまとてふ玉ごとの名に引きかへてからをぎせむとうたふ子やたれ

雨降の山—相模連山の一
すはのあふみ—信濃諏訪湖
ひを—火を、氷
爪木の道—小さ

くれの秋

うきときはうきをかこちて今日はまたとまらぬ秋を何うらむらむ

時雨

さがみねのいづれはあれど冬たてば雨降の山ぞ先しぐれける

氷

行きかよふすはのあふみの厚氷神のをしへし道はまよはず

霜

木がくれや塒の鳥も出でがてに吹く風さゆる庭の朝しも

あられ

やま風のにはかにさそふしもと原梢みだれてあられ降るなり

網代

もりあかす夜床やわぶるあじろ人ともすかゞりのひをたのみつゝ

落葉

日に添へて落葉ぞふかくなりにけるなれし爪木の道たどるまで

秋山ぞわれは―天智天皇鎌足に詔して春秋の優劣を論ぜしめし時額田女王の歌にて判じ給へる結末の句に「秋山吾は」といへり、萬葉集卷一に出づ

すまに―すきま無く

鹿

山彦のかすかにつたふ鹿の音は幾重の峯のおくに鳴くらむ

秋山

秋山ぞわれはといひし昔べもあかぬもみぢやかくこそ有りけめ

野分

もゝくさの花はさらでもうつり行く秋のすゑ野に野分吹くなり

紅葉

はゝそ原かつ散りそめて露霜のこゝろあさゝや色に見すらむ

秋夜

ともし火はかゝげつくせど残る夜にはてなき秋の思ひをぞ知る

衣うつ

よもすがら麻のさごろも手もすまにうつや袂をまきの島人

菊

一もともあはれとは見よむらさきのゆかりわすれぬ菊のにほひを

色、物はいはねどの意を含む

駒むかへ―八月の駒牽の儀式に諸國の牧より牽き來る馬を逢坂まで迎へに出づるをいふ

あらがき―組くゆひたる垣、あらゝかの縁語

ふり出でて―鈴の縁語

十五夜

めなるれば心おとりのする世にも今宵の月はあかずも有るかな

駒むかへ

あふさかの關のあらがきあらゝかに山ふみならす岩ぶちの駒

露

さまぐの花になれにし袂にはかわかぬ露をあはれとぞ見る

霧

きりこむる峰のかけはし末消えて繪によく似たる夕ぐれの山

松むし

住み荒れしむぐらの門に聲たてゝ人まつ蟲ぞあるじがほなる

鈴蟲

夕されば露ちるをのの秋風にふり出でて鳴く鈴蟲の聲

きりぐす

ねざめする霜夜の床のきりぐす有るかなきかの音ぞあはれなる

なごしの祓―陰暦六月晦日のみそぎのはらへをいふ

たらひの水―七夕の夜星影を盥に映す習ある也

高まど―大和添上郡高圓山

口なしの色―黄

夕だち

ゆふだちに川となり行くいさら水わたりやわびむ野路の旅人

なごしの祓

國つ罪今はのこらじ大王の御門のはらにはらへしつれば

初秋

をぎ原やまだ穂に出でぬ程ながらゆふべは秋と初風ぞ吹く

なぬかの夜

棚ばたのこゝろも空にくみて見むたらひの水にかげしうつらば

をぎ

風の音にくだけてものをおもへとや露ふきむすぶ庭のをぎ原

はぎ

高まどやをのへの秋に宮人のむかしかざしし萩の花散る

をみなへし

口なしの色に咲けどもをみなへしとはで過ぐべき秋の野べかは

ゆはた—纐纈、しぼり

か—疑問辭に蚊を掛く

ながさか—長し・長坂

なでしこ

からにしき色こき中にくれなゐのゆはたもまじるなでしこの花

あふち

入日さすかた山ばやしおく見えて散るやあふちの花の夕かげ

ほたる

草ふかき野中のしみづそれをだに有りと知らせて飛ぶ螢かな

鵜河

鵜飼舟さすや水棹に散る露もみだれて見ゆるかゞり火の影

蚊遣火

くれはてぬ宿に烟は先たてつ有るかなきかをいとふばかりに

氷むろ

消えぬ間と都へいそぐ氷室守道ながさかのほどやわぶらむ

藥がり

生ひしげる夏野のはらのくすり狩いづこに鹿の跡はとむらむ

みあれ山—山城愛宕郡御阿禮山、賀茂のみあれの葵祭の爲めにとて葵を引く也

ひとへに—偏に、三重に對する言葉の洒落

春のはて

散り残る花はなごりもあるものをつれなく暮るゝ春や何なり

衣がへ

ぬぎかふる夏のころもはうすくとも花の香をだに移さましかば

ほとゝぎす

明けそむる箱根の關のほとゝぎす二こゑ三聲まづなのるなり

神まつり

あふひ草引くはたが子ぞみあれ山しげるかづらの夏影にして

五日

軒に葺く今日のあやめのそれならで引きあらそふは眞弓なりけり

たちばな

たち花の花さく宿のいつはあれど雨のゆふべぞ世に似ざりける

あふぎ

風を音にならす扇の三重ながらひとへに夏はわすられにけり

下光る新京朱雀のしだり柳まだい田居となる前栽秋萩撫子唐葵しだり柳」
三日の日―巳日祓をいふ、周の世に起り魏の世より三日を用ふとぞ、源氏物語須磨巻には三月朔日が巳に當りて源氏の君浦邊にて舟に人形を立てて祓の具とする事見えたり
ふぢ―藤、淵

さくら

さかりなる三山櫻を來て見れば花ゆゑ世をもそむくべきかな

三日の日

めづらしな今日しもぬさと散る花をみそぎにながす春の川水

春の田

賤の男は散りしく花をすきかへし雪におりたつ春のを山田

かへる鴈

鴈のゆく尾上の花は雪なるを一夜は旅のやどりからなむ

春月

かくてこそあはれもそはれほの〴〵と霞みながらに有明の月

すみれ

春はまた草にやつるゝ故郷もすみれ摘みにと人ぞとひける

藤

池水ににほへる色の深ければふぢとは花の名におほしけむ

年のへだては―舊年と新春との隔をなすものは

絲―遊絲　くる―來る、繰る

こち―東北風

光あり―催馬樂「淺綠や濃は縹染めかけたりと見る迄に玉光る

霞

のどけさのきのふにかはる空見れば年のへだては霞なりけり

かげろふ

かげろふのもゆるを絲といふめるは春のくる野にたてばなりけり

うぐひす

鶯の鳴く初聲を聞くときは老もわするゝこゝちこそすれ

いなり詣

神さぶるいなりの山のいはひ杉いくよの人かかざし折りけむ

春雨

春の海やこちふきたゆる夕なぎに霞むなごりぞ雨になり行く

紅梅

紅ににほへるうめやまづ春のいろをふかむる初なるらむ

柳

光ありとうたふ朱雀の玉やなぎ露のかけたる名にこそ有りけれ

みふねの山—大和三船山

こゝら—多く

ゐぐ—草の名、葉は藺に似て小く、根に慈姑の如きものあり、其味ゐぐしといふ

白馬—正月七日左右寮より白馬二十一匹を引き出し、天皇紫宸殿にて御覽ぜらるゝ式

琴後集 巻八

百二十首

春たつ日

朝風に氷流るゝ瀧のうへのみふねの山に春は來にけり

子日

いつとてもはつ子(ね)はあかず小松原こゝらの春にひかれ來ぬれど

わかな

都人ゆきかき分けて春もまだあさ澤ゐぐを摘むやたがため

白馬

あを馬の毛いろもはえて見ゆるかな今日引きわたす紫(むらさき)の庭

のこりの雪

霞たつすゐの松山はる越えて消えのこる雪(ゆき)や波と見ゆらむ

いざさらばひろふ紅葉を袖の色に匂ひかはして今日はくらさむ

十一月　かぐらするところ

つま琴も笛もしらべをかへてけり朝倉うたふ聲を待ちえて

十二月　松竹に雪つもれり

降るがうへにいやふる雪やまつ竹にこよらの千世をこめて見すらむ

朝倉―神樂歌「朝倉や木の丸殿に我がをれば我が居れば名乘りをしつゝや行くは誰が子ぞ人やたれ」。

がて―難く

きく―聞く、菊

櫻ばな咲く木のもとは春霞たちやすらはぬ人しもぞなき

四月　卯の花ある家に郭公過ぐ

郭公(ほとゝぎす)鳴く音ぞたえぬ卯の花のにほふかきねを過ぎがてにして

五月　あやめ引くところ

澤水に根ながくおふるあやめ草まづこそ千世のためしには引け

六月　はらへする所

秋風を袖にやどして歸らまし夏をばすてつ今日(けふ)のみそぎに

七月　たなばたまつるところ

たなばたにかしつる琴のいとせめてあかぬわかれを引きもとゞめよ

八月　つりどのに月を見る

ながむればてにとるばかりおばしまの下ゆく水にやどる月影

九月　人々菊を見る

老(おい)をしもかげとゞむとしきくなればともにぞぬれむ花のしづくに

十月女ども紅葉ひろふ所

門浪―瀬戸にたつ浪をいふ

とよむ―鳴り響く

海のほとりに風ふき浪たつ

風をいたみ渚に舟ぞよせ來なる明石の門浪音もとゞろに

瀧の繪に

誰ためにさらせる布ぞ春は花あきは紅葉の色に染みつゝ

たつた河の繪に

もみぢ葉の流れて常にうかべるは水の秋をやこゝにとゞめし

柴くだしの繪に

ながれ來る眞柴とるとや下つ瀬にあらそひ出づる宇治の河ふね

越の君の北方の御屛風の繪に

正月　子の日する家

引きうゝる子の日の松のかげごとに千世をこめても見ゆる宿かな

二月　いなりまうで

けふごとに杉の葉かざすいなり山みねとよむまで人ぞつどへる

三月　馬車に乗りて人の花見たる所

あがた—縣、田舎

袂そぼづ—袂をぬらす、而してそぼつは案山子の異名、兩義を掛けける也

ゆふの山—豐後木綿山

二神—伊邪那岐、伊邪那美の二神

この—彼の

京の家に市女來り酒うる

もろともに醉をすゝめよ立ちまじりおのがあがたのこと語るとて

そほつの繪に

大かたも田子はうきにぞたちならす袂そぼつはなればかりかは

茶具いるゝようつはの繪に歌かけと人のいひければ

雪をにるすさみもうれしかくれがの松のあらしに心すむ夜は

ゆふの山の繪に

萬代に神さびたてるゆふの山そゝ行く雲もふもとなりけり

あさま山の繪に

あさま山神のいぶきの霧はれて雲井にたてる夕けぶりかな

二神の繪に

千萬のよにも動かじふた神のゆきめぐらしゝあめの御柱

よもぎが島に玉のうてなどあるかた

これやこの家路わすれて浦島の妻どひしけむわたつみの宮

竹取の翁―竹取物語の主人公、竹取物語は本文庫「平安朝物語集」の卷頭に收めたり

あくご―厭く期、期に碁を掛けたり

つらづゑ―頬杖

かひな―甲斐なし、腕

くれそむるを花がもとのしろうさぎ月の影かと見ぞまがへつる

桃花源の繪に

かくれがの春やいくよの名残ぞと花ものいはゞ問はましものを

を竹取の翁の繪に

あはれとて世にやつたへしなよ竹の此一ふしの昔がたりは

碁うちたる所

何ゆゑのすさみなればか諸共にあくごも知らでうちむかふらむ

白川少將殿にて人々なみゐたるさまを繪にかゝせ給ひてこれに歌ひとつとあるにおのがかたもそのうちにあれば

をりにあふもうれしかりけりうつしゐに姿とゞむるけふのまとゐは

女のつらづゑつきたる所

涙のみはらふおもてにつくつゑのかひなの世とや思ひしるらむ

うかれめの舟に乗りたるかたを

さだめなきよるべを波にまかせつゝつながぬ舟ぞ身のたぐひなる

やこゑ—八聲、いやこゑの意にて、鷄の諸聲に鳴きいづるをいふ

壽星—七福人の一なる福祿壽をいふ

松と竹と栽ゑたる所を女みる繪に

おもふことかはらぬ中もならはばや千世のどちなる松と竹とに

靈芝の繪に

たぐひなき種とこそ見れ石の上に千とせをかけておふる初草

岩の上に鶴たてり

岩のうへにむれゐるたづも夕しほのさすにひかれて浦傳ひせり

鶴の繪に

明けぬとて先つげそむる初とりの聲にこたへて鳴くやこゑかな

きぬ〴〵にうきをかこたむ鳥の音を老はねざめの友とこそ聞け

龜の繪に

うきにすむものとないひそ河かめのにごりになるゝ身ぞやすげなる

壽星の繪に

千世つまむためしに見よと此神のかしらの雪や高くかさねし

うさぎの繪に

神のみやつこ—神に奉仕する下僕
きよめ—掃除
人長—にんぢやう、神樂を舞ふ人の頭
さし—笠の縁語
まさへ—ませ

はるかなるこしに有るてふしら山をゆき見て誰かかくはうつせし

月次の屏風の料　十二月小鹽山

大原や神のみやつこきよめすな玉しくばかり雪のつもれる

神樂せる所

わざをぎの昔おぼえて人長がたちまふ袖も神さびにけり

年くれて竹ある家

かねてより春の色なる竹垣は年のさかひもへだてざりけり

松に朝日の繪

すみの江の波もにほひて朝日子が影さしのぼる岸の松かさ

小倉の君の六十の賀に松の繪に書きつけける

もろ人の千世にまさへとうたふにぞ山松がえも聲あはせける

道行く人きしのほとりなる松のもとにやすみて波のよるを

見るかた

波あらふみなぎは凉しいざこゝに松がねまくらしばし結ばむ

はしりでー門口、家の前のふと走り出でたる所の意
ほだー榾、木の切株などを薪とするもの
あだー大和阿陁郷
ふりはへてーわざわざ、降りに掛く
むやひー舟と舟とつなぐこと

あがたの家に翁雪を見るをさなきもあり

はしりでに大雪ふれりいざ子どもほだ焚きそへよ翁さびせむ

高殿に雪見る人あり

雪ふれば千里もちかしおばしまのもとよりつゞく不二の柴山

山里に住む人雪のふるを見る

雪つもる軒のむら竹うちふして道みぬ山もあらはれにけり

雪のあした鷹がりしたる所

みゆき降るあだの大野の朝狩にきほひて出づる雲の上人

雪ふる日山里をとふ人あり

おもしろく降るしら雪のふりはへてたが冬ごもる宿をとふらむ

雪の降りたるに人々舟に乗りて見る

ゆく河のいづくはあれど雪つもるこの松かげにむやひして見む

雪つもる入江のとまやきしの松みどころおほき舟路なりけり

屏風の繪にこしの白山のかたかけるを

けふのためし—風土記に「九月九日俗采茱萸房を折り以て頭に插む、謂ふ惡氣を辟除して初寒を禦ぐ」

いく藥—不死の藥

しもと原—蘖の原、蘖は若き立木の長く直くして枝しげきをいふ

茱萸袋のかたかける繪に

山人のけふのためしのいく藥かけてやちよの秋をちぎらむ

紅葉の折枝(をりえだ)をかける繪に

一枝にみ山の秋をしらするやたが家づとのすさみなるらむ

箱根山もみぢおほかる所

箱根(はこね)路(ぢ)はもみぢしにけり旅人の山分(やまわ)け衣(ごろも)袖にほふまで

山里にかりする人來れり

かりくらし一夜は寢なむ山里(やまざと)にのこるもみぢを明日(あす)も見がてら

網代(あじろ)に紅葉のよせたる所

散るもみぢ瀬々のあじろにかゝらずば昨日の秋を波に見ましや

あられ降る野をゆく人あり

旅人のしばしたちよるしもと原うちしをるまでふる霰かな

女すだれのもとに立ちて雪の木に降りかゝれるを見る

はなとのみ梢に雪は散るものをふりすてゝやはたゞに過ぐべき

かつしかー葛飾、武藏の名所

きり原ー信濃の馬の產地

わたつみー海の神

ゆめかたらはむー大伴黑主鬪鷄野に寓し二鹿の問答を聞く、牡曰く、吾霜背上に降ると夢むと、牝曰く、凶夢なり恐らくは人に殺されん、黑主怪みて之を窺ふに果して獵人來りて牡鹿を殺す、これより比野を夢野と呼ぶ

かひー頴、甲斐

は月ばかり雁の聲まつかた

かつしかのわさ田かる男にこととはむ初雁がねの聲はきゝつや

駒むかへ見る女車あり

月をさへへだつる松のしたすだれおぼつかなしやきり原の駒

人の賀の屏風に海のほとりに人々月見たる所

わたつみのかざしの花と見ゆるかな月ににほへる沖つしら浪

鹿のひとり立てるかたを

たちあかす夜をやわぶらむ野べの鹿ゆめかたらはむ妻しなければ

大屋何がしの七十の賀に菊の花の咲きたるかげに水のながれたるかたかける繪をおくるとて淺田ぬしのこれの歌よめと有りければ

かげさへもにほへる菊の下水に千とせの秋をうつしてぞ見る

稻ほしたり

里ごとにたりほの稻をかけほしてかひある秋のほどぞ見えける

野の宮—齋宮に立つ皇女のその御物忌の間暫くおはする宮

うちつけに—卒爾、何と考ふる間もなくいきなりといふ程の意也

おもなき—氣まりの惡き

いろ〳〵の蟲の音ながら移しきて花野の秋をしめし宿かな

秋海棠の繪に

いかなれば秋野の露の下草に春のにほひを猶とゞむらむ

野の宮のかたかける繪に

夕露をよすがに月もとひてけり秋野のみやの花にほふころ

琴のねもすみやまさらむ秋の野の小柴がもとに月やどる頃

家に女月を見る

ふるされしうき身のともと見る月はよもぎがもとの心しりきや

月夜に女の家にをとこゐよりて居たり

うちつけに入まつ蟲もなくものを月をのみやは君やどすべき

女車をたてゝ月を見出したる

玉すだれかけあらはなる小車におもなきまでぞ月はすみける

秋の月おもしろきに池ある家

すむ人のこゝろをさへにくみて見む月おもしろき宿の池水

月にうからむ—月を見る妨となちん

しづえ—下枝

一時の花—「秋の野になまめき立てる女郎花あなかしがまし花も一時」古今集

をばなあしげ—馬の毛色の名目、さしげある韋毛也、秋の縁にていふ

桐の葉の散りたるかた

もろく散るならひもうれしかゝらずばきりの廣葉や月にうからむ

白萩の繪

夕月の影かと見ししらはぎの露ににほへるしづえなりけり

七くさの花をかける繪に

からにしきひもとく花の七くさに秋のあはれをあつめてぞ見る

女郎花の繪に

いく秋も道しあせずばをみなへしなに一時の花とやは見む

馬にのりたる人秋の野を行く

かり衣秋野(あきの)の露にぬれにけりをばなあしげのこまにまかせて

野の花さかりにひらけて人々あつまりて見る又かりとる所
もあり

おりたちて見るもたをるもやちぐさの花に心をひかれぬはなし

秋の花どもをうゑたる所

て摘ること
たかうな―筍、たかんな、竹の子
おばしま―高欄
あふぎ―逢、扇

草も木もこれにしく花なければやにほひのおやと人のいふらむ

たかうな折る所

夏くれば先こそたをれなよ竹のこは生ひたゝぬ程を時とて

すゞみする所

おばしまの下行く水はたれも皆おりゐてむすべ夏なかりけり

河のほとりにすゞみする所

むすぶ手に波間の月をやどしつゝ夏をわするゝ河づらの宿

雨はるゝゆふべ高殿にすゞみする人あり

村雨のなごりすゞしき高殿に千里をかけてゆふ風ぞ吹く

いづみに月の影うつりたるを女ども見るほどに大路を笛吹きて行く人あり

水のおもに月だにやどる宿をおきていづくに笛の音をすますらむ

女のあふぎもたるかたを

なつかしき風のやどりと手ならすや誰にあふぎの名を頼むらむ

あやめふく—五月五日屋根に菖蒲を葺くをいふ

いくしろ—幾代、代は廣さを計る語にて、七坪半の廣さをいふ

しづくら—韉、したぐら

ま手のつがひ—二人ずつ番ひて弓を射ること、公事根源に「五月三日は左近の荒手結、四日は右近の荒手結、五日は左近の眞手結、六日は右近の眞手結也」

いたづらぶし—相手なく一人に

あやめふく家に時鳥なく

あやめ草下露かをる曙に鳴くやのきばの山ほとゝぎす

雨ふる日人おほく早苗とる

早苗とるかたやいくしろ五月雨にみだれて出づる田子のすが笠

さうぶとる所またかざせるもあり

ふりはへてかざすよどののあやめ草引きおくれたる人もありけり

かざす手もとる手もにほふあやめ草千世をやちぎる心々に

五月五日馬引き出でて見る所

あか駒にしづくらおきてよそへるやま手のつがひをいそぐなるらむ

五月五日駒くらべする所

袖の香も駒の足竝もかた分けて神の御前にきそひ出でにけり

たちばなの咲きたる所戀の心を

袖の香に花たちばなをよそへつゝいたづらぶしもあはれそふ頃

蘭の繪に

ゆふしで—幣をいふ、ゆふは木綿、しでは垂る意

玉河の里—陸奥にあり、卯の花の名所

三のやしろ—稲荷三社

神まつる所

神のます杜のまさかき夏たてばゆふしでかけぬ下つ枝もなし

卯の花さけり月あかし

うのはなのにほへる宿はおのづから月の光も世に似ざりけり

卯の花さけるやどをとふ人あり

たちかへり人にもつげむ卯の花のにほひよろしき玉河の里

うのはな咲ける家に郭公を待つ

卯の花ははや咲きにけりほとゝぎす初音もらさば家宿に鳴け

杉たてるかたに郭公なく所

ほとゝぎす鳴くや杉生の梢より三のやしろに聲のおちくる

郭公なく山路を女ぐるま行く

郭公聲するかたにひかれなばならはぬ山のおくも分けまし

淀のわたりに舟ありほとゝぎす鳴く

舟よばふ聲にこたへて郭公よどのわたりにをちかへり鳴く

曲水宴―三月三日、盃を水に泛べて詩を作る宴

とかいたう―かいたうの物名を讀み入れたり

ふかみ草―牡丹の異名

花をめで鳥をあはれむ春の野はこゝろ〳〵のすさみなりけり

曲水宴かきたる繪に

散りうかぶ波間の花のさかづきにふるきためしやくみて知らまし

花のもとにより來る波の盃はながれて遠きためしなりけり

もゝの花を女どもの折る所

紅のこぞめの袖と見ゆるかなとる手ににほふ桃の初花

海棠を

春の色を見よとかいたうにほふらむ錦をはれる花の梢は

山吹咲きたる家に人來て見る

ゆく春をこゝにとゞめよ山吹の花の籬をへだてにはして

よき女藤のはなをもてあそぶ

紫のいろににほへる藤のはなかさぬる袖にいざくらべ見む

白牡丹の繪に

月雪のきよきこゝろを一花のにほひにこむるふかみ草かな

おぼえて―に似て

引きやはとむる―しめ引きても歸る鴈は引き止むる能はず

すみれの床―菫咲く雲雀の巣

櫻の枝とつく〳〵しを籠に入れたるかた

一枝の花にまじへて山づとのあはれを見するつく〳〵しかな

富士の圖に

咲きつゞく花のはやしを麓にて雲井ににほふ不二のしら雪

蝶のかたかける繪に

吹きさそふ風ものどかに散る花のすがたおぼえて飛ぶ胡蝶かな

山田うつ所にかへる雁などある所

すきかへす山田の原に引くしめの引きやはとむる春のかりがね

道ゆく人歸鴈を見たる所

鴈がねの行くかた遠きたかねこそわれも越ゆべき山路なりけれ

雲雀のおりゐたる繪に

あがるとも見えぬ春野の夕ひばりすみれの床やわすれかぬらむ

人々春の野にあそぶ

おもふどちすみれ摘みつゝむらさきの根はふ横野に今日はくらさむ

さけて―散ちけて

都のつと―都への土産

とこ―山の名に永久不變の意を掛けていふ

なで―ずして

おもふどち心へだてぬ花のもとにひもときさけて一夜あかさむ

山里の花咲きたり見る人あり

たちかへりかくとはつげむ山里の花のたよりを人もこそ待て

山里に櫻の花の咲けるに道行く人のいひいるゝ所

山守の心やいづら木の本ははなこそ人を先とゞめけれ

一枝はわれにまかせよ山ざくら都のつとに折りてかざさむ

櫻の木のもとに弓射る所

さくら散るかげに眞弓を引きつれて肩ぬぐ袖も香にぞ匂へる

鳥籠山花ある所

散ることも知らじなとこの山櫻とこしへにのみ春をしめつゝ

大原女の黑木おひたるが花の枝をり添へたるかた

春はまたやつるゝ袖も折る花ににほはすや誰が妻木なるらむ

苗代水に櫻の散りうかびたる所

散る花はせきもとめなで苗代の水のこゝろにまかせつるかな

ならなくに—ならぬに、春野は險しき道ならねど、花ゆゑ踏みなづみたり

袖はへてとる手ぞまがふ青柳のおなじみどりをかさねきつれば

柳おほかる家に人來れり

とふ人の花のたもとぞたゞならぬ柳にこもるやどの夕ぐれ

人の家にやなぎ櫻あり

にしきもてかこふ垣ねと見えつるは柳櫻のかげにぞ有りける

人々花のもとにあそぶ

櫻ばなあすとだにやはたのむべきあかぬ心にけふはまかせむ

道ゆく人櫻のもとにとまれる

岩ねふむ道ならなくに春の野を行きなづみたる花のかげかな

かへるさもかくて見るべき花ならば誰かさくらに心おかまし

往來をもとゞむる花のにほひこそ春の旅路のほだしなりけれ

道ゆく人櫻の花を見て馬をとゞむ

駒とめてあくまでは見む山櫻たゞに過ぐべき花のかげかは

人々花のもとにねたる所

霜はらふ―枕草紙「水鳥は鴛鴦いとあはれなり互に居かはりて羽の上の霜を拂ふらんなどいとをかし」

かざしの杉―稲荷に詣づる人、杉を折りて歸る事前にも註せり

かたみ―筺、互

春野の筆―土筆とかく文字よりいふ

霜はらふをしの羽かぜにさそはれて汀の梅の花ぞかをれる

紅梅に鶯

くれなゐの濃染の梅に一しほのにほひをそへて鶯ぞなく

紅梅の梢の水に入りたるかたを

下水にあらふ錦と見ゆるかなこずゑ波こす梅のくれなゐ

初午いなりまうで男女おほく行きかふ

いなり坂霞のうちに匂ふなりかざしの杉も花のたもとも

わらびをる女かたみひさげなどしてあり

とる手ぞと見ゆるすがたの初わらびかたみにつむも心こそゆけ

わらびすみれの爲に

春の野をゆくてのすみれ下わらびつみてぞけふの家づとにせむ

つくづくしの繪に

つくづくし春野の筆といふめればかすみも添へて家づとにせむ

女柳の枝をひかへて立てり

梅の花かけるあふぎに

おのづから風まつうめの香をそへて袂にやどせ春の夜の月

籬の梅さきたり見る人あり

たちとまる袖さへ香にぞにほふなるかきねの梅のはなの夕風

客あまた來りける庭にうめの花咲きたる所

つくしがた梅さく宿にまとゐせし昔おぼゆる今日にやはあらぬ

人々あそびしたる所の庭に梅のはな咲けり

梅のはな咲く木のもとにふく笛は聲もかをれる心地こそすれ

梅の花さけるに鷹をすゑて人ゆく

夕風に雪とみだれて散る梅をたもとにはらふ春の狩人

をとこすいがいのもとに笛ふく梅の花散れり

庭もせに梅散るやどは笛竹のふきよる風も香にぞにほへる

うめ散らす風にきほひて吹く笛のよにおもしろき宿の春かな

梅の花あり水鳥あそぶ

つくしがた—大伴家持の筑紫にて梅の宴を催せし故事

すいがい—透垣

せに—狭き程に

琴後集　卷七

題畫歌

井に朝日うつれりくむ人あり

朝日かげにほへる春のわか水に千世のさかえやくみて知らまし

山里にすむ女子日（ねのひ）する所

花蔓（はなかづら）かけてや千世も契（ちぎ）らましわが住む山のまつの二葉に

わか菜摘むところ

千世かけてちぎる小松のすり衣きてこそつまめ野べのわか菜は

霞を分けて山寺にいる人あり

ゆくまゝに霞む山路（やまぢ）ぞあはれなる跡をしも世にへだつと思へば

梅のゑに

鶯もさそはれぬべし梅の花いろ香おほゆる筆のにほひに

子日―正月初子の日野に出でて小松を引きて遊ぶこと

おぼゆる―本物そのまゝの

いさめのつゞみ―江相公の詩に「刑鞭蒲朽螢空去、諫鼓苔深鳥不レ驚」

へなみ―船の緣に打かゝる波をいふ

のづかさ―岡

りうたん

苔むせるいさめのつゞみ誰世よりうたんうたじもとはで過ぎけむ

あじろ人波におりたちさわぐなりうたんとやする瀬々の堰杙を

折句

こまむかへ

こぎまよふまのの浦舟むやひしてかぢふりたてよへなみたかしも

あはのくに

あかずみむはるもさかりののづかさにくもかとばかりにほふ櫻は

旋頭歌

千蔭が家にて萬葉集竟宴しける時題をわかちて擬うたといふことを

かくしつゝゑひみわらひみ思ふ人どちたち花のかげふむ庭は千世にならさむ

うし―憂、牛、吳牛喘」月の故事による

こづみ―木積、木屑の寄りつもること

せみの小河―瀬見小川、山城下賀茂神社の境内を流る

かにひ―雁皮

物名

うし

ひるの間のたへぬあつさにならひてや月のかげをもうしと見るらむ

こづみ

瀬をはやみそこつみくづもなかりけり岩間をあらふ瀧のしら波

うつせみ

堰棟うつせみの小河の清き瀬にゆふとりかけて夏はくらさむ

住家をばみ山にうつせみやこ人からきうきよのさがいとひなば

かにひのはな

一重きるきぬもうきまでいかにひのはなはだしくも照り増るらむ

やよひの末つ方人の家にゆきけるに園にれんげ草といふくさの花あまた咲きたりけるを歌よめとありければ

春ふかきそのふにたれもあくがれんけさうぐひすの聲老いぬとも

水の上に云々—所謂鏡花水月の喩、世相の實有の如くにして而も空なるをいふ

ひろき誓—法華經に「弘誓深如海、歷劫不思議」

水の上にうつろふ月のおもかげはありと見ゆるも何かつねなる

自寛が家のうちの一間に觀音大士を安置して供養しける日

水晶の數珠をおくりけるにその箱のふたに書きつけゝる

曇りなき思ひの玉を手ならさばたのむ誓やたがはざるらむ

おなじ時人々と共に題をさぐりて發大清淨願といふことを

人はみなひろき誓の海をへてにごらぬ法のこゝろともがな

ひじりの御代の

いにしへのひじりの御代のためしにも思ひくらべむ時ぞこのとき

かひやなからむ

したふともかひやなからむ今日わかれあすは野山を行き隔てなば

みやこの手ぶり

もろ人の昔をしのぶことばこそならの都の手ぶりなりけれ

かよふこゝろの

君にけさともなひつれて行く雁をかよふ心のしるべにはせむ

たひらの宮―平安宮

はひおくれたる―灰後る、灰返るともいふ、色のさめたる義、紫色は椿の灰をさして染むれば也

つるばみ―橡、賤者の服を染むる料

多

きみが代のたひらの宮のやちまたに行きかふ人ぞ數も知られぬ

舊

日かげ草かづらにすなる手ぶりこそ神代のまゝのためしなりけれ

低

玉梓(たまづさ)はとるもあやなし紫のはひおくれたる色と見しより

後

品ひくき身はつるばみの布衣(ねのごろも)袖のあさぎもおもひかけめや

釋敎

われとわが身をしよそへど石の帶のうはてさすをば見るよしぞなき

勸持品

世の塵(ちり)につゆもけがすなこゝろもて心をあらふ法(のり)のもろ人

如是相

たぐひなき薫(かをり)を世々に傳へよと御(み)法(のり)のはなやひらけ初めけむ

きみが代は下つ岩根のかたければとはにうごかぬ宮ばしらかな
雲かゝる松さへおふる岩ほこそ動きなき世のたぐひにはせむ

寄レ弓祝

梓弓引きこゝろみてよも山の守わすれぬ世こそ安けれ

寄レ龜祝

おのが身にいたゞく島の名もしるくかめのよはひや常世ならまし

寄レ松祝

しら雲に枝さしかはす峰の松としの高さもかゝれとぞ思ふ

花有二喜色一

いづる日のひかりににほふ朝露をまちよろこべる花の色かな

竹遐年友

明くれにかはらぬともと君し見ば竹のこゝろも千代になびかむ

竹不レ改レ色

君がすむ宿のうゑ竹千世ふともあせぬみどりの色をこそ見め

おのが身に―蓬萊山の一名を「かめやま」「かめのうへのやま」などいふ

うゑ竹―植ゑたる竹

年ある―豈年

秋ごとに―八月十一日定考（カウヂヤウ）とて六位以上の官吏の藝能、行跡、恪勤を撰びて榮爵を賜ひしをいふ

春祝

日影さす高ねの松に千々の世をたちかさねたる春霞かな

夏祝

かぎりなきいのちつぐてふあやめ草君が爲にぞけふはひかまし

秋祝

あがた人つどふ市路にこととへば年ある秋とこたへぬはなし

秋ごとに賜ふつかさの數そふもをさまる御代のためしとぞ見る

秋祝言

宿ごとに千五百のいねをかりつみて足穗の秋をいはふ里かな

冬祝

霜ゆきにあせぬとこはの深みどり千世まつがえの操をぞ見る

寄レ星祝

君が代はほしのやどりをいく千度行きめぐりてもつきせざるらむ

寄レ巖祝

掛く、かやは一にかへともいふ也

高き門—于定國の父于公が子孫必ず興るものあらん事を期して門閭を高大にしたる故事

みどり、あけ—綠は六位、緋は五位

人の七十の賀に鶴を

天とぶや鶴の毛ごろも袖たれてきつゝならさむ千世も八千世も

年のくれに人の七十の賀に

あたらしき春待ちつけむ宿なればわかがへりつゝ千世もすめ君

人の八十の賀に

すゑ遠き千とせの坂にくらぶれば八十路は老のふもとなりけり

神原ぬしのあらたに司賜ひたるをよろこびて

馬車引入れつべくいまよりはいとなみつくれ高き門をも

しはすばかり大久保忠陽ぬしのつかさえ給へるを歡びて

袖のいろのみどりは春に先だてつあけにも染めよ秋またずして

人のむことりしたるをいはふとて浦鶴といふことを

しき波に千世のよはひやちぎるらむ浦わの鶴の翅ならべて

祝

天地の神も知らじなかばかりに治りにける御代のためしは

松のけぶり—墨は松の油煙を固めて作りたる也

市にうる云々—左太沖の故事なる「洛陽爲之紙貴」の意

聲しる人—鍾子期よく伯牙の琴を聽き分けたる故事

ちいし—疊子、菓子鉢をいふ

くりかへし—繰返しに、栗、梱を

おのづから老せぬ宿のすさみとて千世もにほはせ松のけぶりを

紙

市にうる紙もまれにやなりぬらむ君がこと葉を世に傳へなば

琴

つま琴の玉のひゞきは聞きなれつ聲しる人のたぐひならねど

盃

もろ人の君にすゝむるさかづきを我もくみてぞ千世は契らむ

千蔭が六十の賀に磯山にさくらの花咲きたるかたを洲濱につくりて波にはなのうつれるかたを盃のまきゑにかきてその櫻のもとにおけり

わたつみのとこよの波にかげうつす磯山ざくらあかずもあるかな

おなじ人の七十の賀に栗梱の實鳥の子をもりたるらいしに結びつけたる歌

くりかへし千世はよばなむ思ふどちかひある春をいはふまとゐに

をす國—君の治め給ふ國、皇國

千里—千里の濱、紀伊國の名所

原澄法師の四十の賀に

山まつのかげをしめたる宿なれば苔の袂ぞ千世のどちなる

白川少將君の五十賀に

をす國のしづめなれとて民ぐさも千世もと君をいのらぬはなし

濱田の君の五十の賀に

咲く花もさかゆく色を見するかな君が千とせの春を待つとて

佐賀の君の六十の賀に寄鶴祝

海原や千里の波にとぶ鶴のはるかなる世は君ぞ知るらむ

寛齋市河翁の六十の賀に六種のものを題にてよめる歌

硯

君にこそたぐへては見め常磐なる硯のいしの命ながさを

筆

世に遠くかをらざらめや筆の上に生出づる花はいろことにして

墨

しみさびー茂みさぶ、鬱蒼として茂る

いはひー祀り

みくまりの神ー分水嶺にいます神

ありかよひー長ちへて通ふ

かぐ山やみねのまさかきいく代經(よへ)てしみさびけらし神の御前(みまへ)に

住吉

たぐひなき光にもあるか住(すみ)の江(え)の磯たちならす波の上の月

楫取神社

かとりがた百舟人(もゝふねびと)のぬさたつる神のみやゐはいく世へにけむ

社頭榊

とこしへにみむろのさかき榮(さか)ゆくは神代の種やいはひとゞめし

社頭水

ゆく河のきよきなぎさと萬代にいはひそめけむみくまりの神

人の賀によもぎが島をつくりたる洲濱(すはま)に添へて

とこしへによもぎがしまの島山をありかよひつゝ君こそは見め

宗什が四十の賀に

かくしつゝ千世もへなまし松風の聲をともなる宿のあるじは

こは茶を好む人なるによりてかくなむ

それ―に き人

たか玉―竹の細工に玉を貫きたるもの、しゞといはん縁語也、しゞには繁くの意

なき人をこふるなぎさにかげうつす花のおもてもそれかとや見し
いとゞ君おもひしるらむ川水の行きてかへらぬ世をうきせとは

千蔭が一めぐりの忌に紅葉送ㇾ秋といふことを

もみぢばの過ぐるならひをなげきつゝことしも秋に又や別れむ

また題をさぐりて暮春懐ㇾ舊といふことを

とゞまらぬ秋をあはれといひ〳〵て昔やいとゞ遠ざかりなむ

おなじ人の三とせの忌に月添二秋思一といふことを

春秋のすさみはあまたあるが中に月をあはれといひし君はも

神祇

神代より神のたからをとる弓をまもりとなせる國ぞこの國
天地の神やかためし萬代にたてゝうごかぬ國のみはしら
手くさとり瓮ほりすゑてたか玉のしゞに神代の例をぞ見る
百千々の世にもうごかじ天地の神のかためし大和しまねは

寄ㇾ榊神祇

かれ生―草の枯れたる後に再び生じたるもの

かたみに―亡き人の形見として

草の名―萩の異名をふる江草といふ、芳宜園の名にちなみて、主人無き後も隔てなく情かけよといふ也

おもひきやかれ生の霜をふみわけてはぎのあそびの跡とはむとは

去月の秋芳宜園に梅をうつし植ゑたりけるにその秋翁みまかりにけり、春になりてその梅の咲きそめたるをもせ子の許より見よとて一枝をりておこせたるによみておくりける

花さかばつげむといひし園の梅かたみに見むと思ひかけきや

千蔭なくなりて後ちえ子のもとより歌ども書きつらねて見せにおこせたる草子のはしつかたに

水かれしふる江にたてる草の名にうらなく露のなさけかけてよ

とあるかへし

もろともにもとの心をくみて見むふる江の水はよしあせぬとも

おなじ頃ちえ子が石濱の莊にてよめる歌を見てそのこゝろにこたへたる歌

つみはやす人やもいづこ誰爲にかきねのすみれ春をわすれぬ

ひづ―漏るゝ

ふる―經る、降る

おほせず―育て上げず

物思ふ袂のひづやいかならむなべての世さへ時雨降る頃

とある返し

なべて世の露もしぐれもこの頃はたもとのものとわびつゝぞふる

また千蔭がもとより神無月になりて殘れる菊にそへて

秋くれてのこれる菊も有るものをわすれがたみもなどや

とゞめぬ

とある返し

秋くれしまがきの菊のそれならば花は散るとも香や殘らまし

きく子は子をうみてうせけるがその子もおほせずなりにければ

かくなむ

千蔭みまかりて七日にあたりける日菊花一枝おくるとて

おもひきや山路のきくを手折りもて袖に泪のふちなさむとは

冬に成りて人々とともに芳宜園につどひて歌よみける時閑

庭霜といふことを

橘の―枝直の姓橘なるよりいふ、續紀に「橘者果子之長上人所レ好淩二霜雪一而繁茂葉經二寒暑一不レ凋（中畧）是以汝姓者賜二橘宿禰一也」

有りし世をしのびぞ出づる郭公なほふる聲をきく心地して

みす子が一めぐりに吉澤臺卿がもとめにて橘のもとに去
年をしのぶといふことを

誰そでに今はよそへむ橘のこずゑはもとの香ににほふとも

枝直のみまかりぬる時千蔭がもとへよみておくりける

世をへてもとこはなるてふ橘のあきにあへじとおもはましやは

おなじ人の十三年の忌に月似レ古といふことを

秋をへて人はふりにし宿ながら月はむかしをわすれでぞすむ

紅葉を見てむかしをしのぶ

手向とてをる袖しぼるもみぢ葉にあまたしぐれの秋はへにけり

長月すゑつかたむすめのきく子みまかりて七日にあたりけ
る日そのはかにまうでて菊の花など折りて手向くとて

はなつむもわりなきわざぞ先だちて我こそかくはとはるべき身に

その頃ちえ子がもとより

いかでわが身をといふ句をおきて懐舊の心を

年ふればたゞ夢とのみたどる世にいかでわが身をうつゝとも見む

夢

數知らず宵々ごとに見る夢をむつのしなとは誰かさだめし

往事如レ夢

しげりあふ夏野の蝶もしのぶらむ花にむつれし春を夢とは

月前無常

おもふどち月見るたびのくりごとにあらましかばといふが悲しさ

蒼生子が身まかりて後七とせになりける頃ぬひ子がもとにて春雨ふる日むかしをしのぶといふことを

春雨はさびしかりけりつれ／″＼を訪ひ訪はれつる人しなければ

標照が十三年の忌に夏懷舊、

かくしつゝこゝらの年をふるものは五月の雨となみだなりけり

貞樹がみまかりける又の年の五月に有りし世を思ひ出でて

むつのしな―六夢・正夢・噩夢・思夢・寤夢・喜夢・懼夢

あらましかば―彼の人の生きてありなば、後拾遺集「世の中にあらましかばと思ふ人なきが多くもなりにけるかな」

ふる―降る、經る

みがくれて—水中に隠れて

くたし—くさし、けなし

しのぶ—偲ぶ、慕

がもな—あれかし

海邊述懐

なげかめや磯のしら玉みがくれて人に知られぬたぐひある世に

ものおもふ頃ひとりごとに

うきをだにあひかたらはむ人しあらばかくまで物は思はざらまし

懐舊

ともすればふりぬる世とてしたふ身を老(おい)のさがとな思ひくたしそ

秋懐舊

むかしべをこふる泪(なみだ)と露しぐれいづれか秋にふりまさるらむ

月前懐舊

おもかげも見し世に似(に)たる秋なれば月のかゞみもむつまじきかな

いつとてもかはらでむかふ秋の月見し世の人もかゝらましかば

有りし世をしのぶが露にかげやどす月もむかしやわすれざりけむ

寄レ夢懐舊

人の世は夢にもがもなゆめならばさめて昔に立歸らまし

冬ごもるまどのすさみに雪を煮てきよきこゝろの友とせよ君

遠き國の人のもとにふみやるとて

遠つ人かりしかよはゞ山河もおもふこゝろをへだてましやは

大學のかうのとのの谷中の莊を見侍りて

おのづからふみのはやしの陰なれば霜のにしきの色ぞことなる

述懐

月花に身をまかせてぞ過すべき世のことわざはさもあらばあれ

おなじ世におなじすさみの友もがなふるごとしのぶ心かたらむ

述懐非レ一

さま〴〵におもひぞいづる憂しといひ嬉しといひて過ぎし昔を

獨述懐

ともすればとはずがたりぞせられける心ひとしき人しなければ

ことの葉の道はかた〴〵わかるともたゞわれのみや昔しのばむ

いざといひてともにそむかむ人もなし世はうきものと思ひ知れども

雪を煮て―茶をたつる也

かり―雁、蘇武雁帛の故事により書信の義にいふ

そむかむ―世俗を遁けん

をくき—岫即ち山の洞ある所の稱

さや—さやか、明か

いりまぢ—伊利麻治、廣瀬の森及び大屋が原、共に武藏の名所

もしほ草—鹽を取る爲めに度々汐水を注ぎ染ましむる海藻をいふ、書き集めの緣に用ひたる也

萬葉集の武藏歌になずらへてよめる

ちゝの實のちゝぶの山の春がすみはるたちしよりあさな〳〵たつ

いざさらば朝菜つまましむさしののをくきが雪も打ちとけにけり

時つ風沖吹くらしもむさしの海もゝ舟人ぞふなよそひする

むさし野はしもと萱はらしげければさやにも見えぬ玉の横やま

春草はまだうらわかしむさし野のをけら花さく秋まちて見む

いりまぢの廣瀬の森にぬさたてゝ大屋原に御祓しに行く

人のから歌つくりてと求むるに久しうさるわざもせでおほつかなければ

かぢをたえ年經ぬる身はからごとに舟こぎよせむよしも知られず

やむごとなきおまへより歌かゝむ料にとてうるはしき紙どもあまた賜ひければ

今よりは波にあらさじもしほ草あさなゆふなにかきあつめつゝ

大窪天民のもとに土瓶をおくるとて

思

よしあしをいにしへ今とたどるにはいはぬ思もある世なりけり

天橋立

神の世に神のかよひし跡なれや雲井につゞく天のはし立

千世古道

ふみ見なば千世の古道たどらめや心のさがによしまよふとも

日本紀竟宴に天武天皇を

いかづちのひゞきも絶えて天地にうけひしことぞまさしかりける

本居宣長が古事記傳書きはてゝ竟宴のうたこひけるに神直日神を

まがつびのあらびあらせじと神直日神のみたまやあれましにけむ

ぬひ子が家にて人々枕草子よみはてつる日ちかくてとほきものといふことを

年たてばきのふを去年と思ふより心づからやはるけかるらむ

さが―嵯峨、嶮巇

うけひし―誓ひし、日本紀に「朕今日與汝等倶盟于庭而千歳之後欲無事奈之何云々」斯くて草壁皇子まづ異心なきを誓ひ、五皇子天皇交々相誓ふ事見ゆ

ちかくてとほきもの―枕草紙中の一條にて「十二月の晦日正月一日の程」

王昭君—前漢元帝の妃、後晉の文帝司馬昭の諱を避けて明妃と改む、涙を飲んで匈奴に嫁したる有名の美妃也

四の緒—琵琶

宿をだに—新古今「白波のよする渚にみをつくす海士の子なれば宿もさだめず」

花にとぢ紅葉にうづむ宮のうちにいく春秋をあはれとは見し

王昭君

まそかゞみむかふもうしとしのぶらむ箏(こと)のすさみのさがにくき世に

いかにして心はやらむ四(よつ)の緒(を)の引きとゞむべきたびぢならぬを

浦島子

たちかへり誰にとひけむ故郷(ふるさと)は見しにもあらずなりはてし世を

法師

雲水をおのがこゝろとおもへばや木のもとにだに跡をとゞめぬ

海人

宿をだにさだめぬ蜑(あま)が釣の絲のこゝろぼそくや世を渡るらむ

樵夫

山がつといひなくたしそ世にふれば誰もなげきをこる身なりけり

心

うしといひ哀(あはれ)とおもふ程なくば世にことの葉もしげらざらまし

蓬がしま—仙人の住む處、蓬萊

すきて—吸ひて

水の江—浦島太郎

鑷—かんざし

翁草—松の異名、老人の意によそへていふ

陵園妾—晉の武帝の宮人が潘岳と通じ事顯はれて陵園（みささぎ）の番人に貶せられ幽閉せられし故事、白居易の詩に「陵園妾、顏色如花命如葉」

雲のうへに袖をつらぬるあまをとめ月のみやこに住むやいつまで

たに水の淵となる世を誰かしるいはもと菊の露はらふまに

時の間に波穂ふみわけいく千里蓬がしまにかへる山人

このゆふべ雲のうてなにのぼりたち霞をすきてつどへるやたれ

水の江が心おぞさやわらふらむ常世にすめる島のしま守

すぎ來つる世の名をだにもいく千とせ霞にこめし桃のみなもと

雲の上は花にあくべき里もあれや世のもゝとせを一春にして

鑷白

おく霜をはらふもはかな翁草みどりにかへる春を待つとて

玉樹後庭花

常にかくありとや花にうたひけむ世は露の間に移らふものを

陵園妾

松の門さしもいく世か經にけらしもろき木の葉を身のたぐひにて

上陽人

宮人斜—宮人を葬りたる叢冢の地、長安城北に在り

まさか—現在の有様、未來に對していふ語

むかしべや云々—唐劉得仁の絶句に「白髪宮娃不ㇾ解ㇾ愁、滿頭猶自插₂花枝₁」

三千とせ—漢武故事に「此桃三千年一開ㇾ花、三千年一結ㇾ實」

かたみぞといふもわりなしかくしつゝ立ちまふ袖を君みましやは

宮人斜

秋風の露ふきむすぶ草のはら今もかざしの玉をこそ見れ

孟門行

なげきこる世のへがたさにくらぶれば岩根ふむてふ山はものかは

閨怨

春の夜の夢のまさかやたのむらむ塵となる身のゆくへ知らずて

舊宮人

むかしべや今もわすれぬ宮姫のなほふりがたき花のかざしば

短歌行

ながしてふ春も一時さく花に心をやらでいつを待たまし

小遊仙

三千とせになるてふ桃をくひもてる翅やほしのつかひなるらむ

花も咲きもみぢもそめて春秋を常にとゞむるわだつみの宮

風きよきあきを軒ばに待ちとりて月のかつらの花もにほへり

林中翠

雨はるゝ楓がしはの夏木立風もみどりになびくとぞ見る

棲烟烏

青柳のゆふかげけぶる枝ごとにねぐらさだむるむら烏かな

寒溪草

溪ふかき雪のした草さながらに春にもあはで年をつむらむ

陰崖竹

世にうときかた山ぎしに生ふる竹さしもむなしき心をぞ見る

婬人怨レ服レ散

ひとり身を千世もとなどかねがふらむ誰が爲にとて惜む命ぞ

愛妾換レ馬

植ゑおきし花をばをらでよそ人の手がひの駒になど心ひく

銅雀伎

むなしき心―竹の節の間の空なるより、虚心坦懐の義にいふ也

やなせ―やなを設けたる瀨

昔がたり―神武紀に「有作」梁取」魚者」天皇問」之對同臣苞苴擔（ニヘモチ）之子」

つみのえ―柘の枝・萬葉に「古にやな打つ人のなかりせば今もあらましつみの枝はも」

ひはだ―檜の內皮、まいはだ

島このむ―庭園の數寄を凝すを好むこと

みほとけにたつる朝なのかたみにもつみおかさじとたのみつる哉

梁

梓弓いるよりはやく見ゆる哉やなせにおつる水のしら波

魚梁

梁うちし昔がたりやつみのえのながれて世々にしのび出でまし

古壁苔　以下卅二首詩題

雨もるゝ軒のひはだのつま朽ちて苔むすかはらいくよ經ぬらむ

垂洞藤

世にそむくかた山ほらの青つゞらすむ人あれどくる人はなし

嶺上雲

心ありてたつとも見えぬみねの雲なに朝ゆふに行きかへるらむ

幽徑石

むかしたれ島このむとて路のべに千引の石はひき殘しけむ

臨軒柱

紫もみどりもにほふみや姫のゆはたの帶ぞ世にたぐひなき

あや

雲鳥のあやをさながらあらはすやこはたが機におればなるらむ

車

行きめぐる千里のはても小車の跡はかはらぬ君が御代かな

帆

風先に鳴戸すぎ行く沖つ舟つくる帆なはやいく手なるらむ

たく縄

海士の子が千ひろたく縄ながく世をくるしとのみやうみわたるらむ

火とり

つれ〴〵の友となぐさむたきものにひとりとのみは思はざりけり

つと

あかしがた波間の月の玉ならば拾ひてこよひ濱づとにせむ

かたみ

ゆはた—絞纈、しぼりぞめの稱

たく縄—栲布の縄にて長くの縁語也

うみ—倦み、海

ひとり—火取、獨

かたみ—菜などを摘み入るゝ竹籠

つめよ―集めよ

いつきの宮―伊勢と加茂とに奉仕せし女王又は内親王の稱、其任に赴く時、天子自ら插櫛を插し與へ給ふ御儀ありし也

やくるおもひ―竹取物語の火鼠の裘の話による

とのゐ―殿上の宿直

散らしけむこと葉の花を木のもとにまたかきつめよ見む人の爲め

筆

おのづから心の見ゆるわざなれば筆とることのはづかしきかな

櫛

さし櫛やさしも久しきためしとていつきの宮にけふたまふなり

もとゆひ

もとゆひの霜はあやしなこむらさき結びそめつる時も有りしを

すだれ

かりそめにすきまおほかるいよすだれ月もれとてや作り初めけむ

かは衣

なか〱にとりも出でずばかは衣やくるおもひはそへざらましを

袋

きならせるとのゐの衣の袋こそあくる人めをつゝむなりけれ

帯

文

しるしおく文はあやしな見ればかつむかしの人に逢ふこゝちして
　石王寺の石もて作れる硯をうすらひと名づけてその硯のう
　らにほりつけたる　石に存くうすらひの文あり
世をわたる人もかくこそうすらひをふむはかしこき心わするな
　越の君の北方のおほせ事にてうもれ木の硯のふたに
うもれ木も今より世にぞさかゆべきこと葉の花の春に逢ひなば

弓

をさまれる御世の守りの梓弓引きなゆるべそものゝふの道
やしま國今もむかしの跡とめてゆはずの貢たゆる世もなし

笠

うちむれて賤がかりとるあし間より見えがくれする難波菅がさ
　やよひばかり自寛の家火にあひてよろづのもの燒けうせぬ
　と聞きて硯筆など調じておくる包紙に

うすらひ―薄氷の意
かしこき―可畏

ゆはずの貢―男の獵りて得たる禽獸を貢すること

つらさに鷄の音をうしと聞きしが、今は老いて夜の長さに、却て寢覺の慰めとなると也

引くうしの—柳文の陸文通墓表に「其爲レ書、處則充ニ棟宇一出則汗ニ牛馬一」

牛

引くうしのたぐひならずや小車のわれとうき世につながるゝ身は

猿

谷ふかみ霜に色そふ木の葉ざる秋はにしきをかづかぬもなし

瑠璃貝

青海のいろにまがへるいさら貝波かきわけてたれか拾ひし

書

天地のとほきはじめも見てぞ知る神代の書を今につたへて

よしやその千世のふる道ふりぬともふみ見て遠き跡は尋ねむ

引くうしのあせあゆるまでつみ添へてふりぬるふみの數ぞ知られぬ

披レ書知レ昔

くだち行く此世のさがも知らざらむふみ見て遠き跡をとはずば

神代山陵考を見てよめる

ふみ見ずばいかで知らまし神の代にいはと立ちけむその跡どころ

に類し、茎は淡黒の皮に包まる、初夏黄色の花を開く

蔭にやはあらぬ—蔭なり

つみ—摘、罪

と波—瀬戸に立つ波

曉の云々—若かりし時は別れの

とだえなくゆきゝのをかのをざさ原玉もなしあへず露ぞみだるゝ

江松老

すみの江の松や神代のたねならむ老いぬてふ名も千年へにけり

榊

大井河入江のまつはそのかみに昔をとひし蔭にやはあらぬ

はふり子がゆふとりかくる玉串に神代のあとは今ものこれり

ゆづる葉

ゆづる葉のゆづる常磐の色に見む立ちさかゆべき宿のためしは

しきみ

明けくれのつとめたゆまぬ法の身につみのこさめや峰のしきみを

鶴立レ洲

あしたづの立てるなりけり澄む月のあかしのと波よると見えしは

曉鶏

曉のうきをつげしはむかしにて寝ざめなぐさむとりの聲かな

そむきし—捨てたる

年のあまり—魏略に出でたる董遇の言に「冬ゝ歲餘視日餘陰雨時餘」

濱ゆふ—海邊に生じ、芭蕉に似て、葉は萬年青

見るがうちに庭の木だちもうづもれて谷よりのぼる峰のしら雲

山家夕烟

みねの庵(いほ)に焚(た)くやましばの夕けぶり心ぼそさを空にしらせて

山家夢

をり〳〵にかよふ夢こそあはれなれ憂(う)しとそむきし都なれども

山家待レ人

我山のもみぢ色こき秋はたゞ世にほこらしきをりも有りけり

山家送レ年

花になれもみぢにあきて山里(やまざと)に世のさが知らで年を經(へ)しかな

田家

いとまある年(とし)のあまりと賤(しづ)のをがまたをりかくるをだの竹がき

濱ゆふ

みくまのの浦のはまゆふ咲(さ)くときはもゝへの波のよるかとぞ見る

岡篠

かははり—扇

おしてるや—おそひたてるの約にて、波の縁より難波の枕詞とす

桃のみなもと—武陵桃源の意

ものへまかる人に扇やるとて

君にまたあふぎてふ名をたのむ間は風のたよりをわすれずもがな

手ならさばおもひも出でよかははりのこがるばかりにそへし匂を

かたらふ人の遠き國へまかるに鏡をとらすとて

いのちあらばさらにも君ともろかゞみ向はむまでのかたみには見よ

難波へゆき侍らむとしける時よみて友だちのもとへおくりける

おしてるや難波ほり江のあき風にすむらむ月をひとりかも見む

旅宿夢

ぬるがうちはわすれむものを海山のうきをまた見る夢ぞわりなき

山家

をさまれる世とて岩ほの中にだになほ人ざとの數そはりゆく

此里にかくれそめしはいつの世と花にぞとはむ桃のみなもと

山家雲

り行くをおくる

ゆき氷みなぎりおつる富士河のはや瀬わたらば君こゝろせよ

ことのまゝのやしろを過ぎば我爲にまたも逢ひみむねぎごとはせよ

山口至言が母とじをともなひて身延山にまうづるに元政上人のふるきためしも思ひ出でられてなむいひやりける

世をへてもかげや澄むらむ法の月むかしの跡をてらしても見よ

小澤なにがしが香取にかへるをおくりて

いざさらばとねの河ふね行きかへりまたとひ來ませ波のよるべを

賀茂季鷹が父のこゝちわづらふと聞きてとく都へのぼるにわかるとてあふぎに添へて

ゆき〳〵てはやくあふぎの風しあれば身のあつしさも君や忘れむ

つくしへ下らむとする人に鹿毛なる馬をおくるといふことを題にて

つくしがた月のゆくへは遠けれど心をかげにたぐへてぞやる

ことのまゝ—事任社、遠江小笠郡己等乃麻知神社の稱、何事も願のまゝに聞かるゝ神とて古來有名也

元政上人—平安の人、年十三彦根侯に仕へ十九母に隨ひて泉州和氣に遊び日蓮の像を拜して願を起し、二十六致仕して僧となる、性至孝老母を扶持して身延山に參詣せしめしは最も有名の話也

あつしさ—暑さに病苦の意を兼ぬ

かげ—鹿毛、影

うまのはなむけ―送別

ふたら山―二荒山、日光山の別稱

廣澤の池―山城の月の名所

豐後の國にかへる人のうまのはなむけしける時

みな人のこと葉のはなもそへて見よゆふ山ざくら折りてかざさば

卯月はじめつかた上柳孝思が木曾路より都へのぼるにわかるとて

今もなほ木曾山ざくら散らずあらばはなの香うつせ旅の衣に

う月ばかり土田延年がふたら山にのぼるをおくりて

なつ山にひらくみのりの花にこそさかりなる世のためしをば見め

八月の末つかた長尾景隆が都にのぼりける時よみておくりける歌

いとまあらば月に先とへ秋の夜のいづこはあれど廣澤のいけ

もみぢ葉にむかししのばゞさがの山みゆきのあとも尋ねてを見よ

心してとひ見よ賤がしわざにも都はふるき手ぶり有りけり

ことの葉の色もまさましおのづから都の人に立ちまじりなば

しはすの二十日あまり七日の日勘解由判官正邦が都にかへ

すむ―住む、澄む

ならはしの云々―孟母三遷の意による

あがりたる世―上古、陶淵明の歸去來辭に「倚南窗以寄傲審容膝之易安」

床の山―近江鳥籠山をいふ

くまもなき心の月のかゞみ山うき世のちりをはらひてやすむ

林下幽閑

村まつのおのづからなる琴の音に苔のむしろの塵(ちり)はらふなり

隣

子をおもふ心知れとやならはしの移りやすさにうつすとなりは

宿かさでかへせるものをみやびをの隣しめつとなどたのみけむ

窓

風きよき南のまどのうたゝねにあがりたる世の心をぞ知る

きさらぎばかり柏木如亭の都にのぼるをおくる

花散らばとく歸り來てわが爲にみやこの春のことかたらなむ

大堀正輔の彦根へかへるをおくる

ちぎりおきてまたぱや床の山ざくら散りなばまたも思ひたつ日を

清原雄風が香取へのぼるをおくりて

もろともにゆかましものをかとりがた鹿嶋(かじま)の崎の花も見がてら

にはたづみ—雨後のたまり水、行潦
うたかた—泡沫
ほりかねの井—武州堀兼井
身をかくすたぐひ—隱者類の
鏡山—近江蒲生郡の西南

有りはてぬ世にぞたぐへむにはたづみたゞしばしなる雨の名殘を

うたかた

うたかたを何はかなしと分きていはむ消をあらそふ人のこの世に

ほりかねの井

汲みそめし人はたが世の爲にとてなほほりかねの井をばのこせし

仙家

とこしへに散らぬ花ある宿なれや霞のいろもくれなゐにして

閑居

身をかくすたぐひとな見そ草の庵にことなくて世を過すばかりぞ

とはれぬを何かなげかむ引く琴もむかふ硯も友なるものを

世のことは思ひわすれつ今日もまた筆のすさみに日をくらすとて

閑居燈

よのことはそむきはてたる窓のうちになど燈火の花を見すらむ

鏡山のふもとに世をのがれたる法師のもとへ

老もわかえし—續日本紀「因覽當耆郡多度山美泉自盥、(中略)或白髮反黑、或頹齒更生(中略)、改靈龜三年爲養老元年」

うみ—海、倦み

手ぶり—風俗

水上（みなかみ）や雨のなごりの山見えてゆふ日にうかぶうぢの河ふね

名所瀧

大君の御代の名にしもおひくるや老もわかえし瀧のまし水

淵

浪風のさがしき世には住むとてもさわがぬ淵をこゝろともがな

瀬

世の中はおきつ汐瀬（しほせ）をゆく舟のからくや誰もうみわたるらむ

海路朝

いさり火のかげは島わにのこりつゝ波にしらめる沖つ百（もゝ）ふね

みやこ

移りゆく世のすがたをも見るものは都の人の手ぶりなりけり

古郷

ふる畑に苔むすかはらいく世經（へ）て野となる里のむかし見すらむ

にはたづみ

詞のちり—歌屑
ゆふの山—豐後木綿山、木綿は手向の料也
日の經に—東方より西方に
心あてに云々—あの邊が富士ならんと推測して見たる白雲は、晴れて見ればその麓に過ぎず

山としもならばこの身をかくさなむうき世の塵よよしつもれかし
やまとのみつもるを何のかひとてか詞のちりの數そはるらむ

名所山

旅人のぬさも手向くるゆふの山たが越えそめて名にはおひけむ

天香山

日の經にふりさけみれば大君の御門おほゆる天のかぐやま

富士の山に雲のはるゝを見て

心あてに見ししら雲は麓にておもはぬ空にはるゝ富士のね

山彦

あしがらの山のやまびことよむなりいづれの峯に舟木きるらむ

山畑

たま〳〵にはたゞうつ人のあるをこそ知らぬ山路のよすがともみれ
なづな咲く花のにほひにくれかねて霞にのこる春のやま畑

晴後遠水

わきて―特に
有りはつまじき
―いつか一度は
死ぬる

むやひ―もや
ひ、舟と舟と繋
ぎ合はすること

笠やどり―雨止
みを待つこと

雲

夕ぐれに雲のたゞよふを見て

ゆくへなきものとや雲をわきていはむ有りはつまじき人の此世に

さだめなき世のすがたぞと見る雲もゆふべはわきて悲しかりけり

雲埋二山路一

泊船むやひわするな沖つ洲にたゞよふ雲は風はやみかも

深山雨

はるかなるうまやの鈴をしるべにて雲の中ゆくあしがらの山

雨中待レ友

たちのぼる谷のうき雲みね越えて檜原がおくに村雨ぞ降る

つれ〴〵のながめよいかにくらさまし笠やどりにも人はとはなむ

夕やみ

夕やみにあさぢがもとはたどるとも月待ちがてらとふ人もがな

山

たかしるや—高治、しろしめす

心づから—我心より

ふる—經る、古

琴後集巻六

雜歌

天

動きなき日嗣の位たかしるや天の御かげを世々につたへて

月のあゆみ星のやどりも行きめぐる天の道こそときをたがへね

雜地儀

盡きもせず動きもやらぬ君が代は山と川とを例にぞ見る

風

やま松にしらぶる琴の聲たてゝたちまふ雲の袖かへすなり

花もみぢ心づからも散るものをとがをば風になどおほすらむ

古寺嵐

かねの音を峰のあらしのさそはずば世にふる寺もありと知らめや

いかなりし契なるらむ秋ごとにうき身を露のおきどころとは

をぶさ—鷹の尾につくるふさ
すゞろ—鈴、坐ろ

をぶさとり手なれぬものをあら鷹のすゞろに人の戀しきやなぞ

寄レ貝戀

いたづらに拾ふ人なきやれ貝をふるされし身のたぐひとぞ見る

寄レ灯戀

いかにせむ秋のなが夜のともし火はかゝげつくせど盡きぬ思を

寄レ金戀

たゝらたて吹くやみ山の岩こがねうちとけてぬる巾としもがな

たゝら—ふいごのこと、岩こがね迄はとけての序詞

寄レ鼓恨戀

かくしつゝ袖になみだのふりつゞみ音にのみなくも恨めしの身や

寄レ鼎變戀

人はなど有りしにも似ずなりぬらむ鼎のあしのたつ名ばかりに

寄レ秋戀

身の秋に絶えぬつらさは數そへどつれなき露のいのち何なり

寄二秋露一戀

しな—品、身分階級
すく—抄く、好く、好色の名
もりすてむ—守りを撤せん
みるめ—海松、見る目
すもり子—孵化せずして巣に殘れる卵をいふ

戀の山のぼるにしなはなきものを何ちりの身とおもひやむべき

寄レ河戀

染むれども薄花いろの紙屋河すくてふ名のみたつぞあだなる

寄レ瀧戀

おもひあまる心は瀧の絲なれやむすぼほれつゝせくよしもなし

寄レ野戀

はてもなくおもふ心にくらぶれば猶むさしのもかぎり有りけり

寄レ關戀

ゆるされぬへだてよ不破の關ならばもりすてむ世も有りとたのまむ

寄二海松一戀

みるめかるわざもかひなしいたづらにあひねの濱をこと浦にして

寄レ鳥戀

いたづらにまだあらはれぬすもり子のかひなく人を戀ひやわたらむ

寄レ鷹戀

みぬめ—攝津三犬女浦に見ぬ目を掛く
あふくま—逢ふ、阿武隈
よるは螢の—「明けたてば蟬のをりはへなき暮し夜は螢のもえこそ渡れ」古今集
袖に—涙にぬれたる袖に

かぢ枕みやこにかよふ夢しあらば妹(いも)をみぬめに舟はとゞめじ

旅戀

たちかへりいつわぎも子にあふくまの松ときくにもぬるゝ袖(そで)かな

ある曹司のまへを通りけるによるは螢(ほたる)のなどいひ出しければ

飛ぶほたるおもひは誰(たれ)もあるものを身よりあまるといはゞたのまむ

枕塵

ふたり寢てうちも拂はゞ木まくらのちりとたつ名もいとはざらまし

寄レ月戀

秋の夜のながき思ひのはてもなしこゝろを月の空になしつゝ
うき事を思ひつゞけて月みればいつしか袖に影のやどれる
恨みわびなみだに月はくもれどもなほおもかげの立ちそはりつゝ

寄レ塵戀

いつよりか空になき名の立ちぬらむちりもつかじと思ひける身を

めかれぬ―始終目をつけて居たる

かひ―峽、甲斐

やさしー恥し
あしかる―蘆刈る、惡しかる

艶女遇二他人一戀

咲きしよりめかれぬ花よあだ人に折られむものと思ひかけきや

泣レ面戀

おもかげをともにうつせばつゝ井づつゐづつの水もむつまじきかな

山家戀

世をよそに住みなす山のかひしあらば人めいとはで逢ふよしもがな

里戀

うつり來てなれぬ大井の里住に君まつ風を聞くぞわびしき

水郷戀

澄みかへりおもふ心をいかにせむ小島がさきのゆきのなごりに

めぐりあふ我ぞやさしき難波江のあしかるわざに年をかさねて

關戀

名のみたゞあふさか山のかひもなしゆるさぬ關を中にへだてゝ

舟路戀

あかしかねしを―君に逢はでは明し兼ねたるに

玉の緒の云々―命のうき思につれなくて持ちこたへたりしがうれしと也

かた絲―よりのはぐれて片方になりたる絲

一夜だにあかしかねしをいつよりかまたじと君をかこち馴れけむ

人ごころかはるならひをたのむかなまたゝうとからぬ折もありやと

思ひかけず絶えたる人の來りければ

うきものとおもひ知りぬる玉の緒のつれなかりしぞ今はうれしき

ふたゝび絶えたる戀

水まさる谷の棚橋またさらにわたすとせしもたゞしばしなり

くり返しものはおもはじかた絲の絶えしながらのうき身なりせば

變戀

ともすればかはるを常の人の世に我のみやなどかくたのみけむ

人ごころかはりにければ

おもふてふことの葉だにもかれはててかはる心のおくも見えけり

色かはる袖はあやしな紫のふかかれとこそ思ひそめしか

おどろく

しのぶれば我によそなる人ごともうき身のうへとおどろかれつゝ

て居ること

みどりの袖―見取、縁、上の「ゆるされぬ」と共に染色の縁語にて綴なしたる也、ゆるされぬは禁色の意、みどりの袖は六位の位袍の色

忘戀

我ばかりねになけとてやみよしののかりにも人の音づれもせぬ

恨レ身戀

ゆるされぬ中のつらさも我からとみどりの袖のうらめしきかな

恨レ久戀

つれなさにたへても年をふる衣うらむとだにも知られてしがな

秋恨戀

葛(くず)の葉にあらぬこゝろのいかなればあきてふからに先(まづ)さわぐらむ

さらぬだに露そふ袖の月かげをいかに見よとか人のつれなき

絶戀

絶えはつる人のこゝろはつらからで思(おも)ひそめしぞ今はくやしき

絶不レ逢戀

僞(いつはり)のことの葉ながらとり出でて絶えにし人をまたやしのばむ

人のつらくなる頃

なつかしとみし世をのみやしのぶらむうかりし節は思ひ忘れて

ふるくものいひ侍りける人に

わすれめや過ぎゆく年の後背山わけまよはじと契りおきしを

年經ていふ

草ふかき野中の清水とだえしてもとの心にまどひけるかな

あひ思ふ

おもひ出でよたなばたつめの逢瀬だにうらやまれつゝいく秋か經し

花もみぢはかなきふしのすさみにも思ひかはせし色は見えけり

われも見つ人にも見えつ春の夢あひ思はずばかゝらましやは

思二三人一戀

山吹にまたも心やひかれなむ梅もさくらもあかぬものから

おもひやす

人を思ふこゝろはいかでよわるべき影となるまで身はやせぬとも

ものおもふ身はとやごもる鷹なれやたゞやせ〳〵になりまさりぬる

もとの心―「古の野中の清水ぬるけれどもとの心を知る人ぞ汲む」古今集

とやごもる―鳥屋にとぢこもり

なき名ならずば―これが噂通の仲にてあらば

くたせ―腐らせよ

いはし水―岩清水、言ふ勿れの意を兼ぬ

何―何故、なぜ

かたやく―鹿の肩骨を焼き、その裂け方によりて吉凶をトふ、難しに掛く

なき名

種をだにまかぬなき名のいかなればかくまで人のつみはやすらむ

なき名たてたる人に

君ゆゑにいひさわがるゝ人言もなき名ならずばうれしからまし

ぬれぎぬ

さらぬだにうき身にきするぬれ衣はしぼる袂をまたくたせとや

名ををしむ

あひ思ふ中とな人にいはし水つひにはもれむうき名なりとも

悔戀

諸ともにとくるにつけて悔しきはつれなく過ぎし昔なりけり

身をすてゝ何もとめけむとりえてもつひにこやすのかひしなければ

占戀

あふことはかたやく鹿のこがれつゝ占門ふ度に音にやたてまし

舊戀

あしたおもなみ—朝は氣まり惡さに

かれし—別れし、枯れし

待たずば—待たずに眠れば

七ふ、三ふ—七編、三編の廣さ、袖中抄に「陸奥のとふの菅ごも七ふには君をしなして三ふにわれ寢む」

後朝戀

またも來む程やちぎらむ別路にあしたおもなみたちかくるとも

一夜へだてたる

人心かはるならひのありといへばうしろめたしやあはぬ一夜も

打なびきいこそ寢られねなよ竹の一夜もかれしならひなければ

二夜へだてたる

ふた夜をばやみのうつゝに過してき待たずば夢におはましものを

遇不レ逢戀

今はたゞ塵のみつもる菅ごもの七ふも三ふもたれかかぞへむ

契りおく事を命にながらへつまたもあふべき此身ならねど

中絶えし身はなか〳〵にいとひつるうき名をだにも思出にせむ

鳥のねをなどさばかりはいとひけむ今はかぎりのわかれなりしを

與レ君後會知何日

あふせをばいつと契らむうかれめのつながぬ舟を身のたぐひにて

り、同じ心に結ぶの縁とす

ひぢ―濡れ

命にかへて―命がけにて祈りたれど、逢へば又逢ひたさに却つて命が惜しくなる

袖のわかれ―後朝のわかれ

こや―これや即ち

あふまでの心はちゞにくだき來ぬ一夜の夢と見はてずもがな

逢增戀

露ばかりかはす枕のほどなさに中々袖ぞひぢまさりける

あはぬ間の心なりせばおもかげの身にそふばかり思はましやは

祈レ逢戀

なか〳〵に逢ひみてこそはをしまるれ命にかへていのりこし身も

年頃あはぬ人に逢ひて後つかはしける

いたづらに經にける年のくやしさも逢ひみてこそは思ひ知らるれ

曉別戀

曉の露をもともにしぼれとや袖のわかれにふる涙かな

兼惜レ別戀

宵の間のかねにもうさは先だちぬこやあかつきをつぐるてふ物

月あかき夜人の歸りて又のあしたおとづれければ

かたぶくをうしと見つゝもあかしにき待つ夜の月のたぐひならねど

しかちなくに―古今集
うらなくきたる―裏無く着たる、心の隔なく來れる
空だのめ―空しき頼み、實なき約束
いれひもの―直衣狩衣等の服に附屬する紐にて、雄紐と雌紐と互にさし入れ結び合はすよ

つらからぬことばぞつらき中々におもひこりよといひもはなたで

不レ逢歸戀

いたづらに歸るこゝろのうす衣うらなくきたるかひだにもなし

雨ふるとて來ぬ人の降らぬにも見えねば

はるゝ夜の空だのめなる月もうし昨日の雨を袖にやどして

待レ使戀

逢ふことはかたしの濱のはま千鳥かよふ跡さへおぼめかれつゝ

逢戀

とけぬ間のうさをうつゝに馴れし身は逢ふ夜も夢と猶たどりつゝ

初逢戀

つれもなくながらふる身と思ひしもおもひわすれし今宵なりけり

戀ひ〳〵ておなじ心にいれひものむすびそめつる今日ぞうれしき

うれしさをつゝまむものを昨日までほさぬ袂と何かこちけむ

はじめてあへる

見えじ—見られじ

つゝまし—氣が置ける、遠慮せられる

なりぬ—物に成つたの意に實がなりぬを掛く

ならぬ—鳴らぬ、成らぬ

逢にしかへば—「命やは何ぞは露のあだ物を逢ふにしかへば惜

馴戀

おもひ出でてかたるも悔しなれぬ間の心くらべにすぎし昔を

馴れ顔に人に見えじと思ふより隔てなきにも心こそおけ

馴不レ逢戀

思ふとはさすがにいはぬ中なればなるゝにつけてつゝましきかな

憑レ媒戀

よそながら我しめゆひし園の梅なりぬと聞くもうれしかりけり

人にうたがはるゝ女にかはりて

一すぢにおもひかけひのいさら水よそにはわけぬ心とを知れ

不レ逢戀

あふまでとたのむ命をともすればたえねと思ふをりも有りけり

神垣にかくる小鈴のしめ朽ちてならぬ戀にも年をふるかな

いとせめて逢ふにしかへばと思ふ身も只いたづらに消えむとやする

詞和不レ逢戀

とだえせしくめの岩ばしいたづらにふみ見てのみも思ふころかな

被レ返レ書戀

玉づさはよしかへすともむすびめのかはらばせめて見つと思はむ

度々返事せぬ女に

いくしほと染めしやいづらなれ衣たゞ口なしの色ふかくして

ふみかよはして久しくなりぬれどつれなき人に

いたづらに心はそらに月日經ぬ雲のうはがきかきも絶えなで

祈經レ年戀

祈ることいつかかひあるみしめ繩たえぬ思ひに年をかさねて

契レ久戀

こがるべき程やしのばむ貴船河ながれてすゑの世をたのみつゝ

逢ひみての後せの山のみねの松かはらぬ色をちぎりともがな

年月をへだてゝ契りながらさもあらぬ人に

うらもなくたのみて年をふる衣いろかはらむと思ひかけきや

ふみ―踏み、書

雲のうはがき―雲は「そらに」の緣語、文の上書をいふ、文は絶えず書きながら心には情もなくて月日を經たりと也

後せの山―若狹後瀨山に後の逢ふ瀨を掛く

きくの濱—豊前聞長濱、聞くに掛く

よそに云々—他の方と疎遠にならば或は我に打解くる折もあらんと也

うど濱—駿州有渡濱に疎しを掛く

聞戀

音にのみきくの濱邊にひろふてふかひなく人を戀ひやわたらむ

見戀

今ぞ知る見ざりし程にしたひしは數にもあらぬ思ひなりけり

稀見戀

ほの見つるをりわすれめや花ざくら霞のよそに身をへだてつゝ

われにとけなむ

よそに君うとくなるをぞたのまし我にとけなむをりも有りやと

白地戀

あふも又なげきかさねむふし柴のしばしばかりの中のちぎりは

梓弓おきふしになどしのぶらむとるてばかりの契りなりしを

通レ書戀

逢ふことは世にうど濱のはま千鳥かよふ跡こそ今はたのまめ

見レ書戀

やさし—恥し。

はねかづら—花鬘の轉、女子の頭の飾、花簪

ねぬ縄—草の名、水底に生ふるより「しづみて」の縁とす

有るまじき人を思ひかけて

いひ出でむ身のたぐひかは思ふぞと知られむだにもやさしきものを

童(わらは)より見ける人を心かけて

はねかづらなつかしと見し面影をかけてや今(いま)に戀ひわたらまし

さかぬ間(ま)も心にかけしはつ櫻あだになときそ花の下ひも

しらぬ人

散りてこそよそにもしのべことの葉は我(われ)に見よとのすさみならねど

五節の夜人に

ためしあれば天津(あまつ)をとめも見るものを世にあひがたき人や何なり

忍戀

くるしとて言(こと)になでそねぬ縄(なは)のうきにしづみて年はへぬとも

もらさじとしのぶ泪(なみだ)のいつよりか我心にはそむき初(そ)めけむ

互忍戀

うきふしはおのがさまゞゝありといへどしのぶ心はかはらざりけり

うち出でむ—口にいひ出すを打出濱に掛く
かひ—甲斐、貝
むすび松—紀州岩代の海岸なる老松、齊明帝の御宇、有間皇子叛を圖りて捕へられ、途中その枝を結びて歎詠せる松也
いなさ—遠州引佐細江に否の意を掛く
みをつくし—澪標、身を盡し

木がくれて人に知られぬ口なしの花にうき身をたぐへてや見む

身を觀じていひ出でぬ戀

はまの名のうち出でむことも思はめやかひなき海と身を歎きつゝ

身のほどを思ひ知らずばいとふともしたふと人につげまし物を

思不レ言戀

おもへどもえぞいはしろのむすび松とけぬ心をいかにしてまし

いはでおもふ

言に出でていひも盡さむものならば人に心をもらさざらめや

色に出でむ時しなければ木がくれて人に知られぬ口なしの花

たき河の音にたてゝはいはずとも下にむせぶと知られてしがな

言始戀

人はよしいなさ細江のみをつくしつくす心をいはでやまめや

いひはじむ

つま琴の音にたてそめてもらすともひかれざりせばいかにしてまし

琴後集巻五

戀歌

戀

やよいかにますらたけをの心すら戀にはあへぬならひなるらむ
むさしうたとて相聞の心を

玉河にしづくしら玉みえずともとらではやまじしづく白玉

水鳥のをさきの池のあつ氷つひには解くるをりもあらまし

さき玉の津にすむ鳥の馴れるつゝ人になるべき妹ならなくに

初戀

戀ひそむる心ばかりは嬉しとも憂しともえこそ思ひさだめね

わけ初むるみをの杣山おくまではおもひもいらでこふる頃かな

不レ言戀

あへぬ—かなはぬ、まける

をさきの池—埼玉郡小崎沼に尾を掛く

みをの杣山—近江高島郡水尾山

かへらむ春―病氣の全快を回春といふによそふ

とし―年、疾し

なやらふ―十二月晦日の夜邪鬼を祓ふ式

降る雪はとしの關ともなりななむひまゆく駒も立ちとまるべく

こゝちそこなひてわづらひける年のくれに

行く年はとゞめまほしく思ふかなかへらむ春をまつ身なれども

世のさかえもとむべき身にしもあらずむなしき名を人に知られむのすさみもなければわがおきふしこそいと心やすけれ、やう〳〵かたぶき行くよはひの今はむそぢにもあまりぬれどもとよりあめつちのことわりを知れゝば今さらに年の暮るゝもおどろかれず

のどかにも過ぐる月日をこゝろからとしとは人の何名づけけむ

追儺

雲の上になやらふ時や來にけらし四の御門につどふ宮人

なやらふ雪ふる

伴のをがためしとて射る蘆の矢は御門の雪にみだれあひにけり

鹽木―鹽をやくに用ふる薪の稱

三のあまり―三餘、冬は歲の餘、夜は日の餘、陰雨は時の餘、魏略に出でたる董遇の言

海邊歲暮

こりはこぶ鹽木と共につむとしやいづれかからき浦の海士人

まほかけてなだ越す舟とゆく年といづれかはやき浦のあま人

老少送レ年

我もまた花のためにぞ春またむ老をなげかぬ人にならひて

學者惜レ年

たのみこし三のあまりも何ならずけふ一年のくれぬと思へば

うかれめ年を惜む

ながれゆく年にまかせてあだ波をいつまで袖にかけむとすらむ

雪與レ年深

暮れて行くとしの日數をふる雪は我身につもるものとやは見ぬ

年のはての雪

跡をしもとゞめだにせでゆく年のつもるや雪になどならふらむ

年のくれに雪の降りければ

の勸盃といふ、菅府の中米、和氣の栞攝津國栢梨の莊を以て左近府に寄す其地利にて官人以下酒膠の料に宛つと江次第裏書に見ゆ

老かくるてふ—「鶯の笠にぬふてふ梅の花折りてかざさん老かくるやと」古今集

佛名のあしたわかるゝ僧に

白雪(しらゆき)のふりすてゝけふわかるとも山たち出でばまたもとへ君

冬日

世のさがも知らで春待つすみかには暮れやすき日も長閑(のどか)なりけり

冬至の日に

咲きそむる梅の色香(いろか)に知られけり春に先(さき)だつはるの心は

依レ花待レ春

身にそはることも思はで來(こ)む春を花ゆゑいそぐ年の暮かな

としのくれに

ふりにける身にも春こそいそがれ老(おい)かくるてふ花を待つとて

歳暮松

山人の市路(いちぢ)にはこぶ松の葉のかはらぬ春を明日(あす)やむかへむ

閑中歳暮

ゆく年もかくはをしまじ世の事に思ひまぎるゝ昔(むかし)なりせば

の舞は淨御原天皇の製する所也、相傳云、天皇吉野宮に御す日暮に琴を彈き給ふ興あり俄爾に前なる岫より雲氣忽に起る疑ふらくは髙唐神女の如き髣髴として曲に應じて舞ふ他に見る人なし袖を擧げて五たび飜すこれを五節と云々」

かへりだち―祭終へて後再び宮廷に歸り來て舞ふこと

荷前の使―年末朝廷より十陵八墓に幣帛を奉る使者

わがにはあらぬ―韓神謠をいふ

つくしのわた―被綿「かづけわた」とて御佛名の時導師幷に衆僧に綿を被け賜はる也、筑紫地方より産する綿古來殊に名あり

栢梨の酒―栢梨

臨時祭

夕されば みはしの雪に跡つけてかへりだちする雲のうへ人

荷前使

みてぐらを君が御門にはこぶなり今ぞ荷前の使たつらし

神樂

はふり子が手にとり持ちてあそぶなりわがにはあらぬ神の御杖を

ゆふだすきかたにとりかけとる杖もあなたふとしや神の宮人

から神のかみのみまへによもすがら大和の琴の音もすみにけり

朝倉やあづまの琴の音もそひて霜にすむ夜のおもしろきかな

榊とり鉾とる袖もしら〴〵と霜うち拂ふ神のみやつこ

佛名

身につもる罪をつくしのわたなればけふ法の師にかづけ初めけむ

佛名の導師にかづけものする

ためしとてかづくるわたにとり添へて醉をすゝむる栢梨の酒

ならはざりし―習はしにては無かりし

灰となりゆく―枯木冷灰、老いて情の薄れ行くこと

おもひいりてや―深く思ひ込みて、いり炭の縁

あかひも―舞姫の衣に掛くる紐の稱、あかぬの序詞

よしのの宮―江次第に「本朝月令に云ふ、五節

雪霜の寒さもたへて草の庵にすみならすべきよすがにはせよ

老人さむさをいとふ

おもほえず寢ざめの袖ぞこほるなる昔はかくはならはざりしを

埋火

灰がちの色をも霜と見つるかな更くる夜寒きねやの埋火

時しあらばまたかきおこせ埋火の灰となりゆく老のこゝろも

爐邊閑談

もろともにむかふ火とりのいり炭のおもひいりてや昔かたらむ

爐邊懷舊

うづみ火のうづもれし身よいかにして昔を今にかきおこさまし

豐明節會

をとめ子が衣にかくるあかひものあかぬは舞のすがたなりけり

五節

みこゝろをよしの宮のためしとや袖かへすらむ今日の舞姫

雪の中におもひをのぶ

花さかむ春にあふよや待ちて見むとしふる雪のうづもれし身も

鷹狩

狩人の朝たつ袖のしのぶずりみだるゝ雪にきほひてぞ行く

のる駒のあがきをはやみ大雪のみだれていづる御狩野の原

大鷹狩

みかり野は朝風寒し雪つもる遠山ずりの袖こほるまで

獵場風

御狩野のかぜをはげしみますらをが空とる鷹やあはせわぶらむ

遠近炭竈

いかばかり炭やくとてか遠近のみねに樵りつむ眞柴ならしば

人のもとに炭やるとて

みやこ人わが山ずみをいかにぞと思ひおこさばうれしからまし

大原の賤が手わざをせめて君夜ぶかき冬の友とだに見よ

大鷹狩―馬琴歳時記引く所の滑稽雜談に「小鷹を秋とするは鶉雲雀その外秋の小鳥狩なり、大鷹は冬として鶴鴈鴨の類を狩る也」

山ずみ―山住、山炭

思ひおこさば―思ひおこす、火をおこす

といひ、中高にして漆塗なり

宮姫の—萬葉巻二に「天皇賜藤原夫人」御歌一首、我里に大雪ふれり大原の古りにし里にふらまくは後」これちを指すにや

やその湊—多數の湊

消えむ消えじ—枕草紙なる雪山の爭の話による

とね河や消えせで波にながれゆく雪にも今朝はうはにごりせり

名所雪

宮姫のむかしおぼえて大原のふりにし里に雪ぞつもれる

あしがらやあしの海づら氷る日ぞ神のみさかに雪は降りける

社頭雪

御手洗の岩うつ波もうづもれて雪しづかなる加茂のみやしろ

禁中雪

もゝしきや雪うち拂ふ朝風に御階の櫻散るかとぞ見る

曙雪

雲はるゝをのへは雪にあらはれてまだ明けはてぬ山もとの里

雪中眺望

見わたせばやその湊もくまぞなき雪に明けゆく鳰の海づら

雪中遊興

雪山の消えむ消えじをいつしかとおぼつかなくもふる日數かな

さして—目指して、笠の縁語

雪の山—雪を積みて作れる小山

市女—行商などする女、そのかぶる笠を市女笠

眞楫とるたもとに雪をはらひつゝさして漕ぎよる笠縫の島

閑居雪

訪ひ來べき人しなければ庭の雪にこゝろおかれぬ草の庵かな

たまくに人もや訪ふとおもりゆく松の雪をも拂はでぞ見る

世にそむく宿とや雪も隔つらむ今朝はとなりも道見えぬ迄

やむごとなき殿に雪の山つくらせ給ひけるを見よとてめしたりければ簀子に侍りけるに簾のうちより祝のこゝろをこめて歌よめとおほせごと有りければ

此殿につくれる雪の山にこそ千世をつむべきためしをも見れ

千蔭がもとにやどりけるあした雪の降りたりければ

かきこもる小笹がもとにやどらずばよにおもしろき雪を見ましや

市中雪

ゆきかよふ里の市女が笠のはにはらひもあへず積る雪かな

河雪

ふるかひ—經る甲斐、世塵の外に脱れて住む甲斐、降るに掛く

雪の山—釋迦難行の檀特山を一に雪山といふ

ゆるぎの森—近江高島郡、枕草紙鷺の條に「ゆるぎの森に獨はねじと云々」

山家雪

山里に雪みる日こそ世の外にふるかひありと思ひ知らるれ

山里に雪降れり

來む人は思ひもかけぬ山ざとに友まつ雪や誰にならへる

遠山見レ雪

かひがねの今朝より白く見ゆめるは夜半のしぐれや雪となりけむ

すみのえの浦わの波にまがふまで雪かすかなる淡路しま山

志賀山越に雪の降りたりければ

御佛の法にあふ身をたのみつゝ雪の山ゆく今日にやはあらぬ

杜雪

風吹けばゆるぎの森に散る雪をねぐらの鷺のたつかとぞ見る

杣雪

おしなべて梢の雪となるときはくち木の杣も花咲きにけり

鳥雪

ふりはへて―わざわざ、雪降るの縁語

いろもなく―風に紅葉の散り盡したるをいふ

色かへぬたけの緑もうづもれて千世をこめたる園の雪かな

松竹に雪つもれり

消ゆる世はあらじとぞおもふ松竹にちとせをかけてふれる白雪

松に雪の降りかゝりたるを

ふりはへて雪おもしろき宿とへば友まつがえの陰ぞたがはぬ

雪の木に降りかゝれるを

いろもなく見はてし風の梢をもふりすてがたき今朝の雪かな

散りかゝる梢の雪の花なるは今日よりはるの心知れとか

足柄山雪

旅ごろも衣手さむしあしがらの關吹きこゆる雪のあさ風

足柄關雪

たび衣雪にきほひて出でたつやむちうつ駒のあしがらの關

田家雪

朽ちのこる門田の鳴子音さへもうづもれはてし今朝の雪かな

いひなくたしそ—言ひくさす勿れ

もゝしきや—初雪の見參を歌へる也

いさゝめに—おしるしばかり、僅に

さやげり—さやさやと鳴りてあり

雪

み山木といひなくたしそ花ならぬ陰やはいづれ今朝のしら雪

老が身のかゝらましかばふる雪にくち木も花のさくをこそ見れ

もゝしきや玉の砌にあとつけてけふ初雪をいはふ諸人

初雪

色ながら木葉散りしく苔の上に見そむる雪のめづらしきかな

けふよりやみやこの人も待ちてみむ初雪降れり宇治の山里

初雪降りける日

はつ雪はうれしかりけりいさゝめに降るも友待つよすがと思へば

水路新雪

とまり舟苫のしづくの音絶えて夜半のしぐれぞ雪になりゆく

浅雪

庭の面の苔路ばかりはうづもれて枯生のすゝき雪にさやげり

竹雪

たぐへ―比して

ぬしわく―主を見分け得る

つがはぬ―一番とならぬ、雌雄別々になりたる

玉笹に云々―源氏物語「拾はゞ消えなんとする玉笹の上のあられ」

水鳥

水鳥のところさだめぬ宿をもうき身のうへにたぐへてぞ見る

水鳥知レ主

巣だちせし池のかりの子年をへてぬしわくばかりなるが哀さ

澤水鳥

こすげかる人もやかよふ澤水にところさだめぬかものむら鳥

河瀬にをし啼く

夜を寒みつがはぬ鴛鴦の聲すなり岩ねの水や氷りそめけむ

あじろ

波のうへの網代のかゞりしらむ夜に猶こがるゝは紅葉なりけり

あられ

かきくらし降るやあられの玉笹にたまると見ればかつくだけつゝ

山家霙

雪になる高根ははやくましろにて麓のさとにみぞれ降るなり

よる―寄る、夜

かつはれて―そばからすぐに晴れて

寒流帶レ月

霜氷るあしの枯れ葉に風さえて月すさまじき淀の川なみ

浦千鳥

よる波にみだるとすれど浦なれてまた立ちかへるむら千鳥かな

曉天千鳥

沖つ風雲井に吹きて有明の月にみだるゝ村千鳥かな

よるの千鳥

舟とむる磯山かげのむら千鳥なみのよるこそ哀添へけれ

波の音にうきねの枕夢さめて心すむ夜をとふ千鳥かな

月前千鳥

うきものと何おもはまし磯まくら夕なみちどり月に鳴く頃

すむかげのくもると見ればかつはれて月に橫ぎるむら千鳥かな

河千鳥

河島によるかとすれば立歸るちどりや波とおもふどちなる

比良、志賀—近江琵琶湖畔の名所

ひまもる—すきまより漏れてさし込む

月にさはらぬ—月の池に映ずる邪魔にならぬ

みぞれ降る比良の大わださへ暮れて氷によどむ志賀のうら舟

冬月

冬の夜は霜にくもれる月よりも嵐に更けし影の寒けさ

閑庭冬月

浅茅生のしもには跡もなかりけり月のみひとり訪ひならしつゝ

世の人に見せましものを霜むすぶ浅茅がもとの冬の夜の月

寒閨月

敷妙のそでの氷となりにけり閨のひまもる冬の夜の月

故郷冬月

里は荒れてくまぬ古井の氷る夜は月さへかげをとゞめざりけり

破林霜後月

いつしかと霜を落葉にふりかへて梢くまなき冬の夜の月

冬月水にうかべり

下折の枯れ葉は波にうづもれて月にさはらぬ池の村蘆

柴を燃して寒さを凌がんと也

いさらゐ―小さき井

鳰の浮巣―鳰は鳧に似て小さく、巧に水をくぐる、巣は木の葉藻など集めて水上に浮べ造る也

冬はまた朽葉まじりの落椎を紅葉の後の山づとにせむ

暁残雁

霜けぶる有明の月に空はれてまれなる雁の数ぞ知らるゝ

氷

くみすてし跡よりやがてこほるなり片山本のいさらゐの水

氷始結

たきの絲はよどみも見えぬ山河にあさ瀬の氷先ぞむすべる

氷留二水聲一

氷ゐて落葉にとづるいさら水けさは聲さへ埋もれにけり

夜の間にや氷り果つらむ更け行けば軒のかけひの音絶えにけり

湖氷

つくばねの雪になり行くあしたより氷りそめたる鳥羽の海づら

しがの浦や蘆間の氷むすぶ日は鳰の浮巣も流れざりけり

氷駐レ舟

ふるの―降る、古野

大よどの濱―伊勢多氣郡大淀の海邊

寒さわすれむ―

枯野を行くとて

霜やたびふるのの千草枯れふして花に分來し面影もなし

枯れたる荻につけて人につかはしける

冬されば音づれ絶ゆるをぎの葉に君ならはむと思ひかけきや

寒菊

霜の後に咲くてふ菊の花ながら下葉は秋の色やのこせる

池寒蘆

朝氷むすぶや波の音絶えて霜にしづまる池の村蘆

濱邊寒蘆

よる波も蘆のかれ葉に音そへて夕風さわぐ大よどの濱

冬嶺秀㆓孤松㆒

もみぢ葉は風にまかせぬ木々もなしひとり尾上の松をのこして

椎柴

冬ごもる峯のしひ柴しひてだに寒さわすれむよすがにぞ刈る

—源氏物語「げにすさまじきものにいひおきたるしはすの月云云」

おもひ草—女郎花の異名とも、露草又は龍膽の異名ともいふ

かるゝ—枯るゝ、交通の絶ゆる意を兼ぬ

冬朝

日影さす淺茅が原の朝じめり夜の間の霜のなごりなるらむ

山家冬朝

山がつのさゝのしのやに朝餉たくけぶりや夜半の落葉なるらむ

寒草

たゞしばし冬田にのこるそば麥の霜にまがへる色もめづらし

冬の野のをばなは霜に枯れふしてまねかぬ袖を拂ふ夕風

あはれにも殘るか春をおもひ草しもの尾花にまじるみどりば

野徑寒草

行く人もすさめぬ野路に枯れ立ちてつれなく見ゆる女郎花かな

岡寒草

霜のうへの路さへ絶えて冬はたゞかるゝゆききの岡のかや原

庭寒草

吹く風にみだれし庭の絲すゝき今朝は霜にぞむすぼほれ行く

貴船河―山城愛宕郡貴布禰神社の御手洗川

さりげなく―然か晴るゝ様子もなく

すさまじげなる

落葉

木枯のたえず音する山里は苔路によそのもみぢをぞ見る

大比叡や小比叡おろしの音さえて木の葉ふきまく志賀の辛崎

落葉浮レ水

もみぢ葉を波もてはこぶ貴船河きのふの秋やこゝによどめる

河水にもみぢ流る

落ちたきち水泡さかまく谷河にもみぢみだるゝ夕あらしかな

庭落葉

かき拂ふことを惜しとて日をふれば道さへ絶えつ庭のもみぢば

車中落葉

もみぢ葉を風のさそへる小車はさらに錦の下すだれせり

月の夜木の葉の散るを見て

月かげのはれ行く空にさりげなくしぐるゝものは木の葉なりけり

散りまがふ紅葉に月もくもる夜はすさまじげなる影としもなし

いたゞく霜｜菊の花の上の霜と我頭の白髪と

みながらは｜そつくり全部は

殘菊

散りのこる菊も我身にたぐへ見むいたゞく霜やいづれ増ると

殘菊ねやにかをる

なごりぞとかをる枕もあはれなり伏屋の菊の秋におくれて

山家殘菊

のがれすむ身のたぐひとて世の秋におくるゝ菊も哀とぞ見る

神無月ばかりにうつろひたる菊に霜おけり

みながらはうつろひはてぬしら菊に猶まがへてや霜の置くらむ

霜

朝まだき門田の鳥やあさりけむ霜に跡あるまへの棚はし

霜夜聞レ鐘

置きそはる軒ばの霜の深き夜に聞きもまどはぬ鐘の音かな

露結爲レ霜

日影うときかたへは霜となりにけり夕風さゆる岡の露はら

衣手の里—山城葛野郡の名所、袖をさしかざすに掛く

秋だに云々—芳宜園橘千蔭は文化五年九月二日歿す

一しきりはるゝ跡よりしぐれ來てまたさしかざす衣手の里

時雨陰晴

はるゝかと見ればしぐるゝ空の月雲のやどりやさだめかぬらむ

述子の君の御もとよりもみぢにつけて

神無月しぐれに染みしもみぢばの散りうせぬ間を君にと
ぞおもふ

とのたまふかへし

もみぢ葉も君にひかれてわが爲にきのふの秋のいろやとゞめし

かみな月五日人々と共に少林院にまうでけるに芳宜園の翁
いまはのきはまでもけふの山ぶみの事いひつゞけられしを
思ひ出でて殘る紅葉を

誰が爲にのこるもみぢぞ契りおきし人は秋だに見はてざりしを

殘るもみぢを尋ぬ

道かへてまたや尋ねむきのふ見し端山は秋の色ものこらず

きゝの篠屋―篠葺の陋屋

樵路時雨

袖ぬれてかへる木こりにことゝへば高嶺の雲はしぐれなりけり

山中時雨

箱根路は時雨來にけり富士の根を雲立ちはなれ行くとみしまに

山家時雨

山かげやならの葉ならで音もなしかやの軒ばにしぐれふる頃

閑居時雨

木の葉ふる音を軒ばに先だてゝやがて時雨をさそふ山風

閨時雨

世をよそにふる身をだにももらさじとさゝの篠屋をとふ時雨かな

行路時雨

なかなかに友と聞くこそ哀なれねざめがちなる夜半の時雨を

里時雨

おくるゝもおなじ木陰を尋ね來て野路の時雨にあひやどりせり

縣居の翁—加茂眞淵
少林院—品川東海寺の地中
きてを見む—着て見ん、來て見ん、をは咏歎の助辭
ならの葉—楢の葉、奈良の宮に掛けて眞淵の萬葉ぶりを世に廣めたる功を稱す

時雨

雲過ぐるみねは夕日のかげ見えて麓のさとに時雨ふるなり

神無月ばかり縣居の翁のみまかり給へる日にみはかにまうでて少林院にて人々と歌よみけるにしぐれといふことを題にて

としごとに山分衣きてを見む時雨の雲にいざなはれつゝ

ふることは世にあらはれつならの葉にさしも時雨の音たてしより

夕風のなごりしぐるゝ峯の松たかきしらべをうたふとぞ聞く

かへるさにしぐるゝ袖はほさできむ山のしづくをかたみと思へば

初冬時雨

むら紅葉なほ散りのこるかげとめて今一しほと時雨きにけり

朝風のさそふもみぢにあらそひて梢にさわぐ初時雨かな

山路時雨

もみぢ葉を袖につゝまぬ人もなし時雨と共に山めぐりして

朽葉―かさねの色目、表山吹に裏黄

白重―上下共に白き重ね、四月と十月との衣更及び夏時之を著用す

あらし―嵐、非じ

琴後集 巻四

冬歌

十月ついたち秋のなごりなき心を

木々はみな色なきのみか今日よりはあらぬ朽葉を袖にかさねむ

もみぢ散り鹿の音たゆる山里は秋をきのふとおもはざりけり

神無月ばかり山里にやどりて

木の葉ふるかた山かげのかり枕こゝろすむにぞいを寝かねつる

冬の衣かへ

きならしゝ露分衣ぬぎかへてけふよりしもの白重せむ

うらもなく月をば又もやどさまし時雨にぬるゝ袖のくち葉に

深草の里を冬によせて

とふ人もあらしにいとゞ門さしつ野となる里の冬枯の頃

つと―土産
をしか―惜し、小鹿

飫くよなき山路の菊の花も見つもみぢをつとに折れるのみかは

晩秋鹿

眞萩散りもみぢ亂るゝ山ざとに秋ををしかの音にたてゝ鳴く

長月つごもり山里をとひて

山里は秋のなごりぞあはれなる落葉まじりに尾花散る頃

こがれ—色濃くなる意に漕がれを掛く

花づま—萩をいふ、「わがをかにさを鹿來なく初萩の花妻とひに來なくさを鹿」萬葉集

長月なかば島このみ給ふ家にあそびて

ふねよせて誰も見よとや中島のもみぢも波にこがれ出づらむ

關路秋風

ゆく秋の梢をさそふ山風にもみぢ吹きこす足柄の關

秋霜

おく霜にうらがれわたる草の原かくていくよの秋かすぐせし

朝しもの光や月にそへて見む秋もなごりの有明のころ

くれの秋

しぐるとも露も散らすな紅葉にけふゆく秋をかけてとゞめむ

さをしかも聲なをしみそ花づまに別れむ秋は今日にやはあらぬ

眞はぎ原鹿の音うとくなりにけりなが花妻を秋はてぬとか

暮秋朝

のこりなく染むる梢の朝しもに更け行く秋のほどをこそ知れ

暮秋興

城葛野郡にあり、桓武天皇以來の芹川行幸の御道筋也

こがるゝ―焦るゝ、色こき意に漕がるゝを掛く

みかさの山―三笠山、笠の縁にていかにもりてかといふ也

いがき―齋垣の意、神社のまはりの垣、みづがき

木々の色も山路もふかくなりにけりはゝそにつゞくはじの村立(ならだち)

家路(いへぢ)をも何かいそがむもみぢばの下照(したて)るかげは暮れぬともよし

江紅葉

大堰(おほゐ)河(がは)入江ににほふもみぢばのこがるゝかたに舟はとゞめむ

社邊紅葉

露しものいかにもりてか神のますみかさの山はもみぢしぬらむ

朝熊(あさくま)やかゞみのみやのむら紅葉下照(したて)るかげぞ世にはことなる

神のやしろのあたりをまかりけるにいがきのうちのもみぢを見て

行く秋をひきとゞめたるしめのうちに匂(にほ)ふ紅葉はあかずもあるかな

月前紅葉

梢(こずゑ)よりもり來るかげの霜なれば月も紅葉をそむるとぞ見る

瀧紅葉

布引のたきのしら絲それをだに村濃(むらご)に染めて散る紅葉かな

松間紅葉

染めわたす色をもみぢにゆづりてや松は聲のみなほしぐるらむ

森紅葉

散らぬ間を折りてかざさむむらもみぢ松の嵐のうしろめたさに

林紅葉

秋のいろはあさかの森のむらもみぢしぐれの後ぞ又も來て見む

故郷紅葉

そめわたすかた山ばやししげけれど露ももらさぬ秋のいろかな

箱根紅葉

あれにける志賀の都のむら紅葉にしきだにはれ昔しのばむ

行路紅葉

箱根路はもみぢしにけり旅人の山わけごろも袖にほふまで

散りしけるそはのもみぢに跡つけて霜の上ゆくみねの柴人

みゆきせしむかしの秋のあととめて紅葉を分くる千世の古道

うしろめたさに―心配なれば、氣懸りなれば

あさかの森―伊勢淺香山に淺しを掛く

そは―岨、けはしき山路

千世の古道―山

をはつせの山—信州小長谷山

林葉漸紅

紅ににほふ林も下かげはみどりをのこす秋のこのごろ

黃葉

露をだにもらさぬ松の下もみぢうすきながらに秋を見せけり

紅葉深

檜原さへにほふばかりになりにけりもみぢ色こきをはつせの山

山皆紅葉

峯も尾ももみぢ照りそふかゞみ山くまなく見ゆる秋のいろかな

紅葉勝レ花

花よりもあはれはふかしみ山木のおのがいろ〳〵紅葉する頃

紅葉留レ客

もみぢ葉のちらぬかぎりは山里に秋はつまじきこゝちこそすれ

家路をも誰かおもはむもみぢばに心をそめぬ人しなければ

山里にまくらからずばむらもみぢ昨日にまさる色を見ましや

みふねの山—大和吉野郡御船山
かさとりの山—笠取山、山城醍醐山の別稱、笠取の縁にて雨はもらせしと續けたり

東海寺の山ぶみに菊もみぢさかりなる頃山里をとふといふことを

いざといはゞ又も來て見むもみぢばも菊もえならぬ秋の山里

蔦

染めわたす梢のつたの村もみぢ秋はまづさへ色になりつゝ

紅葉

しぐれするみふねの山はもみぢ葉の色こき秋にまづこがれけり

かさとりの山のもみぢば色ぞこきいつかしぐれの雨はもらせし

しぐれする雲にくもれる鏡山下てるいろはもみぢなりけり

紅葉淺

一枝はまづこそたをれ薄もみぢ青きをおきてかへる山路に

そめのこす千入のをかの薄もみぢ秋もおくある心地こそすれ

紅葉淺深

一むらのたかねのもみぢ先そめて麓ぞ秋におくれがほなる

きせわた―菊の花を蔽ひて霜をふせぎ、兼て香を移す爲めの綿

山人―仙人

とあるかへし

下露をふちとたのまば菊の花霜にうつろふことな習ひそ

閑庭菊

おのづからしづけき宿の手ずさみにつくろひ添へつ菊のきせわた

菊閑中友

世をいとふ人のたぐひときくの花うゑて心の友としも見む

この宿に千世をもちぎれ世のうさはいざしら菊の花に馴れつゝ

月の夜きくを見て

見れどあかぬにほひなりけり長月の光そへたるしら菊のはな

月照二菊花一

さま〴〵の色ににほへる村菊はよるさへみよと月やてらせる

照る月の光はしもと見えながら老せずにほふ白ぎくの花

菊契二多秋一

山人の住むてふ宿のきくのはな千秋もいろはかはらざらまし

ものこひしぎ―物戀し、鴫

重陽宴―公事根源「九月九日は節日にて侍れば菊の宴行はるゝなり(中略)羣臣に菊酒を賜はる」

あえぬ―あやかる

わかゆ―若返る

鴫

旅まくら夢もむすばであかさましものこひしぎの聲をきゝつゝ

重陽宴

さかづきはくむともあかじ今日をしも待ちえし菊の花のむしろに

宮人のかざしの菊の花の色もかよひてにほふ袖のむらさき

菊花待レ開

下露もかをるばかりに咲きなばと心を菊のうへにこそおけ

菊

千世ふれど老をも知らぬしら菊の花のおもてに君あえぬべし

なづさへば老もわかゆときくの花いざこゝろみに折りてかざさむ

折レ菊

移ろはむためしもさらにしら菊は折るとも香さへあせずやあらまし

人のもとより

君とわが語らむことのつもりては淵となるべき菊の上の露

吹山、其西南麓に伊夫岐神社あり、日本武尊山神の毒氣に當りし事紀に見ゆ

みすゞ高かや—篠と刈萱との別名、高かやは竹かやとも書く

まきのしま—槇の島、宇治川の名所

いめ人の—ふしみの枕詞

うづら—鶉、鶉

いかにして身のうき秋をわすれまし霧のまがきは世を隔つとも

霧底筏

あすか河ふち瀬も見えず立つ霧にくだす筏やいかにたどれる

野分

野分せしみすゞ高かや影ふして下葉にまじる秋はぎの花

擣衣

世をうぢの河風さむく更くる夜に衣うつなりまきのしま人

名所擣衣

さよ更けて聞けばさびしないめ人のふしみの田居に衣うつ聲

更くる夜のとほよる波に聲添へて衣うつなり須磨の浦人

月の夜に衣うつを聞く

さよぎぬたひゞきは空にかよへばや月にあはれのうちそはるらむ

鶉

うらがれし秋のすゑ野ぞ哀なるしもをうづらのなく音のみかは

るをいふ、望月の縁

引きわけの使―駒引の儀式の後公卿以下に賜ひて殘れる駒を、院、東宮等へ分ち奉る使者

はつか―僅か、幽か

くま―陰

聲をほに上げて―聲を立てて、舟の縁語

いぶき―近江伊

駒引

雲のうへにみまきの駒をむかへ來てけふ引きわけの使たつらし

みちのくのあら野の駒もなつき來てみよのためしにあふ坂の關

雁

山風のさそふ木の葉とみるばかり麓(ふもと)の小田(をだ)に落つるかりがね

薄暮初雁

秋風のわきて身にしむゆふべかなはつ雁(かり)がねの聲聞きしより

ゆふぎりのたえまもり來る初雁のはつかなる音(ね)もめづらしき哉

月前雁來

塵(ちり)ばかり雲もかゝらぬ山のはに落ち來る雁ぞ月のくまなる

すみわたる月のみふねにおくれじと聲をほに上げて雁は來にけり

霧

ゆくふねはほのかに見えて朝河(あさかは)のあけぬや霧のまよひなるらむ

秋といへば神のいぶきの名もしるく先(まづ)たちそめつ峰のうき霧

おもかげうかべ―様子も思ひ出され

うつろふ秋―草木の色移る秋

波の上ゆく―駒の影の波に映ず

葉がくれににほふ眞葛の花も見むうら吹きかへせ月のした風

月前遠鐘

はるかなる鐘もなにかまぎれまし月も心もすみわたる夜は

月前遠情

月にこそおもかげうかべ昔みしまゝの入江の秋のうら波

月前幽情

あはれとやうしとや見ましあばらやのしのぶが露にやどる月影

十三夜月

一とせの花のとぢめと咲く菊にこよひの月をたぐへてぞ見る

久かたの月のかつらの花みればうつろふ秋にならはざりけり

九月十三夜月をもてあそぶといふことを

おもふどちまがきの菊を折りかざし月みる夜半は更けずもあらなむ

駒迎

ふみならすせたの長橋きりはれて波の上ゆく望月の駒

袖のうへに苫もる月をかたしきていくよあかしの磯枕せし

月下眺望

六田川きしねの柳散りそめて七瀬のよどに月もへだてず

月下述懐

ともすれば袂の露をそへてけりかたぶく老を月にたぐへて

月下懐舊

月をおもふ友こそ稀になりにけれむかしの秋を誰とかたらむ

月下交友

隔てじとともにまとゐをすがむしろくまなき月を心にはして

月前紅葉

もみぢばに今一しほをそへよとや月さへかげを霜になすらむ

月前萩

月みにと訪ふ人あれや夕庭に露もみだれて萩が花散る

月下葛

六田川―大和の名所、七瀬は多くの瀬をいふ、六つに對する數の洒落

すがむしろ―菅筵に爲すの意を掛く

あれや―あればにや

玉の横野―玉野横野、共に尾張中島郡にありて相鄰接せる地名

おもなさ云々―月色明かにてきまりの悪き事を忘れ何とて月の夜に逢はんとは契りしぞ

塵(ちり)ひぢのなれる山より出でてなどかばかり月のかげはすむらむ

野月

よの常のたぐひとは見じ名にしおふ玉の横野にすめる夜の月

浦月

あしの葉に夕しほたゆる難波(なには)がたうらわのたづも月に鳴くなり

花洛月

月にとひ月にとはれてこよひしもすさみおほかる都人かな

寄レ月逢戀

おもなさも思ひわすれてあふことを月にとはなど契りおきけむ

寄レ月恨戀

はれやらぬ空なうらみそ我からのなみだに月はくもる習ひを

寄レ月別戀

いかにしていひなぐさめむ今宵とて月にひかふる袖のわかれは

月下旅泊

家とじ―奥さん

玉もしかず―朗詠「瑤池便是尋常號、此夜清名玉不↓如」

月夜よし―三九一頁に註せり

しき夜のさまなり、家とじを始めてふみ子ちえ子などのさやかなる空にあくがれ出でて伊豫簾かゝげながらはし居のあらはなるも今宵は罪なうこそおぼゆれ、夜更けゆけば聞中大德の玉もしかずとうたひながらゆくりなうまうで來ぬるも世の外の光そへたる心地してこゝろゆくまとゐになむ

とこしへにかくてぞみまし橘のかげふむ庭にすめる月影

十五首

十五夜月

月夜よし夜よしといひしふるごとはかゝる夜半にやうたひ初めけむ

月前風

おのづから月の光となりにけり雲ふきはらふ夜半の秋風

月前露

今宵しも月やどれとや萱の軒草のまがきも露おもるらむ

山月

としといひ―滿月は只一夜にて疾し遲しと待つ譯には行かず

芳宜園―橘千蔭の邸園

白河少將のめしける時よみて奉れる十五首の中

こよひとも知らで今宵の月見れば驚かるべきかげにやはあらぬ

かぎりなきちゞの秋にもあかれじと一夜を分きて月のすむらむ

よしや月かくるならひはあらずともいつを今宵にたぐへては見む

としといひおそしと待たむ秋もなし月のかつらの花のさかりは

くまもなく思ひこそやれから人もこよひの月をかくや賞づると

なれがほに見るものながら老が身も今宵の月はめづらしき哉

賤がやも光ことなるあきの月玉のうてなやいかにさやけき

いかばかり言葉の玉をみがくらむこよひくまなき月の光に

年ごとに八月もちの夜半はあやにくに雲のたゞずまひのここころねたきを今宵はちりばかりの隈もあらず、さるはまづ芳宜園のけはひいかにとてあさぢがもとの露ふみわくればはやく延年千古など來あひてうそぶきあへるにあるじの翁は澄みのぼる影をわがものがほにてうちまもれるも折をか

都月

やちまたにすみゆく月の玉すだれ今宵かゝげぬ高殿もなし

貴賤憐レ月

ちまたにも夜よしとうたふ聲すなり雲井に月をめづるのみかは

緇素見レ月

のがるゝものがれえぬ身も塵の世をわすれてむかふ秋の夜の月

秋月勝二春花一

秋といへばいく夜もともと見る月をあだなる花に何たぐへまし

十五夜月

世のことはあかぬならひの埴生にもみちたゝはせる秋の夜の月

どしごとのくもるならひも忘られし今宵の月よ入るまでは見む

かげやどすいつはの松のいつはあれど秋をなかばにすめる夜の月

わがごとく今宵の月にあくがれていく里人かいを寝ざるらむ

心なきうらわの海士も山がつも今宵の月をたれか見ざらむ

夜よし—「月夜よし夜よしと人につげやらばこてふに似たり待たずしもあらず」古今集
緇素—僧侶俗人

埴生—陋屋

いつはの松—五葉の松、いつの序詞

夜や、ふかき、ながれやはやき有明の月もおち行くよどの河舟

やむごとなき殿の月の宴に侍りて

玉だれの小簾のひまもる月影も所せきまで照す夜半かな

月あかき夜人の家のいづみを見て

すむ人のこゝろきよさもくまれけり月をやどせる庭の池水

幽栖秋月

おもふ友なしとないひそむぐらにもさはらず月の影はとひけり

故郷月

故郷は板井のしみづうづもれてしのぶが露に月やどりけり

山家月

かくて世をあきのすさみと人やみむ月ゆゑ山に住みなれにけり

山里にて月の夜都をおもふ

昔みし都のともも月にこそ我すむ山のあきをしのばめ

玉すだれかゝぐる宿と松の戸とあはれやいづれ秋の夜の月

あき—厭、秋

玉すだれ、松の戸—富貴の家と貧賤の家と

月見つゝなにはのあしをかりそめの海士となるまで浦馴れにけり

たちかへり難波のことを人とはゞ月のみみつの浦とこたへむ

江月

波にあらふ光を霜と見つるかな太刀つくり江の秋の夜の月

名所月

飛鳥河あすも來てみむ秋の月七瀬のよどにかげやどる比

播磨がたゐじまが崎にすむ月は影を波間にうつしてぞ見る

舟とめて今宵はこゝにあかしがた名だたるうみの月をこそ見め

さくら河の月

みし春のおもかげかへて櫻川あきはかつらの花ぞながるゝ

橋月

すむ月のよどの繼橋もゝよつぎかくても見ばや波にでる影

舟の路の有明の月

ゆく舟はきりたちこむる波の上にほのぐ\のこる有明の月

かりそめ―刈、苟且

みつの浦―難波の別名、見つを掛く

名だたる―有名なる

繼橋―ところどころに柱を立てて板をつぎわたせる橋をいふ、もゝよつぎの縁

照るをめで曇るを惜みよひ〳〵の月に心をつくす頃かな

舟をうかべて月を見る

はるゝ夜の波にうかぶる河ふねは月のゆくへにまかせたらなむ

河なみに月のゆくへをしたふ夜はつながぬ舟もうれしかりけり

すむ月にこぎゆくかいの雫をばかつらの花の散るかとぞ見る

山館見ㇾ月

人とはぬ深山の庵の秋はたゞ月こそともと住みならひけれ

かくてのみ月をし友と住みなれむ麓のちりの世をのがれ來て

霧中月

深き夜のあはれは添へつうす霧に光をさまる山のはの月

きりの海を出來る月や水底にしづめる玉の影と見ゆらむ

海邊月

あし火たく烟を空に吹き消ちて月を見せたるうらの秋風

難波のうらの月

まかせたらなむ—まゝにしてあれかし

かつらの花—桂の花、月光の水に映じたる形容

となせ―泊無瀨、山城の名所

枕の山―枕の峰ともいふ、枕上に聳ゆる峰の意、固有の名稱にはあらず

身のたぐひ―我身の同類、我は年老い月山の端に傾くをいふ

あはれとは月も知らなむしるべなき闇にいくよかたどり來し身を

あらし山の月

山の名のあらしにはるゝ月みればとなせの波に影ぞくだくる

月出レ山

床の上にかたしく霜とかつ見れば枕の山に月ぞ出でぬる

初昇月

たちのぼる雲におくれて山のはにかつ見えそむる秋の夜の月

暮天月

木の間よりもるゝ夕の月見れば先こゝろこそときめきにけれ

深夜月

更くる夜と知らで月をば見つれどもいつしか袖は露にぬれぬる

曉更月

傾ける影をあはれと見つるかな身のたぐひなる山のはの月

夜々見レ月

塵の世の人は知らじなばせを葉に雨の音きくあきの哀を

月

世のうさもわするゝたねとなるものを老をば月になど歎くらむ

秋といへばかはらぬ友となれがほにとひくる月を哀とぞ見る

わきてしもあはれとぞみる山里に月も我身もすみかへてより

やちまたに塵をなたてそを車のわれとは月のくもらぬものを

おのづから須磨も明石もおもかげにうかぶは月の夜頃なりけり

くもる夜の月

もれ出づる月やいづことゆく雲にあからめもせぬ秋のそら哉

對レ水待レ月

いつしかと月待つほどの池水に先すむものは心なりけり

見レ月

ながしとて秋をばたれのいとひけむ月にこゝろの慰むものを

思レ月

を車の一輪、我、我とは自ら進んでの意

あからめもせぬ一凝と眺めてわき見もせぬ

いくむすびせし
—幾回も幾回も
結びたる秋夜の
長きをいふ

かりすてし山田にのこるもくづ火の烟さびしき秋の夕暮(ゆふぐれ)

秋聲

あしの葉も聲うちそへて難波(なには)がた夕しほさわぐ浦の秋風

秋夕

くれぬ間(ま)はむしの音(ね)うとき淺茅生(あさぢふ)に月待つほどぞ秋は淋しき

秋夕風

吹く風はいつとなけれど荻の葉の夕(ゆふべ)ぞわきてこたへがほなる

秋夕思

大かたに秋をしらする夕露のなどわが袖をおき所なる

秋夜

とりの音(ね)にまたおどろきつ秋の夜のいくむすびせし夢のなごりを

秋夢

村雨(むらさめ)の音にねざむる秋の夜はいくたび夢をむすびかへけむ

秋雨

山田もる賤のかりほにおくかびの煙とともにたちあかすらむ

穂に出でぬをだのひつぢやうしと見むおろかおひなる身のたぐひとて

田家興

月きよきあら田の原のふせ庵にしかの音きゝて今宵あかさむ

田家秋晩

人かへる夕べをおのが時とてや落穂たづぬるを田のかしどり

稲舟を

みなと田に朝夕かよふいなぶねはたゞかりしほにまかせてぞ漕ぐ

秋眺望

たかまどの野邊のうき霧とだえして尾花につゞく松の村立

旅宿秋曉

夢さむるさゝの篠屋のかり枕あかつき露にぬれぬ夜もなし

みやこ人とはゞかたらむ有明の月にふしみの里のかりねを

秋畑

かびー鹿火、野獸の來るを警むる火
おろかおひーひつぢの別名、愚かに生れたるといふ意を掛く
稲舟ー稲を積み入れて運ぶ船
かりしはー刈るべき期節
たかまどー大和添上郡高圓
ふしみー臥してみると山城伏見と

むすぼほれゆく—憂愁の情を加へ行く

なく音云々—夕風につれて必ず鹿がなく

枕の山—枕がみにある山、つい近くの山

ひつぢ—刈りたる稻株より更に出づる芽

雨中蟲

よもすがら窓うつ雨にこたへつゝしめやかに鳴くきりぐ〵す哉

床蛬

おきそはる霜の夜床になく聲もむすぼほれゆくきりぐ〵す哉

松蟲

あはれさのいづれはあれど故郷に人まつ蟲の月になく聲

鹿

夕風に眞萩ちる野のかり枕しかの音きけばいこそねられね

野鹿交レ萩

眞萩はら花ちる頃はさをしかの鳴く音さそはぬ夕風もなし

鹿聲近

わがやどのものときくこそあはれなれ枕の山になく鹿の聲

秋田

心とくかりし早田のひつぢさへ穗に出でぬべく見ゆる秋かな

我身の云々—我身に沒交涉の物と思ふべけんや、やがて此身も露と消ゆべきをと也
さゝがに—蜘蛛
ところせきまで—あたり狹き程

眞萩ちりを花みだれて狩人の袖ふきかへす秋の夕風

いなづまのいそがしきを見て

稻妻のひかりにも見よやどるまはたゞしばしなる露の此世を

露

花ににほひ月をやどして秋の野の哀そへよとおける白露

風をまつ草葉の露よいつまでか我身のよそにおもひおくべき

蜘のいに露のかゝれるを

いとすゝきなびくと見しはさゝがにのすがきに露のおもるなりけり

蟲聲

ほのかなる末野の月になく蟲はいづこに草のまくらをかとふ

蟲の音いとしげし

露おもるむぐらよもぎの夕かげにところせきまで蟲の音ぞする

寺靜にして蟲をきく

とはれぬをこゝろとすめる室のとに人まつ蟲やたれにならへる

すがた―大和生駒郡に菅田あり「をとめ子がすがたの池」なども詠めり、姿に掛くる事云ふ迄もなし

ませ―ませがき

あらはなり―あまりあからさまにて氣まり惡し

たゝまくをしみ―疊むを惜みと立たむを惜みと掛く

草花色々

いろ〳〵にかさぬる袖かをとめ子がすがたの野邊の花のちぐさは

栽二秋花一

うつし植ゑて野邊のちぐさの花かずを思ひ殘さぬやどの秋かな

蟲(むし)の音(ね)も小はぎが花も夕露を待ちえがほなるませのうち哉

月照二草花一

すむ月をあらはなりとやをみなへしを花が袖におもがくしせる

野花留レ客

秋の野にとまるこゝろはさをしかにわれおとらめや萩(はぎ)が花妻

をみなへしなまめく野べにあくがれて誰もこゝろを花になすらむ

人々秋の野に遊ぶ

からにしきたゝまくをしみ秋の野の萩のあそびにこの日くらしつ

おもふどち秋野の花にたちまじりくれなば蟲の音をも尋ねむ

小鷹狩

さが野―人の口端のうるさきに嵯峨野を掛く

いるの―山城乙訓郡入野、古來薄の名所也

松も薪と―古詩「松柏摧爲レ薪」

秋はぎの名におふそのの夕露に袖にほはせてけふは遊ばむ

萩の露おもし

故郷のよもぎがもとの小はぎ原はらはぬ露を哀とぞ見る

をみなへし

人ごとのさが野にたてる女郎花風さそふともなびきだにすな

薄

旅まくらかりねのなごり跡見えているののすゝき結ぼほれつゝ

をばなさへ心ありげに見ゆるかな秋としいへば袖の露けき

庭薄

かくながら月をもやどせ庭のおものをばなが袖に露おもるなり

朝顔

露の間にうつろふ花よさもあらばあれ松も薪となる世なりけり

朝がほを見て

朝がほのうつろひやすき花にしもはかなかる世をたぐへてぞ見る

いをねぬ妻—睡られぬ種

おちぬ—缺かさぬ

衣にほはせ—萩の色を衣に染ましめよ

袖のうへに今朝めづらしき秋風のなど荻の葉にならし顔なる

よひ〳〵になれていをねぬ妻なれや秋風やどるのきの下荻

荻風

契りおく人しもならへ秋といへばぬる夜もおちぬをぎの上風

秋風荻の葉をふく

あはれとも憂しとも人の心より荻ふく風の身にやしむらむ

萩

宮人の袖のなごりやとゞむらむ今もにほへりまのゝ萩はら

閑庭萩

山里やとはれぬ庭のまゝ萩はらせめてをじかの跡だにもがな

さをしかもとひ來ぬべくぞなりにける荒るゝもうれし庭の萩原

雨にぬれて萩の花を見る

よしさらば衣にほはせ眞萩はら分けゆく袖は雨にぬるとも

千蔭の家に歌よみける時萩露を

なごり―後朝の別れの涙をいふ

天つ妹脊―牽牛織女

そらだのめ―空しきたのみを屬せしむる言葉

おきそ―沖、そは接尾語

年に待つ―一年掛りにて只一度の逢瀬を待つ

をやむ―止む、をは接頭語

ほし合のなごりをそれとしのべとや露にしをれし朝がほの花

なぬかの夜あかつきによめる

天の川ふけゆく夜はを見つゝゐて曉露に袖ぬらしけり

七夕戀

あふことのまれなる中よいとせめて天つ妹脊にたぐはましかば

七夕別

別れてはこともかよはぬ天の川ふみ月の名ぞそらだのめなる

わかれをしむおきその風に霧たゝばせめてやすらへ天の河船

ふみ月八日

棚機のわかれよなどか年に待つ心長さにならはざるらむ

閏月七夕

いたづらに袖ぬらせとや棚機のあふ夜の名のみ立ちかさぬらむ

荻

山里はいこそねられね松の聲をやむとすればをぎの上風

うきぎ—筏

おもなし—氣まりが悪し

君—牽牛星

うちがへす—昔男女の相交るにかたみに衣を裏返して打かくる風習ありし也

あえよ—似よ

七日のゆふべをとこあまたゐて天の河をみたり

もろともにゆきて見ましを天の河うきぎのかよふ道したえずば

七日女ども空を見る

たなばたのあふ夜はれ行く空の月よそに見るさへおもなかりけり

七日の夜曉を惜む

曉の空かきくもれあまの川あさ瀬たどらば君かへらめや

七首

七日の夜秋の七くさをよめる

たなばたに今宵やかさむ秋萩の花ずり衣いろあせぬ間に

天の河かはべの尾花かたよりになびくもほしの心をやとる

たなばたの袂おぼえて秋風のふきうらがへす庭のくずはら

たなばたの袖のにしきもかくこそと見るめもあやに匂ふなでしこ

今宵しもたなばたの手にあえよとて誰たちぬへる藤ばかまぞも

棚機のおもかげ見せて澤水にすがたをうつす女郎花かな

さしも—よもや、決しての言、櫛を挿すの縁
うしとやは見ぬ—憂きものと見ざらんや
よりあはむ—絲の縒と二星の會することを掛く
たぐへてを見む—よそへて見ん、をはよと同じ意の感歎辭
うちつけに—卒爾に

たなばたの今宵とりみむさし櫛のさしもたがはじ絶えぬ契は

織女雲爲レ衣

雨となる袖のわかれに棚機の雲の衣もうしとやは見ぬ

乞巧奠

棚機の秋くるからによりあはむ心とりてぞ絲は手向くる

七夕七首

七日女郎花をうゑよとて人のおこせたれば

をりにあふ名もなつかしき女郎花たなばたつめにたぐへてを見む

七日けふの空のけしきいかゞ見るといひければ

天の河ゆふゐる雲もうちつけにたなばたつめの袖かとぞ見る

たなばた祭りしたる所に籬のもとに男たてり

たなばたに今宵手向くるから絲のよりあふ末や誰むすぶらむ

なぬかの夜琴ひく女あり

棚機の心をくみてひく琴やつまおもふてふしらべなるらむ

濱づと―濱のみやげ

もみぢの橋―天の川に架したる橋、古今集「あまの川もみぢを橋に渡せばや棚機つ女の秋をしも待つ」の歌に出づ

つまおもふ―想夫戀

星合の濱―伊勢國の名所

ならへばや―倣ふが故によりてや

天の河とほき神代のむかしより秋をせにこそ名はながれけれ

七夕濱

あまの子がかりしみるめの濱づとも今宵やほしに先手向くらむ

七夕橋

今宵あけばもみぢの橋もいたづらにかけはなれてや戀渡らまし

七夕馬

こよひしも雲井にかける駒もがなふね待ちかぬる天の河とに

七夕管絃

絲竹のつまおもふてふしらべさへ星のあふよはあはれそへけり

海邊七夕

星合の濱の海士人うちつけにみるめや今宵先手向くらむ

七夕薄

こひ〳〵てあふよの星にならへばや尾花の袖も露けかるらむ

七夕櫛

よそひ—船出の用意
よみて—數へて
みながら—悉く、殘らず
うらもなく—心隔てもなく、衣の縁語

山家秋

月すまばまたも問ひ來む山里の稲葉にやどる露もみがてら

兼待二七夕一

天の河月のみふねもよそひせよ星の逢ふ夜はちかづきにけり

いは床のちりを拂はぬ夜はもなし天の河とに秋立ちしより

久待二七夕一

いつしかとさく七草の花かずをよみてや星のあふ夜しのばむ

七夕

あまの川やそ瀬の月はくまもなしはやこぎ出でよ妻むかへ船

なぬかの夜

棚機にこよひやかさむ七くさをみながらうつせ花ずりの袖

二星適逢

うらもなくあふとはすれど棚機の雲の衣よなどま遠なる

星河秋久

西河―山城桂川の別名

風の音のみ―荻は未だ穂に出でずして

みそぎにすつ―六月晦の禊によりて憂き事は祓ひ捨てたり

あさけ―朝明、朝早く

秋來二水邊一

吹く風も聲うちそへて西河や秋に入江の波のすゞしさ

初秋風

今朝ははや軒のした荻うちさやぎ穂にあらはれて秋風ぞ吹く

初秋木

散りそむる桐の一葉に秋來ぬとつぐるや風の心なるらむ

早秋

秋たつやまだうらわかき荻原は風の音のみ穂に出でにけり

秋たてばものかなしきを憂ことはみそぎにすつと何思ひけむ

早秋風

けさよりは瑞穂のあきのはじめとや稲葉より先風そよぐらむ

早涼

信樂の外山のあさけすゞしきは夜の間の雨や秋をさそへる

夕かげに露ふきむすぶをざさ原よは秋なれや風のすゞしき

かけひ—掛樋、とひ

よすがに—よるべとして

たゞすの森—山城愛宕郡下賀茂神社なる森

琴後集卷三

秋歌

山家立秋

松のあらし谷のかけひも今朝よりは秋たちぬとや音かはり行く

田家立秋

けさ見れば色づきそむる我門のわさ田よりこそ秋はおほゆれ

幽栖秋來

跡たえし庭のをざさの露ばかり秋をつけ來て初風ぞ吹く

あれたるやどりに秋來る

おきそむる露をよすがに秋は今朝むぐらの門を先ぞ問ひける

森初秋

みたらしの岩うつ波も音かへつたゞすの森の秋の初風

なつかぐら―六月祓の時行はる神樂の稱、川社とて河の瀬に榊一本を立てゝ柱とし篠竹を棚にかきてそれに神供を備ふる由輿儀抄に見えたり

荒和祓―六月の大祓

なつかぐらあなおもしろし椎柴の下ゆく水に月もやどれり

荒和祓

御祓河瀬々にながるゝすがの葉のあなすが〳〵し水の白波

祓麻

つかさ人きよきなぎさにぬさ取るややがていつきの宮うつりとて

はらひすと眞袖に波をかけてけり瀬々にみだるゝぬさの追風

風さやぐ葉廣がしはの下すゞみ露ちる袖はぬれぬともよし

樹陰納涼

すゞしさを待ちとる袖に露ちりて苔のむしろを拂ふ松風

百首歌の中におなじ題を

涼しさのいづこはあれど夏はたゞ夕風そよぐならの下かげ

松下追レ涼

山松のひゞきぞ波にまがふなるあつさをあらふ心地のみして

すみだ河に舟をうかべて

夕川のすゞしさとめてこぐ舟は水のこゝろのゆくにまかせむ

棚倉の君の深川のみたちにて

風すぐる楓がしはの下露にぬるゝたもとは夏なかりけり

樹陰夏風

衣手もぬるゝばかりにおほゆるやみづえ吹きおろす木々の下風

夏神樂

とめて—求めて

みづえ—瑞枝、若く盛りの枝

さら〳〵に―少しも、聊も、いさらゐの縁語

なぎさ―水邊

秋はとくあふぎの風にかよひけり袂に月のかげをやどして

閨扇風

なつかしき香にこそ風もにほふなれ誰にこがれし閨の扇ぞ

泉

袖ひぢてむすぶいさらゐさら〳〵に夏とはえこそ思はざりけれ

泉のまへのすゞみ

すゞみすと山井の水をいくむすび結べどもなほあかぬ今日かな

但有泉聲洗我心

おく山の岩垣しみづ聲なくばこゝろの友となにをきかまし

水風晩涼

夕風のさそはざりせば池水のこゝろに友をわするべしやは

近水微涼生

蓮葉の露ばかりふく夕風もなぎさの宿は先ぞすゞしき

納涼

なが坂、松が崎ー共に氷室を以て名ありし地

二子山、蘆の海ー共に相州箱根の内

たぐひ來てー共に聞え來りて

ゆかりー緣故の物、紫をゆかりの色といふ

氷室

大君の御代なが坂の氷室もりいくとせ夏をよそに住むらむ

千世かけて消えぬためしと氷室守松が崎には住みならしけむ

夕立

二子山みねに北行く雲見えてゆふだちすなり蘆の海づら

夕立晴

かくながら月ややどさむ夕だちのなごりとゞむる玉ざさの露

蟬

吹きおろす松のあらしにたぐひ來て秋おもほゆる蟬のもろ聲

瀧邊蟬

落たきつ早瀨の波にこたへつゝ梢にむせぶせみのもろ聲

たき川の岩こす波にさそはれて峰より落つる蟬のもろ聲

あふぎ

うちもおかずとるや扇のこむらさき誰がゆかりとて袖にならせる

「明けたてば蟬のをりはへ鳴き暮し夜は螢のもえこそ渡れ」古今集

けつ―消す

あだに見む―空しく看過すべけんや

大ゐ河の夏

とぶほたる瀧つ岩間をながれ來てとなせの波に影ぞくだくる

蚊遣火

いぶせさをよそのみるめもくるしとや絶々たつる賤が蚊遣火

明けゆけどまだもをりたく蚊遣火に猶夜をのこす賤がさゝぶき

かやり火を見て

をり〳〵に蚊遣のけぶりたきけつや賤も心を月によすらむ

蚊遣火に賤はふせやのいぶせさをおもひくらべて夜やあかすらむ

蓮

はちす葉の上とのみやはあだにみむ露こそ人の世のたぐひなれ

地上蓮

池水のこゝろきよさもあらはれつ濁にしまぬ花のさかりは

池の蓮をよめる

影うつす池の鏡のきよければ葉がくれにさく花もみえけり

なつ蟲のかげはあまたになりゆくや淺澤水（あさゝはみづ）のそこ見ゆるまで

瀧邊螢

落瀧（おちたき）つながるゝ水のしら玉に光（ひかり）をそへて飛ぶほたるかな

くさむらのほたる

風さそふ夏野の草のたもとよりつゝみもあへずとぶ螢かな

螢似レ露

とぶほたるははかなき露と見えながら何ゆゑ消えぬ思ひなるらむ

深夜螢

うきことをますだの池にとぶ螢よたゞおもひにこがれもぞする

晩夏螢

みそぎ河しのにをりはへほす袖の露とみだれてとぶ螢かな

ある曹司のまへをわたりけるによるは螢のなどいひ出しければといへることを

玉だれの光へだつる夏むしは誰ゆゑ身よりあまる思ひぞ

つゝみもあへず—包みあふせず

消えぬ思ひ—螢火の消えぬを胸の思に掛けたる洒落

ますだの池—大和益田池に増すを掛く

しのに云々—六月祓の時贖物として出せる衣等を篠に折掛け麻の葉にて水を灑ぎ清むる式ある也

よるは螢の—

やさし―恥し

かつら人―山城國桂の里の人

ほぐし―火串、照射に用ふるもの

むすぶ氷―「氷蟲不知寒、蓼蟲不知苦」と對して鶴林玉露に見えたる句

百合

なつの野に誰をやさしとしのぶらむ葉がくれに咲く姫ゆりの花

鵜河

かつら人鵜河たつとや波のうへにみだれて見ゆる瀬々の篝火

折こそあれ月のかつらの里人もやみをぞたのむ鵜河たつとて

峯照射

かた分けて鹿のたちどや尋ぬらむみねにほぐしの影そはり行く

所々照射

明けやすき夜をやあらそふ五月山ほぐしの光ところせきまで

夏蟲

おろかなる身にはたぐへむ夏蟲のむすぶ氷もしらぬならひは

螢

風さそふしののを笹にちる露のなごりおほえてとぶ螢かな

澤螢

とこめづらしき―永久に珍玩すべき

もとの心―「古の野中の清水ぬるけれどもとの心を知る人ぞ汲む」古今集

末利―茉莉なるべし、夏秋の頃、香氣高き五瓣の白花を開く

たではむ蟲―鶴林玉露「蓼蟲不レ知レ苦」

常夏のたゞ一時に春秋のはなのにほひをあつめてぞ咲く

愛二瞿麥一

宵の雨のなごりいかにと露にさへ心おかるゝ常夏のはな

なでしこのさけるを人の許へやるとて

ちらぬ間を見つゝすさなめよ常夏のとこめづらしき花ならずとも

夏草

なつ草に野中の水はうづもれぬもとの心をたどるばかりに

秋ちかきのぢの草むら露さへもむすぶばかりに早なりにけり

草花先レ秋

いつしかと秋のちぐさの花かずもなかばみえ行く夏の野邊かな

千古のもとより末利花一もとおこせたるをよろこびて

めづらしなたゞ一本のまりのはなあまりなるまで香こそにほへれ

蓼

からきにもなるればなれて過す世にたではむ蟲を何かとがめむ

よどむ間もなき—月の早く傾くをいふ、水に淀む間もなき月の何とて氷とは見るぞとの洒落

常夏—なでしこの別名、夏中變ちずにの意を含めたり

朝にけに—朝毎に

ゆく水によどむ間もなき夏の夜の月は氷といかで見ゆらむ

山家夏月

涼しさのいづこはあれど山里はしみづに月のかげやどる比

竹亭夏月

くれゆけば月と風とをやどしつゝ夏をわするゝ窓のらむ竹

夏月涼

棹させば夏をわするゝ夕河にこほりをくだく波の月かげ

夏の夜月あかし

心さへはれゆく夜のすゞしさは風こそ月の光なりけれ

なでしこ

賤のをが草にやつるゝまがきにもあはれは添へつなでしこの花

なでしこの花咲きそめたり

かつ〳〵も咲きそめしより常夏ににほはむ花は朝にけにみむ

なでしこの花さかりなるを見て

あめの名におふ—五月雨を梅雨といふ、梅がやは相州梅谷の事なるべし

はかる—欺く

つま—種、ゆかり

さらぬだに云々—只さへ夏の夜は明け易き物なるを、月待つとて更に夜を明す事故、せめて月は待たれずして出でよかし

五月ばかり梅がやにまかりて

花さかむ春をぞちぎる五月雨のあめの名におふうめの下かげ

水鷄

あやめ草おふる野澤のみこもりに聲あらはれて鳴くくひな哉

水鷄何方

柴の戸は明けながらねし夏の夜にたゝく水鷄やいづこなるらむ

曉水鷄

まきの戸をたゝけばやがて明くる夜の水鷄は人をはからざりけり

夏月

暑さをもわするゝつまとなりにけり軒にまちとる夏の夜の月

山の端は霞もきりもへだてねど若葉にくもる夏の夜の月

短夜月

さらぬだに明けやすき夜を月影の待たれて出づる事なくもがな

水上夏月

いめ—射部、禽獸を射る者の稱

爪木の道—薪を採りに行く道

訪はれぬ……宿—人の訪問無きが慣れことなりたる宿

あまま—雨の晴間

むやひ舟—繫ぎ合せたる舟

ふりはへて—わざわざ、降りに掛く

村雨のなごりの露もにほひつゝ散るやあふちの花の下かげ

薬獵

いめたつる夏野の若葉ふみしだききそひかりする武士のとも

霖

さみだれに爪木の道も絶えにけり谷の岩ばし水こえしより

閑中五月雨

訪はれぬにならひし宿は五月雨のあままありとて誰をまつべき

旅泊五月雨

五月雨に日數ふるえのむやひ舟棹さへなみのしたに朽ちにき

さみだれの雨につなでも朽ちはてゝみを引きわぶるよどの川船

五月雨はれ間なき比友だちの詣でこぬをうらみて

つれ〴〵を何にすさめむ五月雨のふりはへてとふ人しなければ

五月雨晴

さみだれに板井の水はましにけりこよひや月のかげをやどさむ

もゝしき―宮庭
右のつかさ―右近衛の官人、橘は紫宸殿前の右にありて右近の橘と稱す
橘の小島が崎―宇治川の名所

おもほえずすだれうごかす夕風に袖の香たどる軒のたち花

風靜廬橘芳

たちばなのにほふ軒端は吹きたゆむ風のひまさへたどならぬ哉

橘薫レ袖

もゝしきや花たちばなのおひ風に右のつかさの袖かをるなり

夜橘

橘のはなちる宿に一夜ねむしのぶ昔の夢やむすぶと

曉更廬橘

たちばなにかたしく袖ぞかをるなるいつも寢覺のかゝらましかば

廬橘子低

橘のはなの露そふ葉がくれに實さへかをれる雨の夕ぐれ

夏船

橘の小島が崎のおひ風に棹さす袖も香にぞにほへる

あふち

をこなぎといふ

よどの―山城久世郡淀野

あやめの枕―五月五日の夜あやめの根を枕とすること

かる―刈る、借る

垣つ田のさなへと共にうゑこなぎ花に咲きなば又もとひ來む

刈二菖蒲一

菖蒲葺くけふのためしを過ぐさじと賤はよどのにおり立ちにけり

君が代のながらの濱のあやめ草命つぐてふためしにぞ引く

雨中菖蒲

五月雨にぬるともひかむあやめ草あやなくけふを過ぐさましやは

節後菖蒲

こもり江におふるあやめの根をふかみ千世のためとや引き殘しけむ

夏夜

夏の夜はむすぶあやめの枕だにねながき名をばかるかひもなし

たちばな

そことなくかをるもうれし橘のはなちるさとの明ぐれの空

橘のはなちる比は木のもとの苔路の露も香ににほひけり

廬橘薫レ風

語也

しづくの田居―常陸筑波山麓の地名、水したゝる田の意に取りなしたる也

つるの郡―甲斐都留郡

なぎ―木葵の類、其葉の細き

深夜子規

ほとゝぎすよぶかき雲の絶間よりおちゆく月をしたひてぞ鳴く

夢後郭公

おもほえず聞くぞうれしき時鳥をりあはれなる老のねざめに

郭公入㆓夜琴㆒

待ちよわり引きたゆむ夜のつま琴になく音そへよと訪ふ郭公

よひ〳〵のかたらひ人となりにけり琴の音さそふ山ほとゝぎす

早苗

たに河の水せきいるゝ麓田は雨も待ちあへず早苗とりけり

採㆓早苗㆒

早苗草はこぶたもとや朽ちぬらむしづくの田居の五月雨の比

つるの郡の早苗を

早苗とるつるの郡のさと人は千世のはつ穂の秋や待つらむ

なぎ

ほとゝぎすうとかる里はあらずともこの橘を宿とさだめよ

兩方聞二郭公一

峯に尾に中のやしろをへだてつゝなくやいなりの山時鳥

雲間郭公

村雨のなごりあしとくゆく雲に聲もおくれぬほとゝぎす哉

月おそきゆふべの雲のたえまより先聲もらす郭公かな

閑中郭公

友もなき宿とのみやはいひはてむ山ほとゝぎす月になく夜は

樵路子規

ほとゝぎすとばの山柴とりならしなれてや賤が聞きふるすらむ

曉に時鳥をきく

郭公をりしりがほに鳴きぬめりものおもふ宿の曉のそら

曙郭公

玉くしげ箱根の山の明ぼのにふた聲なのる郭公かな

峯、尾、中—所謂稲荷三社

とば—大和生駒郡飛羽山

玉くしげ—「箱」「明」「ふた」の縁

もとほとゝぎす—昔の郭公、以前より來り訪へる郭公

しのばずもがな—明かに鳴けよかし

かひ—峽（カヒ）と甲斐と

月におもひ雨にまつよの數を經てはつ音うれしきほとゝぎすかな

郭公をきゝて

かくしつゝをちかへり來て我ために昔かたらへもとほとゝぎす

郭公一聲

いく度のかたらひぐさにいひ出でむたゞ一聲の山郭公

郭公幽

きゝつとも思ひさだめずほとゝぎす今一聲はしのばずもがな

山里にほとゝぎす聞きにまかりて

一こゑは都にもきくほとゝぎす山路のかひにをちかへりなけ

海のほとりにて時鳥をきく

ほとゝぎすいはしたかげの一聲はひろへる玉の心ちこそすれ

おもふことある比郭公を聞きて

郭公よたゞなく音にならへとや物思ふ宿を過ぎがてにする

郭公遍

こゝろいられ—じれつたさ

空だのめ—詮なきたのみ、實なき約束

しのび音はなか〳〵つらし郭公した待つほどのこゝろいられに

きくたびにねぬ夜ぞおほき時鳥いま一聲とまちならひつゝ

なれゆけば厭くをならひの人の世に猶めづらしき郭公かな

郭公うひだちしつと山人のかたるをきけばいやまたれつゝ

めづらしとおもふこゝろに時鳥はつ音を夢となほたどるかな

ほとゝぎすたゞ一聲に見し春のはなのなごりも忘られにけり

橘の花ちるさとのほとゝぎすなく音もかをる心ちこそすれ

待二郭公一

時鳥かくていく夜のむらさめを空だのめにはなして過ぐべき

人傳にきゝそめにけり郭公まちよわるともまたやたのまむ

初聞二郭公一

ほとゝぎす聞きつとかたる人もなし初音やわれに先もらしけむ

はじめてほとゝぎすをきゝて

郭公さやかになのる一聲をきゝそめてこそいやまたれけれ

舟づつみ—公事根源に「上達部我が布施の舟づつみを持つて御殿の長押の上なる白木机に置いて次第に座に著く」舟づつみは佛布施の別名

みあれ—四月中の酉の日の加茂の祭、この祭には葵を掛け連ぬるが例也

神まつるあすはうの日とみわの山みてぐら使けふよりぞ立つ

灌佛

御佛のあらはれそめし法の水ながれて世々の人もくみけり

もろ人のけふのためしの舟づつみつどふや法の湊なるらむ

葵

小車にあふひのかつらかけてけり神まつるけふにめぐり來ぬれば

毎年懸レ葵

年ごとにかけていく代かたのまゝし今日のみあれにあふひてふ名は

卯月ばかり香取へ行きけるにかまがやの野にて鹿のむれゆくをみて

眞萩原まだうらわかしゆく鹿の胸分くばかりいつかなりなむ

郭公

待ちあかす心くらべにまけにけり有明の月になくほとゝぎす

さやかにもなのるか月の玉すだれかゝぐる軒の山ほとゝぎす

卯の花くたす――卯の花を腐らす意、梅雨を卯の花くたしといふ

ゆふ――木綿、御幣をいふ

使ざね――使の主領

咲きしよりつもる日數のほど見えてうのはな垣は雪になり行く

卯花藏レ水

うの花のかげ行く川ぞかすかなる雪の下水もれしばかりに

山家卯花

山賤のかきほはまたも訪ひてみむ卯の花くたす雨ふらぬまに

卯花似レ雪

うつぎ咲くかた山里の明ぼのは雪にしらめる心ちこそすれ

卯花がきに月をみる

卯の花をさながらかこふまがきには月の光もへだてざりけり

神まつり

夏たてば森のまさかき茂るなりゆふとる袖もかをるばかりに

大みわのまつりの使

神さぶる杉のした道幾歳か大宮人のたちならしけむ

みわの山杉の下みちふみ分けてぬさとりゆくは使ざねかも

三輪山―大和城上郡の西南

花に云々―花をとるとて手折りし枝はまばらになりて月も漏れ来れど、他の梢は若葉深くして月影をも漏さずものかは―何でもなし

残りの花を惜む

あかぬ間にわかれし春のかたみぞと思ふ花さへちらんとやする

林新樹

三輪山や花より後のかげもよししげきがもとに若葉さす頃

雨中新樹

雨そゝぐかた山かげの夏木立いまひとしほの緑をぞみる

新樹妨レ月

夏蔭や花に手折りし梢のみたまく\/月の影もらしけり

わか楓を

色はゆる青葉のもとの若楓しもに匂へる秋はものかは

夏影ににほふ楓のくれなゐは花の錦のなごりとぞみる

夏山里にまかりて

瑞枝さし清水ながるゝ山里を花にのみなど訪ひならしけむ

卯花

卯の花ー襲ねの色目、表白に裏青、四月に著る也

やさしなー恥しきかな

手向山ー山坂の絶頂の道祖神のおはすといふ所の稱

ときにきそはぬー時世と爭はぬ

櫻いろの袖ぬぎかへて卯の花にかさぬる衣もめづらしき哉

きならせし春の衣をぬぎかへて又しも花に別れぬるかな

貴賤更レ衣

ぬぎかふる袖もやさしな麻衣しらがさねせし人もある世に

殘鶯

散りのこる花にたぐへてをしむかな若葉がくれの鶯の聲

遲櫻

折りとらばにほひをうつせ遲櫻はなのかとりの袖うすくとも

山餘花

手向山はるの越えゆく跡とへば今もさくらの幣とこそちれ

谷餘花

世をいとふたにの庵のおそ櫻ときにきそはぬ心をや知る

卯月ばかり山ぶみして

なつ山や若葉にうづむかげとへば花のしをりの後も殘らず

かとり—香を取る意と縑といふ織物の名とを掛く

そでのわかれ—後朝のわかれ、花になれたる衣を脱ぎ更ふるを戀によそへたる也

琴後集巻二

夏歌

首夏

みし春のなごりわするゝ夏衣花のかとりは名のみなりけり

木の下に散りのこる花やかきつめむ昨日の春のわすれがたみに

首夏朝

なつ山やきのふの花の雲きえて若葉ににほふ朝日影かな

山家首夏

山里は古巣にかへる鳥が音にあはれをそへて夏は來にけり

山里のはらはぬ庭は夏ながら苔路にまじる花も有りけり

更衣

くやしくも深くぞ花になれ衣そでのわかれのあるを忘れて

訪はれぬまゝに—花散りて後は人の來訪もなきによりて

くたしなば—腐らしたならば

あだなり云々—暮れ行く春に反抗して咲く花もあるを見れば花をあだなりと思ふべきにはあらず

よそへては—咲き殘る花の數と殘る春の日數とを比較しては

山家暮春

日ながさも訪はれぬまゝに知られけり花より後のはるの山ざと

暮春雨

ちる花を夜の間の雨にくたしなば春のかたみも明日やたどらむ

暮春花

あだなりと何かおもはむ暮れて行く春に爭ふ花もありけり

よそへては春の日數をゝしむかな殘り少き花をみるにも

暮春鶯

ちり殘る花にや老をわするらむなほ鶯はものうげもなし

惜レ春

ゆく春は夢とのみこそたどられいつかは花をあくまでは見し

惜レ春不レ駐

山河や春はよどせもなきものをかひなくかけし花の白浪

夕かけて猶こえはてぬ志賀の山たれも心や花にひかれし

雪とのみ花のふる道ふみ分けて昔おぼゆる志賀の山越

正臣が家の贈答會に志賀山越といふことを助丁が

ちぎらねど心あふみのしがの山ちる花をさへともにこそみれ

とよめる返しに

あかでちる花のなごりも心あひの風のとがとは何おもはまし

春のはて

春もとく暮れざらましを大かたに散るをし花のいそがざりせば

鶯も老をやなげく此園にはねならはせし折も有りしを

浦暮春

花ははや須磨も明石も散りにけり浦傳ひして春やくれゆく

なごりなく春はくれゆく浦浪の何いたづらに立ちかへるらむ

湊暮春

泡とちる波間のはなは色もなし比良の湊の春のくれがた

心あひの風—心知りの方へ吹く風

何—何とて、何故に

比良の湊—近江琵琶湖の一部の名所

花のいろに波もにほひて池水を村濃になせるかきつばた哉

藤

老いにける松にかゝりていつまでか若紫の藤浪のはな

浦藤

世の常のいろとやは見むむらさきの名だかの浦に匂ふ藤浪

藤懸レ松

咲きそめて手にさへかゝる藤浪に松は木高きかげとしも見ず

暮春藤

日をかさね咲きそふ藤の紫ははる深くしも染むるなりけり

濱田君の庭に牡丹をおほくうゑ給へるに歌よめとありければ

大君の名をしもおへる花みればうべも世に似ぬ色香なりけり

志賀山越

ふみそめし人の心を春ごとの花に忘れぬ志賀の山越

名だかの浦—伊海部郡

大君の云々—皮日休の詩に「落盡殘紅始吐芳、佳名喚作百花王、競誇天下無雙艶、獨占人間第一香」

たのみ―田の種即ち稻と賴みと

につゝじ―丹躑躅と、似たるとを掛く

妹脊山―大和吉野川を挾みて相對せる丘陵

苗代の水口祭しめはへて秋のたのみやかけて祈らむ

燕來

つばくらめ門田に今ぞ聲すなる種おろすべき時や來ぬらむ

つゝじ

咲きにほふ磯山本のしらつゝじしらずよ波にまがふものとは

水邊躑躅

池水にうつろふ時は白つゝじとはにより來る波かとぞ見る

百首歌の中巖上躑躅

あらましき巖にはなど咲きつらむ妹が赤裳ににつゝじの花

所々山吹

妹脊山中ゆく河に影みえてにほひかはせる岸の山ぶき

雨ふる日八重山吹を人のもとへつかはすとて

春雨は七日ふれども山吹のやへさく色はあせずぞ有りける

池杜若

あれにけるまがきも春は結ひそへむ菫摘みにと來む人のため

古砌菫菜

朽ちのこるみはしの苔も色はえてよをふる宮にすみれ咲くなり

菜の花を

花見てもつまゝほしきを初春の雪間にのみとなに思ひけむ

雪間に云々―初春の雪の間の若菜をのみ摘むべきものと何故思ひしならん

園の菜の花を

此園の春に胡蝶やあくがれむ朝なゆふなの花にほふ比

かげろふ

川よどの水もながると見えつるは立つ炎陽のうつるなりけり

長閑にもひもとく花にまつはれて絲かと見ゆる野べのかげろふ

蛙

雨そゝぐ小田の水口水ましてところえがほに鳴くかはづ哉

汝もまた春をやをしむちりまがふ山吹の瀬に蛙なくなり

山吹の瀬―山城宇治川の内なる名所

苗代

ふり—降り、古り
朝ぎよめ—朝の掃除

加はる春—潤年にして二月が二つあるをいふ

すみれ—住む、菫

花は雪とふり行く宮の庭ざくらいづれの春か朝ぎよめせし

閑庭落花

うき世をばそむきし宿にちる花の誰にならひて靜心なき

後のきさらぎ花のちるを

やよひだに待たでうつろふ花みれば加はる春もかひなかりけり

八重ざくら

一さかりありて散りぬる花の後に春をとゞめし八重櫻かな

ちりて後花をしたふ

馴るゝ間もあらで散りにし花ながら慕ふ心ははてなかりけり

すみれ

いざさらば春の野守にやどからむともにすみれの花になれつゝ

菫つみに出でたつとて

紫のゆかりおほゆるすみれ草たゞわれのみは摘まじとぞ思ふ

閑居菫

豊浦の寺—本名建興寺又小墾田寺といふ、向原寺の燒亡の後聖德太子再興して葛木寺と稱せしものこれ也、其址大和高市郡飛鳥村にあり

風さそふ瀬々の岩波音たてゝ瀧のみやこにさくら花ちる

葛城のみねのうき雲ひま見えて豐浦の寺に櫻はなちる

花のちるを見て

雪と降る花はたぐひもなきものを散らばをしとはなど思ひけむ

山櫻ちりゆく方をしたひ來て我さへ風にまかせつるかな

月前落花

月なくばいとゞあだにや見はてまし霞がくれにちる櫻ばな

雨後落花

春雨のなごりおぼえてちる露にもろさ爭ふ山ざくらかな

海邊落花

風こゆるいそ山ざくら散りにけり雪をのせ來る須磨の浦舟

名所落花

比良の嶺の花を嵐の吹くからに波のしたゆく志賀の浦舟

古宮落花

不破—美濃の古關

胡蝶に云々—莊周の胡蝶の夢の故事

關花

吹く風にあらさぬ不破の山ざくら春は關守る神やますらむ

春情寄レ花

花にのみ心ひかれて春はたゞ身を鶯にかへぬばかりぞ

寄レ花祝言

思ふどちかくしも花をかざしつゝ千年の春ぞ待つべかりける

寄レ花夢

暮てゆく春を現と何かみむ夢ばかりなる花のちぎりに

露の間の夢さへ花にあくがれつ胡蝶に身をもかへしばかりに

花衣におつといふことを

櫻狩わが袖ながら散る花をはらはで今日の山づとにせむ

落花

のどけさを思ひつゞくる春の日になど咲く花の一さかりなる

をしめども人には花のつれなくて風の心になどまかすらむ

る水をくむ井

降るを涙―「春雨の降るは涙か櫻花散るををしまぬ人しなければ」古今集
ひがめ―僻目、見そこなひ

埴安―大和香具山の麓の古名

瀧の都―吉野宮瀧の地にありし吉野離宮

霞中花

たちかくす霞の袖もさく花もほころびそめて匂ふ春かぜ

雨後花

春雨のなごりに匂ふ花もよし降るを涙と誰かいひけむ

嶺花

待つ程の雲にまどひしひがめをも思ひさだむる嶺の初花

志賀花園花

ことの葉の色香も世々にそへ來てぞ今もにほへるしがの花園

名所花

かぐ山や高嶺のさくら咲く時は底さへにほふ埴安の池

あけぼのや霞がくれの岩門もはなより開く逢坂のせき

みよしのの瀧の都の跡とへば昔忘れず花咲きにけり

水邊櫻

櫻さく春の河とをみわたせば雲の中ゆく水の白浪

春上昔の―業平の「花やあらぬ春や昔の春ならぬ我身一つは元の身にして」の飜案

閼伽井―佛に奉

惜レ花

あだに散るうさをばかねて知りながら今年もいたく花に馴れにき

依レ花待レ友

おもふ友來むとは花にたのめども待たでちりなばいかにしてまし

花ゆゑに人を待つといふことを

柴の戸の花な忘れそ都人われにはうとき心なりとも

年經て花のもとにてあへり

なつかしき花の色香をわすれめや春よ昔の春ならずとも

花留レ客

櫻ばなあだにうつらふ心もて道ゆく人をなどとゞむらむ

花のもとに歸らむことを忘る

故鄕の人やは待たむ花みつゝ春は旅寐に馴れし身なれば

古寺花

朽ちのこる閼伽井の水を鏡にて花はいくよの影かうつせし

きて―來て、著て

山口―山の入口

老をだに―古今集「鶯の笠に縫ふてふ梅の花折りてかざさむ老かくるやと」の翻案

おほし―培養し

千蔭の石濱のやどりにて歌よみける時花錦を

隅田河つゝみの花のからにしき春はきて見ぬ人やなからむ

花未レ飽

咲く花をおもふばかりはいつか見む心のゆかぬ里はなけれど

奥までも分けずはやまじ山口の花に一夜のまくらかるとも

折レ花

山櫻かた枝まばらになりぬるは我より先に誰か手折りし

はなを折りて

折る花を人なとがめそ老をだにかくすばかりの心ずさみは

馴レ花

日を經てもうす紅のはなよなど人の心を深くそむらむ

散るわかれ有りと知りつゝ咲く花に馴しや何の心なるらむ

千蔭がもとによしの山の櫻の若木をうつしうゑたるを見て

よしの山名高き花の種なれば雲と見るまでおほしたてなむ

うき世の云々―うき世の煩はしきならはしはままよ如何でもよいわい

かつ―又片方から

日數なき花もうらみじあまたたび春にあへるを思ひ出にして

思ふこと花見るたびに忘られきうき世のさがよさもあらばあれ

花如レ舊

あはれよの人もかくこそ老木だにはなは匂のかはらざりけり

風靜花芳

をり〳〵に霞をもれてかをらずば吹くとも知らじ花のした風

花添二山景色一

朝ごとにかすみ色そふ初瀬山檜原のおくも花になる比

毎年愛レ花

春ごとに咲きまされば櫻花あかぬこゝろの年に添ふらむ

花忘レ老

花にそむ心は年にかはらねば春は老をもおもはざりけり

花自有レ情

ひたすらに憂を見せじと散ればかつおくれて匂ふ花も有りけり

道行きぶり―道を行く序手

あすか風―大和飛鳥の風の意、今日に對して明日といふ洒落

きしかげや折られぬ花のにほひをも波によせ來る春の河水

瀧河やあさ瀬しら波たどるとも岩もと櫻をりて歸らむ

河づらの宿に花を見る

前川に船漕ぐ袖もかをるなり渚のやどに櫻さくころ

舟中見レ花

こゝろひく渚の花にあくがれて下しもはてぬ春の河舟

花下忘レ歸

行きくれてやどりはしめつよしの山おくある花は明日さへも見む

山ざとにあるじを誰とさだめねど花のかげこそ長居せらるれ

花下暮レ日

暮るゝまで花にそはむと思ひきや道行きぶりのすさみなりしを

花下送レ日

故郷に今日もくらしつあすか風さそはむまでは花にやどらむ

花下言レ志

おもかげうかぶ—様子が目に見える様也

小金井—東京の西北なる櫻の名所

花はみな雲とぞかたる一言におもかげうかぶみよしのの山

花のさかりに山里をとふ

かくしつゝ花し散らずば我もまた山里人となりぬべきかな

見レ花

はな見ればあかで暮れゆく春の日をおそしと誰かいひはじめけむ

靜見レ花

露をだに散らさぬ花のかげなれば誰かは風に心おくべき

見レ花延レ齡

のどかなる春の心にひかれなば花ゆゑ千代も經ぬべかりけり

見レ花想レ友

見せばやと人をぞしのぶ山櫻あかぬ心のへだてなければ

小金井の花見にまかりて、

春風に香をとめ來れば水上のうきたつ雲は花にぞ有りける

水をへだてゝ花を見る

かゝらば—斯くあらばの意に雲の掛るを掛く

空に—うはのそらに、雲と見ゆの縁

大井、をぐら—何れも京都近郊の名所

春の日の遲してふ名は我がごとく花まつ人やいひはじめけむ

望レ山待レ花

いつかまた咲くらむ花のかゝらばと思ひなぐさむ峰のしら雲

閑中待レ花

いつしかと待つに心をなぐさめて花さかぬ間の春ぞのどけき

閑居待レ花

春ごとの花より外は世の中に待つこともなきすみかなりけり

花盛

櫻ばなさかりとなれば散るうさも待ちしつらさも何か思はむ

人心空になればや櫻ばな咲きのさかりは雲と見ゆらむ

處々花盛

さくら咲く大井の里に一夜ねて明日はをぐらの花も分け見む

よしの山の花のさかりを見てかへり來て人のかたるを聞きて

あだなる名―花は散り易くあだなるものなりとの名

いづれ云々―いつとて花を厭く迄見たる年はなし

かつ散る―そばから散る

花

咲き咲かぬほどをあはれと思ふかな春もおくある花の日數に

散るを惜む心ぞ年にまさりける老をわするゝ花ぞと思へば

あくまでも花見るたびに嬉しきは世に鶯のなき身なりけり

春ごとのちぎりかはらず咲く花にあだなる名をば立てずもあらなむ

なべて世の人の心もはなにのみ染むるや春のさかりなるらむ

咲き散るをしたふ櫻の花ゆゑに夢とすぐさぬ春はなかりき

はなにのみ暮さぬ春はなけれどもいづれの年かあく迄は見し

みよしのの奧も淺しと見はてまし花ゆゑ深く思ひ入るには

咲く花を雲と見しよりわが心かゝらぬ山も春はなかりき

とはゞやとおもふ山路や殘らまし花の日數のかぎりある世に

けふいく日山分衣きならして花にやつるゝ袖ぞうれしき

待レ花

待つ程の憂さは日數をかさね來て咲けばかつ散る花や何なり

暮れがてにする—仲々容易に暮れて了はず

老の盃—老後に酌む酒の意

みかの日—三月三日の曲水宴、流水に杯を浮べ其我が前に來らぬ内に詩を作り杯を取りて酒飲みし故事

ものいはぬ—史記に「諺曰、桃李不言、下自成蹊」

たをやめの—長恨歌に「梨花一枝春帶雨」

遲日

あくまでも花の木かげになれよとや春の日影の暮れがてにする

雨岡の家にて閑中日長といふことを

鶯のかたらふ聲もわくばかり靜けき窓に聞きやならへる

心靜酌二春酒一

日ながさを思ひなぐさむ老の盃にいく度花を泛べては見し

みかの日

よるべをば波に任せて散る花の香ごめにめぐる春の盃

桃

かくしつゝ源遠くさく花のもゝ世もこゝに住み習へとや

賤の男の畑うつ袖もにほふまでくぬぎのもとに桃の花さく

ものいはぬ花とし知れど木の本を心ありげに人ぞとひける

梨

たをやめの姿を今もしのべとや雨に匂へる山梨のはな

たどる―迷ひ考ふ

はるかなる深山の杣の斧の音にこたへても鳴くよぶこどりかな

百首歌の中に谷中喚子鳥

山彦のこたふる聲にしられけり深谷のそこに鳴くよぶこどり

春蟲

うら〳〵と霞む春野はとぶ蝶のつばさにのみや風の見ゆらむ

打ちとけむものとも見えず春かけて古枝にのころ雪のみの蟲

春獸

狩人の手飼の犬の諸手繩ながき春日をくらす野べかな

春園獸

山賤のそのふの花の雪の上に聲なき鹿の跡も見えけり

春日

忘れては今朝を昨日とたどるこそ日長き春のならひなりけれ

春日遲

朝鳥の花になれゆく春の日はねぐらにかへる程ぞ遥けき

越路—北越地方の稱、鴈は春北方をさして歸る也

見えじ—見られじ

落—雲雀の急に空より地上に舞ひ降るをいふ

聲のみ—形は見えずして

山櫻雪とも見えよゆく鴈のこゝを越路と立ちとまるべく

霞む夜の月な見捨てそかへる鴈花にはうときならひなりとも

霞中歸鴈

花にうき心を人に見えじとや霞がくれに鴈の行くらむ

百首歌の中澤邊春駒

寢よげなる野澤の草になれてなど駒の心のあれまさるらむ

雉

明けぬとて啼くやきゞすの聲のうちにほの〴〵しらむ春の山畑

雲雀

空遠くあがりも行くか夕ひばり野澤の水にかげの霞める

雲雀落

春の野の菫の床におち來つゝ聲もにほへる夕雲雀かな

大空はそこはかとなく霞む野に聲のみおつる夕ひばりかな

喚子鳥の鳴くを

あれど―甚趣あれど更に一層面白きは

音しのぶ―靜かに降りて音立てず

ひくま―曳馬、遠江三方原

春秋のあはれをあらそふ心を

秋の水に月をまちとる夜半はあれど花よりしらむ曙のそら

夕春雨

春雨に梢あやなくなりにけりさらでも霞む夕ぐれの山

菴春雨

春雨も音しのぶなり山かげにかくて世をふる心しりきや

幽栖春雨

おとしのぶ春の雨こそ哀なれ我身世にふるたぐひと思へば

百首歌の中閑中春雨

をり〳〵は訪はれまほしき宿なるを音だにたてよ軒の春雨

春野

こゝにのみ枕からまし春はたゞ心ひくまの野べのわか草

そことなく野べにくらしつ花をとひ鳥をあはれむ心々に

歸鴈

六田川―大和吉野村の北なる渡津

春月幽

さし下す船は波路に跡たえて水上かすむ春の夜の月

月入レ花灘暗

上つ瀬は花にへだてゝ入る月のなどか霞める春の川づら

暁更春月

明けゆくや霞にしらむ山みえてほの〴〵残る春の夜の月

春

しらみゆく尾上の櫻いろ見えてかた山くらき春のあけぼの

水郷春曙

青柳の下かげかすむ六田川月もよどめる春のあけぼの

閑中春曙

散りつもる花にやまだきしらむらむ拂はぬ庭の春の曙

暮山春望

花の色は霞のうちになほ見えて松よりくるゝ春の山本

うてなの竹—公事根源に「舞人すゝみ出づ、竹の臺のもとにて竹の枝を折りてかざしにさす」

みつ—近江三津崎に見つを掛く

みな人にかざしの花ぞたまふなるうてなの竹の昔おぼえて

雲の上のかさね土器たちかさね榮えむ御代は汲みてこそしれ

春月

霜と見ば花にこゝろの置かれなむ霞むもうれし春の夜の月

霞中月

霞む夜の月にも老をたどるかな我のみ晴れぬながめなりやと

江上春月

住の江や細江の波のかすむ夜は有るかなきかに月ぞ宿れる

浦春月

すくも焚く烟もたてず霞む夜の月やあはれとみつの浦人

故郷春月

故郷のしがの花ぞのあれにけり月や昔の春をしるらむ

幽栖春月

幾歳の春をふるやの板廂かすむとすれど月ぞもれくる

稲荷山―山城紀伊郡にあり、此社に詣づるもの杉葉を折りかざして家に歸るを例とす

三つのやしろ―稲荷社は山内三所三座なるよりいふ、思ふ事滿つに掛けたる事論なし

祈年の祭―神祇官にて行ふ豊年祈りの祭

絶えやらぬゆきのの岡のはつわらび萌えあへぬ間に人もこそ摘め

初午いなりまうで

稲荷山杉のもとつ葉をりかざしゆふこえ行くは都人かも

稲荷山みねの神杉かみさびいくよの人か折りかざしけむ

かざしをる今日のしるしといつの世に稲荷の杉は生し初めけむ

思ふこと三つのやしろのみしめ縄たれもひかれつ神の心に

峯とほぐのぼりも行くかいなり坂幣とる袖も霞むばかりに

いなり山杉生の木立ほの〴〵と霞にこもるみつのともし火

春日祭

藤浪の花のしなひのながき世にためしかはらぬ神まつり哉

舞人の立ち舞ふそでも霞むなり三笠の山の山かげにして

春神祇

二月やけふ祈年の祭とて千々の社にぬさたてまつる

岩清水臨時祭

あわにだに—沫雪になりとも、絲の結び方にいひ掛けたる洒落

しるはの磯—遠江御前崎の古稱なり、春を知るに掛く

をりあはれなる—折柄趣深き、蕨を折るに掛く

春雨は降るとも見えず柳原あるかなきかにかけ霞みつゝ

柳露

あさみどり露や染むると見るばかり濡れて色そふ青柳の絲

柳の雪のかゝれるを

とけやすき雪にはありともあわにだに結びも止めよ青柳のいと

柳似レ烟

春風のかすみ吹きとく河づらにはれぬけぶりや柳なるらむ

草のいと青やかなるを

春雨は七日ふりけりおしなべてにひ草がちに野べの見ゆるは

磯春草

打ちよする浪もみどりの色そへて春をしるはの磯の若草

蕨

袖つれて遊ぶはるのの手すさみにをりあはれなる初わらび哉

百首歌の中岡邊早蕨

ちゞめ—とゞめよ
けづる—梳る
けぶる—霞を催す

うちたるゝ柳の絲のあさみどり春くるごとに珍しきかな

垂柳藏レ水

青柳はいとたれにけり藻刈人そのふねちゞめ春の河づら

垂柳臨レ水

青柳のうちたれ髪をけづるには下行く水や鏡なるらむ

柳池の水を拂ふ

水引の絲かと見しは波あらふ岸のやなぎの下枝なりけり

水邊柳

青柳の下枝なみこす河づらははなだの絲を洗ふとぞ見る

水郷柳

かげうつす波もにほひて青柳のいとよりけぶる河づらの里

河邊柳

ゆく川の底の玉藻と見るばかりきしねの柳影ぞうつろふ

雨中柳

稱、一枝は折るを許すといふ洒落
色わく―紅白に色を分つ
けぢめ―差別
かたより―片寄、片縒
たち―霞立つと衣を裁つと

雨のうちの紅梅
春雨にひもとく梅のくれなゐはふり出でてこそ色まさりけれ

梅紅白
たをやめがかさぬる袖と見るばかり色わく梅のなつかしき哉

紅梅白梅にほひことならずといふことを
にほひ香はへだてぬ梅のいかなれば色のみ花のけぢめ見すらむ

落梅浮レ水
水上のさとやいづこぞたづね見むうめが香おくる春のかは波

柳
吹くとなき風にまかする青柳はかすみながらにかたよりにけり
よりかけし柳の絲ぞみどりなる霞の衣たちそめてより

柳辨ニ春色一
宵の雨のなごりかすめる柳原ほのかに見する春の色かな

柳絲綠新

かつしか―武藏葛飾、間々手兒奈にて有名なる地

かをりおぼゆる―薫に似通ひたる

ゆるしの色―淺き紅又は紫色の

月夜に梅の花をりてと人のいひければ折るとてといふ事を

さく梅の花の光やとめてまし梢の月はよしかすむとも

月の夜梅かをれり

月夜よし梅の香清しいざさらばこの下かげに枕からまし

かつしかの梅見にまかりて

おのづから千本のうめを垣根にてかをれる雪にこもる宿かな

梅浮レ水

花の香は波にながれてゆく水に影をとゞむる岸の梅が枝

皆川翁源應擧などともなひてふしみの梅谷のうめ見にまかりて

散る梅になか〳〵春もおもほえず雪のなかゆく心ちのみして

紅梅

たきもののかをりおぼゆる梅の花うべも夕日に色こがれけり

一枝はゆるしの色に咲くめれば折りてかざさむこのやどの梅

ねざめの里—信州駒根村の字名

おもふどち—戀仲

隣梅

中垣のこなたもにほふ梅の花われさへ春はあるじがほなる

一もとの梅をかたみに友としてならぶる軒の睦じきかな

里梅

うめが香に夢のなごりやとゞむらむねざめの里の春の曙

梅の花ざかりに山里をとふ

山里はうめ咲く宿のあまたあれば主さだめずとふべかりけり

梅近衣香

舟よする衣手いたくかをるなり咲くや梅津のはるの川風

夕梅

おのづから花の光にくれかねて梅のはやしは夕闇もなし

月前梅

梅の花かをるやそれとみしゆめのおもかげたどる春の夜の月

影もにほひ花も光をそへてけり月と梅とやおもふどちなる

もゆる―燃ゆると萌ゆると

高瀬―高瀬船、底を淺く平に造れる小舟の稱

みやびたり―萬葉集「梅の花夢に語らくみやびたる花とあれ思ふ酒にうかべこそ」

こゝろおかれぬ―靜にて心配のなき

春雪

見るがうちにはかなく消ゆる沫雪はもゆるはる野にふればなりけり

殘雪

忘れては花かとぞおもふ山の端に春も日を經てのこるしら雪

雪消山色靜

雪きえて花まつ程の山の端はかすみばかりぞ春のいろなる

梅

高瀬さすしづが袖さへかをるなりはるの梅津の花のさかりは

なつかしき花のゐまひをみし夢の面影うかぶ梅の下かげ

春風はうれしかりけり木のもとに梅が香ならぬ袖やたれなる

いろに香におごれる花のこゝろよりみやびたりとは人につけけむ

梅花風靜

吹く風はあるかなきかの梢よりおのれとかをる梅の初花

露ながらかをれる梅のはつ花にこゝろおかれぬ朝風ぞ吹く

かきこもる竹田のさとをとひしかば初鶯の音をぞ聞きつる

うぐひすの聲のにほひにさそはれて花なき里もはるや知るらむ

雨後鶯

雨はるゝゆふくれ竹のおくしめてしめやかに鳴く鶯のこゑ

若菜

摘めばかつ千世のためしのうれしさも袂にあまる若菜なりけり

多春摘二若菜一

今日ごとに祝ふわかなの若返りあまたの春を摘むぞうれしき

雪中求二若菜一

かき分けて見れども雪のふかぜりは心あてにぞ摘むべかりける

人にわかなやるとて

初春の今日のわかなをはじめにて嬉しきことの數をつまなむ

女どもわかな摘むを見て

たをやめの手ごとに摘むといふめれば若菜をさへにねたしとぞ見る

かきこもる―こもるに同じ、竹の縁語

ゆふくれ竹―夕暮と呉竹とを掛く

心あてに―これがそれならんと當推量にて

たかきにうつる ―詩經に「出レ自二幽谷一遷二于喬木一」

かくて世の春をよそなる宿なれば鶯の音もうとくぞありける

春鶯呼レ客

うぐひすの聲にひかれて花もなき宿とは知れど人ぞとひける

司得たる人のもとへ鶯の歡聲といふ事を

鶯の初音ぞ千代をよばふなるたかきに遷る春を待ちえて

竹裡鶯

春來ぬと今日告げそむる鶯のこゑも奥あるそののくれ竹

うめに鶯なく

ほのぼのと明くる夜つぐるうぐひすの聲にしらめる園の梅が枝

窓鶯

なれてこそ友とも聞かめくれ竹に臥處さだめよまどの鶯

閑居鶯

世の人は春のすさみやおほからむ我とかたらへ軒のうぐひす

里鶯

布勢の海―越中十二郎潟の古名、垂姫はその湖の附近なる名所にして今は殘らず、萬葉集に之を歌へるもの多く散見す

いさゝめに―かりそめに、僅かばかり

かれせぬ―絶ゆる時なし

檜原より先うづもれて三輪山をしかもかくせる夕霞かな

湖上霞

布勢の海や春深からし垂姫のかすみの袖もおもがくしせり

春烟

入日さす遠山もとの里みえてかすみを漏るゝ夕烟かな

鶯

花おそきかた山里のうぐひすやわれはがほにも春を告ぐらむ

うぐひすの聲いちはやき山ざとを春うとしとは誰かいひけむ

いさゝめにいさゝむら竹植ゑしより鳴く鶯の聲ぞかれせぬ

早春鶯

鶯も年のさかえを今日よりともゝよろこびの初音をぞ鳴く

南枝暖待レ鶯

うめ柳はるにいり江の南にははつ鶯の音も待たれけり

鶯の初音をきゝつやと人のとひければ

ふるさと—降、古里
みさか—甲州御坂
澪標—水脈を示す木標

暮山霞

立ちならぶ高嶺の檜原かげくれて霞にのこる夕づく日かな

嶺上霞

みよしのの雪のふるさと春くれば青根がたけぞ先霞みける

遙峰帯二晩霞一

夕日さす神のみさかはあらはれて霞にへだつあしがらの關

夕鴉歸る翅はかつ消えて霞にのこる遠方の山

浦霞

住の江のうらの松風こゑたえてかすみにこもる沖つ白浪

江霞

なにはえや波の上なる澪標はるは霞の底にこそみれ

行路霞

紅緑行きかふ袖もほのぐとかすむ宮路の春ぞのどけき

檜原霞

つぎても—又續けても

かへりあるじ—勝方の大將が、其里の館にて配下の射手を饗應すること

あさま—淺間山に淺しを掛く

さして—指して、即ち確かにの意、笠に掛けたる洒落

梅がやに子日しにまかりて

梅さかばつぎても訪はむ初春の松にひかるゝ今日ばかりかは

賭弓

ためしとて鷲と鷹との獵矢とり今日たちならす百敷の庭

此殿のかへりあるじやしるからむ射手のつかさの袖つどふなり

露

みわたせば端山茂山おしなべて霞をもるゝ色なかりけり

富士のねの雪さへ春の色みえて霞みそめたる朝ぼらけかな

初春霞

春いまだあさまの山のうすがすみ煙にまがふ色としもなし

山霞

春がすみ八重たつ時は三笠山さしてそこともわかたざりけり

霞添二山色一

うら〳〵と霞みそめたるあしたより日影にほはぬ山の端もなし

あやなき闇―「春の夜のやみはあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくるる」古今集

船岡―山城愛宕郡

まとゐ―團欒の樂み

春風夜芳

梅が香を風さそふ夜はなか〳〵にあやなき闇もよしぞ有りける

子日

子の日する今日のためしと引く松にひかれて千世の春やかさねむ

子の日すと引くや小松の摺衣袖のみどりぞ千世のいろなる

船岡やまつとみゆきの跡をこそ千世の子の日のためしには引け

長枝が家の子日に

松も引き我もひかれて千世やへむ初子をいはふ宿に來ぬれば

かくしつゝ千世にならさむ宿なれば子の日の松も睦じきかな

忘れめやいはふ初子の玉はゝき塵だにすゑぬ宿のまとゐは

引くたびにめづらしきかな宿の松あまたの春になれて訪へども

かくしつゝ松のおもはむ年までもあり經てこゝに子の日をばせむ

百首歌の中に正朔子日

うれしさを引き重ねよと春の立つけふに子の日やめぐり來ぬらむ

かつ消えて—かたかた消えて、段々と消え行きて

いとなし—暇なし

とひとはれつゝ—訪ひつ訪はれつして

春日

うちかすむ千里の波を光にて朝日にほへる春の河づら

春日望レ山

をつくばの高嶺は雪にあらはれて霞にまがふは山しげ山

大ひえやをひえの山の朝がすみたちかさねたる春のいろ哉

かひがねの高嶺のみ雪かつ消えて下つ群山かすみたな引く

春生二人意中一

春といへば人の心ぞたゞならぬ世は花鳥のあはれのみかは

白河少將殿に歌めしける時陽春布レ德といふ事を

雪も消えわかなも萌えて武藏野のはるの光ぞかぎり知られぬ

泉暖草色春

氷ゐし岩垣しみづ音たてゝ雪間の小菅はるめきにけり

家々翫レ春

都人はるはいとなし花鳥のすさみに誰もとひとはれつゝ

あはとも―淡路の語路より來れる洒落、うつすりとも
しきつ―攝津敷津
しづくの田ゐ―常陸の志筑、萬葉集には師付の田井と見ゆ
つのぐむ―芽ぐむ
河と―河瀬の水の一つになりて流るゝ狹き所をいふ

早春海
淡路しまあはとも見えず朝がすみしきつの浦にはる立ちしより

氷解
こほりゐし掛樋のつらゝうちとけてしづくの田ゐに春たちにけり

泉響滴ニ春風一
逢坂や岩間の清水おとすなり氷ふきとく春の山風

風光日々新
難波江やこほり流るゝ朝ごとにつのぐむ蘆の數ぞそひゆく

江上春興多
よる浪もにほふ入江の梅柳いづれのかげに舟はつながむ

春色浮レ水
ほの〴〵と霞む河とのあさ風に春たちかへる浪のはつ花

毎山有ニ春色一
うら〳〵と出づる日影にさそはれて霞にほはぬ山の端もなし

まで―詣で
綾、布―高貴と卑賤と
おこたりざま―なほり加減
あへじ―耐へられずして死なん

雪ながらあくる朝戸にさく花の面影みせて春は來にけり

元日雪の降りけるに人のまで來ければ

庭の雪の跡もめづらし今朝は先春とともにし訪はると思へば

禁中立春

衛士のたくひかり霞みてほのぐ\とあくる御門に春たちにけり

春のはじめに

つくばねの高嶺のみゆき霞みつゝ隅田河原に春たちにけり

百司馬も車もつどふなり君がみかどに春たつらしも

貴賤迎レ春

綾のきぬ布の袂もあらためて春來にけりと見ゆる今朝哉

心地そこなひて久しうわづらひけるに春立ちてよりおこたりざまに覺えければ

霜雪にあへじと思ひし老の身のまたしも花の春に逢ひにけり

くち木ぞとなに思ひけむさく花にまた作はむ春にあふ身な

年内立春—立春の節が十二月中に來ること

む月—一月

はなにもなして—花やかなる心持にもなして

琴後集

平春海

卷一

春歌

年内立春

おほかたの花待つ人にいそがれて年のうちより春や來ぬらむ

いそぎたつ春ぞうれしき老いぬとてよそには聞かぬ心ならひに

元日

む月たつ今日より梅をかざしつゝ今年も春は花にくらさむ

珍らしと春を待ちとる心こそ年はふれどもかはらざりけれ

春たつや今日ははなにもなして見む朽木に似たる老のこゝろも

朝日子のひかりまちとる若水にくまばや千世のはるの心を

元日雪の降りければ

年おもひをよせ、心をこめしものを、いたづらになしはて侍らむはほいなし、ともかくもしかるべからむやうにとりなし給はむこそうれしけれと、こたへければ、人々かのづしより取出て、書きあつめもてゆく。さて名をばいかにといふ。すなはち琴後とこそいふべけれとて、それまきのはしつかたにぞ、書きつけさせたる。

文化の七とせかみな月ついたちの日

琴じりの翁

自序

昔父の世にいますがりし時は、遊の道にふかう心よせたまへりしまゝに、吹きもの彈きものなにくれの器ども家にあまたつたへたるを、としごろたび〳〵の火にあひて、いまはおほく失せもてゆきて、たゞあづま一つなむ、これをのみ昔しのぶるくさはひには思ひたる。今年草の庵をあらためつくりて、小さきふせやを、己がつねに住みならさむ所とさだむるにつけて、おもひけるは、かのあづまこそおのが家の寶なれ、いかでこれに所得させて、そのかたはらにこそおきふしすべけれ、われ琴ひく事はならはねど、絲なきをまさぐりて思をやりしためしもあればとて、これをわがかたらひ人にて、さてことがみに、硯一つ、火とり一つ、琴じりに、づし一よろひをすゑて、年ごろの言の葉どもを入れたり。此ごろおのが心しりの人々詣來ていひけらく、年頃ものし給へる言の葉どもはいかにしたまふぞ、かきあつめ給はましかば、われら筆たすけまゐらせむといふ。そはうれしき事なり、さるはつたなき言の葉を、人なみに世にのこし侍らむ事は、はづかしきわざには侍れど、多

清水濱臣

さと言をはぶきて、新しくひとつのさまを思ひかまへられて、わきてめでたくなむものせられける。世の人翁をたゞに歌よみとのみ思はむも、翁をしらぬなるべく、又たゞに上つ代の學するたぐひとのみ思はむも、翁をしらぬなるべく、またたゞにからまなびのはかせなみにのみおもはむも、翁をしらぬなるべし。おきな若くしてなりはひの道にうとく、つひに家をはふらかして、百千の寶をうしなひ、はてはことたらぬがちに年月をおくられしかど、老いてのち言の葉にとみ、まなびにとまれたり。いでや百千の寶は、たゞしばしいけるがほどのとみなり、言の葉と學とは、とこしへに亡きあとまでの富なり。翁たからにまづしくおはせしかど、言の葉とまなびとにとまれたり。誠に天の下のたからの王とは、翁をこそいふべけれ。たれかはうらやまざらむ、たれかはしたはざらむ。今此言の葉のふみ、世に普くひろごりて、あひだおかず學のふみども板にゑられゆかば、わが翁を天の下の寶の王なりといふことの、いつはりならぬこと知られぬべし。そも此集の名におふせられたる琴じりの詞は、古事記に琴がみといふことばのあるより思ひよられたるなりとぞ。

あれし事おほく、又後には佐々木學儒、安達文仲などいへる、世にすぐれたる博士たちに、あかしたゆふべむつびともなはれしかば、からうたにも其名きこえて、なまくの博士口あかすまじくなむおはしける。翁世にもとむる心なくして、やむごとなき御前わたりに召さるる事好まれず、たゞ花にあくがれ、月にうかるゝほかには、朝夕文机のもと去らずおはして、筆とるわざにのみあかしくらされしかど、ともすれば物まなびする人のためにさまたげられ、かくすれば病の床におきふしして、思ふこといはで止まれたる事すくなからず、かきさして事終へられざりしもの、數あまたなりき。歌をのみたてゝものせられしとにはあらねど、おのづから此うたにて世に知られ、人にもちひられつゝ、やうく天の下、たかきもみじかきも、老たるも若きも、しるしらぬ歌よむ人とだにいへば、千蔭春海と口にいはざるものなきやうにはなりおはしにけり。その歌のすがた、芳宜園のをぢはいきほひ雄々しく、詞はなやぎたるを好まれ、翁はさびたるさまのこまやかにしめやかなるふしを心とせられにけり。文詞は趣をもろこしにかり、言葉をこゝにうつし、ふるごとをもとめず、

ことじりぶみのはしことば

世に歌よむ人おほし。あるは短歌にたくみに、あるは長歌にかしこく、あるはふみ書くわざにすぐる。世に古學びする人おほし。あるは御世々〱の書をあきらめ、あるは四つのおきてぶみにくはしく、あるはあがれる世の古言ぶみに心をふかめ、あるは後の世の物語ぶみを枕ごととす。その人々にとへば、かれにくはしきはこれにおろかに、こゝにおもひいりたるはかしこに心あさし。しかのみならず、大和册子のうへにはくちさきらきゝたるも、もろこしぶみにむかへば、爪くはるゝたぐひおほし。まことそれもことわり、たれやし人かは皆がらかねそなへたるあらむ。我が家の佛たふとぶとにはなけれど、うまく此道々にゆきとほりて、よろづたど〱しからぬは、ひとり我が師にしごりのやの翁のみなむおはしける。翁、こゝのことはすべて縣居の大人にとひきかれたるよしは、誰もよく知れることなればいはじ。もろこしまなびは、はじめ服部仲英ぬしに名簿おくられしを、仲英ぬし身まかられては、鵜殿士寧ぬしにしたがひ、中比都にのぼりて、皆川伯恭ぬしに問ひきか

字充我音也。衣服冠冕。皆隋唐制度也。百官有司。皆學唐制稍變之也。律令格式。皆摹倣唐制也。博士立明經文章天文陰陽律算音諸科。不立和學歌學博士。所謂和歌博士者。出自江匡房戲稱。和學歌學之名。考之古未之有也。和學也者。儒者之通本朝典故言辭也已。歌學也者。儒者而作歌也已。舍周公孔子之道。而別建道者。吾未之聞也。天竺有釋氏之道。後漢傳之。而盛於隋唐。唐之詩人。有儒有仙。李白杜甫韓愈儒也。王維白居易內佛外儒也。其詩非風雅之音。則釋氏之偈也。宮人工女。亦浴二家風者也。吾儕雖庸陋。亦儒也。儒而歌者也。本朝制度文物。已皆奉周公孔子遺法。而其信佛者亦多。故本朝之俗。少而儒。老而佛。自中古以來盡然。由是觀之。非儒則佛。舍此二道而別建道。吾未之聞也。今之和學者。恥我邦別無道。牽強傳會。妄引我古史。欺人欺己。吾安得不辨之哉。質賢先生之持論。有超於世所謂和學者流。宜乎。先生之文。卓異倜傑。有唐宋八家之風矣。

日本百二十世天皇文化七年秋九月　陸奥葛質序

琴後集序

和歌詩也。短歌絕句之類也。長歌歌行之類也。六義既備。抑揚頓挫亦如詩然。余獨讀藤式部源氏傳。知左氏莊周司馬遷之文。可以和言爲之。源氏傳以上。何其無聞也。源氏傳以後。何其無繼之者也。和文既有左氏莊周司馬遷之文。安得無唐宋八家之文哉。求之於古而不得。求之於今。而得之於平春海先生。先生有琴後集如干卷。其歌則不復論。余獨論其文曰。記廿一首。序十八首。題跋十二首。書牘廿三首。雜文三首。墓碑二首。祭文一首。外集卅八首。編文具此諸體。非唐宋八家別集之制乎。升降前却。不失分寸。文其步驟也。抑揚開闔。操縱起伏。文其變化也。整齊而錯落。勃犖而婉曲。文其辭氣也。前提後襯。回抱接初。留筍待後。奇峰突起。橫雲斷山。文其形勢也。截然有界。段落之文也。綿然相屬。過接之文也。承上起下。轉捩之文也。作文具此數法。非唐宋八家之筆乎。先生非獨其於文爾。其於論道亦云。我邦之所道。周公孔子之道。舍周公孔子之道。而別取道於我太古。吾未之聞也。故和字非我字。假漢

その理をのぶるになむありける。

うけらが花 終

享和二年七月、廣田有年、吉井清、安井千之等ともに序なして、岡田常陸及び千之寫し畢りぬ。

かゞぶりて―蒙りて
引馬の原―三方が原、德川家康が武田の軍と戰ひしところ
みはかしの太刀―御佩刀
むま子―孫
田安の殿―田安中納言宗武卿
召さげ―召し上げ
申文―上申書
はふりぬ―葬りぬ
うつせみの世―現の世、此の世
今よりをち―今後

ぬるに、賀茂の縣主成助のすゑにて、世々山城の國、相樂の郡、賀茂の大神の御奴なりしを、師朝といひし世に、文永の十一年、遠つ淡海の國敷智の郡、濱松の庄岡部の鄕なる、賀茂の新宮をいつきまつるべきよしの勅命をかゞぶりて、彼の鄕を賜はり、卽ちその新宮の神主となりて、世々を經て、政定といひしは、引馬の原の御軍に從ひたてまつり、いさをありて、みはかしの太刀、甲を賜はりぬ。大人はかの政定より四つぎのむま子定信といへるが子にて、元祿の十年、岡部の鄕にて生れたまひて、享保の十八年に、京に上りて、荷田の宿禰の敎をうけたまひ、寛保の三年に、江戸にまゐ來たまひしを、延享の三年に、田安の殿より召さげたまひて、古への書の道の博士として、殊にめでさせたまへりき。大人よはひ老いて申文奉り、寶暦の十年に仕をしぞきて、明和の六年十月晦日に、七十あまり三のよはひにてみまかりたまひ、江戸の南荏原の郡、品川の東海寺なる少林院の山にはふりぬ。眞淵といへる御名は、敷智の郡の名より思ひよりてつきたまへりとぞ。縣居とはうつせみの世にませし時、庭を田居のさまに作りて、賀茂氏のかばねにもよしあればとて、自ら家の名におほせられたるなりけり。今よりをち古への學世にひろごりなば、いよゝ此大人をたふとみ、且つ此のふみをたゝへなむものぞとて、

によびー苦吟し

思ひあがりー心け高くなり

藍より青しー師よりも優るをいふ、荀子勸學篇に「青取之於藍而青於藍」

加具土の神のあらびー火災

さはらふー障る

一つよみ出でたまへるにも、深くかうがへ、あまた度あぢはへて、によび出でられしなり。歌のさまは、始と、中ごろと、末と、三つのきざみ有りき。始のほどは、物學びたまへる荷田の東麿宿禰の歌のさまにかよひて、花やぎ手弱きさまなりしを、中ごろより自らの一つの姿となりて、みやびにしてしらべ高く、しかもをゝしきすぢをよみ出だされ、齢の末に至りては、いたく思ひあがりて、まうけずかざらず、誰も心の及びがたきふしをのみ作られき。其始のほどなるも、藍より青しとか、宿禰よりも立ちまさりてぞ聞えし。をりにふれては、古事ぶみのいとあがれる世のさまなる、又古へののりとごとになずらへたる、あるは中つ世の催馬樂の謠ひ物をまねびたる、あるは物がたりぶみによりたるなどは、其代々の人のいひ出せるに異なることなくなむありける。さるを、一とせ加具土の神のあらびに、多くうせぬるこそ、かなしむべきことのかぎりなりけれ。ここに平の春海の翁、童時より大人にしたがへりしによりて、大人のみまかられし後、家の集ども、はたくさ〴〵のちりぼへる文らを、此翁が家にをさめ置けるをかきつめて、板にゑりなむとせしに、さはらふ事ありて年月經にけるを、更に思ひ起して、歌に文にくさぐさの問答をさへにとりとゝのへて、十卷とはなしぬ。そも〳〵大人の遠つ祖をたづ

古へのためし—古今集の序の文を指す
つぎねふ—山城の枕詞
はふり—祠官
たど〳〵し—おぼつかなし
とはに—常に
いさゝめに—かりそめに
くね〳〵し—心のねぢけたる

がら春秋の野山のにしきにたちまじれる心地なむしける。かれそのはしつかたに書きつく。

蒼生子家集杉のしづえの序

花をこひ月を思ふにつけても、心々を見たまひけむ古へのためしは、かけまくもかしこきものから、そも猶事につけつゝ、いひ出づる歌にしも、人の心はあらはるゝものぞかし。荷田の刀自は、つぎねふ山城の稲荷のはふり、東麻呂翁の女なるが、よしありてこのあづまの大城のもとにまゐきて、年月をへにけり。ちゝのみの父の教を守りて、千代の古道ふりぬるふみどもよりして、後の物がたりぶみをさへによく見わたしつゝ、くらぶの山のたど〳〵しきくまなく、朧の清水おぼつかなからねば、やむごとなきわたりにも、春の梅津のかぐはしき名をきこえあげて、鳥羽のわたりのとはに召しまつはしき。刀自の歌のさま、男山のをゝしきもあなるは、常の心おきて、いさゝめにもたをやめのくね〳〵しきならはしなくて、賀茂のみたらし底きよく、淀の河水よどめるすぢしもあらぬ心から、おのづからいひ出づることもしかなめり。されば音羽山の音にきゝて、栗

くだれる世にあれ出でて—後世に生れ出て
長瀬氏—名は眞幸、筑後の人、本居宣長の門人
東の遠の御門—東都江戸
心なぐさ—心の慰に

へ人のさまにかよひて、わがともがらの、人の跡をならひて、其形をうつしうるたぐひにしもあらぬは、眞心の古へ人に等しかればなるべし。吾友藤原千任其書きたまへるをひろひ集めて、板にゑりて、世に傳へまくするよ、こもまた深く古學をたふとめるがあまりなりけり。かれ其はしにしるしつ。

萬葉集佳調序

春山の花にふれては綾なき衣も其香にそみ、秋野の萩をわけてはやつるゝ袖さへ其色に匂へり。されば上つ世の歌を常に心にしめなば、くだれる世にあれ出でたりとも、おのづから其姿にうつらざらめや。こゝに長瀬氏、不知火の筑紫の海の八汐路をへて、このあづまの遠の御門にいたり、ねもごろにいにしへぶり語らふついで、旅のやどりの心なぐさに、萬葉集のうちのすぐれたるを、ながきもみじかきもえらび出で、朝よひに目馴れて、すなほにしてあつく、みやびにして雄々しきしらべをまなびな記たよりとせばやと事はかりす。さはいへ、故郷にかへらむ月日もほどとほからねばとて、とくよみはてゝ、ひろひ出せり。もれたらむは後にもとてなむ。さてかくひろひ出でたるを見れば、さな

由良玖奴那登—揺れ動く玉の音
あげつらふ—論ず
ふみで—筆

邦胤其家乃法以弖葬乃業之、蒲蒟山爾石構、奥槨建天、後名乎豊八尺瓊靈刀奈母稱閉計留、邦胤悲爾不堪弖之、碑爾記須倍伎言乎宣長爾乞計禮婆、宣長諾那比弖歌作弖贈禮里計利、其歌、

無世爾母由良玖奴那登乎遠音爾聞弖隱去之豊八尺瓊乃比加理志所思

故此于志乃常乃行狀乎記弖、自己書弖與刀於能禮爾乞、其名乎太永世爾不朽之米萬久念布波同自心奈禮婆即弖筆乎執弖碑爾記都、寛政八年丙辰七月橘千蔭文并書。

縣居翁の筆のあとをゑりて千歳筵と名づけたるそれが序

手かくわざは、古へ物のまじるしに出できはじまりたるなれば、よきあしきあげつらふべくもあらぬすぢなるものから、古へ人の書けるあとを見れば、心さへ淸らにおぼゆるは、いかなる故にかと思ふに、其の古へ人のすなほなる眞心の、おのづからふみでにあらはるゝによりてなりけり。わが縣居の大人は、古への學びの道をしも導き給ふを眞心にて、手かくわざをむねとせられつるにはあらねど、書きたまへるあとの、おのづから古

えらび給ひて、竹芝のいそべなる、東海寺の眞珠院の壺のうちになむ、その櫃をこめられて、そがかたはらに石ぶみをたてゝ、歌塚てふ文字を君が御手して書かせ給へる、歌に文に、おの〳〵かの塚にこめよとてなりけり。百千々の代々をへぬとも、此石ぶみのかけずくづれざらむ如く、諸人のみやびも朽ちせざらむかも。安永九年やよひ橘の千蔭しるす。

上總國菊麻八幡大神の神主根本常陸介佳胤が碑の銘

于志名者佳胤姓者平朝臣奈利、代々上總國市原郡菊麻鄕八幡大神乃神主奈留我父相武主身罷弖後祖父胤滿主爾養波禮弖生立奴、寶曆乃九年爾當年從五位下之位乎賜利常陸介爾任計奴、無程胤滿主身罷弖家乎繼利、此于志眞爾大神爾仕奉利弖、御社乎修米理久留事不怠之弖、彌整保利爾整保利、益足良比爾足良比伎、又皇御國乃古奴留書乎觀、歌作留事乎好弖、吾縣居翁乎深久貴美、翁爾物學多留伊勢人本居宣長我學乃道乎志奴毗、且自己思得多留事等少奈可良受、佐留乎寶政乃七年爾當留年乃正月從病弖、同年乃七月八日爾奈毛齡五十萬里四爾弖之身罷給比奴留眞子

ふんでー筆

香取ー楫取魚彦、加茂眞淵の門人、下總香取の人

をづつーうつゝと同じ　現在

ほしくて、かいつめむとはすれど、中々にふんでの及ぶべき事にあらずなむ。さて彼の御園に入ることを許したまへるは、利貞朝臣が導きたまへるによれるなれば、かしこまりに堪へずて、よみ侍る。

なべて世のたぐひとや見むくれ竹の御園にかへす舞の袂を

歌塚の記

歌塚なりぬ。其起れる事のよしは、豊國中津知りたまへる奥平の君昌鹿古へを好みたまひ、人をうつくしみたまふあまり、香取の賤男魚彦といへるものを召して、かたらひ給ふついで、魚彦がいへらく、抑文に歌に、古人の書きたるまゝに、千年の末に残り侍らば、千年の先をしのぶ便なるべきを、今はた残れるがいとまれらなるを、惜み侍らざるべけむや、今の古へを見る如く、千年の後に、今のをづつのいかで残らむ事を、こゝらの年月思ひめぐらし侍るに、巖もて作れる櫃にをさめたる物の、年をへて朽ちせぬたぐひあまた侍れば、しかしてひめおきなむ事をねぎおもひ侍るとまうす。君うべなひたまひて、やがてかたへの臣たちにおほせて、是をなむつくらせ給ひける。さて淸らなる所を

頭物、即ち賜り物

ありつる木のもと―以前の樹下

入りあや―舞の手の名

ひとりごたるゝ―獨語せらるゝ

まかで音聲―退出の音樂

かごかなる―こんもりとして物靜なる

五十ぢの夢―邯鄲盧生の榮花の夢

あがれ出て―退出し

うからやから―家族親族

陣樂など、すぎ〳〵に舞ひつゝ、しばしいこはしめたまふあひだも、御園のさま見すぐしがたくて、かたへの芝生のうへ立ちもはなれぬほどに、又なむ物の音のきこゆるに、すずろにあくがれ出でて、ありつる木のもとにうづくまりぬ。太平樂のおごそかなる、喜春樂のみやびなる、陵王のいかめしきなど、目もあやなり。

萬とし御世安かれと宮人の立ちまふ袖ぞのどけかりける

舞人のかざしの花のにほひにも春をよろこぶしらべとぞ知る

菅のねの長々し日も入りあやの袖のにほひはあかずもあるかな

などひとりごたるゝに、日もやゝかたぶきて、まかで音聲に長慶子を遊びながら、橋うちわたりて入りはつるまで、ひたぶるに夢とのみおほめかれつ、かごかなる窓のうちに、夜晝むかふ古きふみにも、物がたりぶみにも、かゝる事なむあるを見るたびに、いかで夢にだに此御有樣を伺ひ見奉らまほしく思へりし年頃のねぎ事を、神もあはれとおぼして、唐人の五十ぢの夢に似かよひたる夢をしも見せたまへるならむと、嬉しくおもふ〳〵、彼の御園をあがれ出でて、いつしかもとの葎が門にかへりて後こそ、夢ならざりしことをおぼえ侍りしか。玉の緒の限り忘るべくもあらぬ物から、うからやからにもきこえま

たつか杖—手に携へ持つ杖
かうけち—纐纈、しぼり染の模様
あからめもせで—わき目もふらずして
まゐりくる音聲—參入の樂音
聖の御代に—聖人の時に出づといふ鳳凰
かづけもの—纏

日になりぬ。たつか杖によりて、彼のみ山に攀ぢのぼりつゝ、人々と共に、御園に入りて、高やかなる木立の陰にかゞまりゐつゝ、見わたせば、南面ははるかに山高く聳えて、東の方の谷陰に橋かけわたされたり。山のふもとに、かうけちの幕引きわたして、大鼓鉦鼓を据ゑ置かれ、鉾立てならべたるが、青葉の山に映え、夕日の光にかゞやけるは、夢の中に天つみ空にのぼりて遊べらむ心地して、うつゝともおぼえず、たゞあからめもせでまもり居るに、橋のあなたの木だち茂れる陰より、物の音かすかに聞ゆるは、まゐりくる音聲にてなむ有りける。おのづからなる山路と見ゆるわたりより、裹頭樂を遊びつつ、ゆるらかに歩み出づ色々の綾錦こきまぜたるが、若葉さす木の間に、かつかくれかつあらはるゝさまは、暮れていにし春のふたゝび立歸り來て、梅も櫻もまた更ににほひ出でたらむやうに見ゆるに、やう〳〵御前に出でて、一の鼓を舞ひ、三つの笛を吹合せ、三つのつゞみをうちならせるひゞきは、空ゆく雲もたゞよひぬべく、列なれる舞人の袖の夕風にふきかへさるゝさまは、聖の御代にあらはるてふ鳥のおり居てあそぶらむも、かくやあるべき。舞はてぬれば、狩衣姿の司人たち、御階をくだり、大庭に沓引きならしていでくるは、舞人にかづけものせさせたまふなめり。かくて萬歳樂、桃李花、散手破

おぼしのどめ—ゆる〳〵と思ひたまへ
朧の清水—大原にある名所
さしぐまれ—涙か得され、清水を汲むの縁
おもとびと—侍者
朝い—朝おそくまでねる
すさめぬ—賞せざる
みぎり—階下

まはぬ御心には、かへりて疎みたまはむと、いとゆゝしうぞおぼえ侍る、後瀬しづかにおぼしのどめたまへかしといふ。君はおぼつかなかりし山中に、よぶこ鳥のたづきを得たまへるは、さすがに嬉しうおぼしめすべし。月もやゝ更けゆくまゝに霞みわたりて、所からなる朧の清水さしぐまれつゝ、立ち別れたまひぬ。

寛政七年四月三日二荒の宮の御前の舞樂を見侍りし時宮のおもと人岸本土佐守利貞主のもとめによりて書きておくりけるふみ

一本二木の軒の櫻も、いつしか跡なく散りはてゝ、所得顔なる八重葎にとぢられつゝ、いともいぶせき菴のうちに、明けわたるをも知らで、朝いせるを、今は人もすさめぬ鶯のなきごゑに驚かされて、やをら起き出づれば、柴の戸おし明けて入り來る人あり、こたび宮の御前に樂所の人々をも召して、樂せさせたまふを、よそながら見奉る事をなむ許させ給ふといふ。かけまくもかしこきみぎりををがみ奉らむことだにあるを、かゝるおほん時に逢ひ奉る事よと、たゞ泣きに泣きぬばかりおぼえて、手を折りて待つに、はや其

念じあへで—我慢がしきれずして
あがたわたらひ—田舍あるき
まつはし—御側に置かれ
くづし—うちとけ
春の錦—都の花
ひづき—世に馴れ

みに、消息せさせたまひつるは、後にうけたまはれば、殿の三の君にておはしますとか、御母君にわらはにて仕へ奉りて、なれきと呼ばせたまひしが、さる事によりて、久しうあがたわたらひし侍りて、後に故師殿につかうまつりしなり、姫君いわけなくおはせしより、まつはしたまひて、今なむ御後見だつ人も侍らねば、かひなけれど、玉の緒のかぎりは、かくてさぶらはむとてなむ、蕨折りつるわらはは、わが子にて侍るが、こも今はよるべなくて此御館になむさぶらはせ侍りける、姫君いかで御宿世あらばと、たのみをかけぬ神しも侍らずなむなど、いとこまやかにくづし出でたり。かくうちつけならむもかたじけなきわざに侍るめれど、春の錦になれたまふとも、み山の花をなおぼしすて給ひそとよとて、うち泣くをあはれとおぼして、

雲かすみ千重にへだつる花の香を袖にをうつせ春の山風

とのたまへば、いと口とく、

袖の香にけたれもやせむ奥山のいはほの中の花のにほひは

時うつりぬ、あやしとやおぼすらむとて、すべり入りなんとするを、いかで御聲をだに聞かせてよとのたまへば、などしかにはかには、いまなむおどろかい奉らば、よづきた

くまなきすき心—どこまでもとどく好色心
すいがい—透垣
あづま—あづま琴、大和琴ともいふ、六絃
こうじ—困じ、つかるゝをいふ
ゆゑづき—由緒ありげにて
まほ—眞正面
身じろき—身うごき
きぬのおとなひ—衣の音
ゆくりなく—不意に
ものし—もののしくいとはし

すれば、例のくまなきすき心かなとあざみたまふやうなれど、御心のうちはおしはかるべし。山蔭の花こそとてそゝのかし奉りて、やがており行きて見るに、門守もなし。中門のすいがいのもとまでいざなひ奉りて、しばしためらふほど、あづまをかきおはする聲いと艶なり。壺のうちにも、八重なる、一重なる、咲きみだれて、つばなまじりの菫は所せきまでにほひあへり。かの童の聲して、人のけはひす、いとあやしといふが、中々にうれしうおぼゆるに、やがており立ちて、すいがいのもとに來るを、ひそかに呼びて、遠き山路にいとこうじたまひぬ、簀の子をだにゆるしたまひてよといへば、中門をひらきて入れ奉りぬ。ふりたれどさすがにゆゑづきて、小簾のうちのかをり、むかしおぼえてなつかし。いかでまほならずとも見せ奉らまほしけれど、簾のうちに几帳たてわたしたれば、見ゆべうもなし。あづまは引きさして、やをら身じろきたまふきぬのおとなひ、よし有るさまなるにも、遠山鳥のおもひやしたまふらむかし。童いかにいひけむ、年のほど四十ぢあまりにやあらむ、いとなれたるさましたるが出で來て、君を見奉りて、ゆくりなくきこえ奉らむは、ものしとやおぼすらむ、されどかゝる御よすがならでは、きこえまゐらするたよりも侍らねば、念じあへで、しのびてものし侍るなり、過ぎし御山ぶ

さう〳〵しうー淋しく物足らぬ
あこー吾兒、兒童を親みて呼ぶ稱
あてー上品
まゝー乳母

なべて世の色香には似ぬ花の枝をたれによせなむ春の山ぶみ

いとさう〴〵しうとてたまへりけり。かにかくに思しはなたせ給はぬなめりとおもへば、とりあへず、

山びめの君を待つらむ心をも世に似ぬ花の色香にぞしる

などなぐさめまゐらせつ。はるけき木のもとに、山がつならで、清げなる童の蕨折るさまも、所からにぞいと興ある。立ちよりて見れば、過ぎつる御山ぶみに、女車に添ひゐて、はかなき御返しもてこし童なれば、あこはいづこよりかく山深くはものしたまへると問へば、此山陰におはします御もとよりといらふるが嬉しくて、そはいかなる人のおはすにかと、かさねて問へば、あなむづかしとて、歸りなむとする袖をとらへて、せめて聞けば、故帥殿の姫君なむ、父君のもたまへりし御莊にこもり住みたまへるなる、あてにおはするものを、しり奉る人なくてと、まゝなどはわびあへり、遲しとや尋ねたまふらむといふ〳〵別れ行く。しりにたちてしばし行きて、この山もとに小柴ゆひわたしたる門より入るを見つゝ、有りしかたへ立歸れば、君、ちるといふなる鐘の聲もしづ心なくて、今なむもとめさせつるとのたまふ。たそかりつるはかゝる事なむ侍りぬるときこえまゐら

すき影―物のすき間よりほのかに見し面影

たえぬ涙云々―「朝夕になく音をたつる小野山はたえぬ涙や音無の瀧」源氏物語夕霧巻

わり子―辨當

所せき―窮屈なる

青やぎ―「青柳をかた絲によりて鶯のぬふてふ笠は梅の花笠」催馬樂

ひと日のすき影は、なほ忘れたまはず、またなむ小野の山踏せむとのたまひて、御心しれるかぎり、四五人御ともにて、ことさらにやつしたまひて、しのゝめの空明けわたるほどに、御馬にて出でたゝせたまひぬ。頃はやよひのなかばなれば、一條の大路うらゝにて、加茂の川瀬の波のおとも、のどかに聞きなさる。はるかに歩ませたまふまゝに、田舍だつけはひもめづらかなり。八瀬とほりぬと口ずさみ給ふ御心のうちぞいとほしき。やゝのぼり行く道すがら、炭やくけぶりに立かへて、霞わたれるをちこちに、散るさくらあれば、今開け初むるなども、あはれに見ゆ。たえぬ涙といひけむ瀧の白絲は、くり返し見たまへども、猶あかずおぼして、おりたゝせたまふ。かへり見すれば、はや都のかたは雲霞のみして、八重の潮路を見やる心地す。こなたかなた逍遥したまひて、苔をむしろにまとゐしつゝ、御わり子とうでて、人々にも御酒たまひなどす。黑木こる賤ならで、行きかふ人もなければ、所せき御身には、いとよき御遊び所なりけり。人々かしこまりなければ、醉ひしれて、あるは岩ほにしりかけ、あるは木の根によりゐて、青やぎつゞしりうたふも有り。げにかた絲によるてふ鳥も、うしろやすげにさへづるは、都にて聞きしにまさるのどけさなり。君さくらの枝をけしきばかりおし折りたまひて、

二もとの杉云々—浮舟の君小野の菴室にありて同居の尼君の初瀨參詣に同行をすゝめしを否みてよめる歌「はかなくて世にふる川の浮瀨には尋ねもゆかじ二本の杉」といふにつきて尼君のたはむれ言ありたるなり

ひたやごもり—一向家にこもりをるなり

昔はまたも—古今集「花のこと世の常ならば過してし昔はまたも歸り來なまし」

ふかきまでおもひしみつゝ、露にぬれたるあけぼのより、かすめる月のかくるゝまで、あからめもし給はぬまゝに、御行ひもおのづから怠りがちにておはします。日數へてひとつふたつ散りそめしより、やがて風をだに待たで、心よわうみだるゝを見るには、あかで別るゝおもひにひとしくて、常なさを思ひ知りたまふ御心さへいづちいにけむ、涙のつきせず流るゝを、手習ひにまじりたる、二もとの杉に、たはぶれごといひあてられしに懲り給ひて、色には出でじとのみ、ひたやごもりにうちしのびおはさうず。御かたへさらぬ侍從こもきが、あやしと思ふらむさまを見るにつけても、昔の右近ならましかば、問はずがたりし出でつゝ、なぐさむわざもあらましものをと思へば、いとゞひがたきを、まぎらはして、文机にのみよりつゝ、珠數引きならしおはしますに、山風に散る花の、御袖にとまれるを、つく〴〵と見たまひて、

今更に心とめじと思ふ身をうたても袖に散る櫻かな

昔はまたもと御心のうちなりけむを、たがさがなさにか。

春の山ぶみといふを題にて

を結びてつくれる机

手習の君—源氏物語手習の主人公浮舟

ねびまさり—深くなりゆき

すきずきしう—好色らしく

わいだめ—辨別し

る。其時の歌、

仙人のおほせしたねの菊の露かけて千年(ちとせ)のかざしにぞ折る

花を惜む詞　手習の君になずらふ

思(おも)はぬ山にと、のたまひおどろかしたまへるあはれさはさるものにて、幼(をさな)かりしより、うつくしとかたみに思ひまつはふる小君にさへ、ことだにかはさゞりしを、いかにうらめしうおもふらむとおもほすにも、いとゞせきあへたまはず。年かへりても、なほ残れる雪は、春としもなき山かげながら、鶯のうら若きこゑは聞きすてがたくて、垂(た)れこめがちなるいよすかゝげさせ給へば、嶺の霞のみぞさすがにのどけう見わたさるゝ。春(はる)のけはひもやうやうねびまさりて、軒近き櫻のひもときそめしより、まぎるゝ事なく、しづかにうちむかふに、八重なるは、あまりにまばゆきまで花やぎて、うたてすきずきしう見ゆるものから、よになつかしきにほひは似るものなく、一重(ひとへ)なるは、さまおくれたるに似たれど、こまかに見れば、いとらうたげにまめだちて、かをりことにふかう、いづれをいづれとわいだめがたくて、ありし世の人々になずらへられて、われながらつみ

大みあらか―宮殿
吹上―海濱の砂丘
むらさい野―紫野

伴の雄―武士

おふな〳〵―その程々につけて
あえなむ―あやからん
よごとのほぎごと―祝賀の詞
うちはらふにも云々―「山人の折る袖匂ふ菊の露うちはらふにも千世はへぬべし」新古今集
しもとのむすび机―細き木の枝

る事なむありける。抑いにしへ、大みあらかに、臣たちつどはしめ給ひて、菊合せをなさしめたまひし時、あるは吹上にたてる白菊を、浪の寄するかとうたがひ、あるは大澤の池水にうつろへる影をめで、あるはむらさい野に一もとにほへるをもてあそび、あるは田蓑の鳥の花の雫にぬれむ事を思ひ、あるは白たへの袖かとたどり、あるは露の間に千年へぬるをおどろけるなど、くさ〴〵のみやびは、いとも〳〵かしこくて、まねび出でむきはにしもあらぬものから、かく鳥が鳴くあづまのはてより、不知火の筑紫のきはみまで、國津御神のうらさびなく、立つ波のさわぎ絶えて、靫かくる伴の雄より、秋田刈る賤男らさへに、みやびごとに心をよするおほん時にあひて、おふな〳〵おほん惠をしも悦ばざらめや、樂まざらめやとて、此翁が七十ぢの今日よりしも、百といふ代を經なむ事は、菊の下ゆく流れを汲みけむ唐人にしもあえなむといふことを、今日のよごとのほぎごとにぞしける。おのれそのつどひに加はりたれど、かの菊合せにみやびは盡されたれば、今更何わざをかせむ。しかはあれど、たゞにやはとて、うちはらふにもといへる歌の心もて、しもとのむすび机を、ませとおもはせて、黄金色なる菊の花の枝に、きぬの袖うちかけたるさまを、おろそけなる洲濱につくりて、翁をぞいはひものし侍りけ

弓槻が嶽、足痛の河―共に大和の名所
りち―音律
かひ―甲斐、鹿の聲のかひに掛く
月よみの神―月の神
ふんで―筆
ゆたかなる―寛政の年號
むまご―孫

天の香久山に、神代のまゝの鏡をかけ、姥捨山をおもひて、千里の外に心をすまし、須磨の海人の苫屋をうらやみて、はるけき汐路の海松をかり、あるは清見潟をしのびて、富士のねの雪と月とを心にうつし、あるは弓槻が嶽にさしのぼる影を足痛の河に待ちとり、領巾振る山にのぼりては、唐土かけて思ひやれる、言の葉の玉の數々のたびはてゝ、りちの音をとゝのへ、秋風の調べをあそぶほど、月西の空にかたぶけり。今宵のみやびごとをしも書きつめて、後のおもひ出で草にをとおほせたまふに、われら心は、小倉山のふもとの鹿の、かゝるむしろに列れるは、いけるかひにと音に立てつべく、よろこぼしきあまりに、大かたの世のそしりをも、人皆のあざけりをもかへり見ずして、たゞ月よみの神のみかげを仰ぎつゝ、ふんでをくだせるになむありける

ある人の七十の賀の序

御代の名をゆたかなる大御政といひて、四の時七たび立かへれる年、何がしの翁が七十ぢになむ滿てりけるを、其子むまごほぎごとするに、時はしも君が代を長月のなかば過ぐるほどなりければ、菊をめづといふ事を題にて、疎からぬ人々に、文作り歌よませけ

ちぶりの神―道祖神
はたばり―布帛の幅
まうち君―前の君にて、大臣參議などの稱
こづみ―木屑の如き小片
刈りそけ―刈り除かれ
まなごぢ―眞砂路
言さへぐ―唐の枕詞
負氣なきものから―分に過ぎたれども

玉ぼこのちぶりの神もたすけなむ旅ゆく君がゆくさかへるさ
いかにかも露のちらまし旅人の庵せむ野の秋のはつ風
難波潟たづのつまよぶあかつきは古里いかに戀しからまし

月の宴の歌の序になずらへたる文

はたばり廣き錦織りかくる、木々の葉月のなかば、十まり五たりのまうち君たち、おほやけのいとまありて、眞心を菅原の君の釣殿につどひて、月の宴をなむしたまひける。この夜らや、天の海に雲のこづみもよせず、星の林も刈りそけられて、月の舟のみ眞帆に浮べれば、池のさゝ浪こがねをのべたらむ如く、渚のまなごぢ玉を敷きたるにひとし。千五百秋はありとし、かゝる足り夜にめぐりあひてむ事のかたかめれば、たどにやはあるべき、吾大御國ぶりにも、言さへぐ唐國ぶりにも作り出でつべき題をおもひめぐらしてよと、人々のたまへるに、は山の眞柴負氣なきものから、門田の稻置いなみあへねば、月を望みて遠方をおもふといふ題をなむ奉れりける。かくて、みやびをたちをはじめとして、玉だれの小簾の中なるたをやめのともさへに、おの〳〵よみいでたまへることは、

難波の大城まもり―大坂城代
おうと―首
いみき―忌寸、共に姓
なかばの秋―仲秋
かはらけ―酒杯
とゝのふる―調べひゞかす
千萬の云々―「千萬の軍なりとも言あげせず捕りて來ぬべき男とぞ思ふ」萬葉集
うしはきまし―占め給ひ
みつるゝ―疲勞する

荒妙の藤原のぬし、おしてる難波の大城まもりにまけたまふまうち君につきて、文月廿日あまりに道立せむとす。今も猶土さへさけぬべき暑さをもさけがてらに、舟をうかべてこそ馬のはなむけはせめとて、沖つ鳥賀茂の大人、空かぞふ大伴のぬし、おうとなる、いみきなる、さき草の三つまたの江よりともづなを解きて、まそ鏡すみだ河原に漕ぎのぼるに、鷲の住む筑波の山の嵐、志長鳥安房につぎたる沖つ風も、たゞこゝもとには吹きつどひつゝ、なかばの秋の空なむおもほゆる。やがて月のみ船も、雲の波をこぎはなれ、久かたの空も、水のそこも、ひとつにのみ見ゆれば、常見る所としもおほえず、かはらけもあまたたびめぐらし、言の葉も千々のなさけをつくして、人々此別をなむ惜むめる。抑今のおほん代には、とゝのふる鼓の音をも聞かず、さしあぐる旗のなびきをも見ねば、千萬の軍なりともとうたはむは更によしなかるべし。たゞ吾せこは、旅行きしらぬ新防人なしぬ。山をこえば駒のかけなは道引きたまひ、海をわたらば舟のへにうしはきまして、なにはの浦のなにはの事なく、御津の濱松みつるゝ事もあらで、よく行かしめ、よくかへらせたまへと、住の江の大神にあふぎふして、こひのみまつるはや。即ちによび出づらく、

まで來ぬる―まうで來ぬる
あゆひ―脚絆
道立―門出
いつゝたりやたり―五人八人
天のたづ村―天飛ぶ鶴の群
いはひべ―齋瓮、神酒を供へし壺、これを据ゑて神を祭り、其子の無事息災を祈るなり
つゝみなかれ―恙なくあれ
しぬゝに―しとしとに

むまで來ぬる。しかしてこゝにしも、其心ばへおろそげならぬ程に、また其時にしもなれりけり。おくつきにもまうでなむ、母刀自妻子にもあはましとて、玉づさの文月廿日あまりあゆひとゝのへて、道立せむとす。いでや鳥がなく八十のちまたに、遠き近きをいはず、國々より來たりつどへる人は、いく百千てふかずも知られねども、眞心もてあひかたらふ人はしも、たゞいくばくもあらねばとて、いつゝたりやたり相つらねて、此別をなむをしむめる。かくて麻の狹衣たち別れなば、杣木きる足柄山の山風はだへにしみ、いはばしる大ゐの河の川浪をま袖にかけ、空にとぶ鴈、野になく蟲の音にも、いかばかりかもこしかた行くさきをしのびなむ。しかはあれど、ちゝのみの父の御靈は、天がけりても、天のたづ村我子はぐくめとこそおぼさめ。はゝそばの母刀自は、いはひべ据ゑなべてつゝみなかれとやいはひまたすらむ。こを思ふに、友どちの別惜むはいとしもわりなきわざになむある。

眞木立てる足柄山の夕霧にしぬゝにぬれてひとり越ゆらむ

藤原の宇萬伎が難波へ行くを送る辭

山のなから—山の中腹
みなぎは—水際
さで—魚をすくひ捕る具
藤の衣—喪服

や。つゞら折なる山路を、手束杖曳きてのぼり行く人あり、童子琴をいだきて隨へり。いづこへ行くならむと見れば、山のなからばかりの平らかなるに、黒木もてあづまや造りて、ひとり笛吹きすさべる人のもとをさして訪ふなめり。はるかに木立うちけぶれるひま〳〵に、小さき家居見えて、細き棚橋わたしたるを、駒に乘りて行くあれば、みなぎはの蘆間に、を舟浮べてさでさしおろし、あるは釣たるゝなども見ゆ。朝な夕なこを見れどあかれぬあまりに、かの瀧のもとなる人の心をよみける、

心さへ澄みわたりけりとこしへにみなぎる瀧の音になれつゝ

笛吹きゐたる奥山人の心を、

吾山の松の嵐よ世の中に笛の音をだに誘はずもがな

千足の眞言が古鄕へ行くを送る詞

吾友千足氏、舟きはふ津の國なる、夕日てる西の宮といふ所に、父母をなむおきたりければ、年毎にまうでたりけるに、父の翁は、こぞなむ廣田の森の秋の葉と過ぎいにてれば、須磨の蜑の藤の衣をしをりつゝあるに、此大江戸の家はた事さりがたしとて、卯月にな

われさへ共に―古今集「逢はぬ夜のふる白雪とつもりなば我さへ共に消ぬべき物を」
名ぐはし―名のよろしき
いたつがはしく―わづらはしく
とごころ―雄心
山田の曾富騰―案山子
こゞしき―險阻なる
横ぎりわたる―横ざまに雲のわきなびく
日陰―かづら
ましら―猿
もりはむ―貪り食ふ

いとゞむつまじきかな。われさへ共にと思ふもかひなくて。

山水のかたうつしたる繪を見るといふを題にて

文机によりゐつゝ、程なき壺の中の草木をのみ憐みて、思ひ足らはせるにしもあらず、名ぐはしき吉野の山の奥をとめ、久かたの天の橋立をたづね、常磐なる松が浦島にわたりてぞ、心ゆくかぎりなるべきを、遠く出でたゝむもいたつがはしくものうければ、いぶせき庵のうちに籠らひ居るよ、ますらをのとごころなしとやいはむ。そもまた己がさがなればいかゞはせまし。いでや山田の曾富騰といへる神の、足ゆかずして、千里の外まで、心をはなちやりてむわざもがなと思ひめぐらして、山と水とのすがたを壁にゑがかせて、心をしづめてうち對ふに、岩がねのこゞしき嶺より、漲りおつる瀧つ瀬あり、かたへの岫より、横ぎりわたる白雲になかば絶えて、麓に落ちくるは、そのひゞき聞きつべく、そが末つかたは、道の面に造り出せる檜皮屋のもとまで流れたり。すだれ高く巻きて、三人四人思ふ事なげに語らふさまを見れば、我も其人々にまじらひ居る心地す。木高き松に日蔭生ひたれて、梢にはましら群れゐつゝ、木の實もりはむなどもをかしき

かきつめて―かき集めて
火桶―火鉢
おほとなぶら―大殿油、燈火
後夜―夜中すぎ
さう〳〵しう―淋しく
うなゐ子―幼兒
あこめ―中古童女の著たる衣
まろばし―雪達摩などつくりし
人やりならぬ―我心からの

どに、小笹が枝もうち撓みて物思ひ顔に、ねぐらもとむる村鳥の羽風に、ほろ〳〵と亂るる雪さへ、袖の涙にひとしう、しばし寒さも忘れて、猶眺めゐつゝ、過ぎこしかたの事ども、かきつめて思へば、かゝるをりには、必ず小簾のうちに空だき物くゆらせつゝ待つに、小車の音して、中門の廊より入りおはして、ともに火桶に寄りゐて、雪とつもれる事ども語らひあかし、かたへ氷れる池水に、住みなれし鴛鴦のかたみにうは毛の雪をうちはらふをも、よそにやは見すぐしつる。格子おろしこめ、おほとなぶら影しづまりて、ともにふすま引きかづきては、窓の前の下折の音をかすかにおぼえ、後夜の鐘のひびきを、物の底に聞くらむやうに、おもはれし夜もありつるを、かくふるされし身は、跡つけむ人もなきや、中々なるものの、いとさう〳〵しうなむ。あはれうなゐ子の昔、おまへの雪におりたちて、あこめしどけなう著ならしつゝ、童どち思ふ事なくて、まろばしあひしをりの心ながらあらましかば、かゝる物思ひはせざらむものを、白たへの雪の光に、暮れがたきをかこち、早うしらみゆく曙を怨みこしより、はて〳〵は枕の氷とけむ期もなく、人やりならぬ思ひにのみしづむも、心なき雪にさへぬれぎぬきせつる罪のつもりにもやあるらむかし。いでや、しら雪もあはれ世にふるたぐひぞと思へば、

し

摺衣―青摺にしたる衣

おのごり戸邊―日本紀一書に「上枝懸以鏡作遠祖天拔戸兒己凝戸邊所作八咫鏡」

心のゆかぬ―滿足せぬ

つれ〴〵―徒然

見わたさるゝ檜皮屋も藁屋も、ひとつ色になりぬ。しかすがに松につもれるはをゝしく、柳にかゝれるはたをやかにして、くさ〴〵のけぢめ見ゆるもあはれなり。かけまくもかしこき九重には、雪の山をつくらしめ給ひ、百の宮人朱雀の大路をねりてまうのぼり、あるは摺衣きよそひ、駒にのりて、白斑の鷹を手にすゑて、交野の御野にきそひ出で、あるは網代車走らせて、道すがら笛吹きすさびつゝ、思ふ方をや訪ふらむ、あるは男女棚無し小舟漕がれ出でては、袖さゆるをしも忘るらむなど、目の前に見るごとおもはれて、面影にうかぶばかりなるもあやしきや。入相の鐘の聲に爭ひて、猶暮れなむともせぬを見はやすほど、雪やみて、おほひふたがりし雲跡なくはれわたりて、月さしのぼれゝば、天つちの限り、おのごり戸邊が鑄なせる鏡をかけなべ、天の明玉が作れる玉を敷きみてたりとも、かくやはと思ふばかりてりかゞやける、はたいふべくもあらずなむ。

かくながら心のゆかぬくまもなし月にてりそふ雪の光に

同じ詞 唐うたの閨怨になずらふ

つれ〴〵とながめがちなる夕暮の空より、花にまがへて打散れるを、あな嬉しと見るほ

やいつこ—やつこ、賤人

とぢめ—終

うらさび—心淋しく

心づから—おのづから

はたれふり—まばらにふり

隱口—枕詞

かづけ—かむち

もみぢの中より、青海の波てふ舞をかゞやかし、あるは秋の川瀬に、もみぢふける舟を浮べては、わたつみの神のしらべをとゝのふるなどこそ、心行くわざならめど、うま人はうま人どち、やいつこはやいつこどちてふ古言の如く、これの庵の今日の遊びぞ、吾ともがらのたのしみのきはみなりけるはや。

うき秋といひつる人は山里のもみぢの色を見ずやありけむ

雪を見る辭

あら玉の年の一とせ、ありとある心ずさみのとぢめに、雪こそ猶おもしろく心ゆくものはあれ。籬の千草も殘る色なく、軒のもみぢも散りはてて、たゞ龍田彦のうらさびませる、嵐の音のみはげしかりしを、いつしか風の音もしづまりて、雲のたゞずまひのどかになれるみ空より、いづこともなく落ちくめるは、風のさそはぬ櫻花の、心づから打散るなして、小笹が上にはたれふりたるは、霜の置けるさまに見えわたるを、やゝ降りまさりつつ、千萬の鷺のとびかけるが如く見ゆれば、忽ちにあらはなりし梢には、隱口のはつせをとめが造りなせる白ゆふ花を咲かせ、常磐なる木々には不知火の筑紫の綿をかづけつゝ、

けぢめ—差別、優劣の意
星の逢ふ—七夕
中ばの秋の月云云—「三五夜中新月色、二千里外故人心」白樂天
とのへ—外郭
我世はへなむ—一生を住みとほさん
かきつらね—相伴ひ
こがる—焦げて色づく
淸き入江に云々—蜀江の錦
くたし—朽ちせ、斧の柄くたしは晉の王質の故事にて時のたつも知らず歸るを忘るゝをいふ

古へより人のわきかねたる、春と秋とのけぢめは、末の世に明らめはつまじければ、ただ春は春をめで、秋は秋をこそあはれむべけれ。久かたの星の逢ふてふころ、荻の上風身にしみそめてより、さを鹿の妻とすなる萩が花に眞袖をにほはし、遠つ人はつかりがねに、玉章の便をかこち、中ばの秋の月の光には、千里の外をおもひしに、はや峯の柞野べの淺茅のうつろひゆくより、草木こと〴〵たゞならぬぞ、秋のあはれのとぢめなりける。こゝに大城のとのへの北に近つあふみの比叡をまねばれたるみ山あり、其麓はかしこになずらへて、坂本となむいひける。そこよりも奥まりたるあたりは、殊にいと淸らに、しづけさいはむかたなし。いざこゝに我世はへなむとて、はやく住か求めつる人ありけり。此頃の時雨だつ雲のけはひに、布留の山ざといかならむと、心しれる人々かきつらねつゝとふに、木高き松に枝かはせる楓の、色こがるばかりにそめなせるは、まことにもろこしの淸き入江にさらせる錦も及ぶまじくて、さらでだに憂してふ事は聞きも見もせぬわたりには、斧の柄もくたしつべくおぼゆるを、ましてかく染めつくせる木のもとをば、いかゞは立ちうからざらむ。臥待の月やゝ梢を登り、淺茅が露玉を敷きたらむ如く見えわたるに、名に負へる長月の夜を長しともおぼえず、語らひあかしつ。色々の

あきじころ—商賣する、商法の失敗の義ともいふ
そまびと—きこり
端山のかひ—近き山の間
そがひ—後方
なぞ—何なるか

八月十五夜家にておの〳〵題を分ちて文作れるに山里の月

といふを題にて

耳になり弭のおとを聞かず、目に旗手のなびきをしも見ぬおほん時代に逢ひては、何事につけても憂しとわびしと怨みかこつべき事やはある。されば世を避くとしもあらねど、あきじころ市のちまたに近き賑はしさをいとひて、此山ざとにはうつろひ住めるになむありける。秋こそ殊にといへるもうべなるかな。籬のもとにたゞずめる小鹿、松に木づたふましらの聲も、ひとりある人をなぐさむるに似てあはれなるに、茜さす日も入りはて、そまびとの斧の響絶えて、端山のかひより月さしのぼれば、そがひの嶺よりおつる瀧つ瀬は、こがねの色の絲引きはへたらむ如く、岩に砕くる水は、白玉をこきちらすとぞ疑はる。とこしへに淸らにして、物にとゞこほる事なきを、吾心とはせむんとおもふに、たぐへてむものはなぞ、たゞ月と瀧つ瀬とのみ。

雨岡がり行きて黄葉をめづる辭

まで來て—參り來て
名だたる—名高き
したに—內心に
はるく—思を晴す
あともひ—伴ひ
國のまほら—見わたすかぎりの國の中
しみさびたち—繁く神々しく立ち
すそわの田居—麓の田
しもと—細き木の枝

じろければ、かのみ山に登らまく思ひつゝ年經ぬるを、年毎ににひ桑まゆの絹もてひさぐをなりはひとせるもの、みやび事好めるが、しば〳〵まで來て、秋のなかば過ぐるころ。國へ歸りぬべし、いかで思ひ起したまへ、名だたる嶺にも從ひ侍りなむなどいへるまゝに、年ごろしたに思へりし事も、今なむはるくべく思ひなりて、二人三人あともひつれて出で行く。かのひさぎ人は、尾花ちるしづくの田居を垣つ田にしめて、家居つきづきしく住みなしたり。其家に憩ひて、共にみ山に登らむとす。あしたの霧の絶間より、木々の紅葉このもかのもに匂ひ、分け行く山路はやゝうら枯れにたれど、八千草の花猶色をつくせり。蟲の聲もそこはかとなく聞えて、げに春見ましよりといひけむもうべなりけり。やう〳〵登り行くほど、み山おろしに霧晴れわたりて、國のまほらもつばらに見わたさる。足穗の山はそがひにしみさび立ち、みなの河は源二をのかひより湧きいづる眞淸水にて、末遠白く流れいぬめり。すそわの田居遙に色付きて、鴈雲井よりおち、端山のしもと陰しげくして、鹿の聲かすかなり。かくてわれも人も紐ときさけて、酒汲みかはしつゝ、岩根に尻かけてうたへらく、

つくばねの嶺の秋霧しのぎ來て昔の人のあともふみ見つ

おのがじし―各自に思ひ〳〵
いはへる―祀れ
みくまりの神―水分の神、水神の森をいふ
ころも手の―枕詞
うしはき―領有し
むけませし―平定せられし

ろくさまも繪によく似たり。すべてひと日のうちに、筑波嶺より吹きおろすかと思へば、沖よりも風通ひ來て、岸の木立も長き堤も、あるはあらはれ、あるはかくれて、限りなき青海原にむかひたらむやうにおぼゆる折もありけり。かくてやゝ夕ぐれ近く成りゆけば、むら鳥のおのがじしねぐらもとむるに、雁の一つら二つらわたり行くなど、えもいはむかたなし。暮れはてても猶行く水の色のみ遠白くのこりて、川添小田にいはへるみくまりの神のみ火の、海人のいさりともいふべく、かすかに見えわたるもあはれなり。

秋ふけて小雨そぼふる隅田河たが墨がきのすさびなるらむ

秋の山ぶみといふを題にて作れる文

名のみ聞きわたりて、見まくほしき山河はしも限なきものから、先づ隅田川の北に聳えて、とはに目なれぬる、ころも手の常陸の國二並の筑波の山の、かけまくもかしこき朋神のうしはきいますみ山にして、いにしへ日本武の御子の命、あづまの國むけませし時、其あたり過ぎ給ひて、いくよか寢つるとうたひ給へる大御言の葉さへ世々に傳はり、その後丹遲比の眞人此山にのぼり、また大伴の宿禰ぬしをみち引きのぼれる人の歌にもいち

しるかり―著しくあり
みをの一すぢ―水脈の一筋
とはに―永久に
はり原―榛の木の林
かきけち―かき消し
たむだき―手をくみて

に行きてやどりぬ。有明の月のにほひも、霧立ちわたる曉のさまも、所がら世に似ぬものから、こゝは雨のそぼ降る日なむ殊にあはれは深かりける。もとより萱ふけるいほりなれば、音だになくて、軒のしづくの三つ四つ落ちそむるより、籬の萩の下葉の色付きたるが、ほろ〳〵と散るもあはれなり。水のおもてはうごくともなくて、鏡の如くなるに、雲の濃きうすきうつろひて、かつ浮びかつ消ゆる水沫にこそ、雨のけはひはしるかりけれ。みをの一すぢは、さしひく汐にもまじらで、とはに花田の色に流れいにて、沖に出づめり。これや水上の秩父の山の眞清水の落ち來るならむ。うち向ふ岸のはり原のみ、濃き墨がきの如くなるが中に、柞の黄ばみたるはさすがにほのかに見えて、其ひまひまより、長き堤の見えわたるに、堤のをちなる梢は、やう〳〵にうす墨もてかきけちたらむ如く、いとしもはるけきは、たゞなびかぬけぶりとのみぞ見ゆる。こゝかしこより、烏の飛び行きつゝ、ねぐらの鷺のつばさおもげにおき出でて、河の瀬の眞菰におり立てば、みさごの群れきて水の面に浮べるもをかし。上つ瀬より筏師の蓑笠きて、棹を筏の上によこたへ、おのれたむだきて、おもふ事なげにてをり、いかだは水のまに〳〵流れ行くもしづけし。渡守舟さし出せば、大笠かたぶけてわたり行く人の、やがて堤をあ

小手指原―入間郡にあり
野づかさ―野中の小丘
まうぼり―むさぼり食ふ
けに―尚一層
をちもこのもも―あちらもこちらも
つぼ―庭園
秋のけはひ―秋の氣色

のうへに、たゞ富士のねのみぞいちじるき。かくて見わたせば、夕べの霧はものゝふの小手指原にたち、入日の影は赤駒の足柄山にかくろひぬ。やがて野づかさにおりたちつつ、つい松ふきたてゝ、さかなまうぼり、汲みかはすほどに、月はる〳〵とすみのぼれば、置ける露原みな玉をしきなせり。此野らのさまは、人のかたれるよりもけにかぎりなく、鳴く蟲の聲は都にて聞きつるよりもいとことにて、ますらをとおもへる人々らも、えたへぬなげきをなむしける。うけら、かるかや、はぎ、すゝき、分けに分けて、をちもこのもあさるまゝに、千々の蟲はかず〳〵の籠にもみちにたり。そも〳〵こと狹きつぼのうちの草むらに聞きて、秋のおもひをやらむよりも、かく大野の心もひろに出でたたむこそ、まことにますらをのあそびなりけれ。かくしつゝ秋てふ秋はとひ來たらむと、野守のをぢにいひて、うちつれて歸りぬ。

むらさきの根はふ萱原入りみだれ秋なく蟲の聲をきくかな

隅田川のほとりなる石濱の庵にて雨の中に作れる文

葉月はつかあまり、秋のけはひのなつかしくて、例のすみだ河のほとり、石濱のいほり

雲のはたて―雲際

花を見捨つる―「春霞立つを見捨ててゆく雁は花なき里に住みやならへる」古今集

ふぐし―土を掘るへらの如きもの

て、草の枕だに結びあへず、天路はるかにおもひあがりて、夕暮の雲のはたてに、聲はを舟漕ぐ唐艫にかよひ、姿は薄墨にかける文字に似て、一つら過ぎ行きつゝ、遠方の田づらに落ちくるさまさへ、おほどかにして、其時しも、荻の葉におとなふ風、萩が枝に亂るる露ぐまなき夜半の月、染めかくる木々のもみぢ、千たび八千たび打ちすさぶ砧の音、おしこめてあはれなるをりに逢ひぬるが、限りなくめでたくなむ。また別けていぬる春べには花を見捨つるなどとがむめれど、しづけかるみ山の花を、つばさにしめむとて、都の空をいそぐならむと思へば、そもはたにくからずこそ。鴈よ〱、なれこそはわがおふどちなりけれ。

われもいざ秋をあはれぶ友どちのつらにはもれじ天つかりがね

蟲撰の詞

秋のあはれは蟲の音ばかりなるぞなき。いで武藏野の原にしもきゝてむ、家づとにもしなむとて、葉月の廿日ばかり、白妙の袖ふりはへ、ぬば玉の駒竝めつゝなむゆきゆくふぐし持たるをとめに問へば、こゝなむ武藏野の原なりといふ。かぎりも知らぬ淺茅生

んのこと
ひきさし―彈くを中止し
見さくれば―遙に目を放ちて見れば
笠にぬふてふ花―梅花
立ちぐく―くぐる
待たるゝ云々―「あら玉の年立ちかへるあしたより待たるゝものは鶯の聲」拾遺集
ゆくりかに―思ひがけなく
そぼふる―しよぼしよぼ降る
こちたき―仰山に
鳴きとよめる―鳴きひゞかす
うれたきや―歎くべきかな

秋の風の言葉をうそぶき出せるをりしも、遠つ人初鴈がねの聲かすかにきこゆるにおどろきて、しばしひきさしつゝ見さくれば、姿は雲路になむ消え失せぬる。いでや白雪の舊年よりしも、はねならはしつゝ、かげろふの春立ちそむるあした、日影うら〳〵とうち霞めるに、軒近き篁にねぐらしめつる鶯の、まだ片なりなるうひごゑにほひ出せるより、笠にぬふてふ花のかをり滿てる枝に來ゐつゝ、ほこりかにさへづるは、めでたき物から、雲にたぐへし櫻も散り過ぎて、青葉しげき木の間を立ちぐく聲のむくつけきには、待たるゝ物はといひしに行きたがへてぞおぼゆるかし。池の藤なみ夏かけてにほへる頃ほとゝぎすの、それかあらぬかとたどらるゝ一聲より、花橘のゆくりなく香ににほへる曙、あり明の月のさやかなるみ空に、さだかに名のりて過ぎ行くは更なり、小雨そぼふるゆふべ、物思ひにいを寢ずして更け過ぐる夜半に、をち返り鳴くを、誰やし人かあはれとおもはざらむ。然はあれど、山かたつけるわたりには、こちたきまで飛びかひつゝ、梢にしもおりゐて高やかに鳴きとよめるなどは、今一聲のといふべくもあらずうれたきや。そも〳〵鴈は、常世の國をや出でけむ、三越路よりや來ぬらむ、ある時は眞木立てる荒山のあしたの霧にむせび、ある時はみるめ刈るやしほぢの夕べの浪をつばさにかけ

もろこしの西の湖―支那浙江省の西湖とて風景絶佳なり
ことくにの書―漢籍
さにぬりの―丹塗
からをとめ―唐少女
日の入る國―印度、佛教をいふ
この上の品のうてな―彼の極樂淨土の上品の蓮臺
によび―苦吟し
もだもあらず―默して止むべくもあらず
ふゝめる―含みたる
あがれ―別れ
七つをのを琴―七絃琴、所謂き

をつきて、石もて作れる橋かけわたせるは、もろこしの西の湖とかいふめる所のさまかけるかたに似通ひて、遙かに行きかふ人の袖のにほひさへなつかしく見ゆ。あるじは吾國ぶりの歌つくり、書見ることをしも好めるが上に、ことくにの書をさへに、朝夕べの友とせりければ、さるかたの友垣にしも乏しからず。唐歌好める何がしの博士は、さにぬりの小舟にからをとめ載せて、此花折らせまくおもひ、日の入るくにのますらをの法に心をよするは、是ぞこの上の品のうてなに生れ出でたらむ心地するなどいひあへりけり。人々心々に歌によび出づれば、もだもあらず。

なべて世のにごりにそまで住む人の友と見るべき花ぞこの花

かくて上野の岡の入相の鐘木の間しのぎてひゞきわたれば、み盛りに開けたりし花の、又ふゝめるさまに立ちかへりたるも、あはれふかゝるものから、遠方の梢の鷺すらねぐらもとむるものをとて、人々あがれかへりぬ。

初鴈を聞く辭

桐の葉の一葉散りそむるゆふべ、獨高き屋にのぼりて、七つをのを琴をかきならしつゝ、

藤原濱臣—村田春海の門人、不忍池畔に住し、泊洦舎と號せり

ゆはた—絞り染

うまびとのきぬがさ—貴人の笠、衣笠は圓りを絹に張りたる長柄の傘

わらふだ—圓座

いろくづ—魚類

の事なりけり。

水上の遠つ筑波の高ねより海原かけて照れる月かも

人の世も吾世も常にあらませば八千代もこゝに月を見てまし

藤原濱臣が泊洦舎にて蓮を見る辭

大比叡うつされたる上野の岡の麓、比良の大わだなせる池水のほとりにさゝなみや志賀さゞれ浪もて名をおほせたる屋あり。白妙の富士のみ雪もきえ、あらがねの土さへさくといふなるころ、人皆涼みせむとて其やどりにつどひて、高きやにのぼりて見わたせば、池の面は紅のゆはたと見ゆるぞ、蓮の花の咲きみちたるにてはありける。おひたてる葉のひろごりたるは、宮路ゆくうまびとのきぬがさの如く、浮きたるは、大庭に百の司のわらふだ敷き竝べたる如く、葉に置ける露は、白玉の五百つ集ひを解きみだしたるになむ似たりける。池の水清らに澄みて、あそぶいろくづ思ふ事なげなり。人々衣の紐を解きさけ、おばしまに寄りゐて、酒汲みかはす程、彼の岡の木高かる瑞枝吹きこす風のすずしきに、えならぬ香のかをりくるもたとしへなしや。彼方の岸より中島まで、長き堤

みつまた―隅田川と綾瀬川と合する邊の三叉の稱
かたつきて―片片へ寄り附きて
すだくみぬま―集る水沼
川と―川の船のとまる所
おほんたからがえだち―人民の夫役、仁德天皇の故事
おほせし―命ぜし

漕ぎのぼらむとす。そも〳〵このあづまの遠のみかどは、古へのおしてる難波高津の宮の御津なして、日の經なる日の緯なる八十のみ國ゆ、千々の大船のつどへる入江にかたつきて大城をしめたまへれば、大江門としもいふなりけり。いでや赤駒のはらばふ田ゐ、水鳥のすだくみぬまも、都なさぬ方しもなければ、蘆荻しげれる隅田河原も、百舟きほふ川ととなりてゆ、今いく世にかもなりぬらむ。かくていや河のぼりて見わたせば、ひんがしの里には、八束穗つめる稻置のもとに、國風うたふ聲たえず、西の岸には、家竝しきて、かまどのけぶり千里に滿ちぬ。三とせまでおほんたからがえだちをゆるさせたまひし大御世や、かくこそありけめ。ふりさけ見れば、狹衣のを筑波高ねたゞ此水上に神さびたち、かへり見すれば、夏麻引く海上がたの沖つ浪にぞつゞくなる。やがて月のみ舟とともに、かよりかくより木の葉なすみだれ出づめる舟屋形に、百の物の音ならしたつれば、月の光もいやてりまさりて、水の面は櫛笥にのする鏡の如し。げに橋の名をふた國といへるは、武藏と下總とのあはひなればなり、河の名をすみだ河とおほせしは、月の影と物の音とによれりとこそいふべかりけれなどいひあへり。かゝれば人々歌よみしつゝ、かけまくもかしこけれど、古へをおもひ、今をあふぐはや、ころは葉月なかば

かづらく—髮に飾る
まさきく—恙なく
さかみづき—酒宴
面やめづらし—「去年の秋相見しまゝに今日見れば面やめづらし都方人」大伴家持
もとほとゝぎす—毎年來鳴く時鳥の意
ふた國の橋—兩國橋

内の柳かづらくより、三笠の山にもみぢをかざすゆふべ、阿騎の大野に鳥狩するあしたも、いまさゞりし程は、にほひうすき心地しつるを、あら玉の年の五とせ經て、まさきくてまうのぼりたまひ、かくしもろともにうたげする事よと、よろこびにたへずして、さかみづきするに、あるじの君も、面やめづらしなどうたひ出したまへり。人々醉のすさびに、河づらにかまへたる高殿にのぼりて見わたせば、佐保の山に並みたてる松の梢に、夕月ほのかに見えて、にごりなき河水にうつろへるに、ほとゝぎすさへしば〳〵名のりて過ぎぬるは、人皆の思ひたらへる夜のさまなりけり。そが中に或人盃をとりて、

うるはしき友にあふ夜をなれすらも空にしりてかこよ鳴きわたる。

我等そのむしろのはしつかたにさもらひて、

うちのぼる佐保の河浪立ちかへりなく音めづらしもとほとゝぎす

とぞうたへりける。

隅田河に船を浮ぶといふを題にて

玉くしげふた國の橋よりもこなた、さき草のみつまたの江に舟よそひして、隅田河原に

軒のつま—軒端　しみゝに—繁く　をゝりにをゝり—撓みたるが上にも撓み　おばしま—欄干　あからめもせで—傍見もせず

まうのぼり—参り上り　うるはしみおもほす—親しく思はるゝ

其つらにかずまへられ—其人々の内に数へ入れられて

つほのうちに、一もと立てるが、高きやの軒のつままでおひのぼりて、其枝はしみゝにひろごり、其花はをゝりにをゝり、おもふ事なげに咲きみちつゝ、おばしまによりゐる人々の面わにてり、衣手にくゆりかゝれり。かの筑紫の館には、紅なるやなかりけむ、ただ雪にまがへるをのみめであへるは、あかぬすさびにこそおぼゆれ。ひねもすあからめもせでうたひいづらく、

すがのねの長き春日もくれなゐの梅さく宿は立ちうかりけり

川づらなる家に時鳥を聞くといふことを題にてつくれる文

大伴氏の家は、代々佐保河のほとりになむありける。其主は大ぎみのよざしのまゝに、天ざかる鄙に年へませしが、うち日さす都にまうのぼりたまひて、卯月ばかりに、うるはしみおもほす人々を、佐保の家につどはしめて、うたげをなむしたまひける。われわくらはに其つらにかずまへられて行けるに、門には馬くるまさはに立ち並み、母屋に小簾かけわたし、壁代を垂れて、麻もよし紀氏なる、あしびきの山の上なる、あらたへの藤井なる、これかれ玉だれの小瓶を中にすゑて、あまたゝび汲みかはせり。いでや佐保の

筑紫の大みこともち—太宰帥、大伴旅人の館に於て梅の宴を開きしをいふ

けぢめ—差別

みじかき—下賤の

ゆるしいろ—紅紫のうすき色

とも—仲間、連中

文詞

那波何がしが家にて紅梅をめづる辭

咲く花のにほふが如くといひけむ、奈良のおほん時、不知火の筑紫の大みこともちの館に、下つ司人らをつどへて、梅のうたけしたまへりしを古きためしにて、世々この花をなむめであへりける。おほよそ草木の花の、天地のなしのまに〳〵咲出づるにくさ〴〵の色ありといへど、白たへなると紅なるにまされるしもあらざりけり。そが中にもけぢめありて、百しほ千入に色こきは、こちたくうたてありて、かしこきはのきぬの色めにさへかよへばにや、たはぶれにくし。あら染の淺らかなるは、下が下のみじかき袖おほえて、品おくるゝかたになむおもはるゝ。たゞ梅のゆるしいろなるが、おのづから花びら毎に光こもりて、其香さへこよなきに如くものやはあるべき。こゝに紅の梅をうゑて、年のはに花のさかりには、みやびをのともをつどへて、其花めづる人なむありける。今年きさらぎなかば過ぐる比、いざといふまゝに、かのやどりをとふに、ひろらかなる

山のくき—山の洞あるところ
わくらはに—たまたま
あれ出で—生れて
潮なわ—潮のあわ
おむかしみ—嬉しく思ひ
くしきかも—奇しきかな
たふときろかも—尊ぶべきかな

を　撫で給ふ　惠のあまり　今も猶　千島のおくの　山のくき　荒磯のくまに
わくらはに　人とあれ出て　人の道　しれらぬえみし　千々萬　ありとふ事を
きこしめし　憐みたまひ　そこばくの　臣の健雄を　その島に　渡したまひて
日の本の　神をたふとみ　大君を　かしこむみのり　ねもごろに　をしへたま
ひて　國開き　ひらきたまへば　潮なわの　とゞまる限り　まつろへる　時に
あひつゝ　おむかしみ　現れにけむ　をろちづか　今のをづつの　牡鹿なる
石の巻こそ　古への　伊寺の水門と　誰も皆　明らめにけれ　くしきかも　た
ふときろかも　これのいしぶみ

反歌

ときはなす石のみなとの石ぶみは動きなき世のためしなるらし

むけ平らげ—平定し
よざし—命令
せむすべのたつきをしらに—爲すべき方法を知らずして
かきむだき—手に抱き
しをり—ぬらし
勝のすさび—勝ちほこりて
うれたきや—歎かはしきかな
をろちあれいでて—大蛇出現し
いぶき—息を吐く
もころ—如く
こやし—臥し
いちじろく—著しく
いはへる—祀れる
大みたから—人民

めむけ平らげて　あすの如　歸らむものと　すめろぎの　よざしのまにま出でたてる　ますら健男が　いかなれや　えみしが仇に　たへずして　伊寺水門の　水泡なす　消えてうせけむ　從へる　臣の子どもは　せむすべの　たつきをしらに　其主の　手纒を解きて　持歸り　其妻の子に　故よしを　かくと告ぐれば　たゞ泣きに　泣き歎きつゝ　わがせこが　たまきをとりて　かきむだき　いのち死にきと　聞く人は　袖しをりけり　えみしらは　勝のすさびに又更に　襲ひ來りて　うれたきや　田道をうづめし　墓をさへ　ほりうがてれば　その墓ゆ　をろちあれいでて　吐出づる　いぶきの風に　立向ふ　えみしこと〴〵　冬の野の　草葉のもころ　たちまちに　こやしうせけり　其御世ゆ千五百に近き　年を經て　あづまの國の　みちのくの　牡鹿の郡　石の卷　竹の林を　賤男らが　あらすきかへす　時にしも　現れ出でし　石ぶみは　み靈のをろち　田道ぎみと　ゑりたるあとの　いちじろく　石のみなとに　鎭めつつ　いはへる事も　明らかに　今ぞしりぬる　いはまくも　かしこきかもよ大江戸の　遠のみかどに　まつりごと　まうし給ひて　八十國の　大みたから

もつかへましつゝ昔より父のみことのみ心にたふとみませししき島の我國ぶりの歌よみし手向けたまへる言の葉を天がけりつゝ見そなはしうれしびまさむ事のかしこさ

反歌

土佐の海や君がおましの浦波に秋は月のみ影とゞむらむ

享和元年の春陸奥國牡鹿郡石の巻蛇田の村より靈蛇田道公墳とふりたる石ぶみを掘り出せりとてかの國人其いしぶみをうつしてもて來たりけるを見て聊おもひをのぶる歌竝短

歌

押照や難波高津に宮柱太知りましして天の下しらしめしけるすめろぎの聖の御代に天雲のむか伏すきはみ谷ぐくのさ渡る限まつろはぬかたしもあらぬをひんがしのえみしのともがおふけなく叛きまつるとすめろぎのきかしたまひて竹葉瀬がいろとの田道はたくぶすま新羅の仇を鎭めてしいさをしあればえみしらを言あげもせずはき淸

うれしびー嬉しがり

押照や云々ー仁徳天皇
谷ぐくーひきがへる
まつろはぬー服従せぬ
いろとー弟
たくぶすまー新羅の枕詞

いやしき〳〵に―いよ〳〵しきりに

二たび―奩に掛く

わたつみの手―海神の手に持つ玉の如くに

いつき―大事にし

みめづ子―御愛子

名は世々の秋をふるとも朽ちせじをなぞや置くらむ袖の上（うへ）の露

土佐の國知りたまへる君の十あまり三年の忌に御むすめ君の御法のわざしたまふとて秋懷舊といふ事を御みづからもよみ人々にもよませられし時によみてまゐらせける歌竝みじかうた

土佐の海　おましの浦の　敷浪（しきなみ）の　いやしき〳〵に　代々の秋（あき）　いや榮（さか）えつゝ鳥がなく　あづま大城に　八千たびも　行きかひまして　とこしへに　いまさむものと　大舟の　思ひたのみて　誰も皆　在りこしものを　いかさまに　おもほしめせか　久かたの　あめ行く月の　天雲（あまぐも）に　かくろふ如く　岩がくれかくれいましてをとめ子が　櫛笥（くしげ）にのする　鏡河　二たびとだに　在りし世のみ影見えねば　現（うつゝ）とも　夢（ゆめ）ともわかず　をちこちに　うれへさまよひ　人皆の　ありしあひだに　十といひて　三年（みとせ）に成りぬ　かくしあれば　過ぎにし君が　わたつみの　手にまきもたる　眞玉なす　いつきましつる　みめづ子のめづ子の君は　ちゝのみの　父のみことを　今も猶　いませる如く　まめにし

其秋ゆ―其秋より
葉月―八月
稲荷の山―荷田氏は稲荷山の祠官なり
遠のみかど―都より遠くはなれたる官府、江戸
しみゝに―繁く
あへず―堪へず
殘る一木―たみ子になぞらふ

つゝ　有りつるものを　其秋ゆ　廿年あまり　七とせの秋をへにきと　聞くは
まことか

反歌

老いにける身をも忘れてなき人に遠ざかる世をおどろかれつゝ

荷田在滿みまかりて三十ぢあまりみとせになりにける葉月
ばかり秋ふるきを思ふといふことを題にて在滿が妹たみ子
が乞ふまゝによめる歌竝短歌

玉敷の　たひらの都　神のます　稲荷の山に　おひ出でて　遠のみかどの　あ
づまぢに　移しうゑてし　二本の　杉の梢は　久方の　雲かゝるまで　おひの
ぼり　陰をしみゝに　ものゝふの　八十氏人も　此杉の　二木の蔭に　立ちつ
どひ　きそひよれるを　いかなれや　一木の杉は　過ぎにける　なかばの秋の
露霜に　あへず枯れぬる　しかはあれど　殘る一木の　陰をしも　いやなつか
しみ　もろ人の　來よりつどひて　かたりつぎ　いひつぎゆかむ　ありし世の事

反うた

へて　うつろはむ　事をゆゝしみ　心して　いたくな泣きそ　しめ野もる人

反うた

はかなさを何にたとへむ白露はけぬと見るまに置くなる物を

村田春郷がみまかりて廿とせあまり七年になりける長月ばかりよみて手向けける歌竝みじかうた

梓弓　春のさとわの　いほしろを　あらすき返し　かへしつゝ　おもひ出づれば　若苗の　若かりし時　縣居の　田づらのいほに　もろともに　あそばへをりし　友垣は　多かる中に　眞玉なす　淸き眞心　呉竹の　直かるみさを　世の人に　似ざりし上に　古への　書見歌よみ　庭まりの　おもひあがれる　其わざの　世にたぐひなく　妙にしも　ありける吾がせ　春べには　上野の岡のさくら花　ひとしくかざし　秋たてば　すみだ河原に　すむ月を　ともにめでつゝ　うるはしみ　ありしあひだに　うつし身の　世を長月の　名にも似ず　秋の木の葉に　先だちて　散り過ぎしより　年毎の　花のあしたも　月の夜も　共に見し世を　しのび來て　別れし時は　昨日かも　をとゝひかもと　おもひ

はふそ原―柞の原、母の義にいふ
ゆふしみ―忌々しくあるゆゑに
けぬ―消えぬ
村田春郷―春道の長子にして春海の兄
あそばへ―遊び
庭まりの―あがれるの枕詞

荒妙—荒き栲の布

雪げ—雪模樣

おほしたててし—育て上げし
およびをり—指折り、憶良の七草の歌の句を採る
忘らえず—忘られず
もみづる—紅葉する

て　隅田川　流るゝ水と　とこしへに　歸りまさねば　荒妙の　きぬきる人は　藤白の　み坂の名さへ　うらめしく　名草の山の　なぐさめに　よしもあらじを　年月は　紀の關守も　とゞめあへず　こぞの今日にし　めぐりくるみ法のことを　聞けばかなしも

反歌

むさしねや雪げの雲にかくろひて二たびてらぬ月の影はも

下總のくに香取の永澤躬國が幼子の七月の末つかたみまかりつとてみくにが母刀自をはじめ家こぞりてなげきあへりと聞きてよみてつかはしける歌並短歌

時しもあれ　また初秋の　しめし野に　おほしたててし　なでしこの　花だに咲かで、何しかも　根さへかれけむ　およびをり　かきかぞふれば　七くさの　數こそたらね　よそにして　聞くだに物は　かなしきを　しめ野守る人　秋風の　立ちてもゐても　忘らえず　しのびやすらむ　秋霧の　思ひまどひて　朝よひに　なげきやすらむ　しかはあれど　もみづる秋の　はゝそ原　露おきそ

村ぎもの—心の枕詞
日のたて日のぬき—東西南北
限も落ちず—残す所なく
あくよなみ—厭き足る時無ければ
わかえ—若くなり

ら玉の　年もへなくに　古への　學の道に　村ぎもの　心をよする　人さはに成りにけるかも　かくしつゝ　五百千々の世に　天傳ふ　日のたて日のぬき限も落ちず　行きたらはして　いにしへに　立歸る世を　松が根の　遠く久しく　竹芝の　磯山寺の　おくつきを　あふがざらめや　あづさ弓　もとつ世しのぶ　ますらをのとも

反歌

今よりの千とせの後に世の人のしきしのぶべきおくつきどころ

紀伊の殿の姫君越の君の江戸の御館におはしてみうせたまひける又の年御法のわざせさせたまふ時によみて奉りける

歌竝短歌

言にいでて　いはゞかしこし　磐代の　濱松が枝の　八千年も　あくらの濱のあくよなみ　和歌の浦わの　わかえつゝ　萬代ませと　世の人の　いはふ心はしら神の　磯によるてふ　かひなくて　千さとのをちの　武藏野の　野のべにつめる　白雪の　けぬるが如く　秩父山　嶺にてらせる　夕月の　隱るゝなし

聲しる—知音、伯雅斷琴の意を採る

竹芝のおくつき—品川東海寺の墳

世々のてぶり—代々の國風

忘れいに—忘れ去り

菅の根の—ねもごろの枕詞

すなほ—素朴

ひゞきつゝ　五百千々の　年は經ぬとも　かぐはしき　名は國もせに　殘らざらめや

反歌三つ

限りある世をばなげかじ埋もれぬ名こそ千とせのかたみなりけれ

世々かけて朽ちぬ其名もわが爲はしばしばかりのかたみならずや

君をおきて聲しる人はなき物を言問はざりし事ぞくやしき

縣居大人みうせまして三十ぢまり三とせになりたまひける神無月の晦日に竹芝のおくつきのもとにつどひてふるきをおもひてよめる歌竝短歌

四方山の　護りにすとふ　梓弓　末の中頃　いそのかみ　ふりにし世々の　てぶりをば　忘れいにつゝ　もとつ世に　引もかへさず　あまた年　經にけることを　ますらをの　弓末ふりおこし　いそしくも　思ひおこして　菅の根の　ねもころ〴〵に　さとはせる　世の人皆を　我大人の　道びきたまひ　弓弦なす　たゞ一すぢに　すなほなる　すめらみ國の　古ごとを　傳へたまへれ　あ

うつせみの―世の枕詞
三栗の―なかの枕詞
はゆまぢ―驛路
まそ鏡―むかひの枕詞
しをりつゝ―涙に濡れつゝ

十ぢあまり九にてみまかりぬるよし雪岡大德よりいひおこせければよみける歌竝みじかうた

ちはやぶる　神の御世より　傳へこし　吾國ぶりは　うつせみの　世の人ごとに　誰も皆　うたひ出づれど　長道磐の　神の守らす　すなほなる　大路はゆかず　八十くまの　さき道をしも　かにかくに　たどり〳〵て　大かたは　ありふる中に　天雲に　思ひあがりて　眞心を　立てつる人と　風の音の　遠音に聞きて　相見まく　思ふ物から　岩がねの　こゞしきみ山　落ちたぎつ　かしこき海を　三栗の　中にへだてて　老の身の　せむすべをなみ　下にのみしのべる心　おのづから　かよひやしつる　はゆまぢの　驛のをすゞ　ふりはへて　言傳しより　まそ鏡　むかひゐつゝも　かたみに　言はとはねど　其人の　面影をしも　見るばかり　思ひなりにて　玉あへば　あひぬるものと　むつまじみ　思へるわがせ　初秋の　露とけぬると　玉づさの　便に聞きて　現とも　いめともわかず　痳ぎぬの　そでしをりつゝ　たゞ泣きに　なきなけかれつ　しかれども　年をあまたに　わがせこが　ひろひ集めし　玉の聲　世に

うたてある—物悲しくある
玉かづら—かけの枕詞
天路しらせり—天を治めらるゝに至れり、死去せるをいふ
しなひうらぶれ—萎れかなしみ

反歌

とね河の水のうたかたかつ消えてかつあらはれぬ人のかなしさ

土佐の國しらせる君のうせ給ひて三年（みとせ）になり給ひぬるに月の前に過ぎにし秋をしのぶ心をよめるうた並みじか歌

照る月は　あやしきものか　月見れば　あやにかなしも　秋はしも　いかなる時ぞ　秋といへば　わきてさびしも　常にだに　うたて有る秋を　をとしの秋のなかばの　中空の　雲井のをちに　玉かづら　おもひかけずも　てる月のみ影と共に　久かたの　天路しらせり　しかしあれば　こぞもことしも　秋立ちて　月はさやかに　すめれども　歸り來まさぬ　君ゆゑに　限りしられぬ秋の野の　七くさの花の　花數に　あらぬ小草（をぐさ）の　うへすらも　露置きそひてよとともに　しなひうらぶれ　なげきするかも

反うた

月をのみながめられけり中空に影かくしてし秋をしのびて

京の小澤蘆庵春よりやみて七月十日あまり一日によはひ七

霰ふり―枕詞、かしましの意にて鹿島に掛くる也

落ち瀧つ―下るの枕詞

たまあへば―氣が合へば

へなりて―隔りて

春まけて―春になりて

みなわなす―水沫の如く

風のとのとほと―風の音の如く遠きたよりに

よめるうた並短歌

東路の　利根の川原の　曙に　朝開せし　舟こそは　趾もとゞめね　霰ふり　鹿島の埼の　夕暮に　よせては歸る　浪こそは　行方しられね　昔より　かしまの埼に　たゞ向ふ　とねの河べの　夏そ引く　うなかみがたに　家居して　住めるわがせは　石の上　ふりにし書を　朝よひの　友となしつゝ　よみ出づる　吾國ぶりも　落ち瀧つ　下れる世々の　言の葉に　心をそめず　天ざかる　鄙にはあれど　白雲の　思ひあがりて　たまあへば　おひぬるものと　山河を　へなりてあれど　玉づさの　使からさず　あまた年　在經しものを　あづさ弓　春しきたらば　とね川を　みを引きのぼり　吾宿を　とぶらひ來むと　かねてより　契りしものを　其河の　水かもかれし　こぐ舟の　かぢかもたえし　春まけて　言かよはねば　朝がすみ　おほつかなくも　片待ちて　有りしあひだに　卯の花の　咲く月立ちて　ほとゝぎす　鳴くなる時に　みなわなす　君は消えぬと　風のとの　とほとに聞けど　現とは　おもひ定めず　ぬば玉の　夢にかあらむと　こゝら夜を　かさぬとすれど　さめざらなくに

うづの御手—尊き御手
みはかし—佩刀
ますらわが—ますらをなる我れ
うづ汐の—汐の高き
ひたつち—平地
おほろかに—おぼろげに

反歌

久かたのみ空につゞく潮路より寄せくる浪をけふ見つるかも

この波崎は、飯沼の岡にむかひたる常陸の崎なり、今ははさきとなふれど、もとなみさきといひしならむ、そのをりの日記にくはしくいへり

もろこしへつかはさるゝみ使人(つかひびと)の別をしみてよめるになぞらへてよめる歌竝みじかうた

靫(ゆき)かくる　伴(とも)のをひろき　家の子と　えらびたまひて　から國に　い行きわたれと　大君の　うづの御手もて　たまはせる　大御しるしの　みはかしを　そびらに負(お)ひて　いでたてる　たびにしあれば　ますらわが　いたゞきもたる　大御言(おほみこと)　到(いた)らむ極(きは)み　行くさくさ　事しもあらめや　さきだてる　浪穗のうへも　岩橋(いははし)を　い渡るごとく　うづ汐の　かしこき海も　ひたつちを　いゆくなしつゝ　明日(あす)のごと　歸りまるこむ　またせわがせこ

反うた

おほろかに思はむもの大か君のみたま賜へるわれにやはあらぬ

下總國海上がたの宗筠が四月ばかりみまかりけると聞きて

おひしかまし―追ひ及ぶべき

夏衣ひく―うなの枕詞

とほじろみ―遠く白く見ゆるにより

みをはやみ―水脈の早さに

潮さゐに―浪の高く立つ所に

ありそ―荒礒

島なして―島の如くに

そくへ―遠く隔たれる所

高く飛ぶつばさしあらば咲くらさくあら山中もおひしかましを

反うた

下總國海上郡へまかりし時飯沼の丘にのぼりて浪を見てよめる歌並反うた

夏衣ひく　海上がたの　飯沼の　岡にのぼりて　見渡せば　常陸の國と　下つふさの　中に流るゝ刀禰川は　河とほじろみ　みをはやみ　千里のをちゆ　落ちたぎち　ながれ來につゝ　ひんがしの　み空の極み　たゝへたる　大海原の潮さゐに　いゆきむかひて　あらそへば　沖波高し　其波は　雪かもふれるさ綿かも　つかねてあると　見るがうちに　千ひろ百ひろ　白たへの　布はへしごと　ひろごりて　より來るさまは　あま雲に　乘りて空ゆく　わたつみの龍といふ神か　其海の　ありそのさきに　島なして　立てる岩ほに　さく浪は千々にくだけて　天にとび　あられとみだれ　其岩を　越えゆく浪は　眞白なる　駒か走ると　おもふまで　見のあやしく　その音の　きゝのかしこく　天地の　そくへの波を　ひとかたに　つどへてよする　是の波崎

道行きぶり—道をあるくついでに
ふせ庵のまげいほ—弊屋
きゝしなべ—聞きしによりて
いはひべすゑ—いはひべを供へて
こひのみ—乞ひ祈り
つゝみなく—恙なく
うしはき—領知し
す鳥—洲に居る鳥
うちはぶき—羽をふるひ
あすのごと—明日にもすぐに

ゐり來まして　玉鉾の　道行きぶりに　おもはずも　わがふせ庵の　まげいほを　とひませしより　たまあへば　あひぬる物と　朝よひに　馴れにしものを今更に　歸りいなむと　きゝしなべ　心ぞいたき　しかはあれど　古郷にしも家人の　いはひべすゑて　あめつちの　神にこひのみ　またすらむ　事をし思へば　とゞむべき　旅ならなくに　つゝみなく　歸りいまさね　阿蘇山に　うしはき坐す　大神も　まもらひたまひ　不知火の　筑紫のくにの　國もせに香ぐはしき名を　立てむ君はも

返歌

わかるとも何かなげかむ君が名は千里のをちにかをらざらめや

○

吾はもよ　入江のす鳥　君はもよ　雲井ゆくたづ　春がすみ　翅にわけて　足引の　高ねの花に　うちはぶき　行きこむ日すら　おくれゐて　うらなげをらむ　千里ゆく　つばさにしあれば　あすのごと　天つ雲路を　飛びかけり　またも來まさね　待ちつゝをらむ

なれるいはほ—化石

まさめに—まのあたり

さかゆとふ—榮ゆと云ふ
はしき—愛慕すべき

まさし—託し

日のたてぬきに—東西南北に

魂の　みやび心を　今の世に　あらはさむとか　さくら木の　このねのなれる
いはほこそ　たけくをゝしき　荒魂の　千歳の後に　朽ちせざる　しるしなる
らめ　しかはあれど　ふりし世しのぶ　この君の　めぐみしなくば　其岩も
うもれかはてむ　其花も　まさめにたれか　見つゝはやさむ

反歌

ものゝふの其名と共に千々の春にほひ殘れる山ざくらはも

肥後國熊本の長瀨眞幸やよひばかり古鄕へ歸るを送る歌二首竝短うた二首

天地の　はじめの時ゆ　ちはやぶる　神の御面と　たゝへこし　肥の國はしも
神がらか　國さかゆとふ　國がらか　人ぞさはなる　そが中に　はしき吾せは
かしこきや　すめら御國の　上つ代の　書まなびすと　其君の　きこし給ひて
いやひろに　ましたらはせと　ねもころに　よさし給へれ　葦北の　野坂のう
らゆ　押照や　難波のみ津に　たゞ渡り　天傳ふ日の　たてぬきに　い行きめ
ぐらひ　まつぶさに　とひ明らめて　天の下　つどひまつれる　大江戸に　ま

あともひ—率ゐ
むけ平らげ—従はしめ平定し
言の葉—源義家の「吹く風を勿來關と思へども路もせに亂る山櫻花」の歌
たむけ—峠
たへのほに—白布の如く
た遠み—たは接頭語、遠さに
かしこき—恐ろしき
見まくほり—見んと欲し
和魂—やさしき心

御軍を　あともひ立てゝ　みちのくに　い行きいたりて　春秋を　あまたへにつゝ　其あたを　むけ平らげて　かぐはしく　たけき其名を　語りつぐますらたけをの　眞玉なす　言の葉をしも　殘してし　なこその關の　櫻木の朽ちし木の根は　常磐なす　いはほとなりて　關の名の　今ものこれる　高山の　嶺のたむけに　あら金の　つちにうもれて　ありとこそ　人はいひつれ今もなほ　老木の櫻　をちこちに　立榮えつゝ　梓弓　春べになれば　たへのほに　咲きにほへりと　音のみに　聞きわたりつゝ　忍べども　道をた遠みたれもみな　せむすべなきを　白河や　棚倉の城を　知りませる　君きこしつつみ心に　ふりにし事を　深くしも　しのばすあまり　棚倉と　なこそは同じ　みちのくの　くぬちながらも　岩がねの　かしこき眞山　八十隈の　道べなれるを　いそしくも　求め給ひき　そがうへに　其花をしも　見まほしみ世の人すらも　見まくほり　思はむものと　事はかり　はかりたまひて　花をさへ　こゝら得つゝも　大江戸に　のぼりたまひて　人皆に　しめし給ひぬ其國の　來る春毎に　匂へるは　色にも香にも　武士の　ますらたけをの　和

はりたる—開拓したる
くしきかも—奇なるかな
いまし—汝
日のことゝゝ—終日
よそりゐ—寄り居て
すみすり—硯
なれ—汝
なれる石—化石
なごせ—馴化せしめよ

反歌

誰しかもあふがざるべき治道の神のはりたる道ぞこの道

良峯貞樹がこふまゝによめるふづくゑの銘のうた

くしきかも　いましとわれは　たまあへば　あひぬるものと　晝はも　日のことごと　窓のちに　たどむかひをり　夜はも　夜のことゞゝ　ともし火の　もとによそりゐ　むつまじみ　思ふ心を　かたみに　言葉とはねど　おのづから　いましは知るや　われはしも　いましを知れり　しづけくて　事なきからに　常磐なす　すみすりのよに　いましは　ひとしきものぞ　いまよりは　われによりてな　われもはた　わが世のかぎり　なれによりなも

棚倉知りたまへる小笠原の君一とせ勿來關の櫻木のなれる石を賜ひけるが今年またかの櫻の花を扇におして歌そへてたまへりけるにつけていさゝかおもひをのぶるうた竝短歌

鳥がなく　あづまの國の　ちみやぶる　人をなごせと　大王の　みことかしこ

うつせみの―世の枕詞
くすはしき―奇妙不思議なる
あらがねの―つちの枕詞
そこもへば―それを思へば
言の葉の大き聖―詩聖
飛鳥の清見の原の大御代―天武天皇の御代
藤原の宮―文武天皇の朝
今のをづつ―今現に

せむとてこゝに來りけるにつけて幣代にたてまつれる歌竝

短歌

千はやぶる　神の御代より　言だまの　たすくる國と　いひつげる　神の御國は　うつせみの　世の人每に　いひ出づる　一言すらも　言靈の　みたまそはりて　くすはしき　み國にしあれば　うき時も　うれしき時も　眞心に　思ふまに／＼　歌ふなる　言の葉にこそ　久かたの　天をとよもし　あらがねの　つちをうごかせ　そこもへば　あやにかしこき　言の葉の　道にも有るかも　國はしも　さはにあれども　里はしも　あまたあれども　すめろぎの　遠き御代御代　うち日さす　大宮所　しめさして　定めたまへる　しきしまの　大和の國の　くぬちなる　治道のもりに　廿日より　いはひまつれる　言の葉の　大き聖は　飛鳥の　清見の原の　大御代ゆ　藤原の宮に　其御名を　あらはしまして　八千年の　今のをづつに　國もせに　たゝへまつれり　かくしつゝ　いや遠長に　天地の　よりあひのきはみ　此道を　さきはひまさむ　治道の　大きひじりの　神ぞたふとき

おのが名―都鳥のこと
しづたまき―いやしきの枕詞
逃水―流れの末のわからずなるといふ水、武藏野にあり
堀兼の井―これも武藏の名所
ふづくゑ―文机
老のさが―老人の性
わなゝかれ―手のふるはれ
こづみよる―材木の流れ寄り來る

ばおのが名の　都こひつゝ　あら玉の　年をあまたに　過しきぬ　いでやむかしべ　鳥が啼く　あづまのはての　鄙にして　其國ぶりを　うたへりし　ためしあればと　武藏野の　あら野の末に　かりつめし　言の葉草の　いかなれば　天つ雲井の　あなたまで　きこえあげけむ　しづたまき　賤しき身をもすてまさぬ　おほせかしこみ　逃水の　にげかくるべき　よしなくて　堀兼の井の　深くしも　おもひめぐらし　ふづくゑに　よるとはすれど　おのが身の老のさがさへ　くはゝれば　わなゝかれぬる　みづぐきの　おぼつかなさもこづみよる　汀になれて　玉かづく　淵だにしらぬ　すさびをば　いかゞはせまし　しかはあれど　かゝる御世にし　ながらへて　此一ふしに　あひにけるわが身のさちを　何にたぐへむ

反歌

かゝる瀬もあれば有る世に隅田河ながらふる身を何かこちけむ

大和國添上郡櫟本村治道のもり柿本寺といふに柿本の大人のみ墓ありて歌塚となむとなふる其寺の僧彌叟御社の修理

服し給へる
こきし—王
とりが鳴く—あづまの枕詞
くがね—黄金
大たから—人民
みをす國—御治めの國
みたまのふゆ—神靈の御恩
こたみ—今度

と　仕へ來る　百濟のこきし　とりが鳴く　あづまの國の　みちのくの　小田なる山ゆ　くがねをし　ほりてまつれり　昔より　皇御國に　あらはれぬ　み寶さへに　備はりし　事をかしこみ　神ながら　天にます神　國にます　神に告げまし　もろ〳〵を　惠み給ひき　しかれこそ　たふとみねがふ　み寶もましたらひつゝ　大たから　いやたぬしけく　みをす國　いや安らなれ　萬世までに

反歌

大君のみたまのふゆに咲き出づる金の花は千代にあせめや

妙法院一品宮のおほせにて山居閑居などの歌書きて奉れとて色紙十ひら賜はれるをこたみ一條右大臣殿の御ともにてまゐれる賀茂保孝縣主のもとよりおほせごと傳へければ書きてたてまつれりける時にそへてたてまつれるうた竝みじかうた

ゆく水の　隅田河原の　下つ瀬に　住むなる鳥の　み空ゆく　つばさなけれ

めでたまひ云々—「橘の殿の橘やつ代にも吾は忘れじこの橘を」元正天皇

しらしくる—治め來る　たらひます—足り給ふ　穴門なる豐浦の宮に—神功皇后を申す　むけませる—征

とよのあかり　きこしめしつゝ　香ぐはしき　大みこともて　めでたまひ　たたへましつる　とこ世もの　花たち花に　よそへつゝ　いやとこしへに　百世ませ　千世ませ君と　いはふ今日かも

反うた

君と共にときはなるべし五百枝さし千枝さしおほふ殿のたち花

萬葉集略解書きをへけるころ人々と共に題を分ちて陸奥國より金を出せる詔書を賀する歌に追ひなぞらふる心をよめる歌竝みじか歌

かけまくも　あやにかしこし　千はやぶる　神の大御世の　みはかしの　十つかのつるぎ　八さかにの　みつのまがたま　それをしも　國つ寶の　始にて天つ日つぎと　しらしくる　神のみよ〳〵　み寶は　たらひませども　あれ出づる　人のこと〴〵　たぬしけく　やすかれとしも　おもほせる　大御心を神ろぎの　うづなひませか　穴門なる　豐浦の宮に　天のした　まうしたまひし　たらしひめ　神の尊の　むけませる　三の韓國　そがなかに　内つみやけ

みしね—美稻
かげとも—南面
しゞにおひ—繁茂せる
そとも—背面
家をさ—家の主人
百傳ふ—六十の枕詞
ほぎきとよもし—祝ひ來てさわぎ
うたげ—宴會
こだる—枝を垂るゝ
うち枝—衣服などをたゝめる上に載するおさへのかなもの
巻向の珠城の宮—垂仁天皇の朝
時じくのかぐのこのみ—橘

ごとしける時鶴宿二松樹一といふを題にてよめる歌竝短歌

八束穗の　たりほの稻の　みしねかる　鎌倉の里に　五百しろや　千しろ垣つ田　かげともに　しめゆひなして　ときは木の　しゞにおひたる　高山を　そともにおひて　眞木ばしら　立ちさかえたる　家をさが　うからはらから　しげ樹なす　來よりつどひて　百傳ふ　六十ぢよりしも　千世までと　ほぎきとよもし　うたげする　けふのむしろに　山松の　梢にすめる　あしたづも　庭におりたち　家をさに　おのがよはひの　萬世を　ゆづるとこそは　聲よばふめれ

反歌

鎌倉やをのへにこだる松が枝のたづこそ君が千代の友なれ

豐後國岡知りたまへる君の六十の賀に六くさのたき物を橘のうち枝につけてまゐらする歌竝短歌

巻向の　珠城の宮に　常世べゆ　八さをもてこし　時じくの　かぐのこのみの　其種は　大御くぬちの　國もせに　かをりみちけれ　青によし　奈良の都に

高ひかる—日の枕詞
かん御心—神の御心
あとのまに—蹟に隨ひて
遠のみかど—幕府
遠つ神おやゆ—遠祖以來
こゞしき—險阻なる
あがきを早み—駒の足の如く早く
明日のごと—早速にも
玉ぼこの—ちまたの枕詞
八衢彦神—道を守る神
まな子—愛子

せたまふみ使として都へのぼりたまふを送りまゐらするうた竝短歌

高ひかる　吾日のみこは　天傳ふ　ひめみこながら　すめ神の　かん御心にかんはかり　はかり給ひし　あとのまに　天つ日つぎと　神ながら　敷きましにけり　東なる　遠のみかどゆ　みことほぎ　まうしまさまく　思ほして　遠つ神おやゆ　すめろぎを　まもりたまひし　其氏と　選ませたまひ　天雲のいたゞしませば　いはねふみ　こゞしき道の　百たらず　八十くまごとに　手向ぐさ　幣とりむけて　玉しきの　たひらの都　たひらかに　いたり給はむいはまくも　かしこきかもよ　百しきの　大みあらかに　とよのあかり　きこしたまひて　大君の　よしとのたまふ　大みこと　いたゞき持ちて　青駒のあがきを早み　明日のごと　歸りきまさむ　事のよろしを

反歌

木曾の山八十くまごとに玉ぼこの八衢彦の神や守らむ

鎌倉の郷鈴木富長が六十になりけるをまな子長溫がいはひ

あしのけ—脚氣
なびきこいふし—横臥し
さにづらふ—をとめの枕詞
ゆらゝは—ゆらめきうごくさま
敷たへの—枕の枕詞
物なもひそ—物思ふこと勿れ
ひめみこ—櫻町天皇の皇女智子内親王、後櫻町天皇と申す

秋風の　立ちにし日より　遠方の　野べの八千草咲き　みだれ　蟲の音きそひ　五百しろや　千しろの田のも　ほにいでて　鴈わたるらし　面白き　時のさかりを　おしてるや　難波の海の　あしのけに　なびきこいふし　飛ぶ鳥の　つばさしあらねば　いたづらに　せむすべをなみ　こもりゐて　なげかひくらし　床のべに　いぬるあひだに　さにづらふ　少女のともが　白玉の　玉かづらかけ　紫の　綾ごろもきて　高麗錦　ひもをゆひたり　手にまける　玉もゆらゝに　敷たへの　わが枕べに　つどひ來て　しかななげきそ　うら若き　昔よりしも　むつみせし　事忘れめや　今よりは　かたへさらずて　朝よひに　われなぐさめむ　しるしなき　物なもひそと　をとめらが　かたらひをると　見しいめの　さめつゝ見れば　にしきあやに　つゝめる子らは　ませのうちの　露にあらそふ　秋萩の花

反歌

しるしなき物はおもはじ秋はぎの花の錦に立ちまじりてば

横瀬侍從貞隆主ひめみこ踐祚の御ほぎごと申したてまつら

花ぐはし—櫻の枕詞
浦安の國—日本の別名
ゆほびかに—ゆたかに
をゝり—枝もたわみまがり
宮の名—履仲天皇の皇居は磐余稚櫻宮と申す
さくらのめでと云々—「花ぐはし櫻のめでことめでは早くはめでずわがめづる子ら」允恭天皇
大御くぬち—大御國內

反歌

むさし野のつゞきが原にうちむれて小松引くなるけふの樂しさ

櫻をよめる歌

あら玉の　年の一とせ　百千々(もゝちど)の　花は咲けども　花ぐはし　櫻の花は　おづさ弓　春の光の　浦安(うらやす)の　大御國にし　神代より　根ざしそめてぞ　おのづから　わが國ぶりの　ゆほびかに　のどけきさまを　木だちにも　花の色にも　あらはして　きさらぎやよひ　うらゝなる　時を待ちえて　天雲の　あはだつごとく　白雪の　つもれるごとく　國もせに　をゝりにをゝり　白たへに　咲きみちにける　しかれこそ　遠き御代々々　わきがみの　むろ山櫻　大みきに　浮べりしより　宮の名に　櫻(さくら)をおほせ　宮姫(みやひめ)を　さくらのめでと　たゝへつゝ　うたひたまへれ　おしなべて　大御くぬちに　あれいづる　たかき賤しき　此花を　めでざらめやも　あはれ此花

葉月なかば病(やまひ)に臥したりけるころ庭の萩(はぎ)さかりなりければよめる歌竝短歌

うけらが花　巻七

青丹よし—奈良の枕詞
豐明—朝廷の宴會
初春の云々—「初春の子の日の今日の玉はゝき手にとるからにゆらぐ玉の緒」萬葉集
たひらの宮のそとも—平安城の背面
酒みづき—酒宴
天ざかる—ひなの枕詞
ひな人—田舍人
しでて—垂れて

長歌

子日の遊をよめる歌竝短歌

青丹よし　奈良の都の　大宮に　百のつかさを　召しつどへ　つどへ給ひて　豐明　きこしめしつゝ　初春の　初子の今日の　玉はゝき　とる手もゆらに　賜へりし　昔思はし　玉敷の　たひらの宮の　そともなる　北野の野べに　みゆきまし　小松が原に　大御輿　とゞめ給ひて　君も臣も　酒みづきして　遊ばしゝ　古き例は　かけまくも　ゆゝしきかもよ　今の世に　今日としいへば　うち日さす　都の外の　天ざかる　ひな人すらに　白妙の　袖ふりはへて　かしこきや　君が御代々々は　十づゝき　都筑が原に　八百萬　よろづ世かけて　君をほぎ　吾身をいはひ　ものゝふの　八十氏人も　はく太刀の　組の緒しでて　遊ぶなる　今日の子の日は　世々にたえせじ

八十の隈路―多くの人の目のとどかぬところ

眞玉なす―玉の如き

書きつめよ―書き集めよ

旋頭歌

相聞

忘れむと思へばいとゞ忘られぬ君試みに忘れじとのみ思ひわたらむ

沖つ鳥鵜の住む磯にきよる白浪かつくだけかつみだれつゝ物思ふわれ

契沖阿闍梨が百年の忌に春の懐舊といふ事を人のよませければ

春霞八重立ちこめし八十の隈路を人皆のたどらぬばかりしをりせし君

片山誠之が去年の霜月二十日あまりみまかりけるに其子其しるしの石ぶみを春海にこひおのれに歌をこひければよめる

片山に立つ杉が枝をさしのぼる月曇りなく思ひあがりてありし人はも

躬絃が伊勢の國へ赴く馬のはなむけによめる

伊勢の海や清き渚によする白玉眞玉なす言の葉さへに書きつめよ君

あられざり―居ることを得ず

よそにぬればか―他所に寢ればにやあらん

折句―五句の頭に五の假名をわけならべてよむ歌

あられ　さゝ

浮世にはあられざりけり今よりはいざさと遠き山路求めむ

ころも　はかま

あひみれどこゝろもとけず此頃はよそにぬればかまどほなるらむ

もみぢしてころもへなくに散りしけばはかまく惜しき庭の面かな

ひむがし

友をこひむかしを忍びさまぐ〜に思ふおもひもふかき山里

しもつけ

咲くとしもつげなば行きてみはやさむ君が垣ねの秋草の花

折句

空也寺の僧空阿が書ける鉢たゝきの繪にはちたゝきといふ事を句のかしらにすゑて秋無常の心を

はては皆ちぐさの露のたまなれやたれかは終にきえのこるべき

かり　をみな
やちぐさの花のさかりも過ぎぬるをみなれかねてもなく蟲の聲

ひともとぎく
誰かこよひともときくらむ古郷の軒ばを過ぐる山ほとゝぎす

もちひ
不知火の筑紫の國のみこともちひの入るかたのまもりなりけり

諸成がかつみを物の名にして秋の心をよめといひければ
白雪はいくかつみけむと思ふまで野にも山にもすめる月かな

ぶどう
わびぬれば物や思ふとうちつけにとふ人さへもむつまじきかな

うづみび
衣うつみひとりのみか聞く人もいを寢ぬ秋の月の夜な〳〵

ひをけ
み雪降る外山のかひをけさ見れば春にしられぬ花ぞ散りける

みこともち―勅命をもちて其地を治むる官

かひ―谷あひ

夕さりつかた—夕方
はり原—榛の木林
かには櫻—樺の木
何その人—いかなる人
國むけませし—國を平げ給ひし
かきちか—垣に近く

繼橋のいひつぎにけるあはれさを汲みても知るや眞間の井の水

文月廿日隅田川の菴へ夕さりつかた行きてよめる

隅田河岸のはり原暮れそめてねぐらの鷺ぞ猶眞白なる

雜體

物名

かには櫻

花の枝に何その人か袖ふれてよに懐かしきかにはさくらむ

さうび

鶯のあさうひごゑを鳴きつるは昨日と思ふに春ぞくれ行く

たちばな

東路の國むけませし草薙のたちはなのみもかしこかりけり

きちかう

おもしろき妹がかきちかうき秋も忘るゝばかり千草咲きつゝ

つもり—攝津國津守の浦に積りを掛く

入佐山—但馬にあり

刀禰川—今の江戸川

一木だに千代はもたるを千々の松しめつる君はかぎりあらめやも

　雨岡の定にて庭を松原に作りてといふ事を

陰しげき庭はさながら末の松風にも浪のこゑはありけり

　藤原重忠といへる人のゆくりなく訪ひきて、聞くに今千とせの陰も住吉の松にひとしき名こそ高けれといひ入れけるに

おのづから名やふりにけむいたづらに年をつもりの浦のあま人

　海上の信太正慶がもとにて

海上や磯山松の陰しめて千とせ榮えむやどにもあるかな

　香取の躬國がもとにやどりて

刀禰河に來よる白浪しば〳〵も問はまくほしきやどりなりけり

　出石の君のなり所にて人々歌よみし時花多春友を

入佐山にほふ櫻を千々の春老いせぬ友と君のますらむ

　刀禰川をわたりて眞間にいたりて所々見ありきて

はかりなき世―無量壽

うけら―朮、形あざみに似たる草にて一の根よりあまたの莖を出す

いわけなし―幼し

日にけに―日をおうて益々

ふゝめり―花のつぼみてある

うからやから―一族

が年老いてかしらおろしければよみておくる

はかりなき世をもへなゝむ茜さす日の入る國の神のまに〳〵

貞直卿より季鷹縣主へ消息におのれがよみ歌のうち二首殊にめでたまへるよしにてみづから書きてまゐらせよとありければ書きてまゐらすとて

武藏野や花かずならぬうけらさへつまるゝ世にも逢ひにけるかな

伊豆國熊坂の村菊池武教といへるがむすめ袖子はいわけなかりしよりふみ見歌よむことを好みて十四になりける年はじめてよみ歌あまたおこせて筆くはへてよとこふまゝにいさゝか引きなほしてなむやりつるそのはしに書いつけける

色も香も日にけにそはむ花ぞとはふゝめりしよりしるくも有るかな

鎌倉の長温がうからやからの書けるものをあつめて慕親帖と名づけて家につたへむとす其中にはおのれがかぞいろは

蒿蹊—伴氏、名は資芳、閑田子と號す、閑田耕筆、近世畸人傳の著者

亀井—昔、天王寺にありしといふ井の名

さしぐまれ—涙を催す、汲むの縁

かゞみ山—近江にあり

かど—才

枝さしそふ橘のもとに道ふみいゆき通はむといひおこせける返し

かぐはしき数ならずともあし引の山橘のやまずとはなむ

京の蒿蹊が消息にしはす四日夜難波の四天王寺へ雷おちて諸堂皆やけぬとて、天の火にもえて名ごりも難波寺亀井の水の有るに有るかはとよみたりとて書いつけおこせける返事にいひやりける

時の間の煙となれば萬代の亀井の名さへたのまれもせず

何事もかぎり有る世を思ふにぞ亀井の水のさしぐまれける

保田正永が故有りて年頃近江の膳所にこもり居けるが五十ぢに成りぬる年の暮に消息すとて

わがせこを千代もともなへ近江の海八十の湊のたづの村鳥

かゞみ山とぎし心をさゝなみの國つ御神も守らざらめや

さち子はわが父君に物まなびて女ながらかどある人なるが

香をしめて―袖に香をたきしめて也、師の薫陶を受けたる意にいへり

なきぞとはくまなくみえむ武藏野の月と書きて賜へりければ御返しに

武藏野のを草が上も雲井よりもらさぬ月の影あふぐかな

妙法院一品の宮より長月ばかり刑部卿法印寛常をみ使にてさきに歌奉れるをめでさせ給ひてろく賜はりける時寛常の

音にのみ遠くもきくの香をとめてえならぬ花の色をこそ見れとよみて出しければ返しに

見るめなき荒野の菊に宮人の袖ふれむとはおもひかけきや

京の小澤蘆庵に物學べる小野勝義おほやけごとにてむ月のはじめこゝにまゐりけるにことつけて蘆庵がもとより、立ちよらばたちもよらせよ橘のかげふむ人は道まどひせじといひおこせければ返しに

たぐひなき言葉の花の香をしめて立ちよる人の袖もなつかし

躬絃のもとより年のくれに消息のはしに、年のはに五百

ふりぬる事―古くなりたるに降るを掛く

まほら―山にとりかこまれたるところ

朝顔に置くしら露やはかなさを思へどかれぬたぐひなるらむ

棚倉の君の贈答會にかしら白き女にといふ題にて雨岡、昔誰が初子にしめしはてならむ白雲かゝる松の老木はとある

返し

われながら梢の雲ぞむつまじき昔ふれけむ袖のなごりに

帚木の巻の心をよめる

くまもなく語りつくせし宵の雨のふりぬる事を誰かつたへし

夕霧の巻の讀經の聲かすかにといふ心を

風あらき山のまほらに籠りゐて讀むらむ法の文のこゑする

源氏物語の竟宴しけるに夢の浮橋を得て

谷陰にむかしおぼえて飛ぶ螢おもひ消ゆともよそにしられじ

富小路三位貞直卿おのれが著はせる萬葉集畧解を得まほしとのたまへるよしを季鷹縣主より聞けるまゝに參らせければよろこばせ給ひて御消息のはしに、陰あふぐ心のはても

やぶしわかぬ―叢にても日光はわけ距てなく照す、古今集「日の光やぶしわかねば礒の上古りにし里に花も咲きけり」

はかられ―だまかされ

花にのみ云々―

やぶしわかぬ春の光に雪消えて草はこと〴〵萌えいでにけり

神代の事も

かしこきや神代の事もますらをが手わざにすなる天の櫨弓

門さしてあけざりける所にて

松の嵐たゞく水鶏の音にのみはかられにける宿にしあるらし

松に露のかゝれるをおとさず折りて

かりそめにまつと告げこす言の葉も露ちらさじと思ふばかりぞ

春に心よせたる人のもとに

花にのみ心をよせば唐錦ころも立田の神や恨みむ

同じ題にて長枝、さやかなる月の夜頃のあはれさも知らでや人の春をめづらむといへる返し

秋にのみよるとは知らでかすむ夜の月と花とに君をまたれし

世のはかなき事をいひて法師にやなりなましと思へど思ひすてぬ事といひてといふを題にて

林下幽閑氣味深

人とはゞいかゞこたへむ奥山のしげみがもとに住める心を

草堂深鎖白雲閑

世の常のひえを外山に住む庵はたゞ白雲にとざされにけり

とこしへにとざせる門をたどらずて夕べはかへる軒の白雲

長恨歌の句をさぐりてよみけるに養在二深閨一人未レ識といふこゝろを

しるらめや賤がかふこのまゆごもり恐き御衣に織りあへむとは

在レ天願作二比翼鳥一といふ事を

夜と共にかはす眞袖をそのまゝに翼となして天がけりなむ

雪月花時最憶レ君

入るを恨み消ゆるを惜みうつろふを歎くや同じ心なるらむ

自寛の觀音の入佛供養するにまかりておの〳〵普門品の心をよめるに衆怨悉退散の心を

長恨歌—白樂天の詩

賤がかふこのまゆごもり—賤の女の養蠶してつくれる繭

織りあへむ—織り遂げん

普門品—妙法蓮華經觀世音菩薩普門品第二十五、所謂觀音經

おのがじし―各自に

おどろがもと―草木のむらがり生じたるところ

まだき―早くも

妙法院の宮の月次の御題に心といふ事を

雪をしのぎ風にまかせておのがじし松も柳も心ありけり

同じく思といふ事を

思はじと思へどものを思ふこそ心の外の心なりけれ

同じ宮より關といふ文字書きて雞を爲がけるに歌書きて

よとおほせごと有りければ

古への長鳴鳥や今も世に關の戸あくるはじめなるらし

同じみうちの人に乞はれて墨がきの芭蕉をよめる

忘れてはあしたの雨の音を聞き夕べの風に招くとぞ見る

君恩如二雨露一

武藏野のおどろがもとの小草すら惠の露にもれずぞ有りける

六月ばかり雨岡がもとにて樂所の人々調樂しけるに淸風籠入

管絃一といふ事を

いと竹の聲や雲井にひゞくらむまだきかよへる天の河風

「三輪の云々―古へにありけむ人も吾が如か三輪の檜原にかざし折りけむ」萬葉集

妹まつと云々―「足引の山のしづくに妹まつとわれ立ちぬれぬ山のしづくに」萬葉集

ぬる―寢る

あけ―赤、緋の袍は五位の人の著るもの、緑の袍は六位の人の用ふるもの

あもりづく―香久山の枕詞

かざし

神さぶる三輪の檜原に立ちまじりかざし折りけむ昔とはどや

しづく

妹まつと人や見るらむかりそめにやすらふほどの山のしづくも

高

香久山の峯のさか木の上つ枝にかけし鏡とてれる月かも

近

昨日まではるかにこそは思ひしか袖さしかへてぬる夜有りけり

山の井に影をうつせば久かたの雲井の月を手にむすびけり

緣

位山嶺の若葉のみどりさへあけにうつろふ秋をこそ待て

あもりづく青香久山の眞さか木は神代よりこそ緣なりけれ

人々五色の歌よみけるに黑を

わたの原夕浪黑く立ちくめり熊野の沖に鯨寄るころ

家に歌よみける時神祇を

武藏なる磐井の森の國つ神常磐堅磐に世を守るらむ

曉神祇

千早振神代おぼえてあかつきの長鳴鳥に明くる御戸かな

四海淸

筑紫の海蝦夷の千島の沖かけて浪たゝぬ世は濁るともなし

披レ書逢レ昔

かしこきや奈良の都の宮人と語らふものはふみにざりける

行路待レ人

椿市の路の行く手の歌垣にばひあひがたき人もあはなむ

幸逢二太平代一

大御代はのどけかりけり春霞二荒の山に立ちそめしより

關山月といへるから歌の題を

あげまきがかへる山路の笛の音も月もすみわたる足柄の關

千早振—神の枕詞
長鳴鳥—雞

椿市—大和
歌垣—若き男女相集りて遊び歌ふこと
ばひあひがたき—奪ひ合ひ難き
二荒の山—下野日光山
あげまき—童兒

もとつみやしろ—本社

葦原の云々—古事記に「八重事代主神を徴し來て問ひ給ふ時に、かしこし此國は天つ神の御子に奉りたまへといひて、乃ち其船を蹈傾けて天の逆手を青柴垣に打成して隱りましき」

さつを—獵夫

とよのあそび—豐明節會の宴樂

鹿島神宮

大君のみ笠の山もありといへど鹿島が崎のもとつみやしろ

下總國にまかりける時海上郡荒野村白幡宮によみて奉ることは味耜高彦根命をいはひ奉れるなり

東路の國やすかれと海上にしづまりませる白はたの宮

本居宣長が古事記の竟宴に事代主神を得て

葦原の國さかりつゝ萬代に神の御尾さきつかへまつらす

神あそびの歌になぞらふ

さか木葉に散るや霰をうちはらひ神の御前に立てる人長

さつをらがひくや槻弓も本末の歌遊びする面白の夜や

小齋衣大みの衣袖たれて神の御前にとよのあそびする

神祇

御劍をいはひそめてし昔より代を守りますふるのみ社

いはふなる神の御名さへかぐはしき春の梅津に幣まつらばや

開邪姫の妊娠せるを疑ひ、姫殿に火をつけて火照命を生める故

横川—比叡山のうち

みづはぐむ—年老ゆの意、谷の水といふ語を掛く

まかぬ—枕とせぬ

あやにしき—たちの枕詞

やさし—恥かし

みあらか—神殿

法師

松の聲谷の清水の音聞きて横川の洞に年ぞへにける

僧侶歸暮

眞柴とり眞淸水汲みて歸るらむ横河の暮の鐘のひゞきに

谷樵夫

幾年かなげきこるらむ朝夕に影見る谷のみづはぐむまで

岸頭傀儡

白浪のよるべなぎさに浮寝して新手枕をまかぬ夜もなし

朗詠の題を分ちて妓女を

あやにしき立舞ふ袖の　風になびくを妹が心ともがな

老人

今はたゞむかふもやさし年をへて面がはりせぬ月と花とに

伊勢

五十鈴川高がや葺けるみあらかに神代の手ぶりいちじるきかも

都留の郡―甲斐國

松のと―山ずまひの家

みもひ―御水

南の山―詩の小雅天保篇に「如月之恒、如日之升、如南山之壽、不騫不崩」

うけて―浮べて

一よのから―日本紀神代下に「雖復天神之子、豈能一夜之間（ヒトヨノカラニ）使人有身者（ハラマセンヤ）」云々。瓊々杵尊一夜の契に木花

甲斐守景衛君の七十の賀に鶴千年友といふ事を

名にし負ふ都留の郡に住む鶴も君に馴れつゝ千代を經なまし

人の七十の賀に心靜延壽といふ事を

大かたの春秋知らぬ松のとに忘れて經なむ千代や幾千代

伊勢の國人の七十賀に其國の地の名をわけてよみけるに忘井を

春秋も忘れてへなむ忘井の淸きみもひの千代もあかずて

人の八十の賀に壽の字書きたる盃を五葉の枝につけて

動きなき南の山の影うけて千代も汲まなむけふの盃

季鷹縣主の許にて神代紀の竟宴しける時に木花開耶姫を得て

村あしの一よのからにうけひてしまことはほにぞあらはれにける

將軍

弓張の光し空に淸ければ鳥のねぐらのあらそひもなし

松がさね—表青にして裏紫なるもの
日かげ—日かげのかつら
よもぎが島—蓬萊山
みぎり—砌、軒下
ふし—節、臥
竹のみやこ—齋宮の御住所

自寛の七十の賀に松の作り枝に盃を松がさねの紙して包みて日かげと思はせてみどりの絲もてゆひつけて絲のはしを枝にうちかけたり其包める紙に書いつけける歌

松が枝の日陰のかづら繰りかへしいく春汲まん今日のさかづき

人の八十の賀に椿壽八千春を

うき事も白玉椿八千代まで榮えむ宿の末ぞはるけき

龜契二萬年一

仙人の住むやよもぎが島山を負ふて龜に世をくらべなむ

人の親の七十の賀に寄レ竹祝といふことを

榮えよやみぎりの竹のふして思ひおきては千代と祝ふ子の爲

伊勢の荒木田久老神主が五十の賀に竹不レ改レ色といふ事を

色かへぬ竹のみやこに千代かけて千ひろの陰をしめむ君かも

日向守利和君の御母刀自の四十賀寄レ鶴祝を

今年より君がへむ世の行末はむれゐるたづや空に知るらむ

うれ―梢
日かげのかつら―苔の類
木綿山―豊後にあり
みつばよつば―幾棟も家の重りたてるさま
致仕―退職
しめて―占めて

子日する野邊の小松のうれごとに日かげのかつら千代かけて見む

豊後の人の六十の賀寄レ松祝を

八千代まで神ぞ守らむねぎかくる木綿山松の常磐かきはに

人の六十賀に松有ニ歡聲一

とことはに千代をとなふる聲すなりこや仙人の軒の松風

人の七十賀に松有ニ歡聲一

かぎりなきよはひをもたる松が枝は風の音にも千代ぞこもれる

松代の君の六十賀に檜松有ニ嘉色一といふ事を

千世までのよはひに富める色なれやみつばよつばの軒の松が枝

苅屋の致仕の君の五十の賀に飛鳥非家の出題とて松によせて老をいはふといふ事を

春ごとに色そふ松と君が代はいく千年をか老といはまし

又同じ時に寄レ竹祝を

千尋ある竹の林の陰しめて限りなき世をへなむ君かも

氣比の海―越前敦賀の海

八束穗の足穗―長く立派なる稻穗

いなかつら―稻の穗を組みて鬘とせるもの

ひもかゞみ―氷面鏡、氷の異名、紐鏡の意より結びの緣として用ふ

越前の高野納が父の八十の賀に春祝を

八汐路の浪路かすめる氣比の海のいや遙かなる君がよはひか

人の七十賀に夏祝

年毎にぬくやさ月の玉の緒に長きよはひをかけて契らむ

人の八十の賀に秋祝を

八束穗の足穗の稻置今年より猶や千歲を積まむとぞ思ふ

人の七十賀秋祝言

五百しろの秋の足穗のいなかつらかけて千年もたのもしきかな

人の六十賀の屛風に十月池に氷あるかた

この宿の池の氷のひもかゞみ千年をかねてむすびそむらむ

幸子が母の六十の賀に竹に雪の降つたるといふ事を

吳竹の千ひろのうへに降る雪の高きよはひをつまむ君かな

人の六十の賀に寄レ松祝を

雲かゝるをのへの松の梢より高きよはひを經なむ君かも

あえなむ―あやからむ
ほぎ歌―祝賀の歌
たうび―賜ひ
よごと―壽詞
檜破子―檜の木にて造りたる辨當箱の如き器
水上とめて―桃源の仙郷を求めて

父君を九十(ここのそ)ぢのよはひまでいさゝか祝(いは)ひまゐらせつるなればそれにしもあえなむとていふまゝにものし侍ればしたしき友がきよりやむごとなきわたりまで春の祝といふを題にてほぎ歌たうびぬるはまことに生(い)けるかひありていと嬉(うれ)しくなむさてよみける

ながらへていざ試(こゝろ)みむ花鳥の色にも音にてあく世ありやと

皆人のいはふよごとに言靈(ことだま)のたすけまさなむことはしるしも

都に住める雪岡大德(だいとこ)の師の七十の賀に霞をよめる

春さればかすみ流るゝ大井川君こそくまめ千々といふ世も

岩村の君の御母君の七十の賀に檜破子(ひわりご)を洲濱(すはま)のさまにして桃の花のもとに水流るゝかた作りてそれに添へける

桃咲くや水上(みなかみ)とめて住む人の千代のよはひも君にとてこそ

人の八十の賀に春祝

子日(ねのひ)する野べの小松の千年へて雲かゝる世も君こそは見め

時うしなふ—不遇に陥る

白檀弓—いの枕詞
いそ—礒、五十

よむ—數ふ

寄レ道祝

小車のかよふ大路の末とほくいや平らけき御代にもあるかな

人の時うしなへりしが四月のはじめにつかさすゝみけるをほぎて

春霞はれ行く峯に松が枝の千年の色はあらはれにけり

人の五十の賀に

白檀弓いそべに立てる岩かげに寄るなる浪や人の代のかず

比叡の大僧都崇純の六十の賀に

千代も猶ときはなるべし大比叡や横川の杉と君がよはひは

伊勢の國人七十の賀に

伊勢の海や寄する白玉ひろふともよむともつきぬ人のよはひか

今年六十ぢになりにければほぎ事せむと五百子直蔭らのいふにかく數にもあらぬ身に賀などいはむもおふけなくおほゆるものから昔より人の子のすめるわざにておのれもはた

安濃津―伊勢の津、藤堂候の治
よざし―寄せまかせ
すなほなるてぶり―素朴の古代

社頭祝

葉がへせぬ柏の社に幣まつり常磐に君が代を祈るかな

安濃津知り給へる君の染井の庄の八幡の大神に八月十五日十五首の歌奉らるゝにおのれも社頭祝といふ事をよめとありければ

君が代は千代も絶えめや岩清水いはひまつれる神のまに〳〵

寄日祝

天の原よざしまつれる日の御神照さむかぎり國は動かじ

寄都祝

古への野中古道よろづ代に榮えむとてぞあらたまりける

寄杉祝

すなほなるてぶりを見せて神代より立榮えたる布留の杉村

寄龜祝

松が枝の影さへうつる池水のみどりの龜に代をくらべなむ

印南野、飾磨河
—播磨
みなわ—水沫

たらちねの—母
の枕詞

ものを結び机にのせて歌そへてまゐらせける

いつしかも過ぎにし秋は七くさの花の香のみぞ世に殘りける

七とせの今日よりしもや印南野の千草の露は置きまさりけむ

世の中はしかぞ常なき飾磨河みなわにやどる秋の夜の月

母君うせ給ひて十三年になりけるやよひ十七日に

春ごとにかへらぬ春をしのびつゝ十まり三の春はすぎけり

たらちねの母のかたみと思ひこしおのが身さへも老いにけるかな

明阿彌陀佛の十三年の忌にその男萩原氏へよみておくりける

おくるゝもしばしばかりと思ひしにこゝらの年をふりにけるかな

いはひ

筑波嶺のしづくの田ゐを返すぐヽしげき御蔭をあふぐ諸人

祝言

大御世はしづけかりけり丈夫が手にまく鞆の音も絶えつゝ

人のめ―人の妻

つまなし―山梨の類、妻無しを掛く

ころを

とこしへに空行く月はくまなきを雲隱れぬと思ひけるかな

姉君こその正月末うせ給ひつるがはや一めぐりになりければ

春がすみ立つを見つゝも去年の今日消えし煙のしのばるゝかな

貞樹がみまかりし又の年の五月在りし世を思ひいでて

たちばなに昔しのびし人もはた今年は人にしのばれにけり

人のめのう月ばかりみまかりけるが三年になりけるう月になむつかはしける

立ちぬるゝ袖やいかなるあづまやの軒のつまなし瑞枝さすころ

人の父の七めぐりに

手向する涙の露も置きそふや過ぎこし秋も七くさの花

姫路の侍從殿うせ給ひしは七年さきの七月十四日になむ有りける

其日にあたりて其御妹戸澤家の大刀自君へ御手向の料にとてたき

かへる山—越前にあり
かきつめ—書き集め
みつる—安田躬弦、賀茂季鷹に歌を學ぶ
圓位大徳—西行法師
青根が嶺—吉野山の奥

かへる山歸らぬ旅の手向草かきつめよとは思はざりけむ

みつるの弟清照の三十ぢあまりにてみまかりて荼毘のところにて、世の外のけぶりとなりて目に見えぬ花のうてなに立ちやのぼれるとよみしとみつるがいひおこせければ

立ちのぼる煙の末は跡なくておもひをのみや世にとゞむらむ

其母刀自が、三十あまり過ぎこし年をはかなくも軒端に消ゆる霜と見すらむとよみしがあはれなれば

老いにける松を千代もと思ひ置きて朝の霜と消えし人はも

圓位大徳の忌日に雨岡の家につどひて

さくら咲く青根が嶺の苔むしろかぐはしき名をしき忍ぶかな

雪岡大徳の師京南禪寺に住めるがこぞの霜月身まかりぬと聞きて二月ばかり雪岡のもとへよみて遣はす

世の中に心とゞめぬ法の師もおもひおきけむ君がゆく末

豐國岡の君一めぐりの御忌日に壽量品の惠光照無量のこ

つとに—土産物に
こしの國紙—越前の奉書紙

くりける
百世とも思ひし松の雪消えてしづくにぬるゝ人ぞおほかる
從純が父にはかに病みてしはすの七日にみまかりければ從
純がもとへ
老人のためにをしみし年浪を今はかひなく袖にかくらむ
片山誠之がみまかりければ
いかなればかた山椿八千世もと思ひし人のはかなかるらむ
はやく相知れりける人の身まかりけるころ世のはかなきを
おもひて
誰も世は日影待つまの夜の霜殘ると見るも消えずやはある
同じ瀬によらざらめやは流るゝも淀むも水のうたかたぞかし
牧村刀自がおのれへつとにとてかねてこしの國紙をおこせ
おきたりとてかの刀自がみまかりてのち同じみ御館なる人
よりおこせければ其紙に書いつく

本居宣長ー享和元年九月二十九日歿す、年七十二、此時千蔭六十七歳

たぐへしー比べし

わくらはにーたまさかに

たづきーたより

香取のみくにが妻長月の末みまかりけると聞きてみくにがもとへよみて遣しける

今よりのしぐれよ霜よいかばかりつまなき床にさえまさるらむ

本居宣長長月のなかばより病みて廿日あまり九日になむみまかりぬると聞きてかたみに年高くなりぬるものから今更のやうに驚かれて

伊勢の海や二見の浦の二つなき玉にたぐへし人をしぞ思ふ

わくらはに同じ世にしも立ちへつゝあひも見ざりし事のくやしさ

古ごとの道明らめしいさをこそ萬代までのかたみなりけれ

宣長もおのれも遠つ祖は伊勢の國北畠の家より出でてかつ學の事も縣居の大人に共にこととひたりしを思へば大方ならず思ひなげかれて

枯れやらで殘るさ枝ぞたづきなき同じ根ざしをかつ思ふにも

十一月ばかり倉持宗壽がみまかりて七日によみて其家へお

はつ子—初めて生れたる子
あつしく—病おもく
あえで—似ずして
夕かげ待たぬ—夕方の日影をも待たずしてしぼむ朝顔
御いらつこ—御若殿

むこ三村親雄がはつ子五月廿日あまり一日あつしく病みてみまかりける七日にあたれる日に手向けける

忘れては猶ありとのみ思はれてなきをなげかぬ時も有りけり

六月ばかりみまかりける人になでしこを手向くるとて

かくばかり消えなむとてやなでしこの露をあはれと思ひおきけむ

嘯月がにはかに病みて六月の十七日にみまかりければ

語らひし昨日やうつゝ今日や夢おもひさだめぬ世にも有るかな

七月ばかり自寛のよめのみまかりけるに槿に付けて

立ちならぶ松にはあえで何に此の夕かげ待たぬ花にならひし

人の子の七月四日の日にはかに病みてみまかりければ

はかなさを思ひ知ればや秋立ちて露置きそめぬ草の葉もなき

八月の末土佐の國しらせる君かの國にしてみまかり給ひつるに御いらつこの御かたへよみてまゐらせける

海原や雲井のをちに影消えて二度すまぬ月をしぞ思ふ

もといふが如し、古今集の序文による

もとの雫云々—「末の露もとの雫や世の中のおくれ先だつためしなるらむ」新古今集

なく子なす—泣く兒の如く

て人にまさりておのれを父としたしみつるがやよひ十日ばかりに病みて十二日といふ曉にむなしくなりぬるよし靜子がつかへまつる植村の君の北の方より告げおこせたまひあはれなるうたなど見せたまへりければなみだせきあへずなむ

おのが身の老い行くことをなげきてし人ぞ中々はかなかりける

ちゝのみの父としたはれわが子ぞと思ひし事の今はくやしき

身こそ先づもとの雫と思ひしか葉末の露の何のこるらむ

あはれわがあらざらむ世に歎くべき人を歎かむものとやは見し

なく子なす慕ひし人のいかなればわがなき跡をとはむともせぬ

　縫子が夫の十七年の忌によみておくる

あまた年もとの雫を歎き來ぬ誰も葉末の露の身にして

　縫子がにはかにみまかりぬと聞きて

うつゝある物とはかねてたのまねど夢の中なる夢ぞはかなき

おくつき—墓

ちゝのみの—ちちの枕詞

をちの千々の世—遠く永き後の世

いわけなかり—いとけなくあり

難波津—いろは

漕ぐ舟の雲井に消ゆる沖見れば見し世もかくとあはれなりけり

同じ時おくつきに詣でて

在りし世の恵の露を思ふには朽ちてもあかぬ袖の上かな

人の七年の忌に暮天雁を

ゆふぐれの霧のまよひにいにし人歸らぬ空に雁は來にけり

中村一鄰が遠つ祖の百五十年の忌に山雪を

ちゝのみの秩父の山の嶺の雪かくて幾とせ積みか添ふらむ

人の遠つ親の百年の忌に池水久澄

百年の今日よりをちの千々の世もかくてすむべき庭の池水

姉君桂芳尼睦月二十四日みまかり給ひてけぶりとなしつる

むらををさめ奉るとて

かたみともせめて思はむ煙だに消えにしからを見るぞ悲しき

靜子は（もとみへ子といへるなり）いわけなかりしより難波津も何もをしへものしつるに歌も文もいとよう作り出でてことに常の心おき

知春尼が一めぐりにこぞの秋を忍びてといふ事を

さめなばと思ひしこぞの夢よりもうつゝの秋ぞ更に露けき

荷田御風が七年の忌に月に對ひて昔を思ふといふ心を

月見れば涙ぐましも天がけり去にけむ秋はこゝらへぬるを

父君うせ給ひて十あまり三年に成りぬる八月の十三日人々をつどへて月の前に昔をしのぶといふを題にて歌よみて手向け奉るによめる

面影をあふぎてしのび古ごとをふしては思ふ袖の月かな

荷田在滿が五十年の忌に月催舊情といふ事を

秋の夜の月を見つゝも其名のみさやかに殘る人をしぞ思ふ

父君の十七年の忌に八月十三日人々をつどへて月似古といふ事を

昔おもふ袖にとひくる秋の夜の月は其世の月にぞ有りける

同じ時眺望を

雲のはたて—雲際

東常緣—古今傳授にて名ある人

縫子—菱田氏、荷田民子に和歌を學ぶ

人の七年の忌に秋無常

夕ぐれの雲のはたてをながむればかりは七たび音づれにけり

東下野守常緣ぬしの三百年の忌に寄ㇾ道釋教といふ事を人のよませけるに

雲のはの薫りを道のしをりにて御法の花を今や見るらむ

たみ子が十三回に花のもとに昔をしのぶといふ事を縫子がよませけるに

春ごとにしのぶもあやな朽ちぬ名はあだなる花のたぐひならめや

去にし年花散りしよりさくら木のもとの心を知る人ぞなき

仙臺中納言政宗卿百五十年の忌に盧橘懷ㇾ昔といふ事をよませられける

いにしへを問ふもかしこし其香さへ世々に殘れる軒のたちばな

知春尼が身まかりしに菊にそへて手向けける

思ひきや折る白菊の末の露かけても君に手向せむとは

諸鳥—姓は鹽瀬、賀茂眞淵の門人

寄二時雨一懷舊

村しぐれいくたび袖にかよふらむ空定なき世を思ふ頃

八月なかば諸鳥がみまかりければ

ひとりのみ鳴きやわたらむ秋霧に友まどはせる天つ雁がね

同じ人の三年の忌に寄レ書懷舊

ふみ見ても袖ぞぬれけるふりし世に心をよせし友をしのべば

人の子のみまかりけるに秋無常を

立ちまよふ峯の浮雲野べの露さだめなき世の秋を知れとか

錦なす花野はあせて花と見し露も消え行く秋のくれかな

岩倉入道殿のみむすめ勝子越の君のみたちにありてみまかられしに寄レ露無常といふ事を

かぎりなき名は空しくて武藏野の露やあだなるたぐひなるらむ

知直が母のみまかりける頃春無常といふ事を

來む秋と契りもおかで別れ行く雁はこの世のならひなるらむ

今も猶—古今集「さつき待つ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする」

人のめ—人の妻女

父君のおもひ—父君の喪

荷田御風—在満の子、民子は在満の妹

今も猶花たちばなや思ふらむ昔ふれにし君がみ袖を

　人の二三年の忌に秋懐舊

昔おもふ眞袖の露にいくめぐり秋のなかばの月はとふらむ

　季鷹縣主の遠つ祖山本永久縣主代々賀茂の大神のみやつこなるが百年の忌に秋の懐舊といふ事を

百年のむかしおぼえて神山のやまもとてらす月ぞくまなき

　人のめのみまかりて七年に成りぬるに寄レ藤懐舊といふ事を

今も猶花こそにほへ藤浪の色にかよひし人はなき世に

　父君のおもひにこもり侍りけるにこぞの此ころなむ荷田御風がみまかりぬる事をおもひて御風が叔母なるたみ子へよみておくりける

こぞをしのび今年の秋をなげきつゝぬるゝが上にぬるゝ袖かな

　人の一めぐりに寄レ風懐舊

桐の葉の一葉散りにし夕べより秋てふ秋の風ぞ身にしむ

風だにも云々—風に散らさるゝ憂もなしとの意

たま—靈魂

こしぢ—越路、北國方面

月をのみなど惜むらむいたづらにわがよ更け行く身をば思はで

寄レ花述懷

谷陰の老木のさくら風だにも知らで中々のどけかりけり

むかしをこふ

いたづらに過ぐる月日はをしからで昔の遠くなるがわびしさ

敷妙のふりし枕にとありけむかくありけむといふがはかなさ

人の三年の忌に春懷舊

天がけるたまの行くへをしたひわびあがる雲雀のねをや鳴くらむ

牧村刀自が越前の國にてみまかりて三年に成りけるに春懷二舊一を

鴈がねのこしぢへ歸る聲きけばことづてやりし人ぞ戀しき

人の一めぐりに夏懷舊

見し人は面影もなしめぐり來てけふにあふちの花は咲けども

高辻少納言殿の百年の忌に夏懷舊といふ事を

葛飾の國府—下總の國府臺
たふしの崎—志摩手節崎
布施の海、垂姫の崎—越中
水沫なす—水のあわの如く
くたさじ—朽ちしめざるべし
あらまし事—豫期すること

葛飾の國府より見れば一むらの布ひきはへし刀禰河の水
あはとみる安房の海吹く汐風にうかぶ木の葉やあまのつり舟
伊勢じまや汐干のなごり見渡せばたふしの崎に玉藻刈るなり
橋立や松風遠く音づれて與謝のあま人袖かへる見ゆ

湖水眺望

布施の海や小舟よせけむ宮人の面かげうかぶ垂姫の崎

述懐

いたづらに身は老いぬともかくばかりうき事もなき世をばうらみじ
しづけかる時にあひつゝ花にあき月にあくがれ我世つくさむ
水沫なすはかなきが世に多かるをうれしくも身は老いにけるかな
名をさへに草の原にはくたさじのあらまし事もおふけなの身や
花やうき月やわびしき月花のあらむ限りは世をばかこたじ
天の下しづけかる世にあへる身はさらにみ山の奥ももとめじ

寄レ月述懐

文車―ふぐるま、書籍をのせて家のうちを運ぶ車
あふくま―逢ふ、阿武隈
すみ―住、澄

おのづから靜けきものの世々をへて盡きぬ例を見る石ぞこれ

やむごとなきわたりのよろこびごとに文車まゐらするにそへたる歌

めぐりくる千代の春秋言の葉を猶積みそへむ文車ぞこれ

阿武隈河の埋れ木して文臺作りてそれに歌書きてよと杉田氏がこへるに

言の葉の花咲き出でつかゝる代にあふくま河の底のうもれ木

人の乞ふまゝに書きてあたへけるものをいとよくよそひなしてそれが箱のふたに歌書きてよといへりければ

上つ瀬をとめつゝ見れど水ぐきの底ひをえやは汲みてしるべき

閑居

里人のとふもかならずいとはねど葎ぞ門をとぢはてにける

一すぢのかけひの水とわれのみぞ此山陰にすみはてぬべき

眺望

むらさきのーねに掛く
名取川ー陸前國
下樋ー琴の胴の空なる所
倭琴ー六絃の琴、上古より用ふ
國の名もへるーやまとごとと云へばなり
おふけなくー分不相應に

むらさきのねもごろ君がおもひこそ心の深さをぞ知る

名取川の埋木もてつくれる櫛に歌書きてよと乞はれて

宮人のよゝの詞に名とり河名はあらはれし底のうもれ木

琴をかりて返すとてと云ふを題にて

玉琴よひきはなるとも明日よりは下樋にかよふ風となりなむ

倭琴

大八洲國の名おへる琴にこそ神代のまゝの音は殘りけれ

いかり

大船をとむるいかりのつな手繩心強くも見ゆる君かな

はかり

おふけなく心にかけてしのぶかなはかり知られぬ千代のふるごと

笄簪

紫の根ばふよこ野の初若菜かたみにつむもゆかりならずや

人のもとむるによりて硯のふたに

しらゝの濱—紀伊國
ふみ見—踏見、書見
石上—ふりの枕詞
やさし—恥かし
ふりにける—古くなりたる
梓弓—本の枕詞
淨見原—天武天皇
神の世のてぶり—神代の風俗

かくぞとも人はしらゝの濱千鳥跡見るごとに袖ぞぬれける

大木曾や木曾のかけはしふみ見ずばかしこかる世の事を知らめや

ふみ見ればたのしかりけり石上ふりにし世々の友をあまたに

鏡

たをやめの櫛笥の鏡心さへうつらばいかにやさしからまし

弓

ふりにけるてぶりうたはむ梓弓本つ御世にも引きかへしつゝ

冠

淨見原ひじりの御代のみことのりいたゞきまつるかうぶりぞこれ

布

神わざの麻ぬの衣神の世のてぶりおほゆるよそひなりけり

南部の盛隆がみちのくの鹿角郷といへる所より出せる紫にて染めたる布をおこせて武藏野の若紫にめなれては色もあはれもふかゝらずこそといひおこせければ

はなれそ―陸より離れたる磯

いく藥―不老不死の藥、竹取物語のはなし

葦かび―葦の芽だち

沖つ浪千たびくだくる岩角におりゐる鷲の聲もすさまじ

鵜

風荒く夕浪よするはなれそにあなうとおのが名にやわぶらむ

鴛鴦鳥を籠に入れておこせけるに

中々に八重垣こもる心地にてならべる鴛ぞ羨まれける

猪

千よろづの仇にむかひて走り猪のかへり見せぬを心ともがな

龍

かくるれば硯の水を住みかにて雲井をわたる龍ぞあやしき

藥

いく藥富士の煙にたぐへずは其代の人に今もあはましを

言の葉

葦かびのもえし神代の古ごとも言の葉にこそ世に傳へけれ

ふみ

暮れがてーいつまでも暮れぬ樣に

うな上ー海上

眞なご路ー眞砂路と同じ

あしわかー蘆若浦、攝津國

みの毛ー蓑毛、鷺の頸部にある特に長き毛の稱

けてー伊勢物語「夜があけばきつにはめなむくたかけのまだきに鳴きてせなをやりつる」

高島のあと河浪のおともせで寄するは鷺のあさるなりけり

暮林鳥宿

河上の一むら林暮れがてに見ゆるは鷺のねぐらなりけり

鶴立レ洲

君が代にいく世へぬらむうな上や沖つ洲崎に立てるあし鶴

浦鶴鳴レ月

眞なご路を月にみがける玉の浦やはなれ小島にたづ鳴きわたる

名所鶴

よる浪に八千年馴れてあしわかのうら安げにも見ゆるたづかな

雨中鷺

かきくらし雨もふる江の夕ぐれにみの毛ぬれつゝ鷺たてる見ゆ

曉更鷄

またるべき物とも知らず庭つ鳥かけてうらみし昔をぞ思ふ

鷲

辛崎の云々―萬葉の「さゝなみの志賀の辛崎さきくあれど大宮人の舟まちかねつ」の飜案

千世のどち―千年の友

なには―名には、難波

辛崎の一木の松に貴人の舟待ちつけし昔とはばや

松歴レ年

松島や松のむらだち岩がねにねざしそめしは神の御世かも

嶺松年久

さゞれ石のむかしよりこそ契りけめ嶺のいはほに立てる松が枝

松契二多年一

契り置きてふた葉よりしも天雲の梢にかゝる代をや待つらむ

いのち長き人の前に松竹有る家といふことを

住む人の千世のどちとやいつの世に松と竹とをおほし立てけむ

昔うゑし松と竹との陰見れば我世も高くなりにけらしも

桐

聲知らむたがつま琴となりなましみ山の奥の桐の一もと

水郷鳥

おしてるや堀江の水に住む鳥のなには都の跡ぞのこれる

役の上らぬ意をよそへたる也

砌下—軒近きところ

松—日本武尊が尾津前の一松をあはれと歌ひしことをいふ

舟岡—山城の山名

北野—山城にあり、菅公をまつる

山松の幾代をへてか神わざにかくる日蔭のかつら生ひけむ

竹

鶯のねぐらながらの聲をしも聞くべかりける宿の竹むら

窓前竹

すなほなる心の友か上つ代の書巻きかへす窓のくれ竹

砌下栽レ竹

嬉しさの一ふしごとに今よりは色そはるべき園のくれ竹

松

あはれてふ御言を松にとゞめしや異木にまさるためしなるらむ

岡松

秋更けてしぐれ降るなる舟岡も松はこがるゝ色なかりけり

社頭松

神のます北野の森の一夜松一夜に春の色やそふらむ

松年久

清水―關の清水

此一もと―「紫の一本ゆゑに武蔵野の草は皆がらあはれとぞ見る」古今集

濱ゆふ―葉は幾重にもかさなり、花は木綿幣の如く、南海に生ずる海草

ゆつ岩村―多くの岩石の群生する所

位山―飛驒國にあり、爵位にたとふ、緑は六位の人の袍の色、

しばしだに都のかたを思はずばかはる野山や心ゆかまし

殘月越レ關

逢坂や清水にうつる有明の月を見すてて過ぐるたび人

芝

數ならぬ庭の芝生のうへにだに春と秋との色は見えけり

武藏野の紫草を得て人にやるとて

武藏野の千ぐさの秋のあはれさを此一もとにこめてけるかな

濱ゆふ

かぎりなき南の海の五百重浪幾重よすらむ浦の濱ゆふ

岩苔

川上のゆつ岩村の苔むしろむかしを今もしきしのぶかな

苔爲二石衣一

位山峯のいはほの苔ごろも緣ながらに年へしやなぞ

松にかゝれる苔を見る

异色を青にてすりたるもの
心あひの風—心を知りて吹く風
たぐへ—副へ、
筆船—ふで入れ
神の御面—古事記神代卷に、四國の島は身一つにして面四つありと記せり
つるの郡—甲斐國都留郡
長ちはの神—伊弉諾神の子、道路の神

都路は遠山ずりの旅衣かさねてをゆけ冴えかへるころ

物へまかりける人に扇やるとて

別路に身をこそわけね心あひの風を千里にたぐへてぞやる

西尾安道の古郷阿波の國へ歸るに筆船にそへてつかはす

古郷は神の御面と聞くからに鳴戸の沖もうしろ安しや

鶴のかたにぬさいるゝものをして

天とぶやつるの郡に行く人はよを長ちはの神もまもらむ

ちえ子が子の律師の都へ登りたるころちえ子がもとにて卯月ばかり都へ行きたる人を思ひてといふを題にて

君がいにし都をわれも忍び音の山ほとゝぎすつばさかさなむ

贈答會に田舍へ行く女にさうぞくやるとてといふを題にて

夢にだにおくれじものをから衣旅寢の床にうちかへしてよ

羇中懷レ都

松が浦島—松島のうちにあり
ことだにつてよ—言傳だにせよ
濱臣—清水濱臣、村田春海の門人
心行く—心なぐさむ
わきて—別して、湧きを掛く
つゝみなく—つゝがなく
小野勝義—小澤蘆庵の門人
遠山摺—遠山の

君がよも吾がよも共に常磐にてあひ見む時をまつが浦島

やよひばかり寳明が豊後國へかへるを送るとて春海の家に
つどひて人々歌よみける時

別れては野山の霞へだつとも言だにつてよ速水濱風

同じ時に後撰集の句題たつ日をよそに

鴈がねも共にかへるか君が今朝おもひ立つ日をよそに見ずして

やよひばかり南禪寺の僧亘海が京へ歸るを送る

都べは春の錦と聞くからにたち歸るをばいかでとゞめむ

七月二十八日濱臣が熱海へゆあみに行くを送る

いかばかり心行くらむ伊豆の海や浪にうつろふ月の夜頃は

いつはあれど伊豆の磯間に出づる湯のわきてをかしき旅寢ならまし

伊豆の海や沖にむかへる走湯のはや歸りませつゝみなくして

きさらぎばかり京の小野勝義が歸るに遠山摺の形すりたる
紙をおくるとて

さふる—さへぎりふさぐ

わく子—若子、年若きもの、沸くの語を掛く

いや彦の山—彌彦山、越後の名山

企玖の濱—豐前の小倉の海濱

うるはしみ—親愛すること

嵐山たかねのさくら折りかざしかへれわがせこ花散らぬまに

越の君のくすし安田征盛さ月はじめ伊香保の出湯へ行くを送るとて

現身の人を助くる人をこそ伊香保の山の神も守らめ

日をさふる繁みが奥の伊香保風涼しかるべき旅寝をぞ思ふ

上毛や伊香保のみ湯のわく子なす若がへりつゝ歸りませ君

越後のやすしが古郷へ歸るをおくる

神のますいや彦の山いや千度行き返りてもあはむ君かも

中津の君豐國へ旅立ち給ふ時によみてまゐらす

豐國の企玖の濱松吹く風も君待ちつけて千代呼ばふらし

梅の宮の神司橘經亮が京へ歸るを送る

明日よりは千里のよそにかぐはしき名をのみきかむ梅の宮人

そのかみは常世の種といふめれば下枝をだにもうるはしみせに

黑川盛隆がみちのく南部へ歸るを送る

のぼりける世—上代

曉の雲に云々—「宇治山」の僧喜撰は言葉かすかにして、はじめをはり確ならず、いはば秋の月を見るに曉の雲にあへるが如し」古今集の序

南の殿—紫宸殿

ふみで—筆

空穗—宇津保物語、源氏物語の親と稱せらるゝ古き物語

ぬるま—眠る間、莊周夢に胡蝶となる

長瀨眞幸—肥後の藩士にて本居宣長の高弟

うまのはなむけ—餞別

しのびあへまし—忍びとはすことを得べけんや

松浦なる玉島川に住むあゆののぼりける世のみやび思ほゆ

基泉法師の繪に

曉の雲にあへりし有明の月の行くへを猶しのぶかな

道風朝臣のかたに

かしこきや南の殿に七かへりふみでの跡をとめし人はも

空穗の俊蔭が孔雀にのりて川渡るところに

花園のたへなる琴のしらべには天つ少女も心ひかれつ

もろこしの莊周が眠れるかたかきたる繪に

咲く花の香をなつかしみぬるまさへ野べの胡蝶に身をやかへけむ

梅園院にて長瀨眞幸が肥後へかへるうまのはなむけすとて古今集別の歌の句をおの／＼さぐりてこひしきものをといふを

相見ねばこひしきものを濱千鳥跡にのみやはしのびあへまし

二月ばかり京へ行く人をおくる

ゆづる—讓、鶴

かはまくもうし—牛に水を飮ましめんもいとはし、許由、堯が己に天下を讓らんとすと聞きて耳の汚なりとて潁川に耳を洗ひしに、巣父はその水を汚れたりとて渡りもせざりし事、事文類聚、隱逸部に見ゆ

すなほ—簡素

竹のもとに鶴たてり

くれ竹の千よにわがよをとりそへて君にゆづるの聲ものどけし

巣父の牛牽けるかた

上つ瀬をいざとめゆかむ世の塵に濁れる水はかはまくもうし

松かさといふものかけるに

おのづから落ちし木の實のおひのぼり雲かゝる世を待つぞ久しき

竹深留レ客處といふ詩の心を

くれ竹の夕陰もよしすなほなる代のふることも語りあかさむ

もみぢ散りたる所鹿の跡見ゆ

妻ごひに立ちならしけむ小男鹿の跡見るさへもあはれなりけり

宮の書かせ給へる富士の繪に

神代より高く貴き此山をうつす御筆のすさびにぞ見る

萬葉集にあなる憶良太夫が松浦の玉島川の鮎つるをとめに言問ひけるさまかけるに

いを―魚
なにはの事―難波に、何かの事を掛く
うちつけなるものから―卒爾ながら
ほぎごと―祝詞
あれも―吾も
ものみなは―「物皆は新しきよしたゞ人はふりぬるのみぞよろしかるべき」萬葉集

蘆多かる方に釣人あるかた

絲たれていを待つほどは津の國のなにはのことも思はざらむ

竹に山鳩かけるかた

色かへぬ千ひろの竹にふしなれて同じみどりの山ばとの聲

岩ねに小松生ひたり龜あそぶ所

岩がねに根ざす小松の生先は萬代ふべき龜ぞ知るらむ

京の小澤蘆庵がもとへ千里を隔て侍れどこゝらの年月まのあたり語らひかはし侍る心地せらるゝまゝにうちつけなるものから立ちかへる春のほぎごときこえ侍る

君もあれも百世をへつゝ花鳥にあくやあかずやいざ試みむ

ものみなはとか

妙法院宮のおほせにてよめる繪の歌のうち七首墨がきの梅を

見ればかつかをるばかりにおもほえて散る恨なき梅の花かも

水莖の跡の名ー書道の名、弘法大師のことをい

とはにー永久に

ば

水莖の跡の名さへも高野山入りにし人ぞしのばれにける

富士の山かける繪に

大かたの山てふ山の君としもあふぐみ山や富士の芝山

富士の麓にあなる白絲の瀧を繪がきて歌書きてよと人のこひければ

富士のねの霞のきぬの五百機を誰か織るらむ白絲の瀧

屏風の繪に越の白山のかたかけるを

白山を越路のをちに問はでしもとはに消えせぬ雪を見るかな

住吉の繪に

千とせ經し岸の松原二葉より見そなはしけむ住の江の神

宇治河に柴流すかたかける繪に歌書きてよと雪岡大德に乞はれて

宇治河を下すま柴のしばらくも淀瀬なきをば見ずや世の人

久かたの—天の枕詞
みあらか—神又は貴人の殿舍、こゝにては皇居をさす
こゝもと—此處
はへて—引きのばして

打ちむかふ高嶺の雪をよもすがらみがきそへたる有明の月

樹抄佛閣

千年へし松の緑に大寺の瓦の苔のいろぞあらそふ

鳳闕瑞雲

久かたの天の御蔭のみあらかにたなびく雲も世に似ざりけり

同じ宮の横翠園十景の内君子樹といへる事をよめとおほせごとありて短冊を賜へりければ（此君子樹といへるは、御園のうちのいほりにて、賞君子之花事君子之徳者樹以君子云と書ける御額ありとぞ）

よき人のこゝろ高さにたぐへ見む梢の花も月の光も

鎌倉鶴が岡荘巖院の奥の猿踞峯の上に昇仙臺とてあづまや有り伊豆相模の海山目の前に見えわたる、其屋の額に歌よみて書きてよと荘巖院僧都の請ふによりてよめる

東路の遠つ海山こゝもとに八十綱はへて引きやよせけむ

高野山なる鳳存阿闍梨が其の山にをさむるとて歌こひけれ

すだく―集る

栂の尾の源―茶の事なり、茶は栂尾の明惠上人はじめて支那より傳へたり

ふし待の月―十九日の月及び二十日以後の月の稱

秋萩の花のしづくのしげければま垣にすだく蟲のこゑ〲

枯草原晨霜

入りて猶草の枯生に影のこる月かとばかり見ゆる朝霜

風松溪樵歌

なげきこる業とはいはじ松風の聲にきそひてうたふ柴人

瀹茶亭閑話

栂の尾の源きよき眞清水のあかぬまとゐは樂しかりけり

生白樓六勝

花林朧月

咲きつゞく花のにほひにつゝまれて影さへかをる春の夜の月

竹岡涼月

風わたる岡邊の竹のふし待の月さし出づるほどぞ涼しき

孤松皎月

ひとつ松あはれとてこそ幾千秋月もさやけき影とゞむらめ

雪峯寒月

よむ―數ふ

染めわたす岸のもみぢの散る頃はみ池のみ橋虹をなしけり

曉園積雪

見渡せば御園の雪に明けそめて四方の村山眞白なりけり

翠池浮鴨

水清きみ池に馴るゝあし鴨はうき事しらで世を渡るらむ

蕭寺淸鐘

なべて世の現の夢もさますらむ夕べの寺の鐘のひゞきに

竹窓夜雨

宵の雨の笹の葉つたふ雫をもよむばかりなる窓のうちかな

自適菴六勝

菜花經鳥雉

春されば咲くやすゞなの陰さらずすゞろに音をも鳴くきゞすかな

稺苗田流螢

早稻苗のほに出でぬほどの夕露やあはれ螢の命なるらむ

露萩籬吟蟲

おしなべて世を照しますみ佛の名に負ふ峯や先づかすむらむ

平林春花

立ちつゞくしげみの櫻咲きしより花ならぬ木も花の香ぞする

青田亂蛙

春深み緑にかすむ苗代の小田のをちこち蛙なくなり

西山夏雲

愛宕山雲のあはたつそなたより村雨そゝぐ夕べすゞしも

喬松啼鵑

木高なる御園の松をしをりにてかれずも問ふか山ほとゝぎす

茅檐明月

いにしへの手ぶりおほゆる茅が軒神代ながらの月や澄むらむ

曲塢秋草

御園生に小田の畦道うつしては千種の花も所えて咲く

虹橋丹楓

かれず―絶えず

いにしへの手ぶり―古の風俗

入間

梓弓末ふりおこしさつ人の入間わたりに男鹿鳴くなり

ふるき東歌にならひて武藏國の歌を

武藏なる都筑の原の八十つゞき仕へまつらむますらをの作

東なる國榮えけり橘樹の鄕のたちばないや常葉にて

妙意尼が小松川の宿りにて刀禰歸帆といふ事をよませける

夕汐も今やさすらむ百舟のほのかに歸る刀禰の川づら

ふるさと

かざし折る人もあらじをさゝなみや志賀の古鄕花さきにけり

咲く花のさかえし代より千年へてにほひ殘れる奈良の古鄕

いにしへの藤原が上里ふりて三井の眞清水汲む人もなし

妙法院一品の宮の宮所の廿四景の題賜はりて歌奉れとおほせ事有りければよみて奉りける

十二景

陀峯彩霞

さつ人—獵人

陀峯—阿彌陀が峯

名所湖

雲のゐる嶺の雫の幾代經て箱根の海はたゝへたるらむ

海路

昨日まで雲井に見えし山の端も浪路にきゆる舟の道かな

海のほとりに風吹き浪立つ

風をいたみ沖つ島山かつかくれかつあらはれて浪立てる見ゆ

荒磯に浪のよるのを見て

わたつみはあやしき物か荒磯に花と雪とをとはに見せつゝ

干潟に貝拾ふ

あやはとり舟漕ぎよせし住のえの錦貝をや我はひろはむ

嵐山

花に恨み紅葉にいとふ名はおへど猶なつかしき嵐山かな

贈答の會にしがの山越にて人にあひてといふことを

思ふ事なるとやいはむ瓜生坂こえて戀しき人にあひけり

風をいたみ—風のはげしきために

あやはとり—漢織、古漢國より渡れるはたおり也、錦の縁語

うつぼ木ーうつろの木の中

八十伴の雄ー多くの武士

ゆするー搖ひうごかす

とつ宮ー離宮

藤原ー持統文武兩朝の都し給ひし所

うつぼ木に年へし世さへおもほえて嶺のましらぞなれてとひける

我山の峯の落椎生ひ出でて陰たのむべくなりにけるかな

山畑

をちかたの畑やく煙打ちかすみ春おもほゆる深山べの里

暁關路

家に在りて聞きしに似たるとりの音に幾暁の關路越ゆらむ

道

靫かくる八十伴の雄の行きならしつかへならさむ大路なるかも

瀧のほとりに人來て見る

水上は雲ゐる山の雫にて岩が根ゆする瀧つ白波

み吉野の瀧の白絲くり返し猶しのばるゝとつ宮どころ

音にのみ聞きわたりにし山姫のさらせる布をきて見つるかな

井

藤原のみ井の眞清水尋ねても昔を汲みて知るよしもがな

ゆはた—絞り染
笠縫の島—攝津の海

おとなひ—音たつること

海邊烟幽

葦荻のしげみに立てる烟にぞ蜑の苫屋の數は見えける

夕陽映レ島

夕づく日浪ににほひて紅のゆはたに見ゆる笠縫の島

閑曉

鳥が音はふもとの雲にひゞきつゝ軒端に落つる有明の月

山伏の曉おきの聲さへも雲のよそなる谷陰のいほ

幽夕

大路行く人のおとなひ絶えはてて軒端にかへる家鳩のこゑ

山

足柄の神の御坂を越えてしも猶富士のねは雲井なりけり

山家

山里のおのづからなる花に馴れ紅葉にあきて吾世へなまし

山家積レ年

うけらが花　巻六

雑歌

嶺上雲深

立ちのぼる雲より奥に音するは箱根の海の岸の白浪

朝雲出二馬鞍一

旅人の朝行く駒のひづめより雲たちのぼる足柄の山

田家煙

筑波嶺の茂き恵はしるきかなすそわの田ゐに立つ煙にも

民戸烟

おしてるや難波高津の昔より絶ゆる世もなき民のけぶりか

山家烟

折々は柴といふものの煙だにあはれとは見よ都かた人

しるき―著明なる
すそわ―麓
おしてるや―難波の枕詞
難波高津の昔―仁徳天皇の時代

だに人に知らせむといふ歌のかへしの心を

山の井のやまむよりはと聞くからに淺き心を汲みてこそ知れ

年へて逢へる

見し世にはあらずなれども語らへば心ぞもとの心なりける

いたづらに絶えやはてなむ昔より思ひよわらぬ心ならずば

後撰集の木の葉ちる山の下水埋れてながれもやらぬ物をこそ思へといふ歌の返しの心を

おぼろげの水のながれやいさゝめに散る木の葉にもよどむなるらむ

同じくあだに見え侍りける男に、こりずまの浦の白浪立出でて見るほどもなく歸るばかりぞとある歌の返しのこゝろを

須磨の浦の松の嵐のはやければよどみもやらでかへる波かな

同じく今はてふ心つくばの山見れば梢よりこそ色かはりけれといふ歌の返しの心を

筑波嶺のしづくてふ名は涙にてかはるは袖の色にざりける

後拾遺集のしのびつゝやみなむよりはおもふ事ありけると

木の葉ちる—後拾遺集戀一にあり、後撰集は原本の語
いさゝめに—僅ばかり
こりずまの—後撰集戀四「見る」は「よる」、「ぞ」は「か」とあり

みるめ—海松、見る目

先代や—結び松の名所なるより結びしの序とす

かくれづま—こもりづまと同じ、人に知らせぬ妻

かどはむ—誘ふべき

つて—方便

逢はずしてけふ三日月の眉引くを妹が面わに見むよしもがな

近くてあはず

さゝなみや近つあふみは名のみにてみるめも刈らぬ浦の蜑人

人を待たず

岩代や昔結びし契さへ忘れぬる身はまつとしもなし

人づて

あふみの海みるめなければあつらへて打出の濱のうち出でなまし

思ひいづ

忘られず思ふが中に思ひ出づる心や何のこゝろなるらむ

人もかく思ひはいづや思ひ出でてながむる空に面影ぞたつ

かくれづま

逢はぬ間は木の葉にうづむ谷水のしのびにむせぶこもりづまかも

になきおもひ

かばかりはかどはむ風のつてもがな及ばぬ峯の花の白雲

逢ふと云々—一方が逢ふと夢に見る夜は他の一方も亦逢ふと見るならん

ねぬなはの—くるの枕詞

引佐細江—遠江に在り、「逢ふことはいなさ細江のみをつくし深きしるしのなき身なりけり」千載集

難波なる蘆の—一よの序

居待月—八月十八日の月

いはねどもこふとはしるや問はねども思はれぬとはしるき物ゆゑ

夢のうちもかたみに思ひたゆまねば逢ふと見る夜や逢ふと見るらむ

問はるゝも問ふもあやなきすさびかなかたみに思ふ深さ淺さを

いはでおもふ

言にいでていはねの松の二葉より下に戀ひつゝ神さびにけり

ねぬなはのくるしくも有るか埼玉の小崎の池のいひも出でねば

いはじたゞ引佐細江のいなといはゞ身をつくしてしかひやなからむ

いはずして人に心をつくし見むおのづからにもそれと知るまで

ひと夜へだてたる

馴れぬれば一夜ばかりのよがれにも明け行くほどを待ちわびにけり

ふた夜へだてたる

難波なる蘆の一よは堪へにしを二夜ながらや逢はじとはする

望にあひて結びしひもを居待月待ちえてとかむ夜半ぞ此夜半

三夜へだてたる

ゆふけ―夕占、つじうらの類
恨みじ―占見じを掛く
あさらかに―あさく

しづく―水中に透きて見ゆ
やさし―恥かし
いはばしる―瀧の枕詞
たぎつ―瀧水の如く心のいちだつ
せく―さへぎりとむ
ひぢぬる―濡る

うらむ

水草ゐる板井の清水ふるされて涙のみこそさしぐまれけれ

うらみず

つれもなき人の心をかにかくに恨みしほどはたのみ有りしを

やちまたにとふやゆふけのしるしなみ恨みじとこそ思ひなりぬれ

ないがしろ

紅のあらそめ衣あさらかに思ひそめつゝなど著なれけむ

しらぬ人

わたつ海の千ひろの底は知らねども見まくぞほしきしづく白玉

いひはじむ

やさしとていはでやみなばいはばしるたぎつ心をいかゞせくべき

あした

かへりてぞ袖はひぢぬる別にはしのぶあまりにもらさざりしを

あひおもふ

いそのかみ―ふるの枕詞

たのめつゝ―たのみに思はしめて置きながら

玉ゆら―あるか無きかの程に、ほんの一寸

雨降るとてとはぬ人の降らぬにも見えねばといふを

いそのかみふるとて人のとはざりし恨をそふる月の夜半かな

今宵と契りて人の來ざりければといふを

たのめつゝ來ぬ夜をいかでたへぬべき待つにならへる身ならざりせば

五月雨ふるころ人を戀ふ

五月雨に水こす池のなびき藻の人に知られでよりも逢はなむ

しはすばかり人のもとへ

み雪さへ年さへ深く成りぬるをいつまであさき人の心ぞ

あひ見て後ぞ

玉ゆらにあひ見て後ぞ小篠原朝おく露の消えかへりぬる

僞りてありかを敎ふる戀

ほとゝぎすたづねぞわぶる山彦のあらぬみ谷にこたへせしより

かたこひ

あはれとも誰かは聞かむ吾戀は片山きゞす音にたてつとも

なげきこる—歎くことを木を樵るに掛けていふ

はやながら—以前のまゝに
わりなさ—道理もなきことよ
うらみて—恨みての意、縁語浦見て

文やりけるにつれなかりければといふを

山彦のこたへぬ山に分け入りてなげきこるとも人知るらめや

日に一度は文おこせむといひける人のとはざりければといふを題にて

いづこにかねぐらしめけむ霜の上に今日のみ鳥の跡をしも見ず

文ちらすと聞きて文かへさむと女のいひけるにと云ふを

白雲のかさなる山の岩根ふみかへす〲もなげきこれとか

歌によりてまさる戀

人心花になりけることの葉もかつ見るからに思こそ添へ

はじめは思はで後に思ふ戀のこゝろを

今更につらしと人の思ひけむ昔にかへるこゝろともがな

つらかりしおのが心のはやながらあらましかばと思ふわりなさ

門さして入れざる戀といふ事を

清見潟浪の關守ゆるさねばうらみてのみや立ちかへらまし

最上河云々―「最上川のぼれば下る稲舟のいなにはあらず此月ばかり」古今集東歌

蘆根はふ―うきの枕詞

たどひとめ梢のもみぢ見るばかり霧吹き分けよ峯の秋風

思ひあまりしのぶに堪へぬ一ことを百言にしもなして傳へよ

今は待たじと思ふにとはれたるといふを

今はとて槇の板戸をさしながら心よわさや人に見えけむ

懸想し侍りける人の家の前をわたるとていひ入れけるといふを題にて

物いはぬ花はしばしととゞめねば鳴きつゝ鴈の過ぐるなりけり

懸想し侍りける女の更に返事し侍らざりければといふを

最上河流れてを見む稲舟のいなとも人のいはぬたのみに

女のもとより文はなくて忘草の花おこせたるにといふを

今日よりは吾下紐につけつゝも忘れやするといざこゝろみむ

文かよはしていとひさしく成りぬれどつれなき人にといふを

蘆根はふうきにもこりずいくそ度鴫の羽がきかきつくしけむ

栲縄の―くるにかゝる枕詞

蜑の子―新古今集「白波のよする渚にみをつくすあまの子なればやども定めず」

しかま―飾磨、播磨の名所

いなみじ―否見じに、播磨の名所なる印南を掛く

あり所しらせぬ女にといふを

栲縄のくるしかれとやあさりする蜑の子とのみいらへしつらむ

簾ごしに物がたりし侍るとてといふを

かりそめにかけし伊豫簾を一重山隔てゝすめる思なりけり

月のもとに女琴ひく男來りて懸想すといふ事を其女に代りて

一方にやどり定めてさす月の影ならばこそ引きもとゞめよ

しのびたる男雨の降る夜まで來てぬれたるよし歸りていひおこせばといふを題にて

心しる雨にも有るか人とはばぬれ衣きつと君こたへてよ

思ふ人を今は見じなどいひてといふを題にて

うつろふを見てこそ鹿の音にはなけ霧立ちこめよ萩が花妻

うき戀をしかまの市に立たむよりいなみじとまでおもひ成りにき

人づてにいひやるといふ事を

歌萬葉集にあり、結び松とて名高し
すさめぬ—めではやさざる
ふすべて—すねて
まつら河—松浦河、肥前にあり
枕は言に—言ひならしたる言葉は自然に口に
ふみ—文と蹈みとを掛く
昔ながら—長柄の橋柱より、昔のまゝといふ語を掛く

いはずして年へぬる身を哀とはあらざらむ世に思ひ出でてよ
　女にいきて物いはむといひければきても何事をかといひけるにといふを題にて
老いぬとてすさめぬこゝろの鶯も音にし立てなば聞かずやはある
よしさらばいらへせずとも荻の葉におとなふ風をあはれとは聞け
　久しく來ずとてふすべて出でぬ人にといふを題にて
待つらむと來しかひぞなきまつら河七瀨のよどもあれば有る世に
　吾を知りがほにないひそと有りければといふを題にて
知るといふ枕は言に出でぬとも吾やはいはむ人の名だてに
　我を知りがほに人にいふなといひ侍りける女にといふを題にて
月日へばおのづからにも立たむ名をかごとになして絶えむとかする
　忘れぬなめりと見えし人にといふを
橋柱ふみかよはねば今はたゞ昔ながらのこゝろとは見ず

寄レ衣戀

あきつばの名さへゆゝしもをとめごがすゞしのきぬのうすきのみかは

逢ふ事を遠山摺の狩衣かくめづらしき妹にも有るかな

つれなさを猶まつはしのうへの衣深くも人を思ひ初めつゝ

寄レ蓑戀

春雨の晴れにし後はかけてだに思はれぬ身の果ぞ悲しき

寄レ鼎變戀

かゝりせば鼎の足のみづはさす世までと人に契りおかじを

寄レ鐘戀

鐘つきてとぢめむとしも契らぬをなど憂き人のいらへだにせぬ

物思ふこころひとりごとにといふを題にて

物思ふもおのが心の外ならずいざ思はじと思ひなりなむ

かくとだに人にはえこそ岩代の野中の松のむすほほれつゝ

いかでと思へども色に出でがたき女にといふを題にて

たるもの、頸などにかけて飾とす
あきつば―厭ひあくの語を兼ぬ
すゞし―薄き絹布
まつはしのうへの衣―和名抄、「纏掖、和名、萬都波之乃宇倍乃岐奴」
身の―蓑を掛く
みづはさす―三つに掛く
岩代の野中の松―紀伊の國にあり、孝德天皇の皇子有馬皇子の

あふくま河―阿武隈河に逢ふを掛く
やまとことひ―大和の牡牛
くび木―牛のくびにかくる車の横木
人をみ山―見を掛く
ましら―增すに猿を掛く
玉のみすまる―玉の緒にて貫き

寄レ椿戀

逢ふ事はかた山椿せめて猶葉がへぬ色をたのみわたらむ

寄二埋木一戀

ながれてはあふくま河を命にていく年浪に埋れきぬらむ

寄レ獸戀

思ふ事やまとことひのくび木には堪へぬばかりにつもるとをしれ

寄レ猪戀

奥山の岩ほの中に住みぬとも妹と臥猪の名をやたのまむ

寄レ猿稀戀

たまさかに人をみ山のかひなさに戀をましらの音をのみぞ啼く

寄レ蟲戀

秋の夜は尾花がもとの機織女あやに戀しき音をこそは泣け

寄レ玉戀

古へにありてふ玉のみすまるの見ずば心にかゝらましやは

かりそめ―刈初に假初
こひぢ―溷泥即ちどろの意に戀路を掛く
かひ―穎即ち芽に甲斐を掛く
つれもなき―無情なる
つくま江―託馬江、近江にあり
荒海のかた―荒海の圖、清涼殿の廂にある布障子の繪
かた―圖、片
近き衛―禁中に宿衛する近衛

寄レ田逢戀

秋の田のかりそめぶしも日をかさねこひぢにたちしかひとこそ見れ

寄レ江戀

つれもなき人に心をつくま江や刈らぬ三稜草に袖ぞぬれける

寄レ河戀

いかなれば河と見ながらこがれつゝ渡らぬ袖に浪はかくらむ

寄二禁中一戀

いつまでか人の心は荒海のかた戀のみに世をわたるらむ
もゝしきや近き衛の名のりにもかひなく更くる夜を歎きつゝ

寄レ花逢戀

袖ふるゝ一夜の花のうつり香を吾身散りなむ後も忘れじ
折りえても猶こそあかね櫻花雲と見しよの憂さは思はで

寄レ草戀

戀ふれども引く人ぞなき谷陰にねはふ眞葛や吾身なるらむ

さゝでや寢らむ—閉さずして寢ぬるならん

玉の緒—生命

月におほせ—月の罪にして

すみわたり—澄みつゞけしに關係を續け來れる意を掛く

槇の戸もさゝでや寢らむ月の夜とかけし契を忘れざりせば

寄レ月逢戀

玉の緒のながらへてこそ月影も心もはるゝ夜半も有りけれ

寄レ月別戀

惜めどもあかで隱るゝ月かげを人の上にはなどうつしけむ

入る月に人の別れをたぐへなばかならず明日の夜をしたのまむ

おき別れ行くもとまるもあはれとて月や袂に影をわくらむ

寄レ月恨戀

今はたゞ忘られはてし身を秋の袖に夜がれぬ月も恨めし

憂き人のつらさに曇るをり〳〵を月におほせて恨みつるかな

寄レ風戀

あはれとも思はぬ風の心ゆゑ終に消えなむ露の玉の緒

寄レ水戀

山のべのみ井の眞淸水ふりぬれどすみわたり來し妹は忘れず

新治の鳥羽のあふみ—筑波山下にあり、とはにの序詞
かれぬ—離れたり
しめゆふ—注連を結びて他にゆるさぬ
おほしやはせし—生ひ立たしめ

新治の鳥羽のあふみのとはにのみ戀しき人にあひ見てしがな

非レ心離戀

逢はで世に在りはてめやも心さへかれぬと人の思はずもがな

艶女過二他人一戀

しめゆひし庭の橘吾ならぬ袖にかをれとおほしやはせし

泣レ面戀

人目多み言問ひかはすよしぞなき物見車の立ちならべども

戀雲

箱根山峯にあはだつ浮雲のうきたる戀ぞよるべ知られぬ

戀のこゝろを

僞と思ひはてなばまことをもまことと知らで過ぎぬべらなり

寄レ月待戀

待つからにかならず月はとふものを頼みがたきは人の心か

寄レ月契戀

瀧つ瀬にちるや紅葉の唐錦あらはれてこそ戀まさりけれ

冬戀

かつ亂れかつ砕けつゝ物思ふ身のたぐひなる玉霰かな
わび人の袖の白露秋くれて霜となりても消えかへりつゝ
氷りゐしいつぬき河のいつとかもとけてぬる夜を待ちわたるべき

冬契といふ事を

東人の荷前の荷の緒むかしより結びしまゝのちぎりともがな

雪中戀レ人

待ちわびて袖うち拂ふ面影もゆき見まほしき妹が門かな

雪の日人を戀ふる

かくとしも人は知らじな白雪にかよふ心のあとし見えねば

遠戀

いとせめて忘れずとのみ告げやらむ便からすな心あひの風

名所戀

いつぬき河―伊都貫川、美濃にあり、いつの緣語
ぬる―寢る

ゆき―雪に往きを掛く

心あひの風―心を知りて我が思ふ方に吹く風

室の海―播磨

駒も云々―「大荒木の森の下草老いぬれば駒もすさめず刈る人もなし」古今集

春されば―春となれば

こぞめ―濃染、紅梅の色こきなり

ともし―照射、鹿が照射にて命を失ふ如く、我もしか、（その機に）きらはれぬ前に死にたしと也

埴生の小屋―貧賤なる家

うちはへ―引きのばし

室の海浪にうきねの枕にも心のとまるふしはありけり

老後初戀

今はたゞ駒もすさめず成りぬれど猶初草の萌えざらめやは

春戀

春されば身をうぐひすの音になれてこぞめの梅の色に出でぬる

初草のしたに萌えつゝ戀ふる間に春の霞と名は立ちにけり

夏戀

憂き人の秋にあはずて我もしかともしに消ゆる命ともがな

大かたの思ひなりせば蚊遣火のいぶせき門に車よせめや

相見てもあやめの枕根ながさにならはぬ夏の夜をかこつかな

遠方の埴生の小屋にたく蚊火のかひなくてのみこがるとを知れ

七夕戀

今宵しも手向くる絲のうちはへて長き契をむすびてしがな

秋顯戀

二もとの云々―「はつせ川布留川のべに二もとある杉年を經てまたも相見む二もとある杉」古今集
布留川―大和にあり
すぎ―杉、過ぎ
わくらはに―たまさかに
水驛―水路の湊、水に見つを掛く

我袖にやどりなれぬる月のみぞ絶えぬ思ひを空に知るらむ

逢はぬ夜は思ふあたりの袖の露とふらむ月の影もむつまじ

經レ月戀

逢はで夜にふるの早稲田の若苗を刈るまでとやはかけて契りし

經レ年戀

二もとのすぎし契をたのみつゝながれても世に布留川の水

をり〳〵は忘れむとのみ思ひつゝ忘れずながら年ぞ經にける

舊戀

人とはばふる川のべに年經つるすぎにしことといひてやみなむ

故郷戀

住みすてゝかへりみもせぬ人をなどしのぶの草よひとり露けき

羇中戀

わくらはに戀しき人を水驛かたみに今朝はさしぐまれつゝ

旅泊戀

毎夜他行戀

つれなさもさすがに思ひ捨てやらでよその夜がれを待ちわたりつゝ

難レ忘戀

わすれむとしひて思はじ忘られぬ思ひのみこそかたみなりけれ

怨戀

思へども思はぬ人はにくからで思はれぬ身の恨めしきかな

欲レ絶戀

ともすればわりなく人を恨むるや絶えはてぬべきかごとならまし

琴の緒の絶えなむとてか松風のおとづれさへも遠ざかるらむ

絶戀

今更に思へばあやしかりそめに絶えしやいつのすさびなりけむ

互恨絶戀

難波なるうらみうらまれたく縄の絶えむとまでは思ひかけきや

月前戀

わりなく―理由もなく

うらみ―浦と恨みとを掛く　たく縄の―絶えの枕詞

死ぬばかり思ひしまめや立たむ名をいとひし程の心なりせば

朝厭戀

いとはるゝ身を知れとしも朝ごとの鏡の神や影に見すらむ

顯變戀

谷陰の一木のさくら何しかも風にしられてうつろひぬらむ

俄變戀

末の松待つらむとのみたのみつゝよがれせしまに浪越えぬとか

臨レ期變レ約戀

今宵しもあはむといひていなみ妻辛荷のさきのからき悔しつ

かならずといひしに違ふつらさよりおぼつかなさはたのみありけり

風聲催レ戀

爪琴の下樋にかよふ風の音を聞く我さへに音に立てつべし

隔戀

隔てある人の心のうき雲や絶えぬなみだの雨となるなむ

思ひしまめや―思ひ込むことあらんや

末の松―末の松山陸前宮城郡の海岸にあり、末の松山に浪の越さざるを男女の契のかはらぬにたとふ

よがれ―夜のかよひのたえたるをいふ

下樋―箏の琴の腹のうつろなる所をいふ

あらまし—豫定

かこつふし—かこち言ふかど

あふさきるさ—こちらがよければあちらがわるしといふ意

みがくるゝ—澪標が水中に隱れて見えずなる、死ぬ意によそふ

音なしに落つる涙の瀧つせもながれて人に汲みや知られむ

顯戀

末かけてしのびはてむのあらましも馴るゝにつけて弱りもやせし

馴戀

つらかりし昔を更にいひ出でて馴れてもかこつふしはありけり

依レ忍增戀

年經とも忍びはてむの心にはあふさきるさの袖の色かな

憑戀

僞のなき世とおもひ定めつゝひとつ心にわれはたのまむ

逐レ日增戀

日にそひておもひ入江のみをつくしみがくるゝまで成りやはてなむ

冬來增戀

神無月しぐれに染みし袖を見よ昨日の露の秋は物かは

切戀

中におつるとよめり」
契りやはせし―契りはせずとなり
はるけむ―晴らさん

稀にあひてあかず別れしあしたより露をあはれと思ひ知りぬる
逢ひ見ても殘れることの多かりき物いひかはせ袖のうつり香
とゞめおきし心もおのがこゝろにてなげくや何の心なるらむ

名立戀

憂しとてもいかゞはすべき共に名の立たば絶えむと契りやはせし
おのが名は霞と共に立ちみちて思ひはるけむよしのなきかな

すまずなりにける女の人に名立ちければつかはしけるといふ心を

昔わが入りにし山と思ふよりうきたる雲もよそにだに見ず

無き名立ちける人にといふこゝろを

白雪を花ぞと人のいふめればいざこゝろみに手折りてぞ見む

歎二無名一戀

立たむ名は千名の五百名もなげかめや逢ふてふ事のまさしかりせば

忍レ涙戀

たゞぢ—徑路

ことならば—成る事ならば

かたみに—互に

妹と背—妹背山、紀伊國也、契沖の說に、「背の山は北に妹山は南にありて其中を紀の川といふ川流るゝ也、其二つの山のあひ口を流るゝほどをいもせ川といへり、吉野川の末なれば流れてはいもせの山の

夢逢戀

逢ふと見し夢のたゞぢをとありけむかく有りけむと思ふはかなさ

夢中逢戀

逢ふと見て夢路にかわく袖の露さめてぞ更に置きまさりける

ことならばかたみにかへむよしもがな逢ふてふ夢と逢はぬうつゝと

羇中逢戀

あぶくまの名を頼みこしかひ有りて心の奥も今宵こそ見れ

誓戀

妹と背の中に流るゝ河水の絶えむ世にこそ君とかれなめ

欲レ別戀

別路の野路の小篠も分けなくにまだきに濡るゝ袖ぞあやしき

人のもとより曉に歸りてといふを題にて

有明の月に問はばや殘れるもかばかり袖は露けかるやと

後朝戀

さゝなみの志賀の大わたよどめりし恨もなしや今宵あふみは
うつゝとは思はざりけり夢にのみあひ見しほどのこゝろならひに

契戀

昨日まであふにかへつる命もて行末とほくなどちぎるらむ
飛鳥河あすの淵瀬もしらなくにながれての世を猶たのむかな
山松の千とせまでこそかたからめ葉がへぬ色を猶やちぎらむ

契逢戀

ちぎりしにたがはぬ夜半はなか〳〵にかたみにいはむ言の葉もなし

互契逢戀

待つらむと思ふもしるき空だきをかたみにしめし夜を忘れめや

契二來世一戀

目に見えぬ來む世をかくる愚さも知られぬばかり思ひなりにき

稀逢戀

隈もなく月澄む夜半の星なれや稀なる中に思ひ消ゆらむ

あふみ―近江に逢ふ身を掛く
こゝろならひ―心のならはし
ながれての世―末の世
かたみに―互に
しめし―しみこませし

白雪の花とあざむくならはしに花をも雪と思ひけつらむ

疑二眞僞一戀

花は散り雲は消えなむ後までもそれかあらぬと猶や辿らむ

或ときはあらじと思ひさのみはとたどるや遂のほだしなるらむ

來不レ留戀

人ごころうきたる雲や吾山にかゝると見るもとまらざるらむ

違レ約戀

たのめずてあふよあらなむ契りしにたがふを常のならひなりせば

待戀

かひなさに思ひやまずて山寺の幾夜の鐘をかぞへ來ぬらむ

待空明戀

しのゝめの明けずばいつを限りとかたのめしまゝに待ちわたるべき

逢戀

今宵しもあふくま河の埋れ木の朽ちせぬかひはありとこそ知れ

思ひけつ—思ひ消す、けなす

ほだし—心の羈絆

たのめずて—頼みに思はしめずして

しのゝめ—東雲、東のほの白くなれるを云ふ

あふくま河—阿武隈河、陸奥にあり、逢ふを掛く

柏の社－山城にあり
木綿だすき－かけての枕詞
かけて－決して
息の緒－いのち
くたし－朽ちしめ
水馴棹－見馴の序
あらまし－豫期

今はたゞ思はじと思ふ心にもなりねと神に祈るばかりぞ

祈經レ年戀

葉がへせぬ柏の社に年へてもつれなかれとは祈りやはせし

祈不レ逢戀

稀にだに逢ふ夜なきかな木綿だすきかけても神にさやは祈りし

馴不レ逢戀

逢ひがたきしらべよいかに爪琴の馴るゝばかりを息の緒にして

遇不レ逢戀

[illegible]

露けさは同じあしたのきぬ〴〵を我のみかくぞくたしはてぬる

船中馴戀

河舟のうきたる中も水馴棹見馴れて後やこがるべらなる

疑ふ戀

[illegible]

思ふてふ人の心のあらましを見はてむ世まで在りへてしがな

互疑戀

白地―かりそめなる

あからさま云々―かりそめに一寸逢ふは逢ふうちならんや、赤らに掛く

かけ路―棧道

ふみみる―文見るに踏み見るを掛く

跡だに見えば―筆跡即ち手紙だけにても見るをば得

夕ひばり聲のみ聞きて戀ふるともうはの空にや思ひなすらむ

白地戀

染めつくす峯の紅葉をいづる日のあからさまにし逢ふは逢ふかは

通レ書戀

なか〳〵に淺しと人に見ゆやとて思ふ心はつくさざりけり

忍通レ書戀

陸奥のしのぶの浦の濱千鳥あとなとゞめそ寄する白浪

見レ書戀

我中は木曾のかけ路にあらなくにふみみるさへもかしこかりけり

返レ書戀

とにかくに人の心のあら小田はかへす文にも思ひ知られつ

別無レ書戀

沖つ浪立ちわかれても濱千鳥跡だに見えば何かなげかむ

新戀

初しほ―最初の染色
こゞしき―險阻なる
とことはに―永久に
心くらべ―根くらべ
はたすゝき―旗の如き薄、穗の序
ほの見し―ちらと見し、穗に掛く

うけらが花　卷五

戀歌

初戀

露しぐれ染むるもみぢの初しほやこがれはつべき初めなるらむ

忍戀

岩がねのこゞしき山をふみ初めて苦しかるべきわが行くへかな

互忍戀

とことはに絶えじとぞ思ふ水無瀬河した行く水の人しれずして

見戀

もらさじの心くらべも月日經ばいづれか先に色に出でまし

聲をきく戀

秋風の立つや野末のはたすゝきほの見しよりもみだれ初めてき

羽ぶき―羽ばたきし

ほら―洞窟

ましら―猿

さむしろ―袂や寒きといふより狭筵をいふ

霜寒き萩の古枝にうち羽ぶき春待ちがほの野路の鶯

冬獸

雪に訪ふ庵まぢかくなりぬとは門守る犬の跡にこそ知れ

大比叡や檜原の吹雪寒ければ横川のほらにましら鳴くなり

冬玉

主しらぬかざしの玉と思ふまで散るや霰もあはれとぞ見る

冬筵

橋姫の袂やいとゞさむしろに吹きかよふらむ宇治の河風

冬眺望

隅田河岸のむらあし枯れふして甲斐が嶺遠き雪を見るかな

人のもとにて冬祝

武藏の海沖つ洲先に住む千鳥群れつゝ千代をよぶや誰がため

ひつぢ—刈株より生じたる稲

にひはり—新墾なれど、今は日暮里といふ、上野の北方

うらやすげ—心安らかなる様

伊香保—上野國

おしなべてひつぢ生ひつゝ冬淺き田の面は今もみどりなりけり

松子のもとにて冬の田を

しづけさに心をよせば小山田の秋くれてこそとふべかりけれ

この庵はにひはりの田の面にむかひたればなり

田づらにひつぢ生ひたり

ほに出ねば刈る人をなみ中々に小田のひつぢぞうらやすげなる

屏風の繪に冬武藏野に旅人立てり

いづこにかゆかりもとめむ紫の根はふ大野も枯れわたるころ

刀禰川　冬

伊香保風いかに吹けばか刀禰川の瀬にすむ鳥の聲の寒けき

冬木

夜もすがら嵐吹きしく椎がもと落つる木の實の音ぞひまなき

花の春もみぢの秋も白樫の知らで幾冬みどりなるらむ

冬禽

弓、手に握りもつ弓
方たがへ—天一神の下る方角をよくる爲に他に行くこと
玉しかまし—玉を道に敷かんとなり、歡迎のこころ
あかぼし—明星
はゆまぢ—驛路
かれし—離れ別れし、枯れに掛く

ぬひ子が家の贈答會に節分の夜方たがへに來たる人に

めぐりあふ今宵一夜をかぎりにて明日やわが身もふるされぬべき

家にて歌よみけるに家々除夜を

來る春をほどにつけつゝ待つ夜かな玉しかましと思ふばかりに

冬星

東屋の軒の垂氷にうつろへる光も寒きあかぼしの影

冬夜山

箱根山夜半に越え行くはゆまぢの鈴の音さゆる木枯の風

東人の荷前やいそぐ夜をこめて駒引きすぐる足柄の山

冬野やく所

小男鹿の花づまかれし思ひもや野路の烟に立ちそはるらむ

冬海

見渡せば霰降りけりわたつみのかざしにさせる玉も散るがに

冬田

きさらぎ—二月

なやらふ—儺遣の意にて、惡鬼を追ひ出す式なり

たかむらに云々—藪の中にて飛ぶことを習ふ

追儺—今節分にする鬼やらひなり

たつか弓—手束

れど人まねに歌よまずやはとてかくなむ

花もみぢあくまでめでし年月をたゞに過ぎぬと思ひけるかな

きさらぎに閏ありける年の暮に

としとのみ思ひけるかな花ちれる河瀬に春のよどもありしを

歳暮祝

うき事も知らでふる世に何をかもなやらふ聲の四方にきこゆる

山家冬深

吾門の眞榊折りてくだるなり今ぞ都に里神樂する

春漸近

たかむらにつばさならはす鶯も春待ちがほに見ゆるころかな

ぬひ子が贈答の會に五節の夜人のもとへ

をとめ子がけふ髪あげのからを櫛さして誰をか思ふとは知る

追儺

宮人のけふ引く桃のたつか弓花さく春にいるにぞありける

追ひしく—追ひ及ぶ

世の中のいそぎ—世俗の年末の多忙

こゝろの年—多くの年
思ひたらず—思ひてあらず

年のはて雪

白雪は八尺積むとも行く年の跡だに見えば追ひしかましを

年の暮に人のもとへ

行く年を同じ心にをしまなむむかしの花の春ならずとも

年の暮に女のもとへ衣調じてやるとて

花鳥の春にあひ見む嬉しさをつゝむばかりにたてる衣なり

しづけき所にうつろひし年の暮に

世の中のいそぎにもるゝ人とはば柴の戸あけむ年のとぢめに

つかへをしぞきしよりかく世の外にありふるもいくらばかりの年月にかおくりむかふるわざもなければたゞ

かへるとも行くとも年を思はねば心はとはに老いせざるらむ

身をおのがものとなしつるよりかゝる大御代にあひてしづかにこゝらの年をふるたのしさをおもへば暮れ行くきはみとてさらによはひのつもるをわびしとしも思ひたらず、さ

舟岡ー山城にある山、春の子の日の遊する所

これるーきりとれる

家々歳暮

家ごとに春待つ色の梅やなぎきぬもてはこぶ時は來にけり

閑中歳暮

とく過ぐる大かたの世の年月にいはほの中はならはずもがな

こと更におくりむかへぬ宿にしも行きかふものは年にざりける

歳暮松

舟岡やふりし子日の老木さへみ雪の下に春を待つらむ

豊年のしるしの雪をつみそへて遠山松をはこぶ頃かな

年くれて竹ある家

くれ竹のしげみが奥に鶯と共に春待つやどりなりけり

年の暮に山より爪木こりて出でたる所

雪ふかきみ山にこほる爪木まで明日や都に春を知るらむ

年の暮に友をとふ

月にとはれ雪にとひつゝ年くれぬ明日は子日にいざといはまし

あけたゝば―夜が明けはなれば、戸ぼその縁語

ゆづるは―讓る、交讓木

北山の室の戸ぼそをあけたゝば霞やいとゞよそにへだてむ

年内早梅

世の外の宿にも梅の花のみぞよそのいそぎにさそはれにける

歳暮近

年月もいつしか春にゆづるはを折りもてはこぶ遠の里人

年のくれに

年浪のよどまねばこそ立ちかへる春をもあまた待ちなれにけれ

春を待ち年を惜むもひとゝせの心ずさみのとぢめなりけり

來るを待ち行くを惜みて昔より思ひさだめぬ年の暮かな

海邊歳暮

年浪は立ちかへるとも來む春をはやうち寄せよ沖つ汐風

ま帆かけて風にまかする浦舟のたゞ過ぎにのみ過ぐる月日か

都歳暮

海山の千々の貢もおのづからつどふ都の年の暮かな

―春に至らざるにはやくも霞の立てる

みそなはすがに―御覽ぜらるゝ爲に

手草―舞人の手に持つもの

せがゐ―清和井、山城國大原の里にあり

豐のあそび―朝廷の御宴會

佛名―十二月十九日より三日間朝廷にて三世の佛名を唱ふる式なり

かづきつれ―法師の纏頭物を頭にいたゞきて引き連れ退出するなり

柏梨―攝津國の地名、從佛名に此の地より酒を奉るなり

山家如レ春

冬ごもり焚くや眞柴の夕烟かすむ軒端に梅も咲きつゝ

神樂

榊葉にうち散る雪も皇神のみそなはすがに御火白くたけ

奥山の榊が枝を雪ながら手草にとりて神あそびせり

汲みてしも神ぞ知るらむ大原やせがゐの水の濟き心を

禁中神樂

宮人の豐のあそびは更けにけりとるや手草に霜のおくまで

佛名

一年の罪もこよひにつくし綿かづきつれつゝかへる法の師

降り積る雪を分けこし山伏の春おほゆらむ柏梨の酒

佛名おこなふ家

木々も皆綿かづけけりみほとけの名を唱ふなる庭の白雪

佛名のあした別るゝ空に

とがり—鳥狩
宇陀野—山城
とだち—鳥の飛び立つこと
はだれ降る—まだらに降る
逢ひもかたの—逢ひ難しに交野を掛く
かり衣—狩の衣なり、立つに掛かる
小野山—山城
まだきかすめる

衣手にきのふは摺りし小萩原朝立ちならしとがりするかな

はなちやる手なれの鷹にさき立ちて心空なるますらをの友

雪のあした鷹狩したる所

宇陀の野やとだちもわかずはだれ降るあしたの雪にきそふ狩人

女の家に狩する男来たれり

玉かづらかゝらざりせばまれにだに逢ひもかたののみののかり人

連日鷹狩

かり衣冬立ちしより宇陀の野の時雨に雪にぬれぬ日もなし

炭竈雪

炭竈や雪の下折れ中々に烟となりてあらはれにけり

冬ごもりしたる家

人訪はばやどの埋火かきおこし思ひおこして昔かたらむ

爐火似レ春

小野山やまだきかすめる炭竈のなごりのどけき閨の埋火

しはす—十二月

わぶ—いとはしく思ふ

交野—河内國

はやくより頭にふれる白雪を梢にのみと思ひけるかな

しはす十六日雪ふりける日くめ子が故郷を思ひ出でて、なにはがたあしのまろやのはいならむやへに降りつむ今日のしら雪とよみしといひおこせければ

難波潟蘆屋の雪も君見ずてふるかひなしと世をやわぶらむ

雪中待レ春

厭くよなき人の心の花と散る雪にも花の春をまちつゝ

晴雪落二長松一

梢よりたるひのしづく落ちそめてやがてこぼるゝ松の雪かな

野行幸

雪ふればあけもみどりもおしなべて村濃に見ゆるみ野の狩人

大野にみかりするかた、

大空に紅葉ふきまく鷹すゑて狩るや交野のみ野の朝風

鷹狩

年の賀に用ふ
よと共に―夜一夜語りあかさんとの意、節に掛く

爪木―たきぎ

をち―向ふ

ぬひ子が家の贈答會に竹に雪のかゝれるを折りて人に

君訪はばまがきの竹のよと共に雪とつもれる言つくさまし

人の家に女簾垂のもとに立ちいでて雪の木に降りかゝれるを見る

冬ごもり人待つ閨の空だきを梢の雪の花にかさまし

杣山に雪ふれり柴人かへるかた

折りそへし高ねの花と見るばかりしづが爪木につもる雪かな

雪高う降りたるに蓑きたる人ひとり柴橋渡らむとする所

雪深み今日來む人をあはれとて河よりをちに誰か待つらむ

雪のあした入江に釣する人あり

花とのみ入江の松に散る雪は思はぬ今日の幸にぞ有りける

火桶のもとに人々ゐて雪のいと高く降れるを見る

白雪はやさか降りけり埋火のおきゐてつもる物語せむ

頭白き翁ある所に雪降る

橋立—丹後の名所

よすが—よりどころ

うねび耳なし—畝傍山、耳成山、共に大和の名山、兩山爭の歌萬葉集に見ゆ

ゆづるは—交讓木、この葉を新

橋立や聞きわたりこしおもかげも心にかゝる今日の雪かな

雪の中に遠かたをおもふ

秩父山甲斐が嶺かけて降る雪を隅田河べに誰か見るらむ

雪朝眺望

隅田河くだすいかだをよすがにてみ雪ながるゝあさぼらけかな

雪朝遠望

眞柴たく烟のみこそ埋もれね河よりをちの雪のあけぼの

雪の山をつくりて

春かけてあらそひ残れ吾園に雪もてつくるうねび耳なし

竹に雪の降りかゝれる所

たかむらやねぐらの鳥の立つかたにこぼるゝ雪も面白きかな

雪の木に降りかゝりけるを

白妙にみ雪ふりけりをちかたの野守が門の葉びろ熊樫

見渡せばこと木より先づ枝たれて雪重げなる庭のゆづるは

ふるき—降、古き
おもなき—面はゆき、恥かしき
うち日さす—宮の枕詞
あぢまさの車—檳榔毛の車
あくがれ—心のそれに奪はれこがるゝをいふ

小車のあとだにもなし白雪のふるき宮路の志賀の山ごえ

車中雪

たそがれのしのび車のすき影もおもなきばかりつもる雪かな
花とちる大路の雪を小車の小簾かゝげつゝ見る人や誰
うち日さす宮路の雪にあぢまさの車静けきあさぼらけかな

馬上雪

花ならば蹄も香ににほはまし雪ふみわくる甲斐の黒駒

雪を見てしづかに行くに馬のおそきにまかせたり

花とめで月と見つゝぞあくがれぬいそがぬ駒のゆきのまに／＼

雪降りたるに人々舟にのりて行く

隅田河夕こぎ渡り筑波嶺の端山につゞく雪を見るかな

月雪の夜舟に乗りて人のもとを訪ふ

明けぬとてこぎはかへらじ月雪にまさりて思ふ友を訪ふ夜は

雪中遠情

山里に住む人雪の降れるを見る

花見むと入りにし物を降りつもる雪も世に似ぬみ吉野の奥

雪のふる日山里をとふ

いざとはむ今日降る雪に吉野山入りにし人も待たずやはある

待つらむと來しかひありや信樂の外山の雪に戸ほそあけたり

山里の雪のあしたまらうど門に有る處

立つ松のこずゑの雪をしをりにて跡つけそめし三輪の山本

田家雪

東路の荷前も過ぎて年深き田ぶせの雪ぞしづけかりける

ぬひ子が家にて閑居雪を

立ちよれば猶柴の戸はさしながらかごとがましき松の雪かな

名所雪

見し花の面影さらぬ吉野山かをるばかりの雪の曙

滋賀の山越に雪の降りたりければ

信樂―近江の國

田ぶせ―田中の廬

さしながら―閉ぢながら

かごとがまし―かごち言をいふ樣なる

みむろ―神社の地

横河の寺―近江横川谷の嶺上なる堂塔の稱

篁―竹林

もゝしきや御階の櫻春またで咲くかと見ゆる今朝の雪かな

神社雪

鹿島潟神のみむろにうちよせてかへらぬ浪は雪にざりける

武藏なる氷川の森に雪つもり八重垣こもる神の御社

古寺雪

さゝ浪や比良山風のはやければ横河の寺にみ雪散るなり

遠村雪

今朝見れば里はありけり遠かたの雪に折れふす篁の奥

里雪

生駒山嶺の木枯音絶えて雪しづかなる秋篠の鄕

市雪

朝ぼらけ何に換へましひんがしの市の植木につもる白雪

山家雪

吾岡にみ雪降りけり玉だれの小簾かゝぐらむ都方人

荷前―諸國より進貢する物をいふ、江次第注に「荷前者四方國進御調荷前取奉故曰荷前」

山がつ―樵夫

春のまうけ―春の用意

やさか―八尺、高く深く

まくらがの―古河の枕詞

うたかた―水の泡

見渡せば須磨のうしろの山風に雪うち散れる關のあらがき

關路朝雪

朝ぼらけ關路こえ行く東人の荷前の箱に雪ぞつもれる

樵路雪

山がつの春のまうけの爪木には降る雪さへも花と見えけり

雪道をうづむ

あはれしる人やわけけむやさか積むゆふべの雪に跡もありけり

古渡雪

まくらがの古河のわたりを朝わたり河瀬にふれる雪を見るかな

孤島雪

伊豆の海にひとむら消えぬうたかたやみ雪つもれる浦の初島

禁中雪

かさゝぎの御橋の雪にあとつけて雲井にのぼる心地こそすれ

禁庭雪

かれず—絶えず

あさむづ—淺水、越前の國なる名所

春かけてかれずかたらへ初雪に跡つけそむる庭の鶯

嶺初雪

箱根路や雲の絶間に見渡せば初雪ふれり峯の岩角

越の姫君の會に橋上初雪を

初み雪またあさむづの橋の上に今朝しも誰か跡つけぬべき

雪のあした

片山の槙の葉しのぎ降る雪を翅にかけて立つ鴉かな

雪似二白雲一

箱根山所もさらぬ白雲はこの頃つもる雪にざりける

遠山見レ雪

見渡せば降りつむ雪を有明の月にみがける多摩の横山

雪滿二群山一

出づる日の光にむかふ武藏嶺やをみねことごと雪ぞさやけさ

關路に雪ちれり

橋姫—宇治橋のもとに居る神。
大ひれ—於保比禮「おほひれや、をひれの山は、や、よりてこそ、よりてこそ、山はよらなれや、とほめはれと」
いさゝめに—わづかばかり
はだれ—まだらに少し降る雪

橋姫のこがるゝ袖の色なれや瀬々の網代に寄するもみぢ葉

賀茂臨時祭

さゆる夜に大ひれうたふ宮人の袖吹きかへす加茂の河風
霜さやぐ御階の竹のませのもとよにおもしろき神遊かな
千はやぶる加茂の御手洗音そへて東遊の聲のさやけさ
昨日かも葵かざしゝ宮人の山藍の袖に霜ぞおきける

霰

刈り残すおくての稲葉打ちなびき田の面遙に霰ふる見ゆ

雪いさゝか降れり

いさゝめにはだれ降りけり春鳥の羽風にちらふ花と見るまで

朝に初雪を見る

今朝見ればねぐらを出づるむら鳥のつばさまだらに初雪ぞふる
朝戸あけて見れば嬉しも橘のした照る庭にみ雪ふりけり

十二月十五日初雪降りけるに鶯の來たりければ

はつる—碇泊する

里わ—村里のあたり

みけ—御食
をぢ—翁、紀に「老翁此云二烏膩一」
田上山—近江にあり

里の名—宇治、憂の意にていふ

伊豆手舟今やよすらむ小夜更けて入江のかたに千鳥しばなく

泊千鳥

百舟のはつるとまりの友千鳥立居いとなき聲ぞ聞ゆる

旅のとまりに千鳥を聞く

難波津をこぎ出でし日の友千鳥幾夜ねざめをとひ馴れにけむ

水鳥

山河ははやく氷やとぢぬらむ里わの水に鴨ぞ群れゐる

網代

大君のみけに供ふる氷魚なれば網代守るをぢが業ぞかしこき

網代寒

網代人衣手寒し川上の田上山に嵐吹くころ

落葉留二網代一

もみぢ葉のよるなる時は里の名を身にはしらじな網代守る人

網代にもみぢ寄りたるかた

みたらし―御手洗、神社の池又は川
霜ふり月―霜月ともいふ、十一月
あげまき―幼童
とめつゝ―尋ねつゝ
大淀―伊勢に在り、新古今集「大淀の松はつらくもあらなくにうらみてのみもかへる波かな」

冬の夜月あかきに加茂にまうでてといふを題にて

山藍にすれる袂の霜さえて月影こほる加茂のみたらし

霜ふり月九日金地院に遊びてかへらむとしける時庭のもみぢ散りて月いとあかし

もみぢ葉のちる木のもとに弓張の月のかげさへ引きぞとゞむる

神無月に閏ありければ

更に猶神無月とし聞くなれどわかれし秋は遠くもあるかな

椎葉

木枯にたへぬ木の葉をよそに見て残るもさびし嶺の椎柴

山里に椎ひろふ

今朝見れば我がゐる山の木枯に落ち椎ひろふ里のあけまき

尋二千鳥一

浦づたひとめつゝ行けど大淀の松よりつらき友ちどりかな

夜千鳥

垂氷―つらゝ
鼓の音―開門の時を報ずる鼓
しがらみ―からみつけ
みを―水脈

大空は嶺の嵐にさえ〴〵て軒の垂氷に月ぞうつろふ

曉寒月

昨日こそ寢ざめとひしか音たてぬ荻の枯葉の霜の月影
大御門ひらく鼓の音すみてみ橋の霜に月ぞうつろふ

霜夜月

小男鹿のしがらみふせし萩原や古枝の霜を照す月影

寒山月

聲たてぬ嶺の男鹿の跡見ゆる霜に更け行く冬の夜の月

海冬月

箱根路や關の夜嵐さえ〴〵て月影こほる伊豆の海づら

寒流帶レ月

冬の夜もこほらぬみをの一すぢをよすがにやどる月ぞ寒けき

家にて十一月閑庭冬月を

枯れわたる庭の芝生の霜の上に更け行く月を見む友もがな

しをりにしをりーしをれしむる上にしをれしめて

朝なさなー朝毎に

二をー男體女體の雙峰

氷ゐー氷はる

河とー河の渡し場

嵐吹二寒草一

霜寒み音だにたてぬ荻の葉をしをりにしをり吹く嵐かな

寒草帶レ霜

朝なさなおく霜白き翁草いたくも年の老いにけるかな

蘆飛似レ雪

白鷺のつばさの風に散るあしの吹雪もさむき冬の河づら

氷

筑波嶺の二をの嵐さえ〲て鳥羽のあふみは氷ゐにけり

河上氷

ながるめる紅葉をしばしとめむとて河とや早く氷ゐにけむ

氷留二水聲一

鴛鴦鴨のつばさにかくる浪の音も此ごろ絶えてこほる池水

冬月

風さむみ夕霜こほる楢の葉の落葉が上をてらす月かげ

さふる―さへぎる

なり所―別莊

いをねざり―寢ても睡れず

閑庭霜

別れにし昨日の秋の白露やはらはぬ庭の霜となりけむ

春海の家の會に卷頭閑庭霜を

日をさふる松の下庵朝ごとの霜の花さへさかり久しも

人跡板橋霜

朝な〳〵おく霜白き棚橋に誰が別路のあとを見すらむ

人のなり所にて六帖の題をさぐりて霜月を

冬だにも人め枯れせぬ園なれやあしたの霜も花をなしつゝ

木枯

この頃はいをねざりけり木枯に木の實おちくる山かげの庵

初冬木枯

立ちこめし昨日のくれの霧はれて嶺あらはなる木枯の風

寒松風

岩かどに立つやひと木の松にのみ殘る嵐の音もすさまじ

ゆるし色―紅、紫の色のあさきもの

大澤や云々―「一もとと思ひし花を大澤の池の底にも誰かうゑけむ」古今集

三輪山―大和

ひもろぎ―神への供への物

十月ばかり物へまかりて

時雨ふり木の葉みだるゝみ山路は涙さへこそもろく散りけれ

殘菊

うつろふをいとふならひの露霜もゆるし色なるませの白菊

殘菊映レ水

大澤やひともとの名はしら菊のうつろひのころ色にこそ知れ

霜

百くさの名殘もとめぬ枯野さへふみわけがたき霜の初花

朝霜

有明の消えにし影を松の葉にしばし殘せる霜の色かな

金地院に遊びて霜夜聞レ鐘といふ事を

置きそはる瓦の松の夜の霜を更け行くかねの聲に知るかな

杉路霜

三輪山の杉の下道おく霜にひもろぎまつる跡は見えけり

にひさきもり―新防人、新に筑紫に行く徴兵
はゝそば―柞葉、母を掛く
やさか―八尺、萬葉に「杖たらぬやさかの歎き」などの用例見ゆ、高く、深くの意
朝日山―山城宇治にあり
しがらみ―柵、流れをせきとむるもの
七瀬―多くの瀬
ふるごとしのぶ―舊事を追懐す
庭もせ―庭一面に

關こゆるにひさきもりが麻ぎぬに散るはゝそばの名さへなつかし

紅葉のいたく散りたる山をこえたる所

奥山の梢の秋やいかなりしやさかつもれる色を見るにも

瀧落葉

いかばかり紅葉ちればかくれなゐに漲りおつる峯の瀧つ瀬

河上落葉

朝日山峯のもみぢ葉散りぬめりしがらみかけよ宇治の河長

落葉浮レ水

飛鳥風きのふもけふも吹きにけり七瀬によどむ木々のもみぢ葉

山ざとびたる所に木の葉ちる

夕月のかげさやかなる槇の戸に木の葉の吹雪音の寒けき

閑庭落葉

むら時雨ふるごとしのぶすさみには楢の落葉もかきぞはらはぬ

庭もせに散るもみぢ葉やせきぬらむ筧の水の音だにもなし

み山—山の奥
は山—山の口

染井—東京の西北郊、染めに掛く

あひやどり—同宿

ちり—散、塵

神無月み山のもみぢ散り過ぎては山の里にさかりなりけり

神無月の八日の日安濃津の君の染井の莊へまかりて紅葉を見てよめる

世の秋の色をやこゝにとゞめけむ千入染井の里のもみぢ葉

御園生は春おほえけり飛ぶ蝶のおもかげ見せて木の葉散りつゝ

神無月ばかり山里にやどりて

散り殘る木々のもみぢをたづね來てしぐれの雲とあひやどりせり

初冬落葉

冬立つといひしばかりに染め盡すは山しげ山散りそめにけり

月の夜木の葉のちるを見て

おく霜にうつろふ月の影ながら散るもみぢ葉は夜さへぞてる

月あかき夜木の葉ちる

天つ空鏡と見ゆる月かげにちりかゝるものは木の葉なりけり

關路落葉

行路時雨

しぐるゝや道のゆく手の笠やどり立ち寄るほどももみぢ散りつゝ

海邊時雨

磯山の松の嵐に聞きなれて今日も時雨に袖ぬらしけり

山家時雨

我岡の落葉まじりの村時雨さとの梢を今やそむらむ

田家時雨

五百代の田づらのひつぢうちなびき伏屋の軒に時雨降りきぬ

十月十一日春海道別などとひけるにしぐれ降る夜とふ人ありといふ事を

うれしくも降りくる夜半の時雨かな笠やどりとは思ふ物から

殘紅葉を見る

神無月春おぼえたる長閑けさに殘る紅葉を花かとぞ見る

雨岡の家にて神無月ばかりもみぢを見てといふ事を

笠やどり―雨止みを待つこと

ひつぢ―刈株のあとよる自生する稻

物から―物ながら

春おぼえ―小春びよりをいふ

東海寺—品川にあり
おくつき—墓

夕づく日—暮れ方の日

こきまぜ—搔き交ぜ

冬立ちておく霜寒み焚く柴のしば〳〵とはむ山陰の宿

初冬時雨

昨日しも月にうかりし浮雲の行くへや今朝の時雨なるらむ

十月二十九日東海寺の少林院なる縣居の大人のおくつきの
もとに人々つどひて時雨をよめる

秋くれしみ山の里ぞあはれなる落葉がうへに時雨降りつゝ

神無月しぐれの雲をしるべにて落葉の山を分けも迷はじ

時雨晴陰

木の葉散る山路こゆれば時雨行くあとよりにほふ夕づく日かな

曉の時雨

あけたゝば色そはるべきもみぢ葉にねざめ嬉しき村時雨かな

山路時雨

大木曾はけふも時雨や降りぬらむ麻ぎぬぬれてくだる山人

村時雨紅葉こきまぜ降るころは山分け衣ほさで歸らむ

いちしば原—いちくさとしばとの原、いちじろくの序詞

いとなき—ひまなき

あきつ羽—薄き衣

あせぬ—色のうすくならぬ

うけらが花 巻四

冬歌

初冬嵐

背面なるいちしば原のいちじろく冬來にけりと吹く嵐かな

秋くれてはやくも冬は龍田彦うらさびませる今朝の嵐か

秋暮れて殘る木の葉も有るものをうたてはげしき峯の嵐か

山家初冬

山里の雲の行きかひいとなきは都も今朝やしぐれそむらむ

十月更衣

あきつ羽の袖ぬぎかへて今日より朽葉の色の衣かさねむ

冬のはじめ山里をとふ

散りてだにあせぬもみぢの霜の上をふみわけて來し跡なとがめそ

心地そこなひ—病氣にて
田舍わたらひ—田舍あるき

こは長月廿七日心地そこなひてたれこめけるをりのことになむ

長月つごもり田舍わたらひして

鴈鳴きて紅葉いろこき里をしもなど今日のみと秋はてぬらむ

みなむすび―蜷貝の形に似せたる結び方

玉づさかけてくる―雁の來るをいふ

うら山吹―表は黄朽葉にして裏は靑なるかさねの色目

われもかう―地楡

りんだう―龍膽

すいがい―透垣

してそれにそへける歌

露深み紫苑咲く野の秋の月うつろふ影もうす色にして

残る日かずもはや二日三日となりぬるを、玉づさかけてくる聲だにせず、楓はなほ染めがてなるは、心おそき秋にもありけるかな、されど柹の葉のいやしげなるものから、うら山吹の袖おほゆるまで染めなしたるが、文机のもとに散りくるにおどろきて見いだせば、晴れにたる空いつしかかたへくもりて、しぐれさと降りきぬ、うらがれたる荻の葉もしづ心なく、萩の下葉の色附きたるがほろ〳〵と池水に散りてながるゝもをかし、こゝらあせ行く芝生にわれもかうのはかなげなる、りんだうの我はがほなる、すべて哀れふかし、すいがいのもとより軒のつままではひかゝれるつたは、やゝ下ぞめして、さすがにをり知りがほなり

初しぐれあはれ知れとか秋の色に人の心をそめて行くらむ

うつし植ゑて千草の花ぞ咲きにける大堰嵯峨野はとはずともよし

野色混二秋光一

おきわたす露も千草ににほひつゝいづらを花とわきぞかねつる

人々秋の野に遊ぶ

秋の野はにほふ絲はぎ葛の花誰も心のひかれてぞ來る

山路秋行

小男鹿の妻こふ山を秋ゆけば袖に先づしる初しぐれかな

八月の末田ばたといへる所の西行庵へ人々と共に行きて秋

山寺に遊ぶといふ事を

たきものの煙にかへて立つ霧のはれぬ山べに今日はくらしつ

秋雜

時わかぬ峯の岩ほもはふ蔦のもみづる色に秋は見えけり

八月十四日景雄が扇合しける時紫苑のかさねのきぬして

はりたる扇に紅の紐をぬきてみなむすびして垂れたるを出

いづら—いづれ

もみづる—紅葉する

紫苑のかさね—表は蘇芳に裏は萌黄

山ぶみ—山路をあるくこと

しゞまの鐘—物のとぢめにならす鐘といふ

うつぶし色—黒色

人のすゝめければ

古への手ぶりに猶やかへる手もいや照りそはむ神のまに〱

人の山ぶみしたりとてかへでのもみぢおこせたりければ

秋霧を分けけむ山の深さをも染めしもみぢの色に見るかな

鐘聲送レ秋

今日のみに秋をとぢむる山寺のしゞまの鐘の夕ぐれの聲

うら枯るゝ野寺の鐘の入相のひとこゑごとに秋ぞ暮れゆく

山寺秋暮

しぐれつゝ秋も過ぐめる山寺にうつぶし色の袖ぞさむけき

羇旅暮秋

古郷を別れし袖に置きそめし朝の露ぞ霜となりける

暮秋雲

足柄や關の村山秋更けて時雨もよほす峯の浮雲

庭を秋の野につくりて

こゝら—許多

ほにいでて—明に見えて

神無月—十月

さゝらがた錦の帶と見るばかり細谷川にもみぢながれぬ

　川づらのもみぢを見て

百舟のかよふ川べのもみぢ葉はこがるばかりに染めてけるかな

　川をへだててもみぢの散るを見る

木がらしの吹くや川との渡守ちるもみぢ葉もこゝらつまなむ

　田子の浦もみぢ有り富士見ゆるかた

田子の浦や秋はもみぢぞこがれけるふじの烟のたゞずなる世も

　明石の浦もみぢ有り帆かけたる舟行くかた

明石潟浦こぐ舟のほにいでてにほふ紅葉はあかずも有るかも

　もみぢやゝ散りがたなり

花よりもつれなかりけりもみぢ葉は袖にしむべき香さへとめねば

　紅葉殘レ梢

暮れぬとて何をしみけむ秋の色は梢にのこる神無月かな

　越中國柿本の社に楓あまた植ゑてそれに歌そへて奉るとて

かへる手―楓に歸るを掛く

岩がきもみぢ―岩の垣の如くに立てる所にある紅葉

宇津の山―駿河國にあり
下照る―下葉の紅葉するをいふ

桂人―桂の里人

いさよふ―とゞまりて流れざる

心さへ色にそみぬる木のもとを誰かへる手と名づけそめけむ

山皆紅葉

此ごろはもみぢぬ山もなければや紅にほふ四方の朝霧

古今集句題いはかきもみぢ

龍田彦風なふかせそかぎろひの岩がきもみぢ今盛なり

繪に宇津の山の紅葉を人々分けてのぼる所

蔦楓下照る秋は陰しげき宇津の山路も誰かたどらむ

田舍の家にもみぢ染めたるに田刈りたる所

をしねかる田づらのいほのうすもみぢ色付く秋になりにけるかな

水鄕紅葉

桂人散るをやいかにいそぐらむ嵐の山の嶺のもみぢ葉

網代にもみぢよせたり

水上のもみぢ葉よせてあじろ木に猶もいさよふ秋の色かな

河にもみぢ流るゝを見る

古郷のおとづれをだにきくの花名もなつかしみ折りてけるかな

伴レ菊延レ齢

あし引の山路の菊や仙人の千世のさかゆくしをりなるらむ

ぬひ子が贈答の會に菊を折りて人のもとへと云ふ事を

君とわが語らむこともつもりては淵となるべき菊の上の露

川づらに菊咲けりもみぢ多かり

きくの露つもれるよどにかげうつす木々のもみぢも常磐ならなむ

田のつらに柞もみぢせり

秋更けて色こきいねの中にしも立てる柞のうすくも有るかな

月照二紅葉一

月の船さすにまかせて夜さへもこがると見ゆるもみぢ葉の色

遠紅葉

今朝見れば都の外の露霜の深さしらるゝ峯のもみぢ葉

紅葉留レ客

ならなむ―希望の意

こがる―焦がるに漕がるを掛く

秋篠—大和
入間—武藏
たそがれ—黄昏
けたる—消さる
夕づつ—宵の明星
そのかみの云々—「ぬれてほす山路の菊の露のまにいつか千年を我は經にけむ」古今集

ひんがしに流るゝ水のかなたこなた衣うつなり玉河の里

名所擣衣

千たびうつ砧の音ぞきこゆなる身にしむ風の秋篠の郷
更けぬるか月は外山に入間路の里の砧の聲たゆみ行く

夕菊

村ぎくの露分けごろも日も入りぬ今日や山路に千年經にけむ
たそがれの妹が垣根の菊の花われを待つらむ袖かとぞ見る

月照二菊花一

淵となる行末かけて秋の月やどり馴れなむ菊の上の露

秋の夜月あかし籬のもとに菊さけり

隈もなき月にけたるゝ夕づつの光を殘すませの白菊

菊の花咲きたる所に夜泊りて人々見る

そのかみの山路の種ときくからに一夜の宿も千代や經なまし

旅宿翫レ菊

露深き猪名のふし原たつ鴫の羽風に月の影ぞこほるゝ

河霧

百くまや千くまの河と霧こめぬ舟わたせをと呼ぶ聲はして

湖上曉霧

松風もかぎりあれば霧こめて有明くらき滋賀の辛崎

月前擣衣

筑波嶺のすそわの田ゐに月澄みてにひくはまゆの衣うつなり

千萬の砧の聲ぞきこゆなる都の空の秋の夜の月

月夜聞レ砧

物思ふすさみと聞けば月清みたゆむ砧もあはれなりけり

擣衣驚レ夢

わび人の砧の音のかよへばやさむる枕の露けかるらむ

夢のわた百舟人や寢さむらむ吉野の里に衣うつころ

南北擣衣

わたせを―渡せよ、をは強め辭

すそわ―麓

にひくはまゆ―新桑繭

すさみ―なぐさみ

夢のわた―夢を海に喩ふ

ほにあげて—高くあげて

いほしろ—五百代、田の廣きをいふ

遠つ人—かりの枕詞 かり—雁と假とを掛く

うべ—なる程

桂の里—山城

紙繪に帆かけたる舟あり雁わたる所

海原やおき行く舟の遠近に聲をほにあげて鴈渡る見ゆ

薄暮初雁

夕附日入間のかたのいほしろの穂のへにおつる初かりの聲

妹がり行く道にて鴈を聞くといふを題にて

ふりはへて行くなるわれを遠つ人かりにのみとな妹に告げそよ

馬上聞レ鴈

秋の野に尾花あしげの駒とめて空行く鴈のこゑを聞くかな

雄風が葛飾の里の家をとひて古今集の句題をよめる鴈ぞ鳴くなる

秋風はうべ寒からし葛飾や千町のをしねかかりぞ鳴くなる

水郷鴈

雲路行く天つ雁がね澄む月の桂の里に中やどりせよ

月前鴫

たち待ち―十七日の月をいふ

唐錦―たちの枕詞
立野―武藏國の牧場

三吉野―武藏入間郡
三吉野云々―「わが方によるとなくなる三吉野の田面の雁をいつか忘れむ」伊勢物語
あがた見―田舍見分

織りかくる秋の錦をたち待ちの月かげにほふ岡の邊のやど

て

暮秋月

霜の上に影はとゞめよ秋の月馴れにし露のなごり思はば

駒むかへ

唐錦立野の駒は東路の千里の秋の花やわけてし

駒むかへを見る女車あり

うき名のみ立野の駒も逢坂の路こえぬと聞けばむつまじ

初雁を聞きて

聲きけば先ぞうれしき三吉野の田面の鴈のよりもよらずも

道行く人初かりを聞く

あがた見に朝立ちゆけば遠つ人初かりがねも空に鳴くなり

月前雁來

雲霧を翅の風にうち拂ひ月見よとてや鴈わたるらむ

月を先づ云々―東方の國に在りて西方の都を思ふと也
月夜よみ―月夜のよろしきために
手作り―調布、手おりの白布
たぐふ―比す。べらなり―可きなり
かくさふ―かくすの延音

月を先づ待ちとる國に住みなれてかたぶくかたの都をぞ思ふ

月前眺望

白鷺のつばさと見しは月夜よみ安房の遠山かけて漕ぐ舟

玉川や千村五百村手作りをさらしそふると見ゆる月かな

月前祝言

八束穗の瑞穗の上に千五百秋國のほ見せててれる月かも

九月十三夜家にて人々と共に歌よむに月前祝君

筑波山千秋くもらぬ月をしも君がみ陰にたぐふべらなり

九月十三夜曇りければ

天雲もかくさふべしや照る月をめでそめませし昔おもへば

十三夜人々つどひて歌よむに海のほとりなる人の家に月の入るを見たるといふ事を

難波潟蘆火たく屋にやどらずば波間にしづむ月を見ましや

九月十七日忠賢の家の會に、上野の岡より月の出づるを見

田家見レ月

をしねかる田ぶせの秋の月の夜に都の人を留めてしがな

故鄕月

古里の月にとひきて水草ゐし板井の淸水さし汲まれけり

名所月

大原やおぼろの淸水名のみして秋は月こそ澄みわたりけれ

月下遠鐘

澄む月にあはれをそへて心ある遠山寺の鐘のこゑかな

月前旅行

古鄕の人に見せばや尾花葺く宇治のかりほの秋の夜の月

月前神祇

男山神のみゆきの事はてて嶺さし出づる月ぞしづけき

月前遠情

象潟や秋すむ水の月影を蜑の磯屋に誰か見るらむ

をしねかる―稻を刈る

田ぶせ―田の中の假庵

おぼろの淸水―山城大原村江文の東の草生の中にありといふ

かりほ―假庵

男山―山城にあり、石淸水八幡宮

象潟―羽後國にあり

清瀧川—山城

繼橋—下總にある名所

ものかは—比較にならず

瓦の松—白氏文集樂府に「牆有衣兮瓦有松」

いく千々の玉か散るらむ秋の夜の淸瀧川の浪にてる月

江上月

都鳥うきねの數もあらはなる難波堀江の秋の夜の月

浦月

繼橋の百夜つぎても見てしがな眞間の浦わの浪にてる月

古寺月

なべて世の秋はものかは初瀨山檜原がおくにすめる月かげ

信濃の國なる玄澄法師とまとゐしける夜古寺月といふ題を得てよめる

秋更けて夜なく〳〵すめる月影や瓦の松の雪となるらむ

古寺殘月

曉をまつの戶さゝで誰か見る高野の奥の有明の月

樵夫歸レ月

秋深み夕露おりる椎柴に月かげそへてくだる山人

空だきもの—どこともなくくゆらす香

あるじがらなる—主人の人柄にふさはしき

面わ—容顏

さゝれ石—小石

あはれしる都の友のこひしきはを鹿鳴くなる月の秋の夜

山月入レ簾

小簾の中の空だきものや山の端の月を待ちとる隈には有るらむ

野月

秋の月あくまで見つゝ武藏野の廣き惠をあふぐ民草

野月露深

武藏野や露分け行かむかたもなし草は皆がら月になりつゝ

秋の月面白き池有り家有る所

こゝを瀨に月も澄むらむ島好むあるじがらなる池のこゝろに

池月久明

年ふれどくもらぬ池の鏡には月の面わもおいせざりけり

月照二河水一

武藏嶺に雲をさまりてさゝれ石も月にみがける玉川の水

山川に月のうつるを見て

猪名野―攝津
はつか―端、僅か、二十日
秋のさが―秋の天候の常

いねがてに鳴ぞはねかく有明の月影淸き猪名のふし原

廿日月

杉立てる山のはつかの月かげのさしのぼるほどぞしづけかりける

月前苫

古郷のかやが軒ばの苫の露あはれいくよの月やどるらむ

狂雲妬佳月

詠めつゝ月をねたしと見る人の心や浮ける雲となりけむ

雲間月

行く雲も秋のさがとて早ければしば〳〵見する月のかげかな

山家月

さを鹿の籬になるゝ宿の月かく見むとてぞ世をばのがれし

月の夜山里を訪ふ

山里の月にとひきて大かたの秋のあはれのかぎりをぞ見し

山里にて月の夜都をおもふ

おくれゐて—家に殘り居て
思ひあがる—心高くなる
はつかに—端、僅に
いさしら露—いさ知らずに白露を掛く
ひた—引板、鳥おどしの鳴子

旅の宿りに月を見る

おくれゐて戀ふる袖にもやどるらむ草の枕の秋の月影

しづかに月を見る

とこしへにとざせる門の杉が枝に思ひあがれる月を見るかな

月の山の端に入らむとするを

三日の夜のほのかに見えし影ばかり山のはつかに殘る月はも

山里にひぐらしの聲をきゝて

杣人の斧のひゞきは絶えてしも猶ひぐらしの聲ぞのこれる

女の家に男いたりて籬の尾花のもとに立てり

人はいさしら露むすぶ絲薄ほに出でて我をまねくとぞ見し

山里に侍りし夜鹿の鳴くを

秋深み山田のひたになれてしも枕に近きさを鹿の聲

八月十六日夜人々つどひて歌よみけるに有明の月あかきに

鳴たてりといふ心を

紐とく―花咲く

小倉山―山城嵯峨にあり、鹿の名所

まき―枕の活用語、妻を求め得らるゝ意

布留―大和

八月十五夜前栽うゑたる所

いつはあれど今宵の月をやどさむと植ゑしちぐさは紐ときにけり

松の絶間よりはつかに月の影のかげろひて見えけるを

いつのまに月は梢をのぼりけむ松の葉ごしに光ほのめく

秋の月に山に鹿なく

月影のくまなき夜半も小倉山つままきかねて男鹿鳴くらむ

夜の雲をさまりて月行くことおそし

塵ばかり空の浪なき大空の月のみ舟はこぐともなし

月瀧をてらす

御幸せし布留の瀧つ瀬ふりぬれど月のみ影はいまもやどれり

秋の月面白きに池有る家

大空に光みちぬる月をしもわがものに見る池の面かな

あれたる宿の月

古へをしのぶの露に影とめて月のみすめる奈良の古郷

洲濱—濱邊のさまをかたどり作りたる盆栽

金泥—金箔の粉を膠にまぜて書畫をかくに用ふ

こゝをせにすむ—此處を先途として

つれなき—無情なる、曇りたるをいふ

あはれ知る今宵の月のかげのみぞ八重葎をもへだてざりける

訪へかしと思へば人のとひ來つゝ同じ心を月に見るかな

名に負へるこよひの月の隈なさに千たびあふとも飽くよあらめや

八月十五夜越の姫君の月宴の題十五夜翫レ月

小簾まけば月のかつらの追風もまほにかをると思ふ夜半かな

やむごとなきわたりに月の宴有るに洲濱に水をゑがきて鏡を月のかげとおもはせて鏡のひもを藻にむすびて水の上へ金泥もて歌をかけり

君見よと最中の秋の月かげもこゝをせにすむ庭の池水

八月十五夜人々とひ來て宴せしに蟲をよめる

此夜らの月と君とを蓬生に待ちよろこべる蟲の聲かな

十五夜人々とひ來たりけるに夜一よ曇りたりければ

今宵しも訪はれしのみを光にて月はつれなき蓬生の宿

さもあらばあれ影見せずとも隈もなく語りあかさむ秋の望の夜

かつらかぢ―桂梶、月を舟にたとふ

大江のみと―みとは湊

くる秋―くるは來る繰るの兩意にて蔦葛の縁語

見てしが―見たしとのぞむ意

八月十五夜空いとはれわたりたるに人々とひ來てともによめる十五首

なべて世の人の心もすむ月も空にみちぬる夜半にも有るかな

夕しほに浮べる月のかつらかぢ大江のみとに今ぞよすなる

我園のこ萩の上の露すらも名におふ夜半の月をまちけむ

露ふかき軒ばにはへるつたかつらくる秋ごとに月ぞやどれる

かずならぬ庭の苔路の露をさへとめてやどれる夜半の月かな

さだめなき秋のみ空の空さへも今宵は月に心ありけり

今宵しも筏の床に浮寢してすみだ河原の月を見てしが

玉すだれかゝぐる宿も何かせむ軒端のつたの露の月かげ

さはるべき山のはもなき武藏野は月見るための所なりけり

ことわりの夜半なりながらかくばかり隈なき月の影は見ざりき

あすも見む月とは思へどおなじくは今宵ながらに明けずもあらなむ

いつはあれど秋のなかばの中空に隈なくすめる月を見るかな

長月—九月
とぢめ—終局
心あらなむ—同情せよかし
望の夜—十五夜
月の御舟—月を舟にたとふ
玉くしげ—あくるの枕詞

立つ杉の影さへもなし中空によどめるほどの月のさかりは

入後恭レ月

すむ月の入りにし後も山松の梢に残る影をしぞおもふ

有明月

朝顔のやゝ咲き出でし露の上にしばしはやどる有明の月

朝鳥の羽風にはるゝ薄ぎりの絶えまに見ゆる有明の月

長月ばかり有明の月を見て

馴れ來つる秋の哀も長月の有明の月ぞとぢめなりける

曉月厭レ雲

雲だにも心あらなむ山のはに入りがた近き望の夜の月

曇る夜の月

大空を八重立ちこむる霧の海に月の御舟の行くへ知らずも

八月十五夜

玉くしげ明くるまで見むまそ鏡みがける秋の望月の影

わたらふ—渡るの延音

おのがじし—各自
いをねぬ—睡眠せぬ
すさみ—なぐさみ
ほにいづ—高く現れ出づ
露ばかりだに—露だけにても、僅かばかりにてもの兩意

越の姫君の十五夜の題川づらの月を見てといふ事を

わたつみのうしほと共にさしのぼる月にぞむかふ河づらの宿

終夜翫レ月

武蔵の海沖よりいでて秩父嶺にわたらふ月のあかずも有るかな

盃も千たびめぐるや出づるよりかたぶくまでの月をうかべて

毎秋馴レ月

秋をあまた馴れてむかへばうきふしもうれしきふしも月ぞしるらむ

貴賤憐レ月

絲竹も砧の音もおのがじし月にいをねぬすさみなるらむ

武蔵野に尾花あり月出でたる所

武蔵野の尾花が露に影見えて月もほに出づる秋の夜半かな

月を見すてゝ人のかへらむといひければ

君まちて月をやどせる蓬生の露ばかりだにあはれとは見よ

停午月

きぬともよしや—露衣を著る即ち冤罪を蒙るともよしとなり
けたるゝ—消さるゝ
まとゐ—集合

照る月はふたつなきものを見る人の思ふ思ひや千ぐさなるらむ

家に女月を見る

端居して夜な〳〵月に馴れて見むきぬともよしや露のぬれぎぬ

七月十四日の夜月いとあかゝりければ

昨日しもあひ見し星の光さへけたるゝ夜半の月の影かな

同じ月十七日石濱にて人々と共に月を見て

木の間よりほのめくと見し月影をやがてよせくる秋の河水

七月月いとあかきに池にうつろへる影を見をりて

水清みひれふる魚にさわがれてやどりさだめぬ月のかげかな

釣どのに人々あつまりて月見る所

月すめば澄みまさりけりまとゐする人の心も池のこゝろも

照る月をくもらぬ池の底に見て天つみ空に遊ぶ夜半かな

舟をうかべて月を見る

夜と共に棹さすかたへながれつゝとむればよどむ水の月かげ

老となりにし—古今集「大方は月をもめでじこれぞこのつもれば人の老となるもの」

夜たゞ—終夜

緇素—僧俗

つゞり—つゞれに同じ、僧の著る衣の稱

さかふき—薄の穂の下にねたるをいふ也

妙法院宮の月次の御題月を

ながめきて老となりにし恨さへ忘るゝ秋の夜半の月かな

初秋月

夕月のひかりほのめく西山や秋の越えこし方に有るらむ

弓はりの影をし見れば月にのみ心ひかれし秋は來にけり

閑居見ㇾ月

誰か知る拂はぬ苫の夕霧にうつろふ月を夜たゞ見るとは

緇素見ㇾ月

花ずりの袖につらなるつゞりさへあはれへだてぬ露の月かげ

野宿見ㇾ月

秋の野にをばなさかふき一夜ねて千ぐさににほふ月をこそ見れ

閑山見ㇾ月

立ちまよふ雲は端山にをさまりてみ山の月に隈だにもなし

女ども月を見る

感應寺—谷中にあり
千町のをしね—廣々と見ゆる田の晩稻
網代木—氷魚を捕ふる爲のあじろを掛くるに用ゐたる木
みの毛—蓑の如くさがれる白毛
しづ心なく—心せはしく
おばしま—欄干

九月末つかた感應寺にて秋眺望

見渡せば雲井はるかに雁鳴きて千町のをしね色付きにけり

水鄕秋望

網代木におりゐる鷺のみの毛のみ一むら白き宇治の川ぎり

水邊秋夕

夕風にきよる渚のさゝち浪水にも秋のこゑはありけり

稻妻のいそがしきを見て

露の間に露を見ながらもらさじとしづ心なくかよふ稻妻

秋雨

桐の葉のつもるがうへにうちそゝぐあしたの雨ぞ秋の聲なる

新秋雨涼

桐の葉の且ちりかゝるをばしまに村雨そゝぐ夕べすゞしも

月をよめる

照る月はあやしきものかかなしとも面白しとも人に見えつゝ

なげきの夕霧—長息の霧となりたるなり
秋篠—大和國にあり
うきねの床—船中の夜泊
草の枕ゆふ—旅寝すること
かひよ—鹿の鳴き聲に甲斐よの意を掛く
まくらの山—枕頭に近き山

妻こふるおのがなげきの夕霧を分け迷ふらむ野路の小男鹿

外山鹿

秋篠や外山の雨の笠やどり鹿のなく音に袖ぬらしけり

夜泊鹿

高砂の鹿の音きゝて明石潟うきねの床に涙おとしつ

をとこ旅のやどりに鹿の鳴くを聞く

おなじ野に妻こふ鹿のたぐひかは千里の外に旅寝する身は

いとゞしく都こひしも小男鹿の入野の草の枕ゆふ夜は

鹿交二草花一

秋の野に住めるかひよと鹿ぞ鳴く花の錦に立ちまじりつゝ

棚倉の君の家にて山里に住む女鹿の聲を聞く

塵つもるまくらの山の鹿の聲あはれ都に聞く人もがな

秋眺望

雁がねのつばさの風に霧はれてたえ〴〵見ゆる嶺のもみぢば

すゞろに—何となく、鈴に掛く
やつれのひまとめて—敗れたるすきまを求めて
飛鳥風—飛鳥の里にふく風
うつろふ—月影の映ずる
しがらみふせて—からみ伏せて

ふりいでて鳴く蟲の音やおのが名のすゞろに秋のあはれそふらむ

こほろぎ

秋されば苅萱まじる淺茅生におのれ亂れてこほろぎの鳴く

秋風入レ簾

わび人のをすのやつれのひまとめて露吹きいるゝ荻の上風

越の姫君の海べの御館の月次の題海邊秋風を

八汐路の秋吹く風を百舟の眞帆に見せたる海づらのやど

故鄕秋風

鶉なくふりにし鄕の飛鳥風尾花が袖や吹きかへすらむ

秋の夜月いとあかきに鹿のこゑを聞く

萩原やうつろふ露の月をさへしがらみふせて男鹿鳴くらむ

山陰に雨ふる鹿たてるかた

雨過ぐる山の雫に立ちぬれて妻や待つらむ小男鹿の聲

霧深き野づらに鹿なく

ざりける—ぞありけるの約。
うてな—高臺
うたても—心細くも、あまりにも
草枕ゆふ—旅寢する
ふり行く—鈴を振り行くと古くなりゆくとを掛く
きほへる—競へる
かれなでも—見すてずしても

故郷露

住みすてし宿をもとひて見るべきは淺茅が露の秋にざりける

相思夕上ニ松臺ニ立、蛬思蟬聲滿レ耳秋

來ぬ人をまつのうてなの夕ぐれにうたても鳴くか蟲のこゑ〳〵

蟲聲幽

野分せし籬がもとの八千草と共に枯れ行く蟲のこゑかな

秋更けて草枕ゆふ驛路にふり行くものはすゞむしの聲

蟲聲非レ一

時しもあれ妻まつ蟲もはたおりも星のあふてふ秋にこそ鳴け

松蟲

夕ぐれの風にきほへる松蟲は誰が爪琴の音にかよふらむ

きり〴〵す

おく露も霜になり行く淺茅生をかれなでも鳴くきり〴〵すかな

鈴蟲

青によし—奈良の枕詞

栗栖野—山城

あだもの—消えやすくはかなきもの

はかなしと誰かいひけむ夕陰に咲きまさりたる花のあさがほ

鴨頭草

おく露の色こそことにさやかなれ秋を時なる月草の花

大和の國のたねのつき草をえて植ゑおきけるが花咲きたれば

青によし奈良の都の宮人の衣に摺りけむつきくさの花

小鷹狩

栗栖野やあしたの風も隼の手ばなれにちる秋萩の花

新秋風

小笹原けさ置きそはる白露にあらそひ立てる秋の初風

家にて初秋朝露を

來る秋の爲とてやどはあらさねど所得顔の今朝の露かな

人のもとにて庭上露

あだものと誰かいひけむ庭ひろみ露も千年の數にとるべく

きぬにすりつとに折りつゝ秋の野は人の心もちぐさなりけり
花野を過ぐとてと云ふことを
秋の野は千ぐさの花の唐錦おりたちて行く人ぞ多かる
草花交レ色
咲きと咲く花野を見れば世の人の染めなす色はかぎりありけり
野花留客
眞葛原花さく秋は野べごとに人の心のひかれぬるかな
秋の曉花見る所
別れこし妹が心やたぐへけむはひまつはるゝ野路の葛花
嵯峨野にせざい掘る
明日よりは嵯峨野の風をとはにきゝ露をも見むと千草はるなり
きちかう
七くさにもれし恨やはれやらぬ霧の籬のきちかうの花
槿

つと—家苞
おりたちて—車馬より下り立ちての意、織り裁ちのかけ詞あり
たぐへ—よそへ加へる
せざい掘る—前栽にする草を掘りとる
とはに—永久に
きちかう—桔梗

高圓―大和添上郡にあり
高圓の云々―「宮人の袖著衣秋萩ににほひよろしき高圓の山」萬葉集
せざい―前栽
づとめて―翌朝
おほして―生育せしめて

閑庭萩

おのが野と思ひなすらむ住む人もあるかなきかの庭の秋萩

崎萩

こ萩さく野じまが崎の朝風に夜半に結びし露ぞこぼるゝ

高圓野萩

高圓の野べの秋萩宮人の袖著衣ふれていくよぞ

忠賢がせざいの萩をうつし植ゑたりけるに雨風いみじうはげしかりしつとめて忠賢がもとより、おもひやりて夢もむすばぬなどいひおこせけるに、思ひのほかに花の散らざりければ返事に

夜嵐に思ひおこせし心こそ花におほへる袖となりけめ

七月家にて秋の花ども植ゑたる所を

おのづから秋の野守となりぬめり千草の花を庭におほして

野の花ざかりにひらけて人々集り見るまたかりとるも有り

おとなふ—訪ふ

我のみやあはれと—我一人のみ聞くべけんや

花づま—古來、萩を鹿の花妻として歌によみ習へり

よすが—置き所

荻聲驚レ夢

夢にのみ昔にかへる夜な／＼の哀知らずや荻の上風

幽栖荻風

中々におとなふもののさびしきは伏屋の軒の荻の上風

穂に出でたる荻にさして人に

我のみやあはれと聞かむ秋更けてとはれぬ宿の荻の葉風を

栽レ萩

今よりは我宿をとへ秋萩の花づまかれし野べのさを鹿

月前萩

露分くる野路のさを鹿心せよ月をやどせる萩が花づま

萩の露おもし

朝ごとの露のよすがと植ゑし萩折るともよしやはらはでを見む

萩漸盛

たなばたの五百機たつる頃しもや萩の錦も織りはじむらむ

さゝらがた—錦の枕詞

おもなさ—氣まりの惡さ

飛鳥の寺云々—日本紀齊明天皇三年七月の條に「辛丑作須彌山像於飛鳥寺西。且設盂蘭盆會。暮饗都貨邏人」

七夕秋の七草をよめる

たなばたの紐とくよひやさゝらがた錦に似たる萩も咲くらむ

天の河川邊に立ちてまねくらむ領巾かと見ゆるはつ尾花かな

彦星のあかぬ別にまつはりて引きてとゞめよ庭の葛花

たなばたの五百つ集の白玉の散りか亂るゝなでしこの露

天の河あかで別れし移り香をしばしとゞむる藤ばかまかな

たなばたの心を汲みて此朝け露重げなるをみなへしかな

たなばたのおもなさ見えて霧深き籬ににほふ朝貌の花

閏月七夕

いたづらに逢ふ夜の名のみ重りて重ねぬ袖や猶しをるらむ

盂蘭盆

いにしへの飛鳥の寺のすみの山世々の御法の例なりけり

荻を栽ゑて

風のおとを聞かむ便にうゑし荻思ひのほかに人招きけり

かゝせ男—案山子の如き男か
たぐへむものか—比すべきものあらんや
うつせみの—この世の人の

七日女郎花を植ゑよとて人のおこせたれば

あふ星を例にはしてこよひより千秋にほはむ女郎花かな

七日けふの空のけしきいかゞ見るといひければ

けふといへば其数ならぬかゝせ男もいかゞは暮を待たざらめかも

たなばたまつりしたる所に籬のもとに男立てり

神代より契たがへぬ彦星にたぐへむものかこよひとふとも

七日の夜琴ひく女あり

たなばたのあふ夜の庭の琴の音を雲井にさそふ松風もがな

七日の夕べ男あまた居て天河を見たり

久かたの天つ契をうつせみのこゝろ〳〵になぞへてぞ見る

七日女ども空を見る

夕月もくまなきよひの天の河思ふあたりにいかゞ見ゆらむ

七日夜の曉を惜む

天人のま袖もりてや世の中の曉露は置き初めぬらむ

神さび—時代がつきてかう〲しくなる

ふみ木—機の具、足にふみてあやつる

家々の集—歌人一家の和歌集

いかならむ身のねぎ事ぞ今宵しも小篠にかくる蛛の絲すぢ

七夕櫛

いかばかり神さびにけむたなばたの待ちこしほどの玉の小櫛は

七夕雲

たなばたのひれふる宵は中空に立ちまふ雲もながめられけり

七夕橋

雲鳥のあやに戀しみ機もののふみ木を橋にわたしそめけむ

七夕衣

人なみに今宵かさまし嬉しさをつゝむばかりの袖ならずとも

七夕後朝

たなばたの思ひみだるゝ玉かづら今朝しも庭の露とおくらむ

二星適逢

機もののふみ木の橋を一とせにひと夜とはなどかけてちぎりし

文月七日家々の集どもの題をひろひいでてよめる歌七つ

とわたる—湊を渡る
梶の葉に—七夕に梶の葉に歌などを書きて祭る習ありしなり
麻衣—昔、木曾の名産にて歌に多くよめり
早見濱—早く見んといふを濱の名に掛く
ひれ—領巾、婦人のえりにかくる布帛、人を招く時に打振る
彦星—牽牛星

こよひより夜長かるらむ神の代に秋とちぎりし天人のため

七夕催興

天の河とわたる舟の梶の葉に書きもつくさぬ千々の言の葉

山家七夕

あやにしきあかぬ事なきたなばたに麻衣かさむ木曾の山住

星河落レ簷

天の河櫂のしづくも高どのの軒端にちると見ゆる夜半かな

七夕濱

此ゆふべ天の河原にかよはなむ待つらむ妹を早見濱風

七夕薄

たなばたのひれふる宵の初風になびきそめたる野べの小薄

七夕馬

天の川淺瀬ふむらむ彦星に月毛の駒を今宵かさまし

七夕蛛

かごとにて―かこつけの言葉にして

君は―牽牛星は

ともしづま―愛する夫

たらひにかげ見る―星影を盥にうつして見る

こゝろたらひに―心の滿足の意に盥を掛く

ねぎごと―祈願すること

七夕別

牽く牛のおそき歩みをかごとにてかへり見がちに君は往ぬらむ

羈中七夕

やつるとも今宵かさまし秋萩の初花ずりの旅の狹衣

烏鵲成レ橋

かさゝぎのつばさ重ねて安の河やすらにわたせ其ともしづま

七月七日たらひにかげ見る所

影見るもうれしかりけり今宵しも逢ふてふ星のこゝろたらひに

棚倉の君の家にて七日の夜萩薄にいろ／＼の絲かけたるところ

皆人のこゝろ／＼のねぎごとを千ぐさにかけし絲にこそ見れ

七日の夜の曉によめる、

たなばたのおもひきゆらむほど見えて影しらみ行く庭の燈火

二星期レ秋

みぎり—砌、階前
伴のみやつこ—主殿寮の下司、掃除などをするもの、「殿もりの伴のみやつこ心あらばこの春ばかり朝ぎよめすな」古歌
いちじろく—著明に
ちらふ—散るの延音
牛女—牽牛織女の二星
天なるや—やは強め辭
水あせば—水の枯れば

置き初むるみぎりの露に心せよ伴のみやつこ春ならずとも
朝戸出の茅生の白露いちじろく秋の色こそ見えわたりけれ

山里初秋

山里のあはれいかにと問ふ人に見せばや今朝の淺茅生の露

七夕月

たなばたの心を汲みて天の河月もこよひやはれわたるらむ

野外七夕

野べ見れば紐ときにけり文月の七の夕べのなゝくさの花

海邊七夕

たなばたのかざしやちらふ夕浪に白玉よするほし合の濱

代ニ牛女ニ言レ志

天地と絶えぬ契りをおもふには年にひと夜の恨だになし

織女契久

天なるや安の川水あせばこそ逢ふてふ星のちぎり絶えせめ

文月—七月

鵲の橋—七夕に二星會合の時、鵲が天河にその翼を張り渡して橋となすといふ故事

みかり人—御狩の人

きぬにする—萩の色を衣に摺り附く

あきつばの袖—とんぼの羽の如き薄き衣の袖

あしたの原—朝原、大和國にあり

うけらが花 巻三

秋歌

文月七日秋立ちければ

時しもあれ今日立ち初むる秋をさへかけて渡せし鵲の橋

野亭秋來

我庵のまがきの萩をみかり人きぬにするべき秋は來にけり

荒れたる宿に秋きたる

秋なれや葎にとぢし半蔀を今朝打ちたゝく風ぞあやしき

はじめの秋

秋も猶きのふのまゝのあきつばの袖におぼゆる今朝の初風

新秋露

白露の玉しき滿てて來る秋をあしたの原に誰か待ち得し

夏來てはしづか狹衣ほさぬ日も雲こそかゝれ天の香久山

會津山 夏

紐ときて旅寢やせまし吾妹子にあひづの山の夏陰もよし

那須野夏獵

草深き那須の篠原しのびつゝ聲だにたてぬ男鹿狩るはや

夏旅

大木曾や麓をすぐる夕立のなごりすゞしき峯のかけはし

逢坂の山路こえゆく夏の日は關の淸水ぞ人をとゞむる

夏野を旅人ゆく

見馴れこし笠をかたみのしるべにて言問ひかはす野路の旅人

夏鐘

夏の夜は端居ながらに遠方の鐘に驚くあかつきの雲

夏眺望

八汐路は夕立すゞし島山の雲行くかたにさわぐ舟人

夏來ては云々—「春すぎて夏來たるらし白妙の衣ほしたり天の香久山」持統天皇

かけはし—木曾の棧道

關の淸水—逢坂にある有名なる泉

かたみ—互

言問ひかはす—物を語りあふ

端居ながら—短夜のこととて宵の間より端居したるまゝはやくも曉天になりぬとなり

隅田河へはらへにまかりて

眞心を隅田河原の中つ瀬に神世のまゝのみそぎしてけり

憂き事のなき世ながらも清き瀬にみそぎしつれば涼しかりけり

家々夏祓

はらへせぬ家しなければ罪といふ罪は殘らじ天の益人

男女はらへす

大麻のつひのよる瀬をたのみにていくとし浪にみそぎしつらむ

河のほとりに神樂する

あきつばの袂に麻の露ちりて河瀬すゞしき神あそびかな

琴の音に浪のおとそへて菰枕高瀬の淀とうたふすゞしさ

夏日

きのふけふ照る日かしこし早苗とる田づらの水沫ぬるみ行くまで

夏雲

ひとすぢのけぶりと見しも時の間に千里をわたる夕立の雲

天の益人—人間

大麻—大祓のぬさ

あきつば—蜻蛉羽、薄き衣

菰枕云々—「こもまくらたかせのよどにやたがにへびとぞしぎつきのぼるあみおろしさでさしのぼる」神樂歌

一よ—一夜、一節

六月祓—六月晦に河邊に出でて年中の罪汚れをはらふ儀式

衣手の森—山城にあり

みそぎ—身潔祓

野亭秋近

都人千ぐさ見にくる秋近み露より先にむすぶ庵かな

秋一夜をへだてたりといふこゝろを

昨日しも垣根に生ひしくれ竹の一よを秋のへだてなりけり

生ひしげる庭の夏草かくてしも明日こむ秋の露を待たまし

六月祓したり

眞心のにごりはあらじ隅田河川瀬の菅そさきはらひてば

杜夏祓

さきはらふ天つ菅そに露ちりて心もきよき杜の下風

おのづから眞菅とる手に風すぎて露うちそよぐ衣手の森

河邊夏祓

憂き事も嬉しき瀬にやかはるらむ飛鳥の河にみそぎしつれば

諸人はけふぞ都の西河に秋まちがてらみそぎしにける

くる秋をまつの下陰風凊みみそぎすゞしき滋賀の唐崎

波にたぐひて―波にならひて
わたつみ―海
がふか―合歡、ねむの木
かしこ―けはし

河づらの家に涼する

秋さへも波にたぐひてよせくらむ夕しほのぼる河づらの宿

雨はるゝゆふべ高どのに涼する人あり

高殿に月をこそ待て雨過ぐるこずゑの露を袖にかけつゝ

あし間にすゞみする舟あり

夕しほになかばかくるゝ蘆の葉の露ちるかたに小舟寄せてよ

夏のゆふべ隅田河へ舟をうかべて

わたつみの沖よりかよふ夕風に隅田河原のまこもなみよる

つくばねの瑞枝吹きこす夕風にこぎゆく船の棹のつゆ散る

六月十日あまりすゞみせむとて隅田河に船をうかべて綾瀬へさかのぼればがふか咲きたり

ほの見ゆるうすくれなゐのひとむらは綾瀬の岸のねむの花かも

旅人木のかげにすゞむかた

岩が根のかしこかりしも忘られつ足柄山の松の下風

姬路侍從殿の河邊のなり所にて納涼をよめる

夏そ引く海上がたの夕風もま袖にかよふやどりなりけり

水無月の二日人々と共に舟にてすゞみするに納涼といふ題を

名所納涼

隅田河河瀬すゞしも風にちる棹のしづくを袖にかけつゝ

こよろぎのいその浪わけまだきより秋きにけらし風のすゞしき

家々納涼

闇もなほ螢飛びかふ宵の間は伊豫簾かゝげぬ宿しもぞなき

西河やおなじながれをせき入れし宿てふ宿に秋やかよへる

越の姬君の月次の題水邊納涼

池ひろみやかたびむすぶ雫にもにごらぬ水の色ぞすゞしき

うま人涼する

玉だれの小簾かゝげてよ高殿に富士の高嶺の風かよふまで

夏そ引く—海の枕詞

こよろぎ—小餘綾磯、相模國

うま人—貴人

いさよふ―たゞよふ
西河―桂川
おばしま―欄干
しづえ―下枝
とめくれば―尋ね來れば
いはばしる―岩上をはしる
たるみ―垂水、瀧なり

氷魚のよる河瀬の風や夏の夜のいさよふ浪になほ殘るらむ

水風如レ秋

水の音松のひゞきは秋ながら夏をことわる蟬の聲かな

水檻風涼

西河やせき入れし水のおばしまにしば〳〵秋の風ぞかよへる

風來二水樹間一

水きよき岸の桂の追風にゆふ露かをる袖ぞすゞしき

池浪にしづえをあらふ青柳のおきふす風ぞ袖にすゞしき

樹陰隣レ秋

夏と秋はたゞ葦垣の一重にて瑞枝すゞしき庭の面かな

澗路甚清涼

とめくれば心さへこそすゞしけれ水草きよき谷の細道

納涼

いはばしるたるみの水に影うつす月をもむすぶ夜半ぞすゞしき

まつが崎—山城愛宕郡にあり、有名なる氷室所在地

あふりの嶺—雨降山、相模の大山なり

氷さへ消えせでけふをまつが崎千年かはらぬみつぎなりけり

遠夕立

足柄に入日の影はさしながら海上かけてゆふだちぞする

遠山に夕立ふれり

さがみ路は夕立すらし久かたのあふりの嶺に雲ぞおほへる

蟬

松が根の岩間にむせぶ眞淸水に梢の蟬のこゑぞあらそふ

蟬群夏深

夏もはやこずゑの蟬のこゑにちる夕露すゞし杉のしたみち

隣のいづみ

中垣をしのびにもるゝ眞淸水によその秋をも袖にかすめつ

松下納涼

こずゑよりかゝるひかげの露おちて袂すゞしき松の下風

水風夜涼

かはほり—蝙蝠

けたる—消さる

澤螢

人ごころあさ澤水のうき草に思ひみだれて飛ぶ螢かな

草の螢を

草むらの螢よいかにさく花の秋をばまたずならひそめけむ

水草しげれる所に螢多かり

吾門の板井なくみそ夜もすがら水草にすだく螢すゞしも

賤が家に夕顔さけり

かはほりの飛びかふ軒は暮れそめて猶くれやらぬ夕顔の花

蚊遣火たく處

遠かたやしげみが奥のかやり火に賤が家居のかずも見えけり

里のかやり火

行く水にゆふべの月はすみながら蚊遣にくもる河づらの里

氷室

夏の日も大御光にけたるらむ去年のみ雪もけふを待ちけり

つらゝに—並び列りて

時なる—好季節とする

たらし姫—神功皇后、肥前の玉島河にて鮎を釣りて外征を占ひ給へり

照射—ともし、鹿をよせて射る爲に夏の夜火串をともすこと

鵜舟多

鵜かひぶね所せきまでうかぶ夜は闇としもなき白河の水

鵜河篝

五月雨に鵜河の水や早からし淀みもあへぬかゞり火のかげ

鵜舟のかゞりを見て

かつら人鵜河立つらし五月闇つらゝに浮ける篝火のかげ

名所鵜河

名にしおふ月の桂の川瀬にも闇を時なる鵜飼ぶねかな

玉河へまかりて鵜つかふわざを見て

たらし姫若鮎つらしゝ玉島の名にかよひたる里ぞこの里

照射欲レ明

消えがたの嶺の火串にあらそひて雲間をいづる明星のかげ

雨中螢

東屋の雨のしづくもかず見えて軒のしのぶに飛ぶ螢かな

水無月十日あまり八日暁より雨風はげしかりしを夕さりつかた晴れわたりて月はなやかにさし出でたり人々とひ來て歌よむに

秋近みまだ音たてぬ荻の葉の露にやどれる月ぞしづけき

五月ばかり隅田河のほとりにやどりて

夕暗にともす螢の影きえて月になりゆく川瀬すゞしも

雨後瞿麥

なでしこの露こそことにあはれなれ心ありける宵の雨かな

夏の草

夏の草もさゆりなでしこ咲くころは秋の錦にたちまさりけり

路夏草

行くさきも道はありけり夏草のしげみが奥に見ゆる菅笠

野草秋近

眞葛原葉びろになりぬ秋風の吹きうらがへす時近みかも

桂河―山城
水無瀨河―攝津
うたかた―水泡
大淀浦―伊勢多氣郡
まほに―眞正面に

夏の夜やうつろふ月の桂河影ながらこそせき入れにけれ

水無瀨河流るゝ水のうたかたにやどるもはかな夏の夜の月

名所夏月

伊勢しまや浦の名に負ふ大淀にしばしはよどめ夏の夜の月

竹亭夏月

夏の夜の月の霜にもたわむらむまだうらわかき窓のなよ竹

くれ竹のよながき陰は夏の夜ものどかに見ゆる月の色かな

縫子の家の贈答の會に六月ばかり月あかき夜人のもとへ

短夜の月を淸水にせきとめてさゝぬ板戸のまつと知らずや

夏の月あかき夜女の家に男きたれり

訪はれむとおもはぬ閨の夏の月まほにむかひしことぞくやしき

泉に月の影うつりたるを女ども見るほどに大路を笛吹きて
行く人あり

影とむる月にもならへ笛の音をきゝしらずとやよそに過ぐらむ

れて月さし出でたり

さみだれの雲もいつしか杉が枝をはつかにのぼる月もめづらし

月あかき夜水雞の鳴くを聞きて

槇の戸もさゝで人待つ月の夜に何を水鷄のたゝくなるらむ

夏の夜月あかし

大空を霞も霧もへだてねば夏こそ月は見るべかりけれ

瑞枝さす葉ひろ熊樫露ちりて月おもしろき夜半にもあるかな

雨後夏月

宵の雨にぬるゝ瑞枝をもれ出づる月の花こそなまめきにけれ

玉がしは夕立過ぐる鏡葉をみがきそへたる夏の夜の月

江上夏月

徒人もわたるばかりに月かげの夏さへこほる諏訪の湖面

水上夏月

さゝなみの比良の大わだ淀めども淀みもやらぬ短夜の月

杉が枝—過ぎを掛く
さゝで—閉めずして
鏡葉—柏の葉の廣きもの
諏訪—信濃
比良—近江

いぶせさ—鬱陶しさ
山づ—杣人の用ふる斧
檜の隈河—大和にあり
雨つゝみ—雨籠り
ふりにし—昔の事に梅雨の降るを掛く

節雨初入レ梅

卯の花をくたすながめのさながらにいぶせさそはる五月雨の空

山家五月雨

さびしさに馴れずば堪へじ山たづの音だにきかぬ五月雨の頃

名所五月雨

水まさる檜の隈河の五月雨にかりにも月の影をだに見ず

梅雨留客

我宿に雨つゝみせよさみだれのふりにしことも語りつくさむ

五月雨降るころ人のもとへ

久かたの雨つゝみして來ぬ人をいつとか待たむ五月雨の空

五月雨晴

さみだれもかぎりあればや楝散る岡邊の庵に夕日さしける

さみだれにぬれつゝ植ゑし小山田の畦こす水に月ぞうつろふ

五月廿日出石の君の青山の館へまかりけるに此ころの雨は

風靜廬橘芳

たちばなを玉に貫きたる絲にだにしられぬ風も香ににほひけり

雨中廬橘

ほとゝぎすかさやどりせよ夕暮の雨うちそゝぐ庭のたち花

家にて橘を

我園に常世のたねをおほしつゝいにしへしのぶ友をこそ待て

閑庭橘

たちばなの花散るころは吾宿の苔路に人の跡も見えけり

庭の橘を折りて人のもとへ

ふりはへて訪はれむ袖を待ちがほに咲くや伏屋の軒のたちばな

橘をうゑて

移しうゑし花たちばなに巻向の珠城の宮の昔とはゞや

あぢさゐ

宮人の夏のよそひの二藍にかよふもすゞしあぢさゐの花

玉に貫き—玉にして絲に貫く
かさやどり—雨宿
おほし—生長せしめ
伏屋—小さき家
巻向珠城宮—垂仁天皇の皇居、此時代に田道間守勅によりて橘を常世國より移し植ゑしなり

うきに—浮き、水上に生ずるこ
とに憂きを掛く

三つば四つば—
邸宅の幾棟もた
ちつらなれる盛
なるさま

てうじ—調じ

藥玉—種々の香
を包み玉の如く
つくり、造花に
てかざる、五月
五日には菖蒲を
も添ふ

手番—馬に乘り
たる射手の二人
づつ組みつがふ
こと、其五日に
行はるゝを眞手
番といふ也

かうぶり—冠

うけらが花—形
あざみに似たる
一種の草

常世—仙國

國もせに—國中
一杯に

あるはかざしあるは引きつゝ世の中のうきに生ふてふ根ざしともなし

　五月五日菖蒲にさして人に

千代までといはひて引けるながき根をけふ葺きそへよ三つば四つばに

　五月五日藥玉てうじてやむごとなきわたりへまゐらすと

て

東屋の槇の柱に千代かけていはひまつれる藥玉ぞこれ

　五月五日駒くらべする處

若駒をあやめの草に引きそへて今日中の重の眞手番する

　騎射

かうぶりにかくるあやめも馬弓も古きためしを引くにぞありける

　藥獵する所

露ふかきうけらが花に入りみだれくすりがりする武藏野の原

　盧橘薰風

上つ代に常世の風をつたへ來て今國もせにかをるたちばな

田子―農夫

ほとゝぎす―鳥羽の枕詞
鳥羽田―京都の南

深見草―牡丹の異名

いさゝめに―わづかばかり
すだく―あつまる

田植うる所

千町田におりたつ田子の諸聲も植ゑつくせばや遠ざかり行く

川そひ小田に早苗とる

昨日かも花をせきいれし河そひや早苗とる子が袖かをるらむ

急早苗

ほとゝぎす鳥羽田の早苗いそぐらむ數こそまされしづが菅笠

朝しめりかわかぬ袖に夕月のかげをやどして　うるわか苗

牡丹をよめる

見し春の千々の色香を一もとに取りあつめたる深見草かな

菖蒲

花の香は立ちかへてける袖の上にあやめぞかをる軒の朝露

淀のわたりに菰刈るゝ

いさゝめにすだく螢の宿ばかり淀野の眞菰かり殘してよ

菖蒲とる所またかざせるもあり

をちかへり—くりかへして

夜たゞかたらへ—終夜語れよ
たちとまるがに—立ち留まるほどに

たもとほり—徘徊して

うらめづら—心珍らしく感ずること

ほとゝぎす鳴く山道に女車ゆく

卯の花の雪に車の跡とめてまたもとはまし山ほとゝぎす

をちかへり鳴けや車のあふひ草かゝる山路を訪ふは誰がため

人の月まちて歸らむといひけるほどにほとゝぎす聲しばしば聞ゆ

ほとゝぎす夜たゞかたらへ月待ちてかへらむ人もたちとまるがに

卯月初つかた隅田河のわたりなる庵に日ごろこもりゐけるを濱田の君聞き給ひて過ぎし年おのれが水上遠く鳴くほとゝぎすとよめりし歌をおぼし出でつとてけふいくか隅田河原をたもとほり水上とほき聲きくらしもとよみて給へりければ返しに

ほとゝぎす水上遠き聲よりも君がみ言ぞうらめづらなる

卯月ばかり山ぶみして

郭公鳴く一聲にさそはれて卯の花山を分けくらしけり

戸ほそ—扉

東屋のまやの蔀を—明がたの序にて、夜の明け方と人の家の戸を開くる所とを掛けたり

あやな—あやなしの略、わけわからず

あくよ—飽く時

枕よりあとより—前よりも後よりも

閑中郭公

あふち散り時鳥鳴く夕暮は心よわくも戸ほそあけけり

船中子規

ほとゝぎす鳴く一聲を綱手にて水脈引きのぼる利根の川船

人の家雲井にほとゝぎすあり

東屋のまやの蔀を明けがたの雲路過ぎ行くほとゝぎすかな

寢覺にほとゝぎすを聞きて

一聲によその寢ざめの袖をさへ思ふもあやな山ほとゝぎす

名所郭公

ほとゝぎすあくよあらめやあまた年ならしの岡に鳴きふるせども

淀のわたりに舟ありほとゝぎす鳴く

淀河や下す夜船の枕よりあとより名のるほとゝぎすかな

隅田河のほとりの庵にて雨ふる日ほとゝぎすを聞きて

遠かたやあしたの雨にうちけぶる梢すぎ行く山ほとゝぎす

みのりの文―經文を唱ふ
夜たゞ―夜どほし
藤原―大和の名所
きなら―服楢と掛く、大和國
かれず―見棄てず
たよりとを―をは強め辭
ふりいでて―聲高く振り立てて
鳴きぞとよむ―大聲にて鳴く
まひはして―禮物をば供へて

山寺にこもりて時鳥を聞く

都べにことづてやらむ比叡の山ふもとの雲に鳴くほとゝぎす

古寺にこもりてほとゝぎすを聞く

初瀬山みのりの文にこゑそへて夜たゞとなふるほとゝぎすかな

故郷郭公

子規しのび音もらせ宮人の袖のゆかりの藤原のさと

ふる衣きならの郷のほとゝぎす聞きならしけむ人や戀しき

山里にほとゝぎす聞く

花散りて茂みにこもる奥山の里をもかれず訪ふほとゝぎす

今しばしかたちひなれよ郭公都にいざと人はいふとも

世の中に住みわびぬとはなけれどもほとゝぎす聞くたよりとを知れ

山家霍公鳥

吾山にふりいでて鳴け郭公こひしき人のかずならずとも

ほとゝぎす鳴きぞとよむる都人わが山彦にまひはしてきけ

雨後郭公

雨すぎてあやめ露ちる軒端(のきは)より鳴く音(ね)もかをる郭公かな

曉子規

夕月のはしゐながらにほとゝぎすかはたれ時の聲を聞くかな

遠霍公鳥

ほとゝぎすさだかなる音を夕暮の雲井のよそに誰か聞くらむ

子規未レ遍

さのみやはうらみはつべき子規聞きつる人のかずぞすくなき

神の社にほとゝぎす鳴く

朝倉(あさくら)の聲(こゑ)すみ渡る神垣(かみがき)にほとゝぎすさへなのりてぞ行く

驛路(うまやぢ)にてほとゝぎすを聞く

子規なくひとこゑに旅路(たぢ)行くいくその人の袖ぬらすらむ

海の邊にてほとゝぎすを聞く

ふる里へ言傳(ここづて)はせよ妹(いも)が島(しま)さして過ぎ行く山ほとゝぎす

はしゐ―端居

かはたれ時―夕暮

雲井のよそ―遠方の他の空

朝倉―神樂歌、「朝倉や木の丸殿にわが居ればなのりをしつゝ行くは誰が子ぞ」

ほとゝぎす寢ざめにたどる夢よりも人傳のみぞいやはかななる

年々郭公

年のはに待ちえし人はふりぬれどふりせでなのるほとゝぎすかな

月前郭公

夕月のなかばかくるゝ山の端を鳴きて過ぎ行く郭公かな

千え子がりいきて月あかき夜ほとゝぎすを聞くといふことを

月影もこゝを瀨にすむ宿なればほとゝぎすさへ過ぎがてに鳴く

郭公月を待つにまされり

ほとゝぎす今もなかなむ月かげのいさよふほどはかぎり有りけり

雲間子規

曙の嶺立ちわかれ行く雲に聲は殘れるやまほとゝぎす

雨中郭公

橘の花ちる暮のむら雨にをりあはれなるほとゝぎすかな

いやはかな—一層とりとめなきこと

千え子がり—千え子の許

過ぎがてに—過ぎかねて

いさよふ—月のやゝためらひて出づること

をりあはれ—時にとりて殊に感深き

玉がしは—榊をほめいふ
ひもろぎ—神に供ふるもの
すゞ—篠竹
玉ぐし—榊に木綿をかけて神に奉るもの
賀—年の賀

神まつるところ

玉がしは若葉さしけり皇神にひもろぎまつる時し來ぬれば

露結ぶすゞの若葉をたてながら八十玉ぐしと神にまつらむ

郭公

隅田河堤にたちて船まてば水上遠く鳴くほとゝぎす

人の賀の屏風に四月ほとゝぎす

今よりのいくよの夏をかさぬとも聲はふりせじ山ほとゝぎす

遠尋二郭公鳥一

ほとゝぎすたづぬる山のかひなくば都の人にいかゞ語らむ

待二郭公鳥一

卯の花に月こそ殘れほとゝぎすこの曙を過すべしやは

對レ月待二郭公一

夏の夜や霞へだてぬ月にだに物思はするほとゝぎすかな

人傳子規

卯の花さける家に郭公を待つ

ことさらに卯木垣して誰をしも待つとか思ふ山ほとゝぎす

佃島といふ所に咲きたる卯の花を人におくるとて

沖つ島鷗つくだの島ひゞきうちよする浪と見ゆる卯の花

灌佛

ひんがしにながれて久しあれ出でし佛にそゝぐ今日の眞清水

葵露

あふひ草今日しもかざすもろ人に神の惠の露かゝるらむ

簾葵

神山の朝露ながらかけわたす小簾のあふひの色ぞすゞしき

毎年懸葵

神山のふた葉のあふひいくとせの今日をかけつゝ根ざしそめけむ

ぬひ子が家の贈答の會に祭の日人のもとへ

諸かづらこゝろにかけてわすれめや糸毛の車引きわかるとも

鷗つくだの島—鷗の島に著くと佃とを掛く

灌佛—釋迦の誕生日、四月八日に釋迦像に甘茶をそゝぐ

あれ出で—生れ出で

葵—四月中酉日加茂の祭に二葉の葵をつなぎたるものを加茂の祠官より出しそれを人々の家の簾、柱、車などに懸く

諸かづら—二葉の葵に同じ

あなうの花―卯の花のうに世の中を憂く思ふのうを掛く
ながめ―霖雨と眺とを掛く
ふみわけて云々―在原業平の惟喬親王を小野に訪ひし故事、伊勢物語「忘れては夢かとぞ思ふ思ひきや雪ふみわけて君を見んとは」
かいまみさへも―のぞき見ることも思ふ通りにならぬ

世の中をあなうの花の咲くころは空さへことにながめがちなり

卯の花多かる家

白妙に卯の花咲けりみ越路の雪にうもるゝ宿と見るまで

山家卯花

ふみわけて訪ひ來し雪の面影に卯の花咲ける小野の山里

卯の花は咲きにけらしな稀にとふ都の人の袖と見るまで

卯花隣をへだつ

人ごころあなうの花の咲きしよりかいまみさへもまかせざりけり

卯の花さけり月あかし

秋をおきて月のあはれは卯の花の咲き散る庭の更くる夜のかげ

卯花垣に月を見るといふ事を

月をさへ花かとぞ見るうつぎ垣まがへし夜半のこゝろならひに

卯花咲きたる宿に訪ふ人あり

卯の花のやゝ散りそむる頃しもや跡いとふらむ雪ならずとも

宮木―宮殿の建築用材
若葉さす―若葉の生ずる
卯月―四月
あからさまに―かりそめに
をち―向ひの遠方
ふたあゐ―赤と藍との間色

深山新樹

都人きても折らねば若葉さへみ山ざくらぞおのがまゝなる
幾代々の宮木にもれてみ山木の老木ながらに若葉さすらむ

林新樹

若葉さす片山林露ちりぬ花にいとひし風のなごりに
卯月はじめ利根河のほとり妙意尼がいほりへまかりて歌よみけるに夏木立を
風わたる利根の河邊の若くぬぎ若葉さすなる陰ぞすゞしき
卯月はじめかた隅田河の西にあからさまにうつろひて
昨日かも河よりをちに見し花のなごり忘れぬ夏木立かな

首夏藤

こと花の春を過してあらそはぬこずゑの藤のこゝろ高さよ
宮人のふたあゐのきぬにかよへばぞ夏來て藤は盛なりける

雨中卯花

ありて世の―古今集「殘りなく散るぞめでたき櫻花ありて世の中はての憂ければ」
そこはかとなく―何處ともなく
みづ枝―若緑のみづ〳〵しき枝

おそ櫻を

うち群れてとはるゝ春を過しつゝひとりしづけき遲櫻かな

山餘花

夏山の茂みが奥のしづけさに心のちらぬ花もありけり

ほとゝぎす尋ぬる山のおそ櫻思ひのほかに春ぞ殘れる

松陰餘花

松かげや下枝にかけし木綿ばかり花こそのこれ神祭る頃

木がくれに花こそ殘れありて世のはてもうからぬ松にならひて

餘花何在

夏山のしげみに花や殘るらむそこはかとなく風のかをれる

鳥思㆓殘花枝㆒

花は猶のこれる枝に夏來ても古巣思はぬ百千鳥かな

雨中新樹

村雨にぬるゝみづ枝のあはれさも昨日の花におとりやはする

うけらが花 巻二

夏歌

竹亭夏來

惜みこし春もいつしかくれ竹の陰には夏の好ましきかな

ころもがへ

白がさね著るてふ今日ぞ花の雪きえずもあれな麻の袂に

朝更衣

雪と見し昨日の花の色にだによそへて今朝や白がさねせむ

孟夏旬

刺竹の大宮人の今日こそは雲ゐの風を手にならすらめ

大神祭の使

神御衣につけし績麻のうちはへて今もたえせぬ今日のみてぐら

くれ竹—呉竹、春の暮れたるを掛く

よそへ—なぞらへ

刺竹の—大宮の枕詞

みてぐら—御幣

かとり—織物の縑(堅織の約)と地名とを掛く

浪をたて霞をぬきに織る機のかとりの浦の春はしよしも

いなむしろ—川の枕詞

志賀花園—天智天皇の都し給ひし頃名高かりし花園

春風春水一時來

いなむしろ川そひ柳うちなびき氷ながれて春は來にけり

春水滿二四澤一

春の日に氷とけゆく澤水のけぶりやよもにかすみ初むらむ

知直が妻を迎へし頃人々つどひて歌よむに春江花月夜とい
ふを題にて

幾千々の春をふる江の水の面に月と花との影は老いせじ

志賀浦　春

唐崎や霞にこもる松の色ををり〳〵見する志賀の浦風

志賀花園　春

大宮をこゝとし聞けば花園にあやなき袖をふれむものかは

浮島　春

かすみ立つ春の汐路を見ぬ人や浮島の名はおほせたりけむ

香取浦　春

酒の名も聖—事類全書に「醉客謂二酒清者一爲二聖人一濁者爲二賢人一」
かぢまくら—楫枕にて、船中に宿泊すること
しりたまへる—治め給へる
琴ひきの濱—丹後國にあり
なれ—汝

心靜酌二春酒一

のどけさは汲みてこそ知れ酒の名も聖の御世の春にあひつゝ

春旅泊

梅咲くや室の泊のかぢまくら古郷人の袖の香ぞする

春神祇

九重の神のつかさの花しづめ世のうき事もちりて往ぬめり

春日山神の心もなびくらむ大宮人の藤のかざしに

但馬の國出石しりたまへる君の大刀自君のもとにて春祝言を

一しほの色そふ松の春風も千代をしらぶる琴ひきの濱

家々翫レ春

里つゞきさへづりかはす百千鳥なれさへ御世の春やたのしき

萬物感二陽和一

大路行く車のおとも百鳥の聲のにほひも春めきにけり

路もせに—路も狹くなるまでに

見てしが—見たし

いとゆふ—絲遊、かげろふ

衣はるさめ—春雨、衣はるの序、古今集「我がせこが衣はる雨ふるごとに野邊の緑ぞ色まさりける」

山家春興

いはつゝじ山ぶきにほふ眞清水に春せきとむる柴の庵かな

春の山ぶみ

花見むと分け入る山の路もせにふりすてがたき初蕨かな

嵐山の麓の春の景色書ける繪に

嵐山花より明くる春の色を杉の庵に寢ても見てしが

江上春興多

湊江の岸の柳もいとゆふも心ひかるゝ綱手なりけり

春色浮レ水

霞たつ靑香久山の山まゆのみどりをうつす埴安の池

松有二春色一

うつろはぬのどけさ添ひて松が枝の花に先だつ春の色かな

衣はるさめ

野べは皆若草ずりになりにけり衣はるさめ日數へぬれば

彌生のつごもり—三月三十日

あかぼし—曉星

たるみ—垂水、瀧に同じ

彌生つくる日

春の日の今日としなれば菅の根の長かりしとは思はざりけり

石濱にて彌生のつごもりに

花をしも見るより外になすこともなくて暮せし春ぞ樂しき

春星

今日の日ものどけさしるくしのゝめの霞ににほふあかぼしのかげ

春雲

山の端もさくらのきぬの色見えて薄紅ににほふ横雲

春木

吹くとなき朝の風にうちなびく柳ぞ春の姿なりける

泉響添二春風一

早蕨のもゆる山路の春風につたふたるみの音ぞ添ひゆく

春富士の山を見て

大かたの霞は立ちもおよばねど春の光ににほふ富士のね

森なりと云ひ傳ふ、江戸の東郊にあり
走水ー東京灣口の海

かひーしるし、山の緣語

などー何故に

待ててふ云々ー春に對して過ぎずして待てといふに何時とて留まりし時はあらざりき

あづさ弓ー春の枕詞

彌生(やよひ)ばかり人をとふ

住む人はまちもまたずも呼子鳥(よぶこどり)聞きすてがたき夕まぐれかな

山家暮春

花も皆ちりての後ぞしづけさをもとめし山のかひはありける

春を惜(をし)む

春よなど夏かけて咲く藤なみの心ながさにならはざるらむ

留レ春不レ駐

木がくれに殘れる花は有るものをあひも思はぬ春ぞつれなき

惜レ春不レ留

待ててふにいつかは春のとまりにしと思へど猶も惜まるゝかな

殘春

花ゆゑに待ちこし春のいかなれば散りての後(のち)に惜(をし)まれぬらむ

三月盡

今日(けふ)のみに暮れざらめやはあづさ弓春よしばしと鳥は鳴くとも

立ちよそひ―容儀をつくりたる
神南備―大和の名所
うま人―高貴の人
みけし―御衣
うつろふ―花の散る
ゆはた―しぼり染め
心をまつはす―心を纏はす、藤の縁語
弟橘媛―日本武尊の妃、相模の海に投身せり、その衣の袖漂著したるが吾妻の

行く春もやどりとるべく夕露にしなふまがきの山吹の花

石井のもとに山吹咲けり

底澄める石井の水をかゞみにて立ちよそひたる山吹の花

名所山吹

神南備の岸の山ぶき咲きにけり御室の嵐ふかずもあらなむ

松上藤

藤さくや松の梢を高機に誰れうま人のみけし織るらむ

池上藤

藤の花うつろふからに紫のゆはたに見ゆる池のさゝなみ

人船に乗りて藤の花見たる所

咲きにほふ藤に心をまつはしておなじ汀を行きめぐりつゝ

弟橘媛の御靈齋へりといへる吾妻の森にまうでけるに御社のかたへに藤のいみじうさかりなりければ

藤波の名さへかしこし走水荒かりし代のむかししのべば

棟も殿堂の重ねられたるさま
物いはぬ―史記李廣傳に「諺曰桃李不言下自成蹊」

しづくの田ゐ―今志筑村といふ、常陸新治郡にあり、萬葉集登筑波嶺歌には師付の田井と見ゆ
くもで―蜘蛛手にて、八方に分れたること

人言のしげかる世にも物いはぬ花とし聞けばなつかしきかな

田舎の家に田かへす蛙なく

垣津田をあらすき返すかたへよりせき入る水になく蛙かな

苗代

千町田の苗代水にひく注連の長くも秋をたのみかけけり

雨中苗代

をつくばの山かきくもり葛飾や苗代小田に小雨ふりきぬ

雨後苗代

けさ見れば夜のまの雨にひく注連のしづくの田ゐの名さへしるしも

河苗代

ゆく河の水をくもでにせきわけて苗代いそぐ時は來にけり

あら田うつ所

心してあらすきかへせつくばねの雫の田ゐに櫻ちるころ

山吹露ふかし

すみれ—住むと菫とを掛く
縫子—菱田氏、荷田蒼生子に和歌を學ぶ
交野—河内國の名所
菅の根の—長しの枕詞
見てしが—見たし、しがは願望の辭
みなかみ—水源、武陵桃源の故事をよめり
としのはに—年毎に
みつばよつば—三端四端にて幾

春の野に翁さびせむ若菜つむこゝ野の子らも我によるべく

　をとこ女野にいでて菫つむ

いくとせの春か摘みけむ同じ世にすみれの草の名のみたのみて

　縫子の家の贈答の會に春の野よりかへりて人のもとへ

君がため交野の櫻折りてけり淀の河風ふかば吹かなむ

　閑中日長

菅の根の長してふ日も世の外の宿とひてこそ思ひしらるれ

　桃の繪に

今も猶ゆきて見てしが桃の花咲くやみ谷の水のみなかみ

　桃の花咲きたるを人折れり

三千歳に咲くてふ花と聞くからに折りてをゆかむ老人のため

　つばくらめ

としのはにむれつゝ問ふやつばくらめ都の家のみつばよつばに

　桃の花を女どもの折る所

はな鎭—鎭花祭、三月の末、花の散る頃神祇官にて行ひし祭
山ざとびたる—山里風の
よそに過ぎめや—見過すことを得んや
根にかへる—散るをいふ

やよしばし散らずて残れ櫻花はな鎭する月もこなくに

山ざとびたる家に花の散るを見ていひ入るゝ

散らぬ間を都に告げぬうらみさへつもるや花の雪の山ざと

花ちりて後古寺に遊ぶ

春深み櫻は雪とふりにけるゆふべの寺をよそに過ぎめや

屏風の繪に花のちる所に鴈とぶ

古郷へ別るゝ鴈の聲きゝて梢の花も根にかへるらむ

萎花蝶飛去

とぶ蝶の羽風にとがはおはじとやうつろふ花を返り見もせぬ

散りてのち花をおもふ

見し花のなごりわすれぬ曙にうたてあやしき袖のうつりが

春の野に遊ぶ

白妙の袖ふりはへてかげろふのもゆる芝生に菫摘むなり

人々春の野に遊ぶ所

朝妻の山―近江國にあり、霞の名所
くれ竹の―世の枕詞
ませ―籬
うきふし―憂き事、ふしは竹の緣語
うなゐ子―幼童
咲き匂ふ云々―「古のしづの苧環いやしきもよきもさかりはありし物なり」古今集
後のきさらぎ―閏二月

花ざくら霞の袖ぞおほふなる誰がきぬ〴〵の朝妻の山

花有㆓喜色㆒

くれ竹の世を隔てたるませの内にうきふし知らぬ花の色かな

花慰㆑老

櫻花にほふ春べにあまたたびあへるを老のおもひ出にして

咲く花にうかるゝのみぞうなゐ子の昔の春の心なりける

咲き匂ふ花見る時はいやしきもよきもさかりの心ちこそすれ

志賀山越

宮人のにほひ殘れる志賀の山花に越えゆく袖ぞやさしき

落花

うしと思ふ心よいかに山櫻散るこそ花のさかりなりけれ

月前落花

春風の霞吹きとく折々は散りかふ花に月ぞくもれる

後のきさらぎ花の散りたるを見てといふ事を

柴人―樵夫
こる―木をとる
くろ木―薪

おほせて―負はせて、花のせいにして

彌生ばかり安道が阿波の國へ歸らむとするに旅のやどりにてこれかれあつまりて歌よむに關路花を

關こえて歸らむ人を待ち顔に咲くや箱根の山ざくら花

樵路花

柴人のこるやくろ木に折りそへし花にみ山の春を見るかな

瀧邊花

咲く花の雲の五百重を分けて落つる瀧の水沫も香に匂ふらし

田家花

五百代や千代の田づらかへすぐ見れども花に飽く時ぞなき

女の家に櫻咲きたり男きたりて物いふ

隣花

こよひだに一夜は寢なむ移香を咲くや軒ばの花におほせて

中垣のすきまもれ來る花の香に散るさへもはた待たれぬるかな

名所花

散らまくをし―散らん事の惜しとなり
旅ゐのつぼ―寓居の壺庭
たゞまく惜し―席を立ちて去らんことの惜しきなり
まとゐ―集會
ふた神―男體女體の二神
山さびいます―神々しくいらせらるゝ
くれはとり―綾の枕詞

夕花

百鳥のねぐらもとむる羽風にも散らまく惜しき山櫻かな

阿波の西尾安道の旅ゐのつぼの中に櫻をうゑて人々つどひけるに春夕花を

心ありて花も夕べを殘すらむたゞまく惜しき春のまとゐに

花の頃山里をとふ

咲くとしも告げぬものから心あてに分け入る雲は花にぞ有りける

花添二山景色一

ふた神のかざしの櫻咲き初めて山さびいますをつくばの山

都花

うら〳〵と大路かすめる春の日は櫻かざさぬ人しもぞなき

宮人のかざしの爲と咲きにほふ都の春の花ぞことなる

くれはとり綾に錦になれてこそ咲けるかひあれ山櫻花

ふりはへて行くも櫻の衣なれば大路は花の隈だにもなし

瀧のみやこ—吉野の離宮

斧の柄もくたす—くたすは朽ちしむる意、時の移るを知らぬをいふ、晉の王質の故事

あふご—逢ふ期

草まくら結ぶ—旅寝すること

瀧つ河内—吉野山中の名所

霞中花

宮姫の面がくしせし面影に瀧のみやこの花ぞかすめる

さく花をへだてもはてず中々ににほひを添ふるうす霞かな

雨中花

高嶺よりあわ立つ雲は花なればそほ降る雨ぞ香に匂ひける

彌生六日雨いみじう降りたるに花もちりがたになりぬと聞きて舟にてすみだ河へまかりてよめる

隅田河堤のさくら人ならば笠きせましを蓑かさましを

花下忘レ歸

斧の柄もくたすべきかな一年にあふご稀なる花のさかりは

花下送レ日

今日幾日花より花の草まくら結ぶも蝶のゆめばかりなる

花映レ日

かげろふの夕日にさらすみよしの瀧つ河内の花櫻かな

戸無瀬―嵐山の麓にあり、瀧をなす
心と―おのが心より
影供―神の靈に物を供へて祭ること
高角山―石見にあり、これに柿本人麿の本社あり

いつしかと待ちしほどより立ちなれて櫻がもとに幾日經にけむ

月前折レ花

今日もまた狩りつくしつゝ朧夜の月にぞ手折る花の一枝

月入レ花灘暗

嵐山花よりおくに月は入りて戸無瀬の水に香のみのこれり

風靜花芳

花におく露だにちらぬ春風に心とかをる山ざくらかな

姫路侍從殿の家にて柿本の大人の影供に風靜花芳といふことを

春風もしづけかる世に薫るなる高角山の山櫻花

仙臺中將殿の家にて風靜花盛といふ事を

風ふかぬ花のさかりにあひにける今日をいくよの思出にせむ

風靜花香

ふく風は小簾もうごかぬ春の日に思ひかけずも花の香ぞする

暮れなむとすれどなほ石濱より遥かに花を見居りて

葛飾の花にゆふべを殘しつゝ豐島の方に日は入りにけり

雄風が香取に住みける時歌よみて見せけるついでに隅田河の花をば見きやといひおこせける返しごとに

隅田河春さりくれば咲く花の香取あがたの人をこそ思へ

羇中見レ花

足柄や峯の岩ねにやすらひて八重山遠き花を見るかな

靜見レ花

かくながら千世も經ぬべし見る人の散らぬ心に花しならはば

夜花をおもふ

ことならばわれ百鳥に身をかへて花に塒を占めましものを

翫レ花

世の中に花見てくらす春ばかり思ふ事なき時はありけり

劇レ花

長くいこひ居るべしの意を掛く

雄風―淸原氏、豐後の人、寛政中江戸にありて醫を業とし、傍ら和歌を嗜む

香取あがた―香取の郷

ことならば―成ることならば

時は―時にはと解すべし

ならひにもれて―例に反して
竹芝―江戸の芝の古地名
なり所―別莊
花の梢に―花さく梢の上より越して芝浦の見ゆるさまをいふ
ちらふ―ちるの延音
孝標の女―更科日記の作者
明日さへ―明日もまた重ねて
ながるしぬべし―長井の地名に

山里に我世は經なむ世の春のならひにもれて花し散らずば

彌生七日因幡の國知り給へる君の竹芝のなり所へまかりて花を見侍りて

代々を經し松のみどりに枝かはす花も常磐の色ぞ見えける

咲く花の梢によする百船のほのかにかをる春の浦風

閏二月末つかた隅田川のほとりへ花見にまかりけるに疾く咲けるはやゝ散りはじめければ

春風にちらふ櫻を河添の小田の蛙も鳴きてとゞめよ

こゝは荒川の下つ瀬なれば

吹く風のあら河の瀬に雪とちり浪とよせくる山櫻かな

孝標の女のあすた川といひけむも此川なり

東路のあすた川邊の櫻花明日さへとはむ散りなみだれそ

この川の西は長井の莊石濱となむいふそこにいこひて

郷の名のながるしぬべし石濱や川よりをちのさくら散る頃

歸らむものかー歸らざるべしの意
七日しーしは強辭
うつろひーうつりかはる、散る

むすびてむーすくひ上げん

仕へをしぞきー職を辭し
中々にー却つて
いとなしーいとまなし
水うまやー見、水驛、轉漕の意にていへるなるべし
かづくー水をくゞること

雨ふる日花を尋ぬといふ事を

いたづらに歸らむものか春雨の花の雫を袖にかけずば

春の雨にぬれつゝ花を尋ね見む七日し降らばうつろひぬべし

家の花見る所

白雲にまがふばかりの花はあれど馴れし一木をあはれとぞ見る

河づらの宿に花を見る

こゝもとに波うち寄せよ櫻花うつろふ影を手にむすびてむ

馬をとゞめて花を見るかた

折らでしも幾たび花をかざすらむ木のもとごとに駒をとゞめて

仕へをしぞきたる又の年こゝかしこの花見にまかりて

中々にいとなかりけりこの春は花より花を水うまやにて

隅田河の花見にまかりけるにさかりなりければ

春はたゞ都鳥にも身をかへて散るとも花の浪にかづかむ

山里へ花見にまかりて

あだ—頼みにならぬ
ふりせぬ—ふるくならぬ
都へ云々—都へ誘ひ行く人あれかしと今まで待ち遠しく思ひたりしならん
むつまじみせよ云々—我此世に在らん間は仲よくせよ櫻花よ
みつ—願の滿つるに三つを掛く
神路山—伊勢神宮のある所
木綿—幣

る
あだなりと誰かいひけむ千よろづの世々にふりせぬ山櫻花

望レ山待レ花

咲きぬやとむかふ外山の春霞立ちて見ゐて見見ぬ時もなし

野山に花の木掘れり

櫻花都へいざといふ人を野山の末に待ちやわびけむ

花を植う

今年よりむつまじみせよ櫻花我世を經なむ春のかぎりは

稲荷の社に奉るとて初花を

ねぎ事もみつのやしろの神垣に先咲き初むる花をこそ見れ

山初花

神路山木綿かけたりと見るばかりやゝ咲きそめし峯の初花

山花始開

漕ぎ出でし唐艪の浪の花かともみ船の山は咲きそめにけり

二しへ——二重、しは強辭

眞間の井——下總葛飾郡

立ちならし——下り立ち踏み馴らし

きならし——著馴らすに大和の名所の服楢山を掛く

と——とて

櫻の散るを見て

をしとおもひあはれと見つゝ二しへに心さへちる花のかげかな

石井のもとに立ちて櫻の散るを見て

眞間の井に立ちならしけむをとめ子が面影見せてちる櫻かな

八重櫻の袷に

八重櫻花にふれけむ古衣きならの人の袖やこふらし

春櫻と松とのもとに到る所

松風のこゝろをとめきてとこしへに散るべくもあらぬ花を見るかな

人の家に櫻柳あり

小簾の外ににほひ出でたる袖くちを柳櫻に見する宿かな

花

世の人のあかぬ心を空に知りて花さく時や日永かるらむ

咲くを待ち散るを惜むと大方の春の心は花にぞありける

妙法院宮のおほせにて月次の御題をたまはりて花をよみ侍

雨づつみ—雨をはゞかりて家にこもること

かどはむ—かどはかさん、さそひ來らん

季鷹—京都加茂の祠官、和歌狂歌をよくす

風のやどり—古今集の「花散らす風の宿りは誰か知る我に敎へよ行きて恨みむ」の歌

雨はれて後櫻を見る

初櫻露ににほへりきのふまで雨づつみして咲かずや有りけむ

隅田川の堤の櫻さかりなる頃石濱のかたより見やりて

陽炎の夕日ににほふ花の香をかどはむ春の河風もがな

彌生なかば人々と共に角田川に花見にまかりてそこの川邊なる成林禪尼がもとにて歌よむに舟中見レ花といふことを

さす棹のしづくも香ににほふらむ堤の花の影うつるころ

紀迪が吉野へ行きつとてさくらの花をつゝみておこせければ

思ひきやよし野の山の櫻花分けぬたもとに散らむものとは

季鷹縣主の家にて櫻を人におくり侍るとていふ題に

扇へ櫻の花すきこませて歌は其扇にかけり櫻がさねの紙もて扇をつゝみて表に風のやどりと書いつけたり

吹く風をうらみははてじ吹けばこそとめて折りつれ山櫻花

契かれせめ—契も絶えん、春ある限り決して絶ゆる事なし

たぶさ—拳

あだに—いたづらに
しづ枝—下枝
よきて—よけて

わたつみの神—海神
かけて—花鬘に掛くると、決していさゝかもの意とを掛けたり

櫻のもとに人々あそぶ

櫻花めづるあまりに散るをさへさかづきにまつをりも有りけり

なべて世に春てふ時のなくばこそ契かれせめ花の木のもと

末つひに散るてふことも今日ばかり忘れてけりな花の木のもと

旅人さくらを折る

足柄の八重雲分くる旅ならで高嶺の花にたぶさ觸れめや

櫻の木のもとにて弓射る所

陸奥の安達の眞弓あだに散るしづ枝の花をよきて引かなむ

山櫻

蛙なくしづくの田ゐに庵して筑波高嶺の花を見るかな

磯邊櫻

わたつみの神の少女が花かづらかけて散らすな磯による浪

瀧上櫻

瀧の上の御船の山に宮人の昔かざしゝ花咲きにけり

ねぎごと—祈り願ふこと
しめおかば—染めさせ置かば
なが世—永久
面影に云々—明日となちば幻となりて目の前にちらつくならん
おひぬ—生ぜざる

いろ〳〵の袖こそ見ゆれねぎごともいなりの山の杉の木の間に
思ふ事成らざらめやももろ人の今日うちたゝく三つの神垣

櫻をよめる

山櫻いつの世にしも咲きそめて人の心を花になすらむ
世の人の心を春になすものは野山ににほふ櫻なりけり
櫻花心にふかくしめおかば一年ながらのどけからまし

人の家に植ゑたりける櫻の花咲きはじめけるを見てよめる

この春をなが世の春の始にて千とせもにほへ初ざくら花

女簾のもとにゐたるに男ものいふ櫻の花咲けり

さくら色の衣のにほひもさく花も面影にのみあすやたゝまし

道行く人櫻のもとにとまれる

花の香は麻も錦もへだてねばいざ立ちよりて袖にしめてむ

櫻をもてあそぶ

唐國におひぬ櫻の陰にして群れつゝうたふ大和言の葉

みよしの―見よに三吉野を掛く

まくらがの―こがの枕詞

袖ふりはへて―袖を振るにわざわざの意のふりはへてを掛く

さえかへり―再び寒くなり

尾駮―陸奥に在り、馬の尾が雪にて斑になる意を掛けたる也

花ちらふ　花散るの延音

月の夜鴈歸る

ゆく鴈よ苗代水に影かすむ月をあはれとみよし野の鄕

くらき空に鴈歸る

かすむ夜の月も入りにしまくらがのこがのわたりをかへる鴈がね

道行く人の歸る雁のわたるを見たる所

花見にと袖ふりはへて行くものをあふさきるさに歸る鴈かな

牧春駒

さえかへり猶ふる雪に牧の名の尾駮にみゆる春の若駒

雲雀落

うちむれて菫摘むなるをとめ子が袖に落ちくる夕ひばりかな

根芹つむ野ざはの水にかげ見えてひばり落ち來る春の夕ぐれ

林喚子鳥

花ちらふ片山ばやし今更にかひなき音をもよぶこどりかな

屛風に二月初午稻荷詣するかた

そぼふる—しよぼしよぼと降る

ふる—經る、古る、降る
よきたぐひ—好伴侶

霞の際—空ゆく雁を海をわたる船にたとへたり

うたても—なさけなくも

山家春雨

蕨をる便にとひし里人のおとづれもなき春雨の頃

軒端より雲もかすみも立ちそひて小雨そぼふる春の山里

山里の軒のかすみのひまもれて落つる雫に雨を知るかな

幽栖春雨

世にふるも人にしられぬ住所にはよきたぐひなる春の雨かな

草菴春雨

葦葺やかすむ軒端の苔の露まなくもおつる春雨の頃

菴春雨

八重霞かすみながらにうちしめり野づらの庵に春雨ぞ降る

霞中歸鴈

かぢの音にかよへる聲はさだかにて霞の澪に消ゆるかりがね

月前歸雁

行く雁の影だにしばし見るべきをうたてもかすむ夜半の月かな

板井ー板にて圍みたる井戸
うつろふーうつるの延音
いつはあれどーいつも景色よき所なれど特に
名にはたてー霞が浦といふ名を命じたるをいふ
蓑きて云々ー筏士の蓑著たるによりて雨の降るを知ると也

春なれや浪の音さへのどかにて月影かすむなはのつぶら江

故郷春月

ふるさとの板井の水にうつろふもおぼつかなしや春の夜の月

浦春曙

いつはあれど春のあけぼの見し人や浦を霞の名にはたてけむ

水郷春曙

下にごる刀根の川とのあけぼのは霞める空のうつるなりけり

夜をこめて水脈ひきのぼる舟の帆の霞にしらむ刀根の河面

閑中春曙

おのづから夜の間の花の露落ちて芝生に薫る春のあけぼの

名所春曙

ほの〴〵と明けゆく空も紫ににほふや春の武蔵野の原

霞中春雨

隅田河蓑きてくだす筏士に霞むあしたの雨をこそ知れ

色はえて―色相映じて

三吉野―武藏國入間郡にあり

このもかのも―あちらこちら

山たづ―樵夫の斧

まほに―眞向に

眞木―杉檜などの類

眞間―下總國にあり、萬葉集赤人の歌に「葛飾の眞間の入江に打靡く玉藻苅りけむ手兒名しおもほゆ」

くれなゐの裾ひく道に色はえて萌ゆるみどりの春の若草

三吉野の郷の穂積恭がもとより武藏野の若草摘みておこせければ

武藏野やおなじめぐみの露の身はもゆる小草もむつまじきかな

樵路早蕨

薪樵るこのもかのもの初蕨折々たゆる山たづの音

霞隔レ月

かすむ夜の月にはまほにむかはれて秋見しよりもむつまじきかな

山春月

眞木立てる荒山中もかすむ夜の月にぞ春の色は見えける

江春月

眞間の江や玉藻刈りけむ面かげもほのかにうかぶ春の夜の月

春の夜はたま江の水の名にも似ずみがかぬ月の影ぞうかべる

那波尙興が深川の家にて人々と題をわかちて江春月を

高機—錦、綾などを織る機械
うらゝ—長閑
くる人—繰ると來るとを掛けたり
六田—吉野山の麓、吉野川のほとり
ぬける—貫きとほせる
賤機帶—賤は倭文にて綾模樣の織物なり
希求の辭がな—

春のきる霞のころも織りなせる高機なれや青柳のいと

柳辨二春色一

日にそひてうらゝなるべき春の色を門の柳の姿にぞ知る

家にて青柳風靜といふ事を

吾門の青柳の絲くる人を招くばかりの風は吹くらむ

柳多かる所

春されば六田の淀の柳原みどりに見ゆる風の色かな

柳おほかる家に人來る

玉すだれかゝげし軒と見えつるは白露ぬける柳なりけり

女柳の枝をひかへて立てり

青柳の絲繰りためていにしへの賤機帶を織るよしもがな

水邊春草

ぬるみゆく水のけぶりは隅田河つゝみの草の萌ゆるなりけり

行路春草

こぞめ―紅の色濃きをいふ
かたみ―籠
こがる―焦がる、もえいづるの縁
羽風を花に―何故に羽風あらく梅を吹き散らさんとするか
ゆの手―左の手にて絃を押し扱ふをいふ

梅の花あさしとや見む白妙もこぞめもなべてあはれと思はば

紙繪に紅梅のもとにかたみに蕨折り入れたる所

早蕨のもえいづる野べの梅の花こがるばかりに咲きにけるかな

梅に雀の飛ぶかたかける繪に

梅が香をつばさにしむる心もて羽風を花になどやいとはぬ

梅交レ松芳

梅が香を松の葉毎にとゞめては千世もかをらむ軒の春風

梅の花ちれり

鶯も春のながめをいかにせむ笠に縫ふてふ花し散れれば

梅花飛二琴上一

たをやめのゆの手もあやにかをるめり琴柱にうめの散りかゝりつゝ

屏風に水のほとりに柳有る所

春毎の水のかゞみに影うつす柳の眉は老せざりけり

柳を

しめてー香をしみこませて

名もしるくー梅津神社といふ名あるより先づ其神社の梅の咲くとなり

香取ー香に社の名を掛く

古さとの古木の梅の花の香をま袖にしめて翁さびせむ

梅香留レ袖

紅の梅のはつ花さきしより香さへふかくぞ袖にしみける

社頭梅

名もしるく先こそかをれ春されば咲くや梅津の神の御社

南より先咲きそめて日かずふる北野の梅ぞさかりひさしき

葛飾の郷の香取の大神いはひまつれる社にまうでけるに梅あまた咲きたり

春風のかをるまに〳〵とめくれば梅の香取の宮居なりけり

山家梅

咲きしより霞こめつゝ梅が香をよそにもらさぬ春の山里

山家皆梅花

都にて霞と見しは山ざとをつゝめる梅のにほひなりけり

梅紅白

枕つく―妻屋の枕詞
妻屋―夫婦の住める家
訪はるやと云々―訪問者の袖の香かと思はれて梅が香にだまされて小簾のもとに立つと也
心おそき花の木―桃櫻のたぐひをいふ
うすはた―薄機、うすものの絹
とめゆけば―尋ね行けば

月の夜梅かをれり

かすむ夜の月見よとてや枕つく妻屋の軒の梅かをるらむ

女簾のもとに立ちて梅を見る

訪はるやと小簾のかをりにはかられて吹き初めし梅の花をこそ見れ

水のほとりに梅花見えたる所

うち出づるみ谷の浪にあらそひてにほふや梅の春の初花

春風先發二苑中梅一

心おそき花の木ごとに梅が香の春をつたふる園の朝風

梅花風靜

春風は吹きにけらしなうすはたの霞の袖をもるゝ梅が香

梅が枝をおほふ霞の袖だにも迷はぬほどの風ぞかをれる

梅遠薫

梅かをる霞のおくをとめゆけば猶木のもとは遙けかりけり

梅薫レ袖

むすぼほる—堅く結ばる
さても—そのままにても
杉田—武藏國
とめくる—たづね來る
年のは—年毎に
垂氷—つらゝ
あやなき暗—「春の夜の暗はあやなし梅の花色こそ見えね香やはかくるゝ」の歌に取る

雪は猶むすぼほれたる片枝より紐解く梅のめづらしきかな

二月餘寒

などてかく花おそげにも見えぬらむ春ひと月はさても過ぎしを

杉田といふ所へまかりて

磯山の梅のさかりをとめくればたゞ白雲のかをるなりけり

葛飾の里の梅見にまかりて

里毎に梅は咲けどもこの里の梅こそ春のひかりなりけれ

毎春玩レ梅

年のはにめづらしきかなおもふどち梅をかざさぬ春しなければ

朝梅

朝日かげさすや軒端の梅咲きて垂氷の雫先づかをるなり

月照二梅花一

梅が香はあやなき暗もあるものを月の影そふ夜半ぞ殊なる

梅の花かをるあたりを過ぎがてに空行く月も影とゞむらむ

をつくは—筑波山

二月雪—梅花、朗詠に「折ニ梅花一而插レ頭二月之雪落レ衣」この句を題とせる也

さやに—明かに、古今集の東歌にある語を用ひたるなり

きゞす—雉子

玉の横山—武藏國

いさゝめに—僅に

外山—深山ならぬ端の山

春のはじめ雪はれたるあした

松の葉の夜のまの雪のとけ初むる雫ににほふ朝日子のかげ

雪消山色靜

ふる年のみ雪消えつゝ東人の春知りそむるをつくばの山

二月雪落レ衣といふ心を

春もいま中空にちる白雪をはらへば袖に殘る梅が香

殘雪

甲斐がねや霞ふきとく春風にのこれる雪ぞさやに見えける

春はまだ淺野の雪のむら消にあさるきゞすの跡は見えけり

初瀬女がつくる木綿花ちるばかり檜原がもとに殘る雪かな

山に雪殘れり

白妙に殘るみ雪を春の日の光にみがく玉の横山

いさゝめに梢の花のちるばかり外山のかひに殘る雪かな

殘雪半藏レ梅

篁—竹林 千世—世は竹の縁語

青柳を云々—「青柳を片絲によりて鶯の縫ふてふ笠は梅の花笠」古今集

聲にのみやは—豈鶯聲のみならんや

裾わ—山の麓

おもふどち—相思ふ友

千代—田の廣きをいふ 豐年しるく—豐年ならんこと明かに

春がすみ五百重がおくの篁に千世をこめたる鶯のこゑ

雪中鶯聲

花とちる園生の春の白雪のにほひを添ふるうぐひすの聲

春情有鶯

青柳を絲によるてふうぐひすの音にのみ春は心ひかれつ

鶯の聲をきゝて女の家に男來たりたる所

吾妹子が垣根に馴るゝうぐひすの聲にのみやは心ひかれし

田井に若菜つむ

筑波嶺の雪消にぬるゝをとめ子が裾わの田井の若菜つまばや

多春採㆓若菜㆒

武藏野にあまたの春を摘める身は若菜ぞ殊におもふどちなる

早春雪

葛飾や千代の早稲田春立ちて豐年しるくふれる雪かな

一とせの月と花との面かげを春たつそらの雪に見るかな

舟行くかた―かたは圖のことなり
ゆたに―靜に
御船の山―大和の吉野郡にあり
なか／＼に―却つて

いつの世の子日の小松年ふりて春は霞にたなびかるらむ

富士の山かすめり帆かけたる舟行くかた

うら／＼と富士の芝山霞む日に田子の浦舟ゆたにこぐ見ゆ

芳野山に霞立てり川に舟あり

春霞御船の山をたちこめて吉野の門に梶の音する

南枝暖待レ鶯

うぐひすの聲待ちかねて露ぬるむ片枝ににほふ梅のはつ花

鶯の初音きゝつやと人の問ひければ

人とはぬ竹の中みちなか／＼に先づうぐひすの初音きゝけり

鶯告レ春

なべて世に春を知れとや鶯のこと先だつる今朝の初聲

鶯聲和レ琴

うぐひすも聲あはせけり小簾のうちの春を喜ぶ琴のしらべに

霞裏聞レ鶯

なべて—總體に

少女子が—黒髪の冠詞

黒髪山—下野の日光にあり

山眉—遠山の眺をいふ

春されば—春に至れば

水馴棹云々—舟人は漕ぐに馴れても、浦々は霞こめたれば船路をたどり行くならん

かすみの浦曲—常陸の霞が浦をいふ

島山は雪げながらに八汐路の霞ぞはやく立ちわたりける

霞添二山色一

富士のねも麓につゞく群山もなべて綠にかすむ春かな

霞藏二遠山一

少女子が黒髪山の山眉をうたてもかくす春のかすみか

霞隔二遠樹一

遠方の堤の柳春さればおのがけぶりにうちかすむらむ

嶺上霞

足柄や嶺にたなびくかすみだに立ちもおよばぬ富士の芝山

海邊霞

あまの子が磯菜摘むなる眞袖より八十島かけて霞こめけり

水馴棹なれても春はたどるらむおのがうら〳〵霞こめつゝ

いかばかりわけ迷ふらむ名にたてる春のかすみの浦曲こぐ舟

松上霞

ひく―松を引くと例をひくとを掛く
腹赤御贄―腹赤は鱒の古名、古筑紫より奉るを、元旦内膳司より供御に奉る
藥兒―元旦、屠蘇酒を先づ嘗めて供御に奉る童女
姫路の侍從―酒井雅樂頭
松がさね―重ねの色目、表青裏紫
との曇り―碓日の枕詞
うすらひ―薄氷

山里に住む人子日す

吾門の小松ひきけり尋ねこし都の人にいざといはれて

子日松

みゆきせし北野の春の姫小松ひくも畏きためしなりけり

腹赤御贄

大ぎみの千世の例とまごころを筑紫の海人が釣れるみにへか

藥兒の繪に

ことしよりおひ先こもる藥兒にあえなむ春ぞ限りしられぬ

姫路の侍從殿の家にて霞を

高砂の尾上に春の立ちそめて霞の衣松がさねせり

初春霞

との曇り碓日の御坂霞ゐてあづまの國ぞはやく春なる

霞知レ春

すみだ河きしのうすらひ解けそめて水上かすむ春は來にけり

むつまじみ―仲よくすること

標野、紫野―共に山城の名所、萬葉額田女王の歌に取る

ふりはへて―わざわざ

千代の古道―山城葛野郡にあり

うなゐ子―幼童

ひていく春もみさをかはらず立ちや馴れましといひおこせ

給ふ返しに

御園生のけふの小松にひかれつゝ君が八千代を我もかぞへむ

正月十五日雪ふりけるに、春海、みつるなど訪ひ來て歌よむに子日に引きうゑし松に雪つもれりといふ事を

姫小松むつまじみせよ生ひそめし野末の雪を誰かはらはむ

霞中子日

春がすみ眞袖にわけて標野行き紫野ゆき子日するかも

山子日

君が代の千世の古道ふりはへて引くや子日の嵯峨の山松

屛風に正月子日する家

うなゐ子が引くや園生の姫小松ともにはるけきよはひとぞ見る

山居子日を

吾山の古巣を出づる鶯もけふを初ねとおどろかしけり

みなわ—水泡
鶯の囀—春鶯囀とて雅樂の曲名なり
初子—野邊に出でて小松を引く遊びあり
初ね—音と子とを掛く
けさう—懸想
しめゆふ—標結ふにて、しるしを結び置くなり
いざと—いざ往かんとて春を都にさそふ意
大刀自—大夫人

雪消春水來
筑波嶺のみ雪消ゆらしみなの川みなわさかまきけさぞ流るゝ

春到二管絃中一
鶯の囀といふしらべより世は春べにもなりにけるかな

む月ついたち子日なりければ
む月たつけふの初子の小松原霞こそ先づたな引きにけれ

長枝が家の子日にまかりて
鶯の初ねにはやくとひ馴れて春知りそむるやどぞ此やど

子日女出でたり、例けさうする男きあひて消息すといふを
題にて
初春のはつねの小松はやくよりわがしめゆひし心知りきや

む月十一日節分子日なりければ
淺緑小松ひく野に一夜ねて都に春をいざといはまし

戸澤家の大刀自君より子日に小松にそへて枝高き陰になら

光も浦安—光もうら〳〵といふに浦安の浦をかけたる也
國ぶりしるき—國風明かに知らるゝ
うちびさす—都の枕詞
たてぬき—縱横なり、經緯とかきて衣の縁語、たちは裁ちといふ衣の縁語
御心を—廣の枕詞
汀—水際、岸

棚倉の君の家にて初春祝レ道といふ事を
新らしき春の光も浦安の國ぶりしるき道ぞこの道

早春山
春立つやたなびき初むる霞さへまだうす機の衣笠の山

都初春
うちびさす都大路のたてぬきに霞の衣たち初めにけり

氷解
春の日の光のどけみ御心を廣田の池や氷とくらむ

春到氷釋
櫻河汀の氷とけそめて春を寄せくる浪の初花

春風解レ氷
薄氷松吹く風にうちとけて千世の影見る春の池水

風光日々新
嶺のかすみ野べの小草の若緑きのふにけふぞ深さまされる

浦安―日本國の古名
む月―正月
しるべ―案内
つかへを退き―官を辭し
またのとし―翌年
しはす―十二月
妙法院一品の宮―典仁親王の御子、桃園天皇の御養子、眞仁法親王といふ
あさり―漁すること、歌文を作る意にいふ
萬代の旗手―元日宮庭に立てたる萬歲旗を吹き靡かすをいふ
時つ風―時節にあひたる風

かしこきやわが浦安を出づる日に春知りそめよあだし國人

む月ついたち鶯の鳴きければ

かきこもる竹の垣穂もうぐひすの聲をしるべに春やこえこし

つかへを退きけるまたのとしのはじめに

天の原出づる日影ののどけさも去年にまされる春べなりけり

む月のついたちに去年のしはす妙法院一品の宮より賜はりける御硯にはじめてむかひて

雲ゐより春の日かげもうつるなる硯の海にあさりするかも

立春天

天の原春立つらしも朝がすみ浦安の名に立ちみちにけり

元日宴

萬代の旗手なびかし大庭にけふより春の初風ぞふく

春風來二海上一

あけわたる春の潮路の時つ風東路にこそ先づかよひけれ

あら玉の―とし の枕詞

一よ、ふし―小笹の縁語

海のさち―さち は幸、海の獲もの

うけらが花

巻一

橘千蔭

春歌

年の内に春立ちければ

あら玉のとしにふたゝび二荒山立ちかさねたる春霞かな

年のはじめに

小笹原一よのほどにくる春や嬉しきふしの始めなるらむ

世は春になりにけらしも窓の内にむかふ硯の氷とけゆく

百鳥の春にけふしもあふものをきのふは老を何なげきけむ

年毎にかきもつくさぬ言の葉を硯の海のさちといはまし

霞立つ野のへの若菜つみつゝも鶯きかむ春は來にけり

あづま路にまづくる春の日の影を雪に待ちとる富士の芝山

らざれば、ひが歌や多からむと且はおそり且はやさしみおもふものから、たゞかしこくさと

しすゞめしたまふにしたがへるなりけり。かへすぐも人笑にやあらむかし。

享和の二とせといふ年のみな月

橘の千蔭しるす

おのが歌をしもみづからえらびて世に殘せるためし、いにしへ無きにしもあらねど、そもきはことなるあたりにこそさることはあらめ、わがともがらのまねばむはおふけなきわざなれば思ひもかけざりしを、おのれすでに年たかくなりにたれば、みづからよくえらびおきてよなど、やむごとなきかたぐ\よりねもごろにそゝのかし給ふを、いなみなむも中々にて、えらび出でむこゝろとはなりぬ。若かりしほどのは年經ぬることなればうせにけるを、縣居の大人のつばらにふんで加へたまへる歌に文に、いさゝかもののそこより見いだしぬ。はた身さかりなりしほどはおほやけの暇なくて、書きつむることもせでたゞ一ひらの紙にかいつけたるなむ、こゝらみちのくがみの袋に入れおきぬる。一とせあるひと其歌ども書きあつめむとこふまゝに、かの袋のまゝにてものしつれば、その人も仕ふるみちにいとなくて、いさゝかの暇のほどにうつしかいつめて、おのれが書けるをばかしこにとゞめつ。後に見ればうつしおとしたるもおほかりけり。おのれつかへをしぞきてよりこなた、みづからさうしに書きとめたれば、これかれをあはせては數おほかるを、こたみ父翁の集をうつしをへての後、かくはえ

人、武藏野の千草の露よりもしげくなりたれば、堀兼の井のふかくもとめ出でておのがじしうつしとりなむはわづらはしければとて、われも人もしひてこひつるに、稲舟のいなみあへず、歌に文に自らえり出でられつるをかくなせるなり。そも〳〵此集の名は、先つ年みやこのやむごとなきわたりより、大人のよみおかれたる歌をまゐらせよと有りしに、えりてまゐらせられつる時、花數ならぬうけらさへつまるゝ世にあひぬるよしをよみ出でられしより、みづから宇氣良我波奈と名をおほせられたるなりけり。そのわきいさゝか卷のはしにしるしつ。

享和のはじめのとし長月

日向守巨勢朝臣利和

かけまくもかしこきいにしへより、わが大御國ぶりのまたく傳はれるは、歌にのみなむ有りける。しかはあれどくだれる世となりては、いにしへのしらべをうしなひもてゆけるを、常世物橘の大人は、いとわかゝりしころより、縣居の翁のをしへをうけて、歌のこゝろを得られたれば、おのづから上つ代のすなほにしてあつくみやびなるすがたをなむ詠み出で給ひぬる。年頃おほやけのいとまなかりつれど、歌はちゝのみの父の好めるわざなれば、いさゝめにもわすれじとて、いとまある時はよみ出でられき。此十とせあまりさきにつかへをしぞきしより、かゝる大御世に逢ひてこの大御惠にあけるを、誰かは歡びたのしまざるべきとて、ひたぶるに歌の道にのみ遊びて、春の花のあした秋の月の夜、をりにふれ時につけつゝよみ出でられたるが、濱の眞砂の數おほくつもりにけり。こたみ大人、其父翁の歌に文に書きつめて、子むまごに傳へ、うからやからにもあかちてむとて、板にゑらるゝにつけて、われと同じく大人に名つぎおくれる人々、大人の歌をも文をもともにゑりなむ事をこふに、後の世に殘さむ事はいとしもおふけなきわざなりとて許されざるを、今は多摩河の水のながれをくむ

かへし……………………七〇二
越前のかうの殿に侍ふきち
子のもとへ贈れる書…………七〇三

巻十四　雜　文……………………七〇五
河づらなる家に郭公を聞く
といふことを題にて物語
ぶみのさまにならへる文……七〇五
對レ月言レ志といふことを題
にて書けることば…………七〇八
月花のあはれをことわるこ
とば……………………………七〇九

巻十五　墓碑祭文……………………七一二
足水翁墓碑…………………七一二
山口標照がはかのいしぶみ……七一三
祭二芳宜園大人墓一文……………七一五

睦月ばかり山里人のもとへ……六五八
春雨ふる日友達のもとよりこと引きて遊ばむまでこよといひおこせたるにさはる事のありければ……六五八
五月くす玉を人のもとへおくるとて……六五九
六月人のもとより氷をおこせたるに……六六〇
しぐるゝ日ものへまかるとて人のもとへみの借りにやる書……六六一
上田秋成がもとへ……六六二
伴蒿蹊におくる書……六六三
西村嘉卿にこたふる書……六六四
石原正明にこたふる書……六六五
稲毛直道におくれる書……六六七
大村蜂住にこたふる書……六六九
羽生田貴良がもとへ……六七四
清水濱臣がもとへ……六七五
一柳千古にこたふる書……六七七
詞の清濁は古言清濁考に従ひて改むべきやと人のとへるにこたふる書……六八〇
眞乘院雪岡禪師のもとへ……六八四
おなじ禪師のもとよりおくられし雅俗辨を論じてこたふる書……六八六
自寛のもとへおくる書……六九六
寂阿におくる書……六九八
くめ子君の御もとへ……七〇〇
さがらの殿の北のかたの御もとへかへし……七〇一
おなじ北のかたの御もとへ

舊蹟遺聞序……………六一〇
庚子道の記序……………六一三
若桂の序……………六一四
東歌の序……………六一八
齊明記童謠序……………六二一
契沖法師富士百首の序……………六二四
厚顏抄補正序……………六二四
橘千蔭古今集序墨帖序……………六二七
山づと序……………六二八
あやむしろの序……………六三〇
行かひぶりの序……………六三一
箏曲新譜序……………六三二
萬葉集後讀記序……………六三三
かた絲の序……………六三五
聞中上人の都にのぼり行く
　を送る歌の序……………六三六
長背眞幸が肥の道のしり熊
　木の城に歸るを送る序……………六三九
長曾爾又玄におくる序……………六四二
卷十二　跋……………六四三
千年蔭の跋……………六四三
萬葉佳調跋……………六四四
怜野集のおくがき……………六四四
月詣集跋……………六四八
瀧本坊昭乘法師三十六人歌
　合墨帖跋……………六五〇
縣居翁自筆山里記跋……………六五一
同岡部日記の長歌跋……………六五二
同吉野の長歌跋……………六五二
橘千蔭書新百人一首色紙跋……………六五三
篁千古が七十の賀の歌の跋……………六五三
佛跡をほむる歌の碑の跋……………六五五
涼月遺草跋……………六五六
卷十三　書牘……………六五八

巻六　雑歌……四四八
巻七　題畫歌……四八七
巻八　百二十首……五〇九
五十首……五二六
巻九　長歌……五三一
巻十　記……五六八
清水濱臣の泊洦舎の記……五六八
蓬が杣の記……五六九
知足菴記……五七一
隨時樓の記……五七二
安田躬弦の家の文臺の記……五七三
燒畫記……五七四
山水のかたかける繪を見る記……五七六
二月ばかり山里の梅をめづる記……五七八
山里に花を見る記……五八〇
春の山ぶみ……五八二
花ををしむ記……五八五
おなじ題をすが子にかはりて……五八七
萩をめづる記……五八九
月の宴の記……五九一
八月十五夜芳宜園にてくもる夜の月を見る記……五九七
秋の山ぶみ……五九八
初鴈をきく記……六〇一
山里の紅葉を見る記……六〇三
縣居翁の御墓にまうでて秋を惜む……六〇五
のこりの菊をめづる記……六〇六
雪をめづる記……六〇七
巻十一　序……六一〇
烹茶樵書序……六一〇

同じ詞……二七五
山水のかたうつしたる繪を見るどいふを題にて……二七七
千足の眞言が故郷へ行くを送る詞……二七八
藤原の宇萬伎が難波へ行くを送る詞……二七九
月の宴の歌の序になずらへたる文……二八一
ある人の七十の賀の序……二八二
花を惜む詞……二八四
春の山ぶみといふを題にて……二八五
寛政七年四月三日二荒の宮の御前の舞樂を見侍りし時宮のおもと人岸本土佐守貞主のもとめによりて書きておくりけるふみ……二九〇
歌塚の記……二九三
上總國菊麻八幡大神の神主根本常陸介佳胤が碑の銘……二九四
縣居翁の筆のあとをゑりて千歳筵と名づけたるそれが序……二九五
萬葉集佳調序……二九六
蒼生子家集杉のしづえの序……二九七
賀茂翁家集の序……二九八

琴後集

巻一　春歌……三一一
巻二　夏歌……三五〇
巻三　秋歌……三七二
巻四　冬歌……四〇七
巻五　戀歌……四三〇

目録

うけらが花

巻一 春歌……五
巻二 夏歌……四七
巻三 秋歌……七四
巻四 冬歌……一一三
巻五 戀歌……一四三
巻六 雜歌……一七〇
雜體……二一九
巻七 長歌……二三三
文詞……二六〇
那波何がしが家にて紅梅を
めづる辭……二六〇
川づらなる家に時鳥を聞く
といふことを題にてつく
れる文……二六一
隅田川に船を浮ぶといふを
題にて……二六三
藤原濱臣が泊洦舍にて蓮を
見る辭……二六四
初鴈を聞く辭……二六五
蟲撰の詞……二六七
隅田川のほとりなる石濱の
庵にて雨の中に作れる文……二六八
秋の山ぶみといふを題にて
作れる文……二七〇
八月十五夜家にておの〳〵
題を分ちて文作れるに山
里の月といふを題にて……二七二
雨岡がり行きて黃葉をめづ
る辭……二七三
雪を見る辭……二七四

海は春道の次子也。其兄春郷に代りて家を督するや、豪放不羈遂に家産を傾くるに至るも、而も顧みずして學を勵み、老いて益精しきものあり。其漢學の造詣甚だ深く、文に唐宋八家の致あり、道は卽ち周公孔子の道とする所を道とし、毅然として本居宣長等の古學を斥けたる事、葛質の序文に謂へるが如し。蓋し和文の弊は其冗長纖弱にして寸鐵よく人を刺すの概なく、又雄大豪宕の風に乏しきことこれなり。獨り春海の文の純乎たる古雅言を用ひて、而もよくこれら漢文の美點を捉へ得たるは、特に吾人の學ぶべき最大特色と稱すべし。今本集を成すに當りては、共に流布の原本により、往々假名に漢字を配し、振假名を施したる外、語格假名遣は勿論、句讀の如きも概ね原本に從ひ、敢て改竄を加へず。本集の校訂校正には井口二郎、椿强祐兩氏を煩はしたる所多し、記して謝意を表す。

大正三年十月

校訂者　塚本哲三

緒言

本集はうけらが花七卷、琴後集十五卷を收め、略註を施す。うけらが花は橘千蔭の歌文の集にして、享和二年七月、その門弟數輩の編纂に係ること、同書の卷末に記せるが如し。本書には別に第二編七卷ありて、文化五年十一月の發兌に係る。今紙數に制限せられて之を本集に收むる能はざりしは、寔に遺憾とする所なり。琴後集は村田春海の歌文集にして、卷頭及び第十卷に數文の序あり、以て其内容を窺ふべし。

千蔭春海は共に德川時代に於ける國學の巨擘にして、和歌和文の述作に妙を得たる事、夙に世に定評の存する所、然して歌は千蔭を以て兄と爲すべく、文は卽ち春海を勝れりと爲すべからむ。共に千古不磨の文字にして、他の一流文學と其伍を同じうすべきもの也。

千蔭は枝直の子、父の職を承けて大岡越前守に仕へ、江戸八丁堀の與力たりしが、天明八年疾を得て職を辭す。其著萬葉集略解は最も廣く世に行はれ、今なほ萬葉集を讀む者の楷梯として學界に推賞せらる。千蔭また筆札を能くし、松花堂を摸して別に一家を爲せり。春

LIBRARY
MAR 1 6 1969
UNIVERSITY OF TORONTO

PL
799
K3U8
1914

うけらが花　全

琴後集　全

PL 799 K3U8 1914

Kato, Chikage
Ukerage hana

East Asiatic Studies

PLEASE DO NOT REMOVE
CARDS OR SLIPS FROM THIS POCKET

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY